

平成 23 年 度

フィールドワーク調査報告書

第 9 号

淑徳大学総合福祉学部
人間社会学科

はしがき

本報告書は、総合福祉学部人間社会学科の「フィールドワークⅠ」および「フィールドワークⅡ」を履修した学生の、1年間にわたる調査研究の成果である。

本学人間社会学科のカリキュラムの1つの大きな特徴は、社会学の研究方法としての社会調査について、学生が体系的に学習することを可能としている点にある。1・2年次に統計学および質的・量的調査の方法について計6科目を学び、3年次には「フィールドワークⅠ・Ⅱ」のほか「応用統計解析」を履修することができる。前・後期あわせて通年でとりくむ「フィールドワークⅠ・Ⅱ」は、社会調査法と統計解析について1・2年次で身につけてきた学習内容の集大成として、個別の研究テーマの設定から、テーマに関する仮説の検討、調査の方法的枠組みと分析方法の検討、調査対象の選定と調査票の作成、実査、データの集計、結果の解析、そして報告書による成果の公表にいたる一連の過程に、学生が主体となって取り組むものである。平成23年度の担当教員は野田陽子・松蘭祐子の2名であり、社会調査助手の佐藤麻衣が授業補助に就いた。8名の履修学生はすでに（社）社会調査協会の「社会調査士資格（見込み）」の認定を得ており、この「フィールドワークⅠ・Ⅱ」の単位取得をもって、資格取得に必要な全科目を修得することとなる。

今年度は、千葉市6区を対象地域として「千葉市民の防災意識と防災行動」をテーマに調査研究を実施した。人びとの防災に対する関心と取組みは、1995年の阪神・淡路大震災の発生と、その後相次いだ火山噴火、集中豪雨、大地震等の発生により増しつつあったが、昨年3月11日に発生した東日本大震災は、規模の大きさ、被害の甚大さ、波及的影響の多方面への拡がりにより、私たちに継続的な防災対策の必要性を改めて認識させるとともに、生活様式や生活意識についても再考を迫ることとなった。そこで、防災について総合的に考察するために、東日本大震災の被災県でもあった千葉県に在住する千葉市民の20～70代の方々に、防災に関する意識や行動、取組みについてお教えいただきたくこの度の調査を企画した。

統計的調査は調査票を用いた郵送調査を実施した。調査票の作成にあたっては、20歳から69歳の方々に事前予備調査にご協力いただいた。学生たちは、自分とは違う世代・生活様式の方々の話から大変な刺激を受け、その後も熱心に調査票の作成、データの集計・分析に取り組んだ。調査研究は調査対象者のご協力によってはじめて成し遂げられる。郵送調査にご協力いただいた千葉市民、事前予備調査にご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。また、サンプリングにあたっては、各区役所の市民課にお世話になった。記して厚くお礼申し上げます。

これからの時代の大学のあり方として、研究事業や教育の他に地域貢献が求められるとするならば、大学が立地する地域の社会問題を授業の一環として調査研究することも大学としての重要な地域貢献のあり方だと考える。1年間という短い期間ながら学生たちが懸命に取り組んだ本調査の成果が、地域をよく知ることの一助になれば幸いである。

平成24年3月

淑徳大学教授 野田 陽子
淑徳大学教授 松蘭 祐子

目次

はしがき	野田陽子・松菌祐子	i
目次		iii
第 1 章 問題意識と研究テーマ	佐藤麻衣	1
第 2 章 統計的調査の概要	宮内翔史	7
第 3 章 千葉市の人口構造・産業構造	坂田智洋・市瀬智啓	11
第 4 章 防災計画の認知と住民の防災行動	隅 彩香	22
第 5 章 コミュニティにおける人間関係の形成と防災意識	宮内翔史	32
第 6 章 行動制限と防災行動 ——外出頻度と地域の安全性認識の観点から	嶋村恭範	42
第 7 章 テレビ視聴時間の観点から見た防災対策の取り組みの分化	秋葉 駿	52
第 8 章 被災経験と災害時の行動抑制	田村 渉	62
第 9 章 災害不安と防災対策取り組み度とのズレの考察 ——性格特性の観点から	佐藤朱里	73
第 10 章 流言の信じやすさと買い占め行動 ——批判的感受性によるその分化の考察	市瀬智啓	85
第 11 章 ニュース視聴者と間接的被災体験者の防災対策への影響	坂田智洋	99
参考文献・参考 URL 一覧		113
あとがき	佐藤麻衣	116
付録		
基礎集計表	佐藤朱里・田村 渉	117
調査票		

第 1 章 問題意識と研究テーマ

佐藤麻衣

1. 1 はじめに

昨年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、私たちに大きな衝撃と悲しみをもたらした。

総務省消防庁の報告によれば、この震災によって全国の約半数にあたる 22 都道府県が被災し、死者は 16,278 人、行方不明者は 2,994 人、負傷者は 6,179 人にのぼり、また、震災から約 1 年たった 2012 年 2 月 24 日現在も、県外への避難者だけでも 72,788 人存在する（総務省消防庁防災対策本部 2012:4）。

こうした、かつて類を見ないほどの被害規模の大きさ、被害の甚大さ、波及的影響の多方面への広がり、私たちに衝撃や悲しみをもたらしただけではなく、継続的な防災対策の必要性を改めて認識させるとともに、生活様式や生活意識についても再考を迫ることとなった。

本報告書では、東日本大震災の被災地でもあった千葉市を対象とし、防災に関する意識や行動、取り組みについてのアンケート調査を実施することで、防災についての総合的な考察が目指されている。

1. 2 日本における自然災害と防災対策

私たちの住むこの日本という島国は、もともと、台風・豪雨・豪雪・地震・噴火など、自然災害が多発する地勢にある。

とくに風水害（台風や豪雨による洪水・土砂災害・浸水被害）は、全国のいたるところで発生しており²、日本においてもっとも多く発生する自然災害だといえる。また、地震は、地球上で起こる地震の約 1 割が日本の周辺で起こると言われており³、日本は世界においてもっとも地震の多い国のひとつとして数え上げられている。

こうした地勢の問題から、日本では昭和の中頃まで、毎年のように自然災害によって多くの人命や財産が奪われてきた。しかしながら 1961 年に「災害対策基本法」が制定されて以来、国土保全事業の推進、気象観測設備の充実や予報技術の向上、災害情報伝達手段の発達・普及などにより、死者・行方不明者の数は著しく減少した（内閣府 2010: 第 1 章 2-1）。

¹ 被災した都道府県数については、総務省消防庁災害対策本部（2012）の文末に添付されている別紙 1～7 頁の都道府県別「被害の状況」をもとに計上した。

² 1992 年に東京大学の廣井脩らが行った、全国 3261 の全市町村を対象とするアンケート調査（有効回答数 2461）では、1945 年以降に自然災害が発生したという市町村は全体の 89%であり、そのうち、台風・豪雨による風水害に遭ったと回答した市町村は 99%であった（今本ら 2003: 1-8）。

³ 高松地方気象台（2006）より。また、内閣府の『平成 22 年 防災白書』によれば、「世界全体に占める日本の災害発生割合は、マグニチュード 6 以上の地震回数 20.5%」とされており、規模の大きな地震に限定すれば、日本における地震の発生頻度は全世界の 2 割を占めていることがわかる（内閣府 2010: 第 2 部第 1 章）。

しかしながら、そうはいつでもやはり、自然災害による被害を完全になくすことは不可能であり、ここ 20 年ほどを見ても 7,000 人以上の命が自然災害によって失われている⁴。

とくに、1995 年に発生した阪神・淡路大震災は、死者・行方不明者をあわせて 6,437 人にのぼり、この震災を機に、国や地方自治体、そして人びとの防災に対する関心や意識は格段に上昇したといえる。

1. 3 国や地方自治体における防災対策

国や地方自治体における防災対策は、先述の「防災対策基本法」にもとづく防災計画の策定とその実施によって行われている。ここでは詳細を述べることはできないが、防災対策基本法の内容は、① 防災責任の明確化、② 防災体制、③ 防災計画、④ 災害予防、⑤ 災害応急対策、⑥ 災害復旧、⑦ 財政金融措置、⑧ 災害緊急事態、の 8 つとなっている。

なかでも、④ 災害予防では、国土保全、防災施設等の整備、災害リスクの観測及び予報・警報の実施、避難勧告等の判断・伝達、情報・通信体制の整備、総合防災情報システムの構築や整備、防災意識の高揚と防災知識の普及、災害時要援護者対策、防災訓練、自主防災組織とボランティア活動の支援といった、さまざまな対策が講じられている（内閣府 2002, 2011）。

だが、国や地方自治体が実施するこうした対策について、市民はどの程度、その内容を認知・理解しているのだろうか。国は 2000 年以降、毎年各 5 回、広報誌『ぼうさい』を発行するなど、その周知に務めているが、こうした広報誌自体、知っている人は少ないのではないだろうか。

本報告書内においては、第 4 章を担当する隅が千葉市の防災対策の概要についてまとめ、その上で、それらの対策の一部について、千葉市民がどの程度そうした対策を認知しているのか、およびそうした行政の防災対策に対する認知が、人びとが行なう防災行動にどのような影響を及ぼしているのかということを分析している。

1. 4 市民が行う防災対策 I ——防災意識に関する分析

今度は、行政の行う防災対策ではなく、市民が自らの家庭で行う防災対策に目を転じてみよう。

国や自治体がどれだけ防災に力を注いだとしても、大規模災害であればあるほど、あるいは広域災害であればあるほど、行政の力だけではその救助に限界があると指摘されている⁵。とくに、今回の東日本大震災では、私たちの誰もが、そうした行政の力の限界を感じ

⁴ 内閣府（2010）『平成 22 年 防災白書』、第 1 章「2. 自然災害の状況」内、表 1-2-1「昭和 20 年以降のわが国の主な自然災害の状況」をもとに、平成に入ってから以降（1989～2010）の「死者・行方不明者数」を計上した。

⁵ たとえば、安城市池浦町の防災情報サイト「いけうら防災ネット」によれば、「この先 [=地震発生後] 幾日かは、この不便な生活環境での知恵や工夫・努力が必要です。最低でも最初の 3 日間は他府県からのひとやモノといった援助が私たちの手元まで届きませんし、県や市にもほとんど期待はできません」とある（安城市池浦町、2010）。また、

たのではないだろうか。

こうした、行政の力の及ばない場合の次善の策として、もっとも期待が寄せられているのが近隣の人びとの間での助け合い、つまりは地域コミュニティ内での互助である。

こうした状況を踏まえ、第5章を担当する宮内は、地域コミュニティの人間関係と防災意識との関連について分析を行なっている。ここで言われる防災意識とは、さまざまな防災対策について誰が中心となってどのように行うべきなのか、といった考え方のことを示している。宮内は、地域コミュニティの中で緊密な人間関係を築いている人とそうでない人との間では、防災意識にどのような違いが見られるのか、および、緊密な人間関係が構築されている地域とそうでない地域では、防災意識にどのような違いが見られるのかという2点を分析することで、防災対策が活発な地域とそうでない地域との差が何に由来するのかを明らかにしようとしている。

1. 5 市民が行う防災対策Ⅱ——防災行動に関する分析

さて、第5章の宮内が防災意識を分析の中心に据えていたのに対して、続く第6章から第11章にかけては、防災行動に焦点が当てられている。

(1) 防災行動を促進／抑制する要因の分析

第6章および第7章では、主に、どのような人びとが防災対策を行う、あるいは行わないのか、という観点から分析が行なわれている。

第6章を担当した嶋村は、主に、自らの住む地域が安全であると考える人ほど防災対策をしていないのではないか、という仮説を立て、分析を行なった。

先行研究によれば、「繰り返し災害に見舞われる地域では、コミュニティが災害に対抗するための手段を独自に形成する場合がある。……しかしその一方で、……近年は災害に関する知識や経験を伝承するコミュニティそのものが崩れつつあり、自分たちの住む地域の災害下位文化⁶について知らない人が多いことが、防災や災害発生時において大きな問題となることも指摘できる」(元吉 2004:11-12)。

こうした先行研究も踏まえ、嶋村は、自分の住む地域が過去に被災したことを知っているかどうか、および自分の住む地域が災害に強い地域だと思うかどうか、ということが、個人の防災対策にどのような影響を与えているのか、という観点から分析を行なっている。

また、嶋村は、上記の分析とは別に、日常的な行動に制限があれば防災対策をするのは難しいのではないかと、という仮説も立てており、人びとの外出行動と防災対策との関連についても分析を進めている。

内閣府の報告書にも「阪神・淡路大震災においては、NPO やボランティア等の活躍が目立った反面、行政のみでは大規模災害時において発生する諸課題への対応には限界があることや、行政と民間との連携や被災者の自力復興に対する支援のあり方の難しさが指摘された」とある(内閣府 2001:4)。

⁶ 地域コミュニティが独自に形成した災害発生時にすべき行動や対応に関する規範、災害に関する知識、災害での被害軽減策などの文化的防衛のセットのこと。

一方、第7章を担当する秋葉は、人びとが防災対策を行う要因をマスメディアと関連付けて分析を行なっている。

秋葉が分析の焦点に据えるのはテレビ視聴時間であり、その長さで個人が行う防災対策との関連を考察している。そのさい秋葉は、単に日頃のテレビの視聴時間に注目するだけでなく、昨年の東日本大震災を考慮し、震災直後はテレビ視聴時間が伸びることでよりいっそう防災行動が促進されていると考え、昨年の震災の以前と以後における比較分析も行なっている。

（2）防災行動を行わない理由の分析

第6章・第7章が、どのような人びとが防災対策をする／しないのかといったことに焦点が当てられていたのに対し、第8章を担当する田村および第9章を担当する佐藤は、防災対策をしたほうが良いと認識しているにもかかわらず、防災対策が行なわれないのはなぜなのか、という観点から分析を行なっている。

先行研究によれば、「防災行動と関連する要因として繰り返し検討されてきたものとしてまず、過去の被災経験による影響が挙げられる。過去の被災経験は防災行動の重要な規定因となるという報告は多い。また、被害が大きかった人ほど、近い過去に被害があった人ほど、防災行動をしていることも報告されている。その一方、被災経験と防災行動には関連がないという報告も多い。また、過去の被災経験と災害に対する認識についての検討も行われているが、やはり一貫した結果は得られていない」（元吉 2004:17、元吉による文献注は省略）。

第8章を担当する田村は、こうした問題を踏襲し、その再検討を行なっていると言ってよい。

田村の疑問は、過去の被災経験があろうがなかろうが、同様に防災行動をしない人びとがおり、それはなぜかという点に向けられている。そのさい、田村が仮説として提示するのが「正常化の偏見」である。正常化の偏見とは、「極度に大きな危険の存在が告知されても、その危険が人びとの対応能力をはるかに超え、かつ、危険性の告知に曖昧性がある場合、大きな危険が強いる心的緊張状態を解消すべく、上記の曖昧性が許容する範囲で危険度を低く評価する傾向」のことである⁷（矢守 2008:137）。

田村は、人びとは被災経験の有無にかかわらず正常化の偏見を起こすがゆえに、防災行動をおこさないのではないかという仮説を立てる。ただし、田村の考えでは、被災経験のある人となない人では正常化の偏見に至るプロセスが異なる。そのプロセスに当たる項目が、元吉の言う「災害に対する認識」である。

それゆえ、田村の分析は、これまでに行われてきた被災経験と防災行動との関連性に関

⁷ ただし、この定義は、広瀬弘忠（1984）『生存のための災害学：自然・人間・文明』内に記述されている「正常化の偏見」の概念を、矢守が2つに要約したものの方であり、これだけでは「正常化の偏見」の正確な定義とは言えない。が、その定義の詳細などについてはここでは触れる余裕がないため、省略する。詳しくは矢守（2008）を参照。

する諸研究に、正常化の偏見とその形成プロセスという新たな角度から迫ろうとするものだと言えるだろう。

一方、第9章を担当する佐藤が注目するのは不安感である。

先行研究によれば、「不安感と防災行動にも関連が見られ、災害に対する不安が高い人は、不安が低い人に比べて防災行動を実施しているという」（元吉 2004:19）。しかしながら、高い不安感をもつ人のすべてが十分な防災対策をしているとは限らない。そこで佐藤は、こうした先行研究の知見からさらに一步踏み込み、「不安感が高いにもかかわらず防災への取り組み度が低い人があるのはなぜか」という問題を提起し、性格特性との関連からその問題を解明しようとしている。

（3）防災対策の内容の分析

続く第10章・第11章では、（1）・（2）とは異なり、防災対策・防災行動の具体的な内容について分析されている。

第10章を担当する市瀬は、さまざまな防災行動のなかでもとくに、東日本大震災直後において発生した生活必需品の大量購入——いわゆる「買い占め」に注目し、どのような人びとが「買い占め」を行ないやすいのかといった問題を、「噂」の信じやすさといった観点から分析している。

また、第11章を担当した坂田は、先述した秋葉（第7章）と同様、テレビの視聴時間を分析の軸としながらも、それがどのような対策を講じることへとつながるのか、また、自らの行った防災対策が十分であったかどうかという評価とどのように関連しているのかという点について分析を行なっている。そして可能な限り、そうした分析を通じて、人びとの防災対策の質や継続性の問題へと迫ろうとしている。

こうした防災対策の質や継続性の問題はすでに先行研究でも指摘されており、たとえば、防災行動とそれに関わるコストとの関連については、阪神・淡路大震災からおおよそ2年後におこなわれた調査⁸において、「身近な備えについては、大部分の人が大震災が起こる以前から行なっていた。一方、地震保険や防災訓練といった比較的大がかりな備えについては、今後準備したいとして、現在でもまだ備えを行なっていないとする人が多かった」（家庭問題研究所 1997:49）ことが指摘されている。また、防災行動の継続性については、火山災害地域における縦断調査結果から、次のようなことが指摘されている。「2000年の調査時点で岩手山の火山活動は、行政やマスコミ、研究者にとっては高い緊急性を持つ課題であった。……そのような状況から火山活動が落ち着きをみせて数年、今回の07年調査の結果では、……00[年]時点で[さえも]決して高くないと考えられた防災行動・防災意識が、大幅に減少していることが読み取れる。／この結果は、これまでの研究で明らかにされてきている各種の『防災体験の風化』のひとつであると考えられる」（小野澤

⁸ 家庭問題研究所によって、横浜市民と神戸市民を対象に、1996年12月におこなわれた「阪神・淡路大震災と家族についてのアンケート」。詳細は、家庭問題研究所（1997）を参照。

2008:11、[] 内は引用者)。

さらに坂田は、日本社会に対する信頼度と個人の防災行動との関連にも注目しており、先の分析と同様、テレビ視聴時間を説明変数として、その関連性に迫ろうとしている。

1. 6 おわりに

繰り返しになるが、本報告書の目的は、防災についての総合的な考察を行うことにある。

各章は、それぞれの学生がそれぞれの問題意識に沿って構成したため、その内容は多岐に渡るが、そうであるがゆえに、単に人びとがどのような防災行動を行なっているかだけでなく、国・地域・個人といった防災対策の主体のすべてについて、さらには、何が人びとの防災対策を促進あるいは抑制するのか、なぜ防災対策を必要と認識しながらもしない人びとがいるのか、そして、人びとはどのような防災対策をどのように行なっているのかなど、さまざまな角度から、人びとの防災行動と防災意識に迫ることができたと言えよう。

以下では、さっそく、調査の概要（第2章）と千葉市の概況（第3章）を経て、各自の分析についてみていこう。

第2章 統計的調査の概要

A92066 宮内翔史

2. 1 調査の目的と調査票の概要

(1) 調査の目的

この調査は、千葉市民を対象に日頃の防災意識と防災行動や、2011年3月11日に発生した「東北地方太平洋沖大地震（東日本大震災）」を経て、防災意識や防災行動がどのように変化したのかを明らかにするために行った。

(2) 仮説間の関連

第1章で概観した各自の問題意識・仮説は図2-1のようにまとめられる。

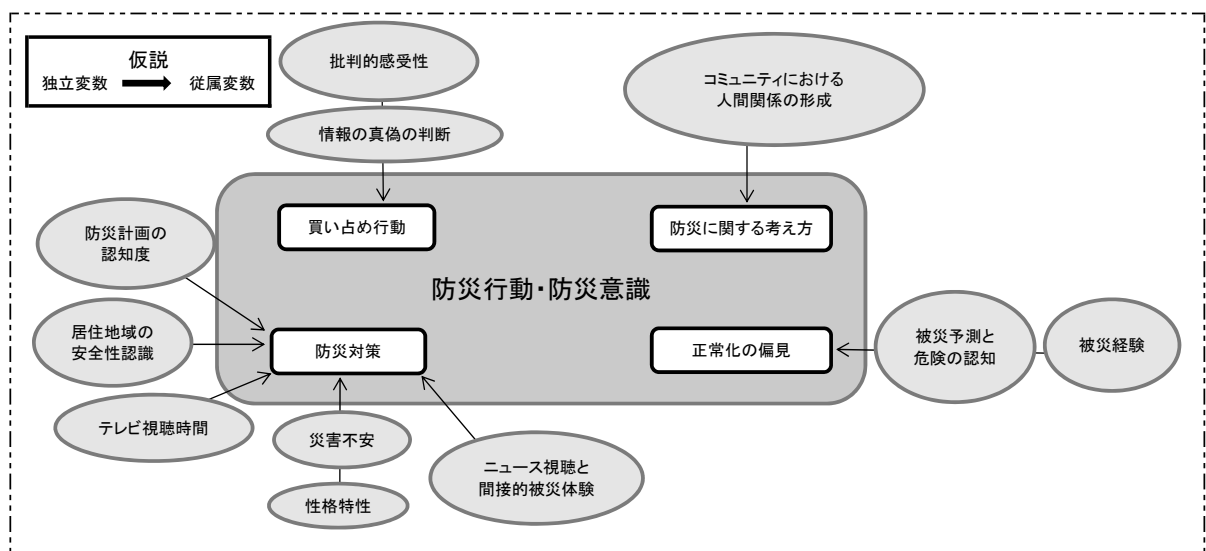


図2-1 仮説間の関連図

全8名のうち6名は「防災行動」に関連する「防災対策」や「買い占め行動」を従属変数とし、①「防災計画の認知度」、②「居住地域の安全性認識」、③「テレビ視聴時間」、④災害不安を媒介変数とする「性格特性」、⑤情報の真偽の判断を媒介変数とする「批判的感受性」、⑥「ニュース視聴と間接的被災体験」を独立変数として、どのような性格・認知・思考特性や経験・情報が人々の「防災行動」に影響を与えているのかを考察する。

2名は「防災意識」に関連する「防災に関する考え方」や「正常化の偏見」を従属変数に、⑦「コミュニティにおける人間関係の形成」、⑧被災予測と危険の認知を媒介変数とする「被災経験」を独立変数として、どのような関係性や経験が人々の「防災意識」に影響を与えているのかを考察する。

（３）調査票の概要

上記の仮説をもとに、調査を行うにあたっては以下の質問項目を設定し、調査票を作成した（巻末「調査票」参照）。

- 居住地区の被災に関する項目（問 1）
- 居住地区の地盤・地勢の強さに関する項目（問 2）
- 「ヒヤッ」とした経験の有無に関する項目（問 3（A））
- 「ヒヤッ」とする経験の予測に関する項目（問 3（B））
- 危険が自身に及ぶ可能性に関する項目（問 4）
- 家庭内での被災に伴う不安に関する項目（問 5）
- 危険に対する対処に関する項目（問 6）
- 震災後半月間の購入物品の量に関する項目（問 7）
- 日頃のニュース視聴に関する項目（問 8）
- 震災以前のテレビ視聴時間に関する項目（問 9（1））
- 震災後 1 週間のテレビ視聴時間に関する項目（問 9（2））
- 震災 1 ヶ月後のテレビ視聴時間に関する項目（問 9（3））
- 震災後の番組視聴時間の変化に関する項目（問 10）
- 情報の真偽の判断に関する項目（問 11）
- 防災への取り組みに関する考えに関する項目（問 12）
- 外出頻度に関する項目（問 13）
- 外出しない理由に関する項目（問 13 付問）
- 地域活動への参加に関する項目（問 14）
- 付き合いのある近隣の人の数に関する項目（問 15）
- 千葉県防災計画・対策等の認知度に関する項目（問 16）
- 千葉市の防災取り組み度の評価に関する項目（問 17）
- 防災対策の取り組み状況に関する項目（問 18）
- 防災対策の取り組み度に関する項目（問 19）
- 生活問題の取り組み主体に対する考えに関する項目（問 20）
- 性格特性に関する項目（問 21）
- 批判的感受性に関する項目（問 22）
- 現在の日本社会についての考えに関する項目（問 23）
- 東日本大震災の被災経験に関する項目（問 24）
- 性別に関する項目（問 25（1））
- 年齢に関する項目（問 25（2））
- 配偶関係に関する項目（問 26）
- 住居形態に関する項目（問 27）

集合住宅階数に関する項目（問 27 付問）
集合住宅居住階に関する項目（問 27 付問）
同居者の続柄に関する項目（問 28）
同居人数に関する項目（問 29）
現在の職業に関する項目（問 30）
勤務形態に関する項目（問 31）
最終学歴に関する項目（問 32）
世帯収入に関する項目（問 33）
居住区に関する項目（問 34）
居住町に関する項目（問 35）
現在地の居住年数に関する項目（問 36）

2. 2 調査の名称と調査の主体

（1）調査の名称

「千葉市民の防災意識と防災行動に関する調査」

（2）調査の主体

淑徳大学総合福祉学部人間社会学科

2011 年度「フィールドワークⅠ」「フィールドワークⅡ」受講生

秋葉 駿	市瀬 智啓	坂田 智洋	佐藤 朱里
嶋村 恭範	隅 彩香	田村 渉	宮内 翔史

調査責任者

淑徳大学教授 野田 陽子	淑徳大学教授 松菌 祐子
社会調査助手 佐藤 麻衣	

2. 3 調査対象

（1）母集団

千葉市 6 区（稲毛区、中央区、花見川区、緑区、美浜区、若葉区）在住の 20 代～70 代の男女。千葉市を選定したのは、千葉市がさまざまな住民が混在する都市近郊の特色を表していると考えられるためである。その中で 20 代～70 代の男女を選定したのは、防災意識と防災行動が年齢や性別に関係なくすべての世代に関わってくるものであるためである。

2011 年 3 月 31 日現在において、千葉市 6 区の住民基本台帳に記載されている 20 代～70 代の男女は 743,753 人であった。

（2）対象者

千葉市稲毛区、中央区、花見川区、緑区、美浜区、若葉区在住の 20 代～70 代の男女の中から無作為に抽出した 1,465 人

(3) 選定方法

以下の手順に従って、確率比例抽出法により抽出した。確率比例抽出法は、第 1 段階では第 1 次抽出単位はその大きさに比例した確率でランダムに抽出され、第 2 段階では、抽出された第 1 次抽出単位に、その大きさに関係なく同数の標本が割り当てられる方法である。

- ① 1 地点（町丁）ごとに 30 人を抽出し、合計 1,500 人を抽出することを目指した。住民基本台帳には母集団に含まれない 20 歳未満 80 歳以上の人も含まれているため、等間隔に標本抽出すると 1,500 人に満たない恐れがある。よって下記②により、1,500 人より多くサンプル数を設定する。

- ② 千葉市の人口に対する母集団の割合と暫定抽出サンプル数

$$743,753 \text{ (20 代～70 代の人口)} \div 959,415 \text{ (千葉市の人口)} = 0.775 \text{ (77.5\%)}$$

ここから最終的に 1,500 人を抽出するので、暫定抽出サンプル数は

$$1,500 \text{ (予定サンプル数)} \div 0.775 \text{ (全人口に対する 20～70 代人口比)} \div 1,935 \text{ (人)}$$

- ③ 1 地点（町丁）ごとに 30 名を抽出するとすると、抽出地点数は、

$$1,935 \text{ (暫定抽出サンプル数)} \div 30 \text{ (人)} = 64.5 \text{ (地点)}$$

となるので、65 地点とする。

- ④ 母集団に該当する町丁別累積人口 743,487 人（町丁別人口統計表には「年齢不明者」がいるため、累積しても千葉市の発表している母集団人口とは数が合わない）から合計 1,935 人を抽出するために第 1 次抽出単位の抽出間隔を決める。抽出間隔は、

$$743,487 \text{ (町丁別累積人口)} \div 65 \text{ (地点)} \div 11,438 \text{ (人)}$$

となる。

- ⑤ ランダムに決定した 4 桁の番号をスタート番号として、11,438 人間隔で該当した地点を抽出する。この作業を繰り返して 65 地点を抽出する。

- ⑥ 抽出した 65 地点ごとに 30 名ずつを無作為抽出して 1,950 名を得た。

$$30 \text{ (人)} \times 65 \text{ (地点)} = 1,950 \text{ (人)}$$

ここから 20 歳未満と 80 歳以上を除いた 1,465 人が対象者となった。

2. 4 統計的調査の方法

郵送調査法（調査票を対象者に郵送し、対象者自身が調査票に記入し、返送する調査方法）

調査時期 2011 年 9 月 13 日～9 月 26 日

回収結果 有効回収数（率） 395 票（27.0%）

注）巻末の基礎集計表における年齢階級は、本来「70 代」とすべきところを「70 歳以上」と表記してある。これは調査票を発送した 2011 年 9 月 13 日からその回収期限である 9 月 26 日までの間に誕生日を迎え、「80 歳」となった人が 1 人いたためである。本調査においては、この 1 人も含め分析することにした。

第3章 千葉市の人口構造・産業構造

本章においては、今回の調査対象地域である千葉市の特徴について、市内6区の特性（3. 1）、千葉市の人口構造（3. 2）および産業構造（3. 3）といった3つの視点からまとめていく。

3. 1 千葉市6区の特性

A92036 市瀬智啓

千葉市ホームページに掲載されている、千葉市総合政策局がまとめた、各区の「基本計画」を参考に、千葉市6区の特性を以下に記述していく。

（1）中央区

中央区は、県郡・千葉市の中央に位置し、面積は44.81km²であり、1921年（大正10年）1月1日の市制施行以来、政治・経済・文化の中心地として発展してきた区である。人口は6区の中で最も多く、近年はマンション建設などによりさらに増加している。

千葉都心には、各種行政機関が集中しているとともに、千葉駅を中心として、商業・業務機能が集積している。蘇我特定地区ではJR蘇我駅周辺とその臨海部において、蘇我副都心の整備が進められている。本区は都市機能の充実・強化に取り組み、県郡・千葉市の顔として発展を続けている。

（2）花見川区

花見川区は、千葉市の北西部に位置し、面積は34.24 km²で、北部は八千代市、北東部は佐倉市及び四街道市、西部は習志野市に隣接している。区域は南北に長く、その中央を、区の名称ともなっているシンボルの花見川が流下し、豊かな河川空間が広がっている。

区の発展の歴史は、明治時代に総武鉄道（現：東日本旅客鉄道株式会社）、大正時代には、京成電気軌道（現：京成電鉄株式会社）が営業を始めたことに伴い、それらの駅を中心に住宅地が広がっていったことにある。また、戦後の日本経済復興を契機に、首都圏のベッドタウンとして、花見川団地をはじめとする大規模住宅団地の建設が進むとともに、その周辺で宅地化が進んでいったことも、区の発展の歴史として挙げられている。

（3）稲毛区

稲毛区は、千葉市北西部に位置し、面積は21.25 km²で、6区の中では2番目に小さな区である。稲毛区は、地形が比較的平坦なこともあり、大規模な住宅団地の造成や土地区画管理事業によって市街化が進んでいる。そのため、千葉市内でも、最も人口密度が高い区となっている。また、区北東部には、機械金属分野を中心とした工場が立地している。区内には、ほかにも、千葉大学、千葉経済大学、敬愛大学や市教育センターなど、多くの

教育機関や、放射線医学総合研究所、東京大学生産技術研究所が立地しており、「文教のまち」という側面は、稲毛区の大きな特徴となっている。

（４）若葉区

若葉区は、千葉市の北東部に位置し、面積は 84.21 km² であり、6 区の中で最大の面積を有している。区域は東西に大きく広がっており、土地利用は大規模な住宅団地などが整備されている西部地域、畑地・林地などが多く農業が盛んな東部地域に区分できる。西部地域は、区役所などの公共施設と大規模な住宅団地が集中しており、東部地域は、千葉市における農業の中心的地域となっている。

（５）緑区

緑区は、千葉市東南部に位置し、面積は 66.41 km² と 6 区の中では 2 番目に大きな区である。緑区はその名の通り、自然環境に恵まれており、区域の約 28%を山林が、約 21%を畑地が占めている。JR 外房線以北を中心に農地が多く残されており、千葉市内における農家数、経営耕地面積の約 3 割がここに分布しており、この地域は、農業地域としての重要な役割を担っている。工業については区の南部に、研究開発工場を主体とした「千葉土気緑の森工業団地」の整備が進められ、次世代産業の振興寄与を期待されている。

（６）美浜区

美浜区は、千葉市の西側に位置し、区の全域が埋め立てにより造成された地域である。面積は 21.16 km² と 6 区の中では最も小さな区であるが、全体的に平坦な地形であり、計画的なまちづくりが進められている。区の南西部は東京湾に面し、海浜部には、稲毛海浜公園・幕張海浜公園といった公園のほか、いなげの浜・検見川の浜・幕張の浜という国内有数の人口海浜が整備されている。また、区の中央部には、区役所など行政サービス施設のほか、海浜ニュータウンなどの大規模な住宅地区が整備されている。さらに、区の南東部には、食品コンビニートや自動車関連の事業所などが広がる一方で、国道 14 号線までの地域には多くの中高層住宅が立ち並ぶ住宅地域となっている。美浜区を流れる花見川を境として東京よりの北西部は、幕張新都心としての整備が進み、大型コンベンション施設である幕張メッセをはじめとして、国際的な企業や研究開発機関が集積している。

3. 2 千葉市の人口構造

A92042 坂田智洋

本節においては、千葉市総合政策局から毎年3月末と9月末に発表される人口データ(住民基本台帳人口と外国人登録人口の合計)の年齢別集計をもとに、1996年から2011年までの5年ごとの千葉市と6区の人口構造をみていく。

3. 2. 1 千葉市の人口動態

千葉市の総人口は、1996年から2011年まで少しずつ増加してきた(表3-1)。表3-2、表3-3より、平成18年までは男性の方が女性よりも多かったが、平成23年には女性の人口が男性よりも多くなっている。

表3-1 千葉市の人口

	単位(人)		
	総人口	男性	女性
1996年	854,009	431,548	422,461
2001年	887,883	447,236	440,647
2006年	924,063	463,130	460,933
2011年	959,415	479,046	480,369

表3-2 千葉市男性の人口構造の変化

	単位(人)				
	総人口	20歳未満	20～64歳	65歳以上	高齢化率(%)
1996年	431,548	95,398	300,775	35,375	8.2
2001年	447,236	88,972	307,298	50,966	11.4
2006年	463,130	88,026	305,300	69,804	15.1
2011年	479,046	89,762	301,120	88,164	18.4

表3-3 千葉市女性の人口構造の変化

	単位(人)				
	総人口	20歳未満	20～64歳	65歳以上	高齢化率(%)
1996年	422,461	90,439	284,640	47,382	11.2
2001年	440,647	84,561	293,409	62,677	14.2
2006年	460,933	84,090	294,378	82,465	17.9
2011年	480,369	85,725	289,487	105,157	21.9

出典) 表3-1～3-3: 千葉市総合政策局 2011a 「人口統計」>「年齢別人口・町丁別年齢別人口」>「全市」より

年齢別人口構成をみると、65歳以上の人口増加が目立つ。

日本の高齢化率は、2010年国勢調査データで23.1%、総務省統計局による2011年9月の推計値では23.3%となっている。千葉市でも高齢化率の上昇がみられ、高齢化率は1996年の9.7%から2001年には12.8%、2006年には16.5%と上昇し、2011年には20.1%と急速に高齢化が進んでいる。千葉市の高齢化率は男性よりも女性の方が高く、2011年には女性の高齢化率は21.9%で超高齢社会となっている。

2011年3月の時点において、千葉市6区で最も人口の多い区は198,205人の中央区であり、最も人口の少ない区は122,930人の緑区であった(表3-4～3-9参照)。

表 3-4 中央区の総人口と高齢化率

	単位 (人)		
	総人口	65歳以上	総人口に占める 65歳以上の割合 (%)
1996年	165,916	21,925	13.2
2001年	170,972	27,462	16.1
2006年	183,913	33,298	18.1
2011年	198,205	39,187	19.8

表 3-5 花見川区の総人口と高齢化率

	単位 (人)		
	総人口	65歳以上	総人口に占める 65歳以上の割合 (%)
1996年	176,386	16,351	9.3
2001年	179,548	22,377	12.5
2006年	180,906	30,441	16.2
2011年	179,703	38,390	21.4

表 3-6 稲毛区の総人口と高齢化率

	単位 (人)		
	総人口	65歳以上	総人口に占める 65歳以上の割合 (%)
1996年	148,693	14,415	9.7
2001年	146,855	19,335	13.2
2006年	149,026	24,855	16.7
2011年	156,671	31,258	20.0

表 3-7 若葉区の総人口と高齢化率

	単位 (人)		
	総人口	65歳以上	総人口に占める 65歳以上の割合 (%)
1996年	148,766	15,527	10.4
2001年	150,745	21,831	14.5
2006年	149,433	29,188	19.5
2011年	151,468	36,976	24.4

表 3-8 緑区の総人口と高齢化率

	単位 (人)		
	総人口	65歳以上	総人口に占める 65歳以上の割合 (%)
1996年	85,376	7,750	9.1
2001年	103,306	10,865	10.5
2006年	113,639	15,128	13.3
2011年	122,930	20,054	16.3

表 3-9 美浜区の総人口と高齢化率

	単位 (人)		
	総人口	65歳以上	総人口に占める 65歳以上の割合 (%)
1996年	128,872	6,789	5.3
2001年	136,457	11,773	8.6
2006年	147,146	19,359	13.2
2011年	150,438	27,456	18.3

出典) 表 3-4 ～ 3-9 : 千葉市総合政策局 a 2011「人口統計」>「年齢別人口・町丁別年齢別人口」>各区より

千葉市の中心地となる中央区だが、1996 年の時点では中央区は 165,916 人で、花見川区が 176,386 人と、6 区で最も人口の多い区は花見川区であった。しかし、花見川区はその後もしつづ人口は増加していたが、2011 年には人口が減少している。同じように人口が減少した区が、2001 年時の稲毛区と 2006 年時の若葉区である。

1996 年から 2011 年までの総人口に占める 65 歳以上の割合をみると、花見川区、稲毛区、若葉区、美浜区において急激な上昇がみられる。とくに美浜区は、1996 年では 5.3%と最も高齢化率の低い区であったが、2006 年には 13.2%、2011 年には 18.3%と高齢化率が大きく上昇した。人口増のなかでも高齢化が進むのは、千葉市の人口急増期に移住し住み続けている住民の高齢化が関連していると推察される。若葉区は、総人口に占める 65 歳以上の割合が 24.4%と 6 区で最も高く、1996 年から 2011 年の間に、花見川区と同様に超高齢社会に突入している。

3. 2. 2 千葉市の人口密度と世帯人員数

前節と同様に千葉市総合企画部統計課による人口集計（住民登録人口と外国人登録人口）により、1996 年から 2011 年までの 5 年ごとの千葉市、および 6 区の人口密度と 1 世帯あたりの人員数をみていく。

表 3-10 千葉市および6区の人口密度と1世帯あたりの人員数

		千葉市	中央区	花見川区	稲毛区	若葉区	緑区	美浜区
1996年	人口密度 (人/1km ²)	3150.4	3709.2	5152.7	6985.5	1769.9	1319.8	6114.6
	1世帯あたりの人員数 (人)	2.6	2.3	2.7	2.6	2.7	3.0	2.7
2001年	人口密度 (人/1km ²)	3270.9	3830.6	5267.5	6945.8	1791.7	1556.5	6431.2
	1世帯あたりの人員数 (人)	2.5	2.3	2.5	2.5	2.7	3.0	2.6
2006年	人口密度 (人/1km ²)	3406.1	4136.4	5306.1	7044.2	1776.0	1712.0	6935.5
	1世帯あたりの人員数 (人)	2.5	2.2	2.5	2.4	2.6	2.9	2.5
2011年	人口密度 (人/1km ²)	3538.3	4458.4	5270.4	7418.1	1800.6	1851.9	7099.3
	1世帯あたりの人員数 (人)	2.4	2.1	2.4	2.3	2.5	2.8	2.4

出典) 千葉県総合企画部統計課 2011 「分野別統計情報」>「人口・世帯」>「千葉県毎月常住人口調査」

表 3-10 は千葉市と千葉市6区の人口密度と1世帯あたりの人員数を表したものである。

最も人口密度が高い区は、どの年においても稲毛区である。一方、最も人口密度が低い区は、1996年から2006年までは緑区であったが、2011年は若葉区となっている。稲毛区をはじめ、花見川区や美浜区は湾岸沿いであるため、大規模な宅地開発による人口増加が、人口密度が高い要因ではないだろうか。また、1世帯あたりの人員数が最も多い区はどの年も緑区であり、最も低い区は中央区となっている。

3. 2. 3 世帯構成

次に、国勢調査を参考に1995年から2010年までの5年ごとの世帯数をみていく。

千葉市の人口増加に伴い、総世帯数をはじめ、単独世帯数や核家族世帯数も増加している。

2002年から2010年の単独世帯の増加は、表 3-12 を見ても著しい。一方で核家族世帯は、表 3-11 より世帯数は増加していることは分かるが、表 3-12 をみると、一般世帯に占める核家族世帯の割合は減少の傾向にある。単独世帯のうち、2010年の65才以上の高齢単独世帯数は23,497である。

表 3-11 千葉市の「単独世帯」と「核家族世帯」および「総世帯」数

	単独世帯	核家族世帯	総世帯
1995年	81,196	204,765	316,466
2000年	98,833	220,971	348,159
2005年	107,233	235,752	373,766
2010年	131,700	243,038	406,309

表 3-12 千葉市の一般世帯に占める「単独世帯」と「核家族世帯」の割合

	単独世帯	核家族世帯
1995年	26.6	64.7
2000年	28.4	63.5
2005年	28.7	63.1
2010年	32.4	59.8

出典) 表 3-11、3-12 : 総務省統計局 2011 「国勢調査」

3. 2. 4 千葉市の転出入状況

千葉市の住民登録人口の転出入データを参考に、1992年から2011年までの千葉市の転入転出状況をみていく。

表 3-13 千葉市の転出入状況

単位(人)

	転入				転出			
	総数	他区(市内)	県内(市外)	県外	総数	他区(市内)	県内(市外)	県外
1992年	60,603	10,374	50,229	33,277	57,638	10,374	47,264	27,183
1993年	68,501	15,341	53,160	34,256	64,500	15,341	49,159	27,606
1994年	65,802	15,841	49,961	31,701	67,747	15,841	51,906	28,481
1995年	68,239	17,478	50,761	31,518	70,021	17,478	52,543	29,338
1996年	65,683	17,346	48,337	29,569	66,633	17,346	49,287	28,345
1997年	66,826	16,899	49,927	30,984	66,394	16,899	49,495	29,456
1998年	65,548	15,428	50,120	31,634	62,124	15,428	46,696	28,472
1999年	67,310	16,111	51,199	31,902	62,592	16,111	46,481	28,132
2000年	65,613	15,331	50,282	31,401	62,000	15,331	46,669	28,702
2001年	68,137	16,137	52,000	32,494	63,193	16,137	47,056	29,284
2002年	65,901	15,819	50,082	31,161	60,923	15,819	45,104	27,788
2003年	66,207	15,586	50,621	31,225	61,936	15,586	46,350	28,289
2004年	60,027	13,484	46,543	29,073	57,828	13,484	44,344	27,919
2005年	61,965	14,576	47,389	28,923	58,251	14,576	43,675	27,273
2006年	59,914	13,684	46,230	28,270	56,649	13,684	42,965	26,522
2007年	62,760	15,206	47,554	29,063	57,753	15,206	42,547	26,170
2008年	63,308	13,947	49,361	30,347	54,996	13,947	41,049	25,252
2009年	59,809	12,944	46,865	29,215	54,155	12,944	41,211	25,397
2010年	56,241	11,874	44,367	27,163	52,206	11,874	40,332	24,854
2011年	52,611	11,753	40,858	24,379	52,665	11,753	40,912	26,027

出典) 総務省統計局 2012 「住民基本台帳人口移動報告 平成 23 年結果」

全体的に県内(市外)からの転入・転出が多く、毎年 6 万人～8 万人程の人々が転出入し、住民が入れ替わっている。

2011 年の場合、11,753 人が市内で移動し、市外からの転入者は合計 65,237 人、市外への転出者は 66,939 人で、転出超過であった。1992 年から 2010 年まではずっと転入増加であったが、県内および県外からの転入減少により全体で転出超過となった。総務省統計局が 2012 年 1 月 30 日に公表した「住民基本台帳人口移動報告 平成 23 年結果」によると、千葉県は 1956 年以来 55 年ぶりに転出超過となっており、東日本大震災の影響が考えられる。

3. 2. 5 昼夜間人口

国勢調査の従業地・通学地集計の結果を用いて、1985 年から 2005 年までの昼夜間人口をみていく。夜間人口とは、常住人口から年齢不詳の者を除いたものであり、昼間人口とは、夜間人口に通勤、通学で千葉市に流入する人口を加え、通勤、通学で千葉市から流出する人口を引いたものである。

表 3-14 昼夜間人口、流出・流入人口、昼夜間人口比率等の推移

	夜間人口 A	昼間人口 B (A-C+D)	流出人口 C	流入人口 D	昼夜間人口比 率 (B÷A ×100)	流出率 (C÷A×100)	流入率 (D÷B×100)
1985年	788,669	740,483	170,107	121,921	93.9	21.6	16.5
1990年	824,034	772,914	205,849	154,729	93.8	25.0	20.0
1995年	856,593	830,339	215,356	189,102	96.9	25.1	22.8
2000年	883,008	858,702	201,875	177,569	97.2	22.9	20.7
2005年	919,550	894,027	200,816	175,293	97.2	21.8	19.6

出典) 総務省統計局 2011 「国勢調査」(※2010 年の結果は 2012 年 6 月公表予定のためデータなし)

千葉市は、1985 年から 2005 年まで、夜間人口が昼間人口を上回り続けている。どの年も流出人口が流入人口よりも多くなっており、都心部等を仕事の拠点としている人が多いことが推察される。昼夜間人口比率をみると、この 20 年あまりの間にやや高くなってきている。

流出人口数、流入人口数ともに 1995 年をピークに減少に転じている。流出人口はどの年も夜間人口のおよそ 2 割はいる。そのため、流出人口の大半が都心部等を含む市外への通勤・通学であると考え、昼間に災害が発生した場合には、帰宅困難者が多数発生する可能性が高い。

3. 3 千葉市の産業構造

A92036 市瀬智啓

3. 3. 1 千葉市と千葉県・全国との就業者数の産業別構成比の比較

総務省のおこなった 2010 年国勢調査によれば、産業大分類別にみた千葉市の就業者数の構成比は、第 3 次産業が 75.4%と最も高い。この構成比は、千葉県が 71.6%、全国が 66.5%であるのと比較して高い。一方、第 1 次産業、第 2 次産業の占める割合は小さく、第 1 次産業が 0.7%、第 2 次産業が 16.8%であり、県、全国の構成比と比較して低い。千葉市の産業構造の特徴は、とくに第 3 次産業に特化していることがわかる。

第 3 次産業の中でも中分類別にみて、千葉市の産業で最も就業者の割合が多いのは「卸売、小売業」であり、17.8%を占めている。その比率は県や全国と比べても高い。次いで多いのが「医療、福祉」、「運輸業、郵便業」、「宿泊業、飲食サービス業」、「情報通信業」、「教育、学習支援業」、「学術研究、専門・技術サービス業」の順となっている（「サービス業（他に分類されないもの）」を除く）。このうち、千葉市における構成比が、県や全国と比べて高いのは、「情報通信業」、「教育、学習支援業」、「学術研究、専門・技術サービス業」である。後述するように、千葉市には、頭脳集約型の企業が多く立地している「ちばリサーチパーク」のような業務地区や、大手企業の支店・事務所が集中している「千葉新都心地区」、学術機能、研究開発機関が多く集積している「幕張新都心地区」といったような業務地域がある。「情報通信業」等の構成比が県や全国と比べて高いのは、これらの特徴ある業務地域の整備によるところが大きいのではないだろうか。

表 3－14 産業（大分類・中分類）別、千葉市、千葉県、全国の上業者数と構成比

区分	千葉市		千葉県		全国	
	就業者数(人)	構成比(%)	就業者数(人)	構成比(%)	就業者数(人)	構成比(%)
第 1 次産業	2,984	0.7	82,826	2.9	2,381,415	4.0
第 2 次産業	72,402	16.8	556,856	19.2	14,123,282	23.7
第 3 次産業	324,902	75.4	2,074,615	71.6	39,646,316	66.5
分類不能の産業	30,550	7.1	185,099	6.4	3,460,298	5.8
農業、林業	2,964	0.7	78,072	2.7	2,204,530	3.7
漁業	20	0.0	4,754	0.2	176,885	0.3
鉱業、採石業、砂利採取業	83	0.0	1,023	0.0	22,152	0.0
建設業	30,770	7.1	214,872	7.4	4,474,946	7.5
製造業	41,549	9.6	340,961	11.8	9,626,184	16.1
電気・ガス・熱供給・水道業	2,425	0.6	13,706	0.5	284,473	0.5
情報通信業	21,040	4.9	129,589	4.5	1,626,714	2.7
運輸業、郵便業	27,856	6.5	204,086	7.0	3,219,050	5.4
卸売業、小売業	76,778	17.8	495,013	17.1	9,804,290	16.4
金融業、保険業	16,758	3.9	98,899	3.4	1,512,975	2.5
不動産業、物品賃貸業	11,431	2.7	67,140	2.3	1,113,768	1.9
学術研究、専門・技術サービス業	18,152	4.2	104,292	3.6	1,902,215	3.2
宿泊業、飲食サービス業	24,896	5.8	162,598	5.6	3,423,208	5.7
生活関連サービス業、娯楽業	16,784	3.9	120,701	4.2	2,198,515	3.7
教育、学習支援業	21,317	4.9	124,904	4.3	2,635,120	4.4
医療、福祉	40,330	9.4	248,783	8.6	6,127,782	10.3
複合サービス事業	1,127	0.3	12,030	0.4	376,986	0.6
サービス業（他に分類されないもの）	30,422	7.1	189,925	6.6	3,405,092	5.7
公務（他に分類されるものを除く）	15,586	3.6	102,949	3.6	2,016,128	3.4
総数	430,838	100.0	2,899,396	100.0	59,611,311	100.0

資料: 総務省統計局, 2011, 「平成22年国勢調査」

3. 3. 2 千葉市6区の産業別就業者数の構成比の比較

千葉市6区の就業者数の構成比を、産業大分類別に比較してみると、第1次産業の構成比は、千葉市における農業の中心的地域である緑区と若葉区において1.5%と最も高い。次いで、花見川区が0.7%となっている。その他の区では、稲毛区が0.4%、中央区が0.3%、美浜区が0.1%となっている。

第2次産業の構成比が最も高いのは、若葉区の18.1%である。次いで、花見川区の17.8%、緑区の17.5%、中央区の16.9%、稲毛区の15.6%、美浜区の15.0%の順となっている。どの区でも、就業者数の構成比は15%を超えている。

第3次産業については、どの区でも構成比が7割を超えている。最も構成比が高い区は、美浜区で79.4%である。次いで稲毛区の75.8%、中央区の75.3%、花見川区の74.5%、緑区の73.7%、若葉区の73.4%の順となっている。とくに美浜区において第3次産業の構成比が高いのは、後述するように、美浜区は、臨海部に千葉運輸支局があり、物流施設が多く立地していること、また、業務機能や研究開発機能が集中している「幕張新都心」の整備が進められていることなどがその理由として考えられる。第3次産業の中でも、中分類別にみると「情報通信業」、「運輸業、郵便業」、「金融業、保険業」、「学術研究、専門・技術サービス業」の比率が美浜区において高いのは、それらを反映しているといえよう。

表3－15 産業（大分類・中分類）別、千葉市6区の就業者数と構成比

区分	中央区		花見川区		稲毛区		若葉区		緑区		美浜区	
	就業者数 (人)	構成比 (%)	就業者数 (人)	構成比 (%)	就業者数 (人)	構成比 (%)	就業者数 (人)	構成比 (%)	就業者数 (人)	構成比 (%)	就業者数 (人)	構成比 (%)
第1次産業	261	0.3	550	0.7	276	0.4	1,006	1.5	825	1.5	66	0.1
第2次産業	15,525	16.9	14,322	17.8	11,038	15.6	11,806	18.1	9,449	17.5	10,262	15.0
第3次産業	69,177	75.3	60,092	74.5	53,674	75.8	47,807	73.4	39,781	73.7	54,371	79.4
分類不能の産業	6,866	7.5	5,697	7.1	5,792	8.2	4,485	6.9	3,892	7.2	3,818	5.6
農業、林業	255	0.3	549	0.7	274	0.4	1,000	1.5	822	1.5	64	0.1
漁業	6	0.0	1	0.0	2	0.0	6	0.0	3	0.0	2	0.0
鉱業、採石業、砂利採取業	18	0.0	8	0.0	15	0.0	11	0.0	19	0.0	12	0.0
建設業	6,511	7.1	5,804	7.2	4,635	6.5	6,506	10.0	4,041	7.5	3,273	4.8
製造業	8,996	9.8	8,510	10.6	6,388	9.0	5,289	8.1	5,389	10.0	6,977	10.2
電気・ガス・熱供給・水道業	720	0.8	333	0.4	333	0.5	337	0.5	416	0.8	286	0.4
情報通信業	4,196	4.6	4,646	5.8	3,223	4.6	1,780	2.7	2,068	3.8	5,127	7.5
運輸業、郵便業	5,446	5.9	5,755	7.1	4,440	6.3	4,310	6.6	3,080	5.7	4,825	7.0
卸売業、小売業	15,412	16.8	14,935	18.5	12,447	17.6	11,940	18.3	9,271	17.2	12,773	18.6
金融業、保険業	3,292	3.6	3,158	3.9	2,856	4.0	1,911	2.9	1,968	3.6	3,573	5.2
不動産業、物品賃貸業	2,479	2.7	2,219	2.8	2,008	2.8	1,677	2.6	1,194	2.2	1,854	2.7
学術研究、専門・技術サービス業	3,699	4.0	3,101	3.8	3,027	4.3	2,327	3.6	2,534	4.7	3,464	5.1
宿泊業、飲食サービス業	6,099	6.6	4,494	5.6	4,040	5.7	3,754	5.8	2,592	4.8	3,917	5.7
生活関連サービス業、娯楽業	3,679	4.0	2,984	3.7	2,615	3.7	2,850	4.4	2,100	3.9	2,556	3.7
教育、学習支援業	4,494	4.9	3,792	4.7	4,161	5.9	3,013	4.6	2,748	5.1	3,109	4.5
医療、福祉	9,759	10.6	6,544	8.1	6,169	8.7	6,539	10.0	6,071	11.3	5,248	7.7
複合サービス事業	251	0.3	198	0.2	165	0.2	172	0.3	203	0.4	138	0.2
サービス業（他に分類されないもの）	6,324	6.9	5,974	7.4	4,678	6.6	4,600	7.1	3,548	6.6	5,298	7.7
公務（他に分類されるものを除く）	3,327	3.6	1,959	2.4	3,512	5.0	2,597	4.0	1,988	3.7	2,203	3.2
総数	91,829	100.0	80,661	100.0	70,780	100.0	65,104	100.0	53,947	100.0	68,517	100.0

資料：総務省統計局，2011，「平成22年国勢調査」

3. 3. 4 千葉市の主要業務地域

次に、千葉市ホームページに掲載されている、千葉市経済農政局がまとめた、千葉市の「主要業務地域」を参考に、主要業務地域の概要と特徴を記述していく。

千葉市では、首都機能の一翼を担う大都市として、中心市街地を形成する「千葉都心地区」、研究開発、学術・教育機能、コンベンション施設が集積する「幕張新都心地区」、商業・業務系などへの土地利用転換が進められている「蘇我特定地区」（蘇我副都心地区）を合わせて「3 都心」として、位置づけている。

千葉都心地区は、JR 総武線千葉駅・京成千葉駅・京成千葉中央駅・JR 京葉線千葉みなと駅周辺に広がる千葉市の中心市街地である。県内交通の要衝であり、千葉県庁、千葉市役所、国の出先機関などの行政機関や大手企業の支店・事務所などが集中している。

幕張新都心地区は、千葉県企業庁が整備を進める国際業務都市である。国際交流機能、業務機能、研究開発機能、学術・商業・文化機能、スポーツ・レクリエーション機能、住宅機能等の一体的な集積を目指している都市である。

蘇我特定地区とは、JR 蘇我駅周辺を再開発し、千葉都心地区、幕張新都心地区と並ぶ第3の都心として発展が期待される地区である。業務・商業・居住系の土地利用をバランスよく配置し、研究開発・生産・物流系やリサイクル系の土地利用を計画的におこなっている。

また、千葉市には、臨海部と内陸部にそれぞれ工業団地や工業集積地が分布している。臨海部では「新港地区」（美浜区）で食品、「蘇我地区」（中央区）では鉄鋼が主な製品となっており、内陸部では、一般機械、金属製品が主な製造品となっている。

臨海部に属する「蘇我地区」は、昭和20年代に川崎製鉄（現：JFE スチール）、昭和30年代に東京電力千葉火力発電所が進出した地域である。両社は現在も千葉市の経済発展に大きな役割を果たしている。

同じく、臨海部に属する「新港地区」は、千葉市を代表する臨海工業集積地である。準工業地域と工業専用地域からなり、両地域にまたがって、日本で最初の食品工業団地として「千葉食品コンビナート」形成されており、食品製造業が集積していることが特徴といえる。特に工業専用地域には、製粉・製糖・製油など国民生活の基盤となる企業が多く、その製品は材料として地区内で製パンに利用されるなどしている。また、千葉市は平成13年に新港地区の準工業地域を特別用途地区とし、製造業等の操業環境を将来にわたり保全するとともに、これら一層の集積による経済発展を目的とする「新港経済振興地区」と定め、「千葉市新港経済振興地区建築条例」において、業務系の土地利用を図り、住宅・共同住宅等の建築を制限する地区としている。地区内に千葉運輸支局があり、自動車関連企業や物流施設が多く立地していることも特徴の一つである。

内陸部での大きな特徴として、製造業の研究開発施設や工業の立地が進んでいる「千葉土気緑の森工業団地」（緑区）、「ちばリサーチパーク」（若葉区）が挙げられる。

「千葉土気緑の森工業団地」は、千葉県土地開発公社が造成・分譲している160haに及

ぶ広大な工業団地である。団地内には、大規模な公園・緑地が整備されており、周辺には、団地から車で数分の距離に、千葉市内でも特に美しい住宅地として評判の「あすみが丘ニュータウン」が広がっている。この恵まれた環境に着目し、すでに多くの先進企業が研究機関や工場等を設置している。

「ちばリサーチパーク」は、三菱地所株式会社が造成・分譲している業務地区である。千葉市中心部より東へ約 10km に位置し、東関東自動車道・佐倉 I.C を利用して、東京都心へ約 1 時間、成田国際空港まで約 25 分の距離にあり、アクセスの良さが特徴となっている。それぞれの区画は、公園のような敷地にゆったりと配置されており、頭脳集約型の先端企業にふさわしい環境となっている。

内陸部では、他にも、「千種・こてはし地区」（花見川区）、「長沼・六方地区」（稲毛区）、「千葉印刷団地」（緑区）と呼ばれるものがある。

「千種・こてはし地区」には、千葉鉄工業団地と呼ばれる工業団地があり、団地内には、共同宿舎、研修ホール、福利厚生施設等が設備されている。また千葉鉄工業団地に隣接して、千葉市工業センターがあり、どちらも金属製品や一般機械器具など鉄工業関連の企業が立地している。

「長沼・六方地区」は、国道 16 号線から東に広がる工業地域・準工業地域である。大部分は、元軍用地で地形が平坦だったこともあり、工業用地への転用が進み、大手企業から中小企業まで多くの製造業が立地している。

「千葉印刷団地」は、千葉市内にある中小印刷業者が、環境等の諸問題を解消し、従業員の福利の充実、設備の近代化事業の共同化を図るため、整備された工業団地である。

第4章 防災計画の認知と住民の防災行動

A92029 隅彩香

4. 1 問題意識

ひとくくりに「災害」と言っても地震・火事・台風など、千葉市で起こりうる災害は様々である。私達は常に災害ととなり合せて生活している。自然災害の発生は防げないが、事前の対策によって減災できる人もいる。

では、どういう人が防災対策・行動をし、どういう人がしないのだろうか。

この章で注目するのは「都市的生活様式」である。ここでいう都市的生活様式とは「日々の生活問題が、行政、民間、第三セクターなどの専門サービスによって提供される『共同社会消費』によって支えられている職住分離型の生活のこと」をさす（倉沢 1998）。

都市的生活者は、さまざまなサービス利用を通じてふだん便利な生活を送っている。それは防災対策についても影響しているのではないか。都市的生活者は、いつでも買えるので必要とするものを必要な時に買いに行こうと考え、必要以上のものを買わないため、災害に備えた備蓄品は少ないと考えられる。また、都市的生活様式では、自分だけでは解決できない問題、例えば子供や老人の世話、地域環境の整備などについても住民の相互扶助よりも行政のサービスの充実に期待する。地震のように大規模な災害においては、住民個人では対応できないことが多いため、より行政への期待は大きいはずだ。

近年、行政の防災計画の充実が叫ばれ、千葉市でも地域防災計画を強化し、防災対策に関する多くの配布物などを発行し、住民に市が提供するサービスの情報を提供している。しかし、都市的生活者は、サービス依存度が高いため、それを認知・評価するほど、防災に関する行政依存(サービス依存)を高め、防災行動を減らすのではないかと考えた。防災対策を評価している人ほど、行政サービス依存傾向がみられるのではないだろうか。

4. 2 千葉市地域防災計画の概要

千葉市地域防災計画（以下「計画」という）は、災害対策基本法第42条及び千葉市防災会議条例第2条の規定に基づき、千葉市の防災に関する基本計画として1963年10月に作成したものである。

その後、「地震災害防禦（ぼうぎょ）計画」（1972年）の追加を経て「地震対策編」（1984年）、「風水害等編」（1987年）、「大規模事故災害対策編」（2000年）の新設や、社会情勢の変化等に応じて修正を加えてきた結果、計画に掲載する内容が増え、重複箇所も多くなったため、2010年の修正により、計画の内容を修正・更新するとともに、計画全体の構成を変更し「共通編」と「災害応急対策編」に整理した。災害対策基本法上の災害対策本部が水防法上の水防本部を兼ねるため、2010年修正の一環で水防計画を見直し、千葉市

地域防災計画の部門計画として位置づけた。

千葉市では市民の生命や身体、財産を守るため、災害が発生した際に迅速かつ的確な対策を講じるための防災体制の整備や、各種防災用資機材の整備を進めるなどの防災対策を行っている。

以下では、現在行われている千葉市地域防災計画の概要（千葉市総務局危機管理課2010）を紹介する。

（１）計画の構成

千葉市地域防災計画は、総則・災害予防計画・災害復旧計画からなる共通編と、地震対策計画・風水害対策計画・大規模事故災害対策計画からなる災害応急対策編の２つに大きく分けられ、それぞれが次のように定められている。

- 共通編

災害予防に必要な体制整備・環境整備等について定められている災害予防計画を始め、総則や災害復旧計画について書かれている。

- 災害応急対策編

「東海地震に係る周辺地域としての対応計画」について定められている地震対策計画を始め、風水害対策計画や大規模事故災害対策計画などについて書かれている。

計画の前提条件として、「千葉市地震ハザードマップ作成業務報告書」(2008年度)に基づき、東京湾北部地震(マグニチュード7.3)を想定して以下のような被害想定をしている（表4-1）。

表4-1 千葉市における東京湾北部地震被害想定

被害想定項目		中央区	花見川区	稲毛区	若葉区	緑区	美浜区	合計
建物被害	全壊(棟)*1	7,751	2,532	2,741	1,231	645	1,014	15,913
火災被害	全焼(棟)*2	1,042	293	316	64	10	63	1,788
人的被害	死者(人)	513	169	186	80	43	55	1,046
避難者	避難所生活者(人)	53,370	34,295	32,940	21,532	15,049	37,609	194,794
急傾斜地崩壊危険箇所	I(所)*3	23	24	13	25	18	0	103

*1 揺れ、液状化、急傾斜地崩壊によるもの

*2 全壊建物を含まない

*3 傾斜度30度以上、高さ5m以上で、5戸以上の人家に被害を及ぼすそのある急傾斜地等

（２）千葉市が取り組む主な活動

千葉市防災計画の中から、本調査との関連で、住民と直接かかわる部分についてまとめた。これら千葉市の取り組みに関する認知や評価を調査に取り上げた（本章3節以降を参照）。

■ 防災組織

災害発生時に、市民の生命を守り、被害を最小限にとどめるため、市、県、防災関係機関、地域住民、事業所等は、迅速な防災活動を開始するための組織をあらかじめ整備して

いる。また、災害対策基本法第5条第2項の規定に基づき、地域住民が自ら行う防災活動を推進するため、原則として町内自治会組織を単位として、自主防災組織の設置促進に努める。

そこで、防災責任者を決め、市域や市民の生命、身体及び財産を保護するため、災害の予防対策・応急対策・復旧対策を実施し、防災行動力の向上として自主防災組織のパワーアップ、個人のパワーアップを目指す。

■ 地域拠点の整備

各地域が一時的に孤立した場合に応急復旧対策を単独で行うために必要な機能を整備するとともに、地域拠点を補完するため、地域に密着した学校、公民館、コミュニティセンター等を候補施設として、コミュニティ（中学校区）拠点の整備を行う。

それぞれの地域拠点区で整備されている主な機能は、① 情報の収集・提供のための通信広報機能、② 防災活動用資機材の備蓄、③ 食料等救援物資の備蓄、④ 平常時の教育の場、とされている。

■ 避難の安全

安全で災害に強いまちづくりを目指し、建築物の耐震・不燃化、河川・排水路等の整備を行っている。

また、安全避難の環境整備として、地域の一時的な避難先場としての「避難場所」、焼失や倒壊等により自宅に帰れなくなった被災者の収容場所としての「避難所」、火災延焼等により自宅や避難所等が危険な状況となった場合に避難する場所としての「広域避難場所」を指定している。

■ 給水・備蓄の整備

給水体制の整備としては、最低限必要な次の飲料水量を確保する。

- 混乱期（発災～3日） 飲料水3リットル／人
- 復旧期（4日目以降） 飲料水と生活用水を合わせて 20～250リットル／人

耐震性井戸付貯水槽や非常用井戸により初期応急飲料水を確保するとともに、現に飲料用に使用されている市民等の所有井戸を防災井戸として指定し、災害時に活用する。

備蓄品の整備は緊急用食糧、生活必需品、その他応急対策用資機材の備蓄を進め、特に、緊急に調達することが困難と予想される食糧、生活必需品は、想定避難者の数の1～3日分相当を備蓄する（参考として、平成21年4月時点での備蓄量を表4-2として掲載した）。

表4-2 防災備蓄倉庫の現況（平成21年4月1日現在）

医薬品セット	食糧（食）				生活必需品		
（30人用）	乾パン	アルファ 米	クラッカー	粉ミルク	毛布 （枚）	防水シート （枚）	簡易トイレ （台）
352	199,000	285,000	86,000	1,200	21,700	3,500	204

なお防災備蓄倉庫の状況は平成21年4月1日現在であるが、拠点倉庫は中央区4・花見川区3・稲毛区1・若葉区2・緑区3・美浜区1となっている。また、分散備蓄庫は中央区10・花見川区10・稲毛区9・若葉区2・緑区3・美浜区12となっている。

（３）災害時要援護者の避難確保に関する基本的考え方

千葉市では、災害時要援護者の避難確保について、以下のような施策を行っている。

- ① 市は、自主防災組織等を通し地域住民に対して現況及び必要な改善策を示し、地域の課題とするよう問題提起する。
- ② 市は、地域の検討した対策の実施に必要な財政援助等を行う。
- ③ 市は、介助を必要とする避難行動に対して、支障となるような要素の有無を調査し、災害時要援護者とそうでない市民と共生できるよう、「人にやさしいまちづくり」を計画的かつ総合的に推進する。また、地域の要望に応じて、支障となる要素の解決に努める。

ただし、こうした①～③の政策は、以下の④～⑦のような市民の協力が前提にあって初めて成り立つこともまた、同時に示されている。

- ④ 地域住民は、災害時要援護者の問題を他人事ではなく、自ら担うべき課題として、行政との相互協力により解決することを認識する。
- ⑤ 地域住民は、災害時要援護者自らが避難行動能力の向上に努められるよう日頃から支援する。
- ⑥ 地域住民は、災害時の安全な避難誘導のために必要な人手の確保を日頃から手当てしておく。
- ⑦ 地域住民は、地域の実状に応じた必要な資機材を日頃より検討し、準備する。

（４）住民と防災計画

以上の計画を、住民の防災行動という観点からまとめなおすと、表４-３のようになる。

この章では千葉市地域防災計画の中でも住民の防災行動に関連すると思われる行政の取り組みを調査・分析に用いた（３節以降を参照）。これらは、計画で見れば、行政との相互協力で行うことであるが、市民にとっては「千葉市が市民のためにやってくれる」と認識される活動である。

表４-３ 防災計画における住民の防災行動に関連する行政の取り組み

平常時の活動	災害時の活動
・防災に関する知識の普及 ・防災訓練の実施 ・町の安全点検の実施 ・防災用資機材の整備・点検 ・避難場所・避難体制の確認 ・その他地震等災害の予防	・町内の防災情報の収集・伝達 ・出火防止及び初期消火 ・負傷者の救出・救護 ・避難誘導 ・給食・給水・救援物資の配布

4. 3 仮説

<理論仮説>

行政の防災計画の認知度が高いほど、備えをしていない。

<調査仮説>

仮説Ⅰ：行政の出している情報を知ることによって満足してしまい、防災対策や防災活動をしていない。

仮説Ⅱ：行政の防災計画を評価しているほど、行政依存になりがちである。

4. 4 仮説検証に使用する質問

(1) 防災計画・対策等の認知度(独立変数)

行政の発信する防災計画や対策等の情報の認知度を調べるために、問16「千葉市の防災計画・対策の内容をどの程度知っていますか」という質問を用いた。この質問は「だいたい知っている」「いくらか知っている」「名前は聞いたことがある」「知らない」の4件法で回答を求めた。

単純集計の結果、「だいたい知っている」・「いくらか知っている」(以下、“知っている”と表記し、「名前は聞いたことがある」と「知らない」は“知らない”と表記する)と答えた人の割合は「身近な消化栓の設置場所」(37.4%)、「避難訓練」(37.2%)「地震ハザードマップ」(34.4%)といった項目で多く、逆に「千葉市の災害時養成援護者対策」(6.6%)「地域の避難所の備蓄品」(18.1%)、「我が家の危機管理マニュアル」(18.3%)といった項目では「知っている」と答えた人の割合が低かった(巻末基礎集計表 問16参照)。

初期消火訓練・避難訓練・応急救護訓練・震度体感訓練などの「訓練系」は知っている人も多いようだが「我が家の危機管理マニュアル」など、行政としては各家庭で認知し、実践してほしいことがあまり知られていないことがわかった。

また、問16を分析に用いるさいには、全12項目のそれぞれについて、“知っている”を選んだ場合には1点、“知らない”のいずれかを選んだ場合には0点のスコアを与え、0～12点のレンジをとる合成変数を作成した(α 係数=0.829466)。そして平均値である3点を基準に、3点以上を“認知している”、3点未満を“認知していない”とする[認知度]という変数を作成した。

(2) 防災対策の実行度(従属変数)

防災対策や防災行動の実行度を調べるために、問18「防災対策を行っていますか」という質問を用いた。この質問は回答を「東日本大震災前から行っていた」「東日本大震災の後から始めた」「行っていない」の3件法で求めた。

単純集計の結果、東日本大震災の前後にかかわらず“行っている”と回答した人(「東日

本大震災前から行っていた」あるいは「東日本大震災の後から始めた」のいずれかを選んだ人は「懐中電灯の準備」(96.1%)、「電池の備蓄」(78.8%)、「携帯ラジオ等の備蓄」(77.7%)といった項目で特に多く、「防災情報交換」(13.7%)、「窓ガラス等の補強」(14.1%)、「自主防災組織への参加」(14.3%)の項目は、防災対策を“行っている”と回答した人の割合が少なかった(巻末基礎集計表 問18参照)。

また、問18を分析で使用するさいには、全21項目のそれぞれについて、「東日本大震災前から行っていた」と「東日本大震災の後から始めた」のいずれかを選んだ場合には“実行している”とし、1点を与え、「行っていない」を選んだ場合には“実行していない”とし、0点を与え、0～21点のレンジをとる合成変数[実行度]を作成した(α 係数=0.812696)。

(3) 千葉市の防災取り組み度の評価度(独立変数)

防災計画の評価度を調べるために、問17「千葉市が行っている防災に対する取り組みは十分だと思いますか」という質問を用いた。この質問は「そう思う」「まあまあそう思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4件法で回答をもとめた。

単純集計の結果、千葉市に対する評価は、「災害時の情報伝達」で31.0%「防災訓練の実施」で31.7%「防災意識を高めるための広報活動」で30.1%と、どれも半数に満たないことがわかった(巻末基礎集計表 問17参照)。

また、問17を分析に用いるさいには、「そう思う」に3点、「まあまあそう思う」に2点、「あまり思わない」に1点、「全く思わない」に0点と得点を与え、0～12点のレンジをとる合成変数[行政に対する評価度]を作成した(α 係数=0.858397)。そして、平均値である3.4点を基準に3.4以上を“評価高い”、3.4未満を“評価低い”とした。

(4) 生活問題の取り組み主体に関する考え(従属変数)

生活問題への取り組み主体に関する考えを調べるために、問20「次の事柄を誰が行うべきだと思いますか」という質問を用いた。

事例としては、「地域の中で子どもたちが安心して登下校したり、遊んだりできる環境を維持する」(以下、「子どもの地域生活環境の整備」とする)、「一人暮らしのお年寄りが日常生活でちょっとした助けを必要としているとき、お手伝いする」(以下、「ひとり暮らし高齢者の生活フォロー」とする)、「乳幼児を持った親が急な用事で1～2時間子どもを預けなければならなくなったとき、子どもの面倒をみる」(以下、「乳幼児の親の生活フォロー」とする)、「誰からも親しまれている地域のシンボリックな並木があり、あなたの家の前を含む歩道が落ち葉だらけになっているとき、掃除をする」(以下、「地域のシンボリック環境の維持」とする)の4場面を設定した。

この質問は「行政のサービスで行う」「地域住民の協力で行う」「それぞれの家庭で行う」の3件法で回答を求めた。

単純集計の結果、「行政のサービスで行う」と回答した人は、「乳幼児の親の生活フォロ

一」(40.3%)の項目が最も多く、次いで「子どもの地域生活環境の整備」(23.0%)、「ひとり暮らし高齢者の生活フォロー」(29.0%)という結果がみられた。「地域のシンボリック環境の維持」の項目に関しては12.7%と低かった(巻末基礎集計表 問20参照)。

4. 5 仮説の検証

(1) 仮説Ⅰの検証

①防災計画・対策等の「認知度」別の、防災対策の「実行度」の平均の差の検定

表4-4は仮説Ⅰの検証を行うために、防災計画・対策等の「認知度」別に、防災対策の「実行度」の平均値の差の検定を行った結果である。

表4-4 防災計画・対策等の「認知度」別 防災対策の「実行度」の平均値の差の検定

		人数	実行度の 平均値	t	p
a 地震ハザードマップ	認知している	135	12.5	-5.3	p<.0001
	認知していない	250	10.2		
b あなたの街にも自主防災組織	認知している	84	13.2	-5.7	p<.0001
	認知していない	299	10.3		
c 千葉市の災害時要援護者対策	認知している	26	13.7	-3.5	p=.0006
	認知していない	359	10.8		
d 千葉市防災エリアメール	認知している	76	12.7	-4	p<.0001
	認知していない	308	10.5		
e わが家の危機管理マニュアル	認知している	72	13.8	-6.5	p<.0001
	認知していない	308	10.3		
f 初期消火訓練	認知している	132	12.6	-5.8	p<.0001
	認知していない	252	10.0		
g 避難訓練	認知している	146	12.4	-5.4	p<.0001
	認知していない	238	10.1		
h 応急救護訓練	認知している	120	13.0	-6.6	p<.0001
	認知していない	266	10.1		
i 震度体感訓練	認知している	106	12.7	-5.2	p<.0001
	認知していない	279	10.3		
j 地域の避難所の備蓄品	認知している	71	13.0	-4.7	p<.0001
	認知していない	311	10.5		
k 身近な消火栓の設置場所	認知している	148	12.6	-6.3	p<.0001
	認知していない	235	9.9		
m 近くの井戸の場所	認知している	309	12.8	-4.1	p<.0001
	認知していない	76	10.6		

結果として、「地震ハザードマップ」「あなたの街にも自主防災組織」「千葉市防災エリアメール」「我が家の危機管理マニュアル」「初期消火訓練」「避難訓練」「応急救護訓練」「震度体感訓練」「地域の避難所の備蓄品」「身近な消火栓の設置場所」「近くの井戸の場所」は0.1%水準で有意な差が見られた。また1%水準で「千葉市の災害時要援護者対策」も有意な差が見られ、千葉市の防災計画・対策等の12項目すべてにおいて、「認知している人のほうが防災対策を行っている」ということがわかった。これは仮説と逆の結果である。

② 行政に対する[評価度]別の「防災対策の[実行度]」の平均値の差の検定

表4-5は、行政に対する[評価度]別に防災対策の[実行度]の平均値の差の検定を行った結果である。

表4-5 行政に対する[評価度]別 防災対策[実行度]の平均値の差の検定

変数名	n	防災対策の平均値	t	p
評価高い	239	10.9	-1.2	0.2361
評価低い	154	11.4		

結果として、評価については5%水準で統計的に有意な差が見られなかった。よって、千葉市の行う防災計画・対策等を認知しているかどうかという点は防災対策に影響を与えていたが、その評価度は、防災対策に関連がないということがいえる。

(2) 仮説Ⅱの検証

① 千葉市の防災対策の[評価度]別の生活問題の取り組み主体に対する考えのクロス集計

次に、仮説Ⅱの検証を行うために、防災対策の[評価度]を独立変数とし、「生活問題の取り組み主体に関する考え」の3つの選択肢（「行政のサービスで行う」、「地域の住民の協力で行う」、「それぞれの家庭で行う」）従属変数とするクロス集計を行い、 χ^2 検定を行ったが、どの項目も統計的に有意な差が見られなかった。

そのため、「地域住民のサービスで行う」と「それぞれの家庭で行う」という項目をまとめて「地域住民や家庭の協力で行う」とし（以下ではこのようにまとめた項目を「生活問題の取り組み主体に対する考え（2カテゴリー）」と表記する）、再度検証し直した。

表4-6は、防災対策の[評価度]と、そうした「生活問題の取り組み主体に対する考え（2カテゴリー）」とでクロス集計を行い、 χ^2 検定を行った結果である。

表4-6 行政に対する[評価度]と「生活問題の取り組み主体に対する考え（2カテゴリー）」

		単位(%)					
	評価度	行政	地域住民や家庭	合計	人数	χ^2 値	p 値
a 地域の中で子どもたちが安心して登下校したり、遊んだりできる環境を維持する	評価高い	63.2	36.8	100.00	87	0.2710	p=0.6027
	評価低い	60.1	39.9	100.00	306		
b 一人暮らしのお年寄りが日常生活でちょっとした助けを必要としているとき、お手伝いする	評価高い	68.8	31.2	100.00	109	4.0439	p=0.0443
	評価低い	57.8	42.3	100.00	284		
c 乳幼児を持った親が急な用事で1～2時間子どもを預けなければならなくなったとき、子どもの面倒をみる	評価高い	67.1	32.9	100.00	152	4.1165	p=0.0425
	評価低い	56.9	43.2	100.00	241		
d 誰からも親しまれている地域のシンボリックな並木があり、あなたの家の前を含む歩道が落ち葉だらけになっているとき、掃除をする	評価高い	68.8	31.3	100.00	345	1.4450	p=0.2293
	評価低い	59.7	40.3	100.00	48		

その結果、「子どもの地域生活環境の整備」「地域のシンボリック環境の維持」では統計的に有意な差が見られなかったが、「ひとり暮らし高齢者の生活フォロー」「乳幼児の親の

生活フォロー」に関しては5%水準で統計的に有意な差がみられた。

千葉市の防災への取り組み度の評価が高い人は低い人に比べて、行政で行うサービスに頼りがちだということがいえる。

② 性別と生活問題の取り組み主体に対する考え(行政に対する[依存度])のクロス集計

表4-7は性別を独立変数とし、「生活問題の取り組み主体に対する考え(2カテゴリー)」を従属変数とするクロス集計を行い、 χ^2 検定を行った結果である。

表4-7 性別と生活問題の取り組み主体に対する考え(2カテゴリー)

		行政	地域住民 や 家庭	合計	人数	χ^2 値	p値
c 乳幼児を持った親が急な用事で1~2時間子どもを預けなければならなくなったとき、子どもの面倒をみる	男性	35.8	64.2	100.00	240	4.8554	0.0276
	女性	47.1	52.9	100.00	151		

男女別で検証したところ「乳幼児の親の生活フォロー」の項目のみ5%水準で統計的に有意な関連がみられた。これによって男性のほうが女性よりも「乳幼児の親の生活フォロー」を地域や家庭で行うべきだと考えていることがわかった。

4. 6 考察

仮説Ⅰにおいては、すべての項目で関連があった。つまり、仮説とは逆に、防災計画・対策等の[認知度]が高い人のほうがより、防災対策の[実行度]も高いということが判明した。

行政はもともと、防災対策は行政だけの力で行うものではなく、個人の取り組みの重要性も訴えてきた(4.2参照)。そうしてみると、仮説Ⅰの「行政の出している情報を知ること」で満足してしまい、防災対策や防災行動をしていないが成立しなかったことは、行政が行う防災計画や対策等の活動を知ってる人には、行政の狙いがきちんと伝わっていたというふうに解釈することができる。

しかし、千葉市の防災計画・防災対策を認知している人の数を比較すると、ほぼ全ての項目で認知している人は認知していない人の半分以下であることがわかった。今後は市民にどう認知させるか考えなければならないと思った。

次に、仮説Ⅱについては「ひとり暮らし高齢者の生活フォロー」、「乳幼児の親の生活フォロー」の2項目で、仮説を支持する結果が得られた。とくに「乳幼児の生活フォロー」では、女性の方が「行政のサービスで行う」べきと回答した人が多かった。

この2項目に関して言えば、行政の防災計画を高く評価する人ほど、行政依存の姿勢が伺えるといつてよい。

ただし、「子どもの地域生活環境の整備」、「地域のシンボリック環境の維持」の2項目については、今回の調査から仮説を裏付ける結果を得ることはできなかった。

仮説を支持した 2 項目とそうではない 2 項目にはどのような違いがあるのだろうか。その背景として、関係性を取り上げたいと思う。

「ひとり暮らし高齢者の生活フォロー」、「乳幼児の親の生活フォロー」に共通して考えられるのは、援助される人と援助する人との間にある程度の面識があり、関係性を築いていなければ、援助を頼みにくい／行いにくだらうということである。しかし、行政のサービスであれば気軽に頼みやすく、それに加えてその分野専門の人なので信頼もできるのではないかと考える。

一方で、「子どもの地域生活環境の整備」、「地域のシンボリック環境の維持」については相手との関係性がとくに重要だとは考えにくい。したがって、このような事柄においては行政のサービスに頼らなくても、地域住民やそれぞれの家庭で処理すればよい問題だと考えるのではないだろうか。

6. 1 の問題意識で書いたとおり、都市的生活者は、生活問題の解決においても住民が相互扶助で行うよりも、サービスを受けたり、行政への期待が大きいと考えられる。仮説Ⅱの検証をとおして、そうした予想は、援助する人とされる人との関係性が問題となるようなサービスにおいてとくに顕著となることがわかった。

第5章 コミュニティにおける人間関係の形成と防災意識

A92066 宮内翔史

5. 1 問題意識

たくさんの防災意識に関する調査を調べ、都市部において防災活動が活発な地域とあまり活発とは言えない地域があることに気がついた。その違いは何に由来するのか疑問を持った。注目したのはコミュニティの違いである。

「災害」が起こったらまず避難経路の確保が重要となるが、避難経路は日常からコミュニティ内での相互確認が必要となる。また、災害が起こった際、一人暮らしの高齢者や障害を持った人には駆け付け人となる人が必要で、コミュニティ内の共助が問われる。

2009年に神戸大学都市安全研究センターの北後明彦らによって行われた、「都市集合住宅のコミュニティと相互支援に関する調査研究」によると、「駆け付け人の有無と避難困難者把握状況」の項目で「災害時にマンション内で駆けつけてくれそうな人の有無（以下、『駆け付け人の有無』）を尋ねた結果、いないと思う人は51%。同階または他の階にいると思う人が合わせて26%である。1人で避難できない人がマンション内に住んでいるか（以下、『避難困難者の把握』）について、避難困難者がいるかどうか知らない人が50%、知っているが住戸がどこかわからない人が28%、知っており居住階を知っている人が21%であった。このことから、災害時の駆けつけ人がいる人や、避難困難者の居住階を把握している人は一部にとどまっていることがわかり、住民同士でのコミュニティ活動の希薄さが伺える。

また、「日常的な関わりと非常時相互支援意識との関連」の項目から、マンション住人とよく顔を合わせる人は、駆けつけ人がいる傾向にあること、避難困難者の居住階を知っている傾向にあること、隣近所の安否確認ができる割合が高い傾向にあること等、コミュニティ活動が密接な人に非常時の共助意識の高さが伺える（北後ら 2009）。

このような意識の違いはマンション以外の地域でも起こっていると考え、コミュニティ活動が緊密な人とそうでない人では防災意識に違いがあるかという観点に立って、調査検討することにした。

5. 2 仮説

<仮説1>コミュニティ内で緊密な人間関係が形成されている人は防災意識が高い。

<仮説2>コミュニティ内で緊密な人間関係が形成されている地域は防災意識が高い。

<仮説3>コミュニティ内で緊密な人間関係が形成されている地域では、特に共助的な防災意識が高い。

5. 3 分析に用いる変数の単純集計

(1) 緊密度 (独立変数)

まず緊密度とは、緊密な人間関係を築くことができている度合いのことをいい、地域活動への参加度と近隣との交流度双方の質問項目の結果から判断した。

地域活動への参加度については、「あなたは、地域のどのような活動に参加していますか」という質問において「自治会などの会合」、「祭りなどの行事」、「公園の清掃活動等」、「ボランティア活動」、「青少年育成活動」を取り上げ、4件法で回答を求めた結果によって把握した。「あてはまらない」と回答した人がほとんどの項目で半数を超え、地域活動へ積極的に参加している人は少なかった（巻末基礎集計表 問14 参照）。

近隣との交流度については、「あなたは、近隣に次のような方がいらっしゃいますか」という質問において「立ち話をする人」、「訪問し合う人」、「おすそ分けし合う人」、「家族ぐるみでつきあう人」、「一緒に外出する人」を取り上げ、4件法で回答を求めた結果によって把握した。「立ち話をする人」の項目では「たくさんいる」もしくは「数人いる」と回答した人が約半数であるのに対し、「訪問し合う人」、「家族ぐるみでつきあう人」、「一緒に外出する人」の項目では「いない」と回答した人が半数を超えた。このことから、親密度が高いと思われる項目ほど付き合いのある近隣の人の人数が少ないことが分かった（巻末基礎集計表 問15 参照）。

(2) 防災意識 (従属変数)

防災への取り組みに関する考えを調べるため、「防災への取り組みについて、あなたのお考えをお聞きます」という質問に4件法で回答を求めた。全9項目において「あてはまる」もしくは「どちらかといえばあてはまる」と回答した人が、「どちらかといえばあてはまらない」もしくは「あてはまらない」と回答した人より多く、多くの人が防災への取り組みについて関心があった（表5-1 参照）。

また、この質問項目は、「食料や飲料水は自分で備蓄すべきだ」「災害の知識や情報は自分で集めるべきだ」「地区の避難場所や経路は把握しておくべきだ」の質問を自助的な意識をはかる質問、「近所の避難困難者（体が不自由等）の有無をふだんから把握しておくべきだ」「地区の避難訓練には可能な限り参加すべきだ」「災害時、近隣の人が困っていたら迷わず助けるべきだ」の質問を共助的な意識をはかる質問、「行政は市民の防災意識を高めるために努力すべきだ」「市民のための備蓄は、行政が中心となり行うべきだ」「行政は、防災に関する情報がもっと簡単に市民の手に入るようにするべきだ」の質問を公助的な意識をはかる質問とした。

表 5-1 防災への取り組みに関する考え

単位% (人)

	あてはまる	どちらかといえば	どちらかたらない	あてはまらない	計
自助- a 食料や飲料水は自分で備蓄すべきだ	40.3	51.7	7.2	0.8	100.0 (387人)
自助- b 災害の知識や情報は自分で集めるべきだ	29.3	53.1	13.0	4.7	100.0 (386人)
自助- c 地区の避難場所や経路は把握しておくべきだ	70.8	26.6	2.1	0.5	100.0 (387人)
共助- d 近所の避難困難者(体が不自由等)の有無をふだんから把握しておくべきだ	34.9	44.0	15.6	5.5	100.0 (384人)
共助- e 地区の避難訓練には可能な限り参加するべきだ	31.1	47.9	16.8	4.2	100.0 (386人)
共助- f 災害時、近隣の人が困っていたら迷わず助けるべきだ	53.8	43.2	2.6	0.5	100.0 (387人)
公助- g 行政は市民の防災意識を高めるために努力すべきだ	59.2	34.6	5.2	1.0	100.0 (387人)
公助- h 市民のための備蓄は、行政が中心となり行うべきだ	35.1	45.7	17.1	2.1	100.0 (387人)
公助- i 行政は、防災に関する情報がもっと簡単に市民の手に入るようにするべきだ	54.3	41.1	3.6	1.0	100.0 (387人)

5. 4 仮説の検証

(1) 仮説1「コミュニティ内で緊密な人間関係が形成されている人は防災意識が高い」の検証

①仮説1の検証に関する予備手続き

まず、地域活動への参加について調べるため、当該の5項目をスコア化し、合成変数「活動」を作るために、回答選択肢のうち「あてはまる」と答えた人に3点、「どちらかといえばあてはまる」と答えた人に2点、「どちらかといえばあてはまらない」と答えた人に1点、「あてはまらない」と答えた人に0点を割り振り、5項目を合成した。アルファ係数を算出したところ0.80を示し、0.7の水準を満たしたため結合することにした。合成変数「活動」のレンジは0～15である。

また、近隣との交流度を問う5項目をスコア化し、合成変数「交流」を作るために、回答選択肢のうち「たくさんいる」と答えた人に3点、「数人いる」と答えた人に2点、「一人二人いる」と答えた人に1点、「いない」と答えた人に0点を割り振り、5項目を合成した。アルファ係数を算出したところ、0.89を示し、0.7の水準を上回ったため結合することにした。合成変数「交流」のレンジは0～15である。

緊密な人間関係を形成しているか否かを調べるために、活動に関する5項目と、交流に関する5項目をスコア化し、計10項目で合成変数「緊密な人間関係」を作成し、アルファ係数を算出したところ0.88を示し、0.7の水準を満たしたため結合することにした。合成変数「緊密な人間関係」のレンジは0～30である。

次に、従属変数である防災意識が高いか否かを調べるために、防災への取り組みに関する考えの9項目をスコア化し、合成変数「防災意識」を作成することにした。回答選択肢のうち、「あてはまる」と答えた人に3点、「どちらかといえばあてはまる」と答えた人に2点、「どちらかといえばあてはまらない」と答えた人に1点、「あてはまらない」と答えた人に0点を割り振り、9項目を合成した。アルファ係数を算出したところ0.72を示し、0.7の水準を上回ったため結合することにした。合成変数「防災意識」のレンジは0～27である。

②各尺度間の相関

表5-2は仮説1の検証を行うために「緊密な人間関係」、「活動」、「交流」の3つの変数と「防災意識」との相関係数を算出した結果である。「防災意識」と3つの変数には0.1%未満の水準で有意な相関がみられ、相関係数は「緊密な人間関係」とが0.30、「活動」とが0.24、「交流」とが0.28の値を示し、弱い相関が見られた。

表5-2 各尺度間の相関係数

	N	平均	標準偏差	相関係数			
				1	2	3	4
1 緊密な人間関係	380	7.26	6.07	--			
2 活動	382	2.91	3.24	0.85***	--		
3 交流	385	4.37	3.73	0.89***	0.51***	--	
4 防災意識	377	20.83	3.46	0.30***	0.24***	0.28***	--

*;p<0.05 **;p<0.01 ***p<0.001

③仮説の検証

「防災意識」と3つの変数との間に相関が見られたことで、仮説1は成立した。このことから地域活動に参加している人や、近隣の人と密な交流をしている人、またその両方の値が高く、総じて緊密な人間関係が形成されている人は、防災への取り組みに関する意識は高い傾向にあるといえる。

(2) 仮説2「コミュニティ内で緊密な人間関係が形成されている地域は防災意識が高い」の検証

①検証の方法

まず緊密な人間関係得点の平均値と防災意識得点の平均値を居住区別に算出する。もし、コミュニティ内で緊密な人間関係が形成されているかどうかと防災意識の高さに関連があるならば、緊密な人間関係得点の平均値を得点の順に並べると、その居住区別の順位と対応して防災意識得点の平均値も得点の順に並び、かつ分散分析（多重比較）によって緊密な人間関係得点および防災意識得点の居住区別の差異を検出すると、近い場所で差が現れるはずである。そこで、緊密な人間関係得点の平均値を降順に並べ、防災意識得点の平均値の順番が緊密な人間関係得点の平均値の順番とどの程度ズレているかを見る。次いで緊密な人間関係得点の平均値と防災意識得点の平均値をそれぞれ分散分析にかけ、区別の平均値のどこに有意差が現れているかをみることにした。

②居住区別にみた緊密な人間関係得点の平均値と防災意識得点の平均値との相関

表5-3は、緊密な人間関係得点と防災意識得点の平均値を居住区別で算出した後、両者の相関係数を算出した結果である。緊密な人間関係得点の平均値を分散分析にかけた結果、有意な差を認めることができなかったが、緊密な人間関係得点の平均値と防災意識得点の平均値は花見川区以外のどの居住区でも一定の相関があることがわかった。区ごとの差は見られず、ほとんどの区で相関が出たということは、仮説1で行った個人単位での結果がそのまま居住区に反映されただけと考えられ、地域単位では、緊密な人間関係と防災意識とに固有の関連は認められないといつてよい。

表5-3 居住区別にみた緊密な人間関係得点の平均値と防災意識得点の平均値との相関

	緊密な人間関係得点		相関係数	防災意識得点	
	平均値	標準偏差		平均値	標準偏差
緑区	8.727	5.748	0.301*	22.000	2.956
美浜区	7.646	6.362	0.277*	20.603	3.155
若葉区	7.458	6.397	0.287*	20.678	3.693
中央区	7.269	6.255	0.332**	20.590	3.842
花見川区	6.727	5.623	0.214	20.687	3.547
稲毛区	5.686	5.396	0.336*	20.490	3.241
F値=1.50 p値=0.1879			F値=1.53 p値=0.1785		
*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001					

緊密な人間関係得点の平均値では居住区別に有意な差が出なかったもので、緊密な人間関係を構成する活動の得点の平均値で検証を行う。表5-4は活動得点と防災意識得点の平均値を居住区別で算出した後、両者の相関係数を算出した結果である。活動得点の平均値を分散分析にかけた結果、有意な差を認めることができなかったが、防災意識との相関に関しては緑区と中央区で関連が見られた。ただし、この結果も個人単位での結果が反映されただけであり、地域単位では活動と防災意識とに固有の関連は認められないといつてよい。

表5-4 居住区別にみた活動得点の平均値と防災意識得点の平均値との相関

	活動得点		相関係数	防災意識得点	
	平均値	標準偏差		平均値	標準偏差
緑区	3.500	3.380	0.268*	22.000	2.956
美浜区	3.246	3.406	0.191	20.603	3.155
若葉区	3.034	3.242	0.254	20.678	3.693
中央区	2.975	3.405	0.232*	20.590	3.842
花見川区	2.455	2.970	0.177	20.687	3.547
稲毛区	2.235	2.676	0.276	20.490	3.241
F値=1.24 p値=0.2898			F値=1.53 p値=0.1785		
*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001					

活動得点の平均値でも差は出なかったもので、緊密な人間関係を作成する交流の得点の平均値で検証を行う。表5-5は交流得点と防災意識得点の平均値を居住区別で算出した後、両者の相関係数を算出した結果である。交流得点の平均値を分散分析にかけた結果、居住区別に有意な差を認めることができなかったが、防災意識との相関に関しては中央区、美

浜区、稲毛区で関連が見られた。ただし、この結果も個人単位での結果が反映されただけであり、地域単位では、交流と防災意識とに固有の関連性は認められないといつてよい。

表 5-5 居住区別にみた交流得点の平均値と防災意識得点の平均との相関

	交流得点		相関係数	防災意識得点	
	平均値	標準偏差		平均値	標準偏差
緑区	5.291	3.622	0.229	22.000	2.956
若葉区	4.508	3.994	0.248	20.678	3.693
中央区	4.304	3.509	0.343**	20.590	3.842
花見川区	4.269	3.462	0.193	20.687	3.547
美浜区	3.980	3.980	0.281*	20.603	3.155
稲毛区	3.462	3.581	0.295*	20.490	3.241
F値=1.33 p値=0.2525			F値=1.53 p値=0.1785		
*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001					

③仮説の検証結果

分散分析の結果、居住区ごとでは緊密な人間関係、活動、交流と防災意識との関係に特徴的な差が見られなかった。よって、仮説 2 は棄却された。しかし、結果の数字だけを見ると、緑区においては緊密な人間関係得点の平均、活動得点の平均、交流得点の平均が高く、防災意識得点の平均も高い。また、稲毛区においては緊密な人間関係得点の平均、活動得点の平均、交流得点の平均が低く、防災意識得点の平均も低い。この結果から、今回の調査では仮説は棄却されたが、サンプル数が多ければ、部分的にせよ仮説が成立した可能性は否定できないと推測できる。

(3) 仮説 3 「コミュニティ内で緊密な人間関係が形成されている地域では、特に共助的な防災意識が高い」の検証

①因子分析

表 5-6 は、防災への取り組みに関する考えの 9 項目が「自助的な防災意識」、「共助的な防災意識」、「公助的な意識」に分化するかどうかを確認するために因子分析を行った結果である。

表 5-6 防災への取り組みに関する考えの Promax 回転での因子分析

		共助	公助	自助
		第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子
共助-	近所の避難困難者の把握	0.83 *	-0.09	-0.01
共助-	地区の防災訓練への参加	0.80 *	-0.06	0.06
共助-	災害時の近隣への援助	0.71 *	0.14	-0.16
公助-	防災情報の提供	-0.06	0.89 *	0.06
公助-	市民のための備蓄	-0.09	0.84 *	-0.10
公助-	市民の防災意識の向上	0.30	0.65 *	0.06
自助-	災害知識や情報の収集	-0.15	0.01	0.83 *
自助-	食料や飲料水の備蓄	0.08	-0.04	0.79 *
自助-	避難場所・経路の把握	0.41 *	0.08	0.42 *
因子間		II	0.32	
相 関		III	0.23	0.10

初期因子抽出として主成分解を用いた結果、固有値が 1 以上となったのは第 3 因子までであった。また、累積寄与率が最初に 6 割に達したのは第 3 因子であった。更に第 3 因子と第 4 因子の固有値を見ると差が大きく、因子分析の結果も解釈しやすいため、因子数を 3 つとした。第 1 因子は共助的な防災意識でまとまっているため「共助」、第 2 因子は公助的な防災意識でまとまっているため「公助」、第 3 因子は自助的な防災意識でまとまっているため「自助」と命名した。

②居住区別の緊密な人間関係得点と防災意識得点の平均

まず居住区別に因子スコアの平均と、緊密な人間関係得点の平均を降順で並べる。緊密な人間関係得点の平均の順番と各因子スコアの平均値の順番がほぼ同じで、なおかつ分散分析の結果同じような場所で差が見られた場合、仮説が成り立ったと考え、結果を見ることにする。

表 5-7 は、緊密な人間関係得点の平均を居住区別に算出した結果と、先ほどまとめた防災意識の因子別の因子スコアの平均値を居住区別に算出した結果を降順で並べた表である。分散分析を行った結果、共助の因子スコアに関してのみ居住区別に有意な差が検出されたため、共助変数についてはその多重比較の結果も合わせて示してある。

表 5-7 緊密な人間関係得点の平均値と防災意識の因子スコアの平均値

緊密な人間関係		共助		公助		自助	
緑	8.727	緑	0.424	緑	0.066	緑	0.188
美 浜	7.646	中 央	-0.018	若 葉	-0.001	稲 毛	0.160
若 葉	7.458	花見川	-0.047	花見川	-0.002	美 浜	0.039
中 央	7.270	若 葉	-0.057	美 浜	-0.014	若 葉	-0.080
花見川	6.727	美 浜	-0.111	稲 毛	-0.032	中 央	-0.080
稲 毛	5.686	稲 毛	-0.208	中 央	-0.040	花見川	-0.102
		F値=2.70 p値=0.0206		F値=0.08 p値=0.9950		F値=0.97 p値=0.4369	

この表 5-7 によれば、共助的な意識は緑区が最も高く、美浜区、稲毛区が低いという結果であった。共助が高い緑区は、統計的に有意な差は表れなかったが、数値で見ると公助、自助も高いという結果であった。共助が低い稲毛区は、数値の順だけで見ると緊密な人間関係が最も低く、公助が低く、自助が高いという結果であった。稲毛区とともに共助が低い美浜区は、数値の順だけで見ると緊密な人間関係が高く、公助、自助が 6 区の中でだいたい中間ぐらいであった。

③仮説の検証結果

共助以外では統計的に有意な差は見られなかったが、緑区が緊密な人間関係、共助、公助、自助が高かった。このことから、緊密な人間関係が形成されている地域ほど防災意識も高くなる傾向にあることが示唆される。また、稲毛区は数値の順だけで見ると緊密な人間関係、共助、公助が低く、自助が高かった。このことから、稲毛区のように、多くの団地が立ち並び、一般に緊密な人間関係の形成が困難であろうと思われる地域では、共助的な防災意識、公助的な防災意識が低く、自助的な防災意識が高くなる傾向にあることが示

唆される。美浜区は、数値の順だけで見ると、緊密な人間関係が高く、共助が低く、公助、自助が他区と大差が無いという結果であった。緊密な人間関係が形成されているにも関わらず、共助が低いという結果は、美浜区の全ての土地が埋め立て造成によってできた土地であることによると推測できる。区民全員が移り住んできた人ということで、まだ共助に結びつくほどには緊密な人間関係が形成されていないと予想され、これにより今回の結果となったと予想できる。

5. 5 考察

仮説1「コミュニティ内で緊密な人間関係が形成されている人は防災意識が高い」の検証において、近隣に住む人と緊密な人間関係を形成している人ほど、防災意識が高いことが分かった。これは近隣の人と緊密な人間関係を形成していることにより、災害に備える意識が相乗的に高まることや、情報のネットワークの広がりや推測でき、災害時には互いに助け合うべきという意識も醸成されやすいことによると推測できる。

仮説2「コミュニティ内で緊密な人間関係が形成されている地域は防災意識が高い」の検証において、居住区別に緊密な人間関係と防災意識との関連に特徴的な傾向を見出すことができなかった。しかし、数字だけを見比べてみると、緑区は最も緊密な人間関係が形成されており、防災意識も最も高いという結果であった。また、稲毛区は、6区のなかでは緊密な人間関係の形成傾向が最も乏しく、防災意識も最も低いという結果であった。この結果から、部分的ではあるが仮説が成立した可能性は全面的には否定できないと推測することができた。

表5・8は人口動態が千葉市6区でどれだけ差があるかを、2002年から2012年の10年間の推移で表した表である。

表5-8 千葉市の6区別人口移動（2002年-2012年の10年間の動態） (人)

千葉市の人口動態（2002年～2012年）（単位：千人）													（注）	
2002年		自然動態					社会動態					2012年		
	総数	自然増加数	出生	出生増加率*	死亡	その他	社会増加数	転入	転入率*	転出	転出率*	総数	増減率	
千葉市	897509	18309	74535	8.3%	56226	2037	51418	795560	88.6%	744142	82.9%	962988	107.2%	
中央区	174711	2673	15999	9.2%	13326	836	26214	194765	111.4%	168551	96.5%	200178	114.6%	
花見川区	180897	2663	13669	7.6%	11006	59	4586	156346	86.4%	151760	83.9%	180169	99.6%	
稲毛区	147748	2522	11535	7.8%	9013	310	14822	144329	97.7%	129507	87.7%	157309	106.5%	
若葉区	151163	128	10939	7.2%	10811	193	4894	109447	72.4%	104553	69.2%	151857	100.5%	
緑区	105211	4075	10109	9.6%	6034	214	15796	86033	81.8%	70237	66.8%	123968	117.8%	
美浜区	137779	6248	12284	8.9%	6036	425	14102	133636	97.0%	119534	86.8%	149507	108.5%	

注) *の百分率は2002年1月1日から10年間の出生、転入、転出数を、2002年1月1日現在の総数で割った数値である。

注) 総数は、各年の1月1日現在の総数である。

資料出所) 千葉市公式ホームページ (<http://www.city.chiba.jp/>) をもとに作成。

この表を見て、緑区は他の区と比べると転入率、転出率が低いことが分かる。なかでも転出率は6区中最も低い。この結果から緑区は、社会流動性が低く、定住化傾向が高いことが推測できる。このことは、次頁の表5・9「居住区別居住形態」をみると、緑区が、居住形態の内、一戸建てでなおかつ持ち家である人の割合が最も多いことから読み取れる。

表 5-9 居住区別居住形態							(%)
	一戸建て		集合住宅		その他	計	
	(持ち家)	(賃貸)	(持ち家)	(賃貸)			
稲毛区	57.7	—	21.2	21.2	—	100.0	52人
中央区	57.0	1.3	27.9	12.7	1.3	100.0	79人
花見川区	54.6	3.0	10.6	30.3	1.5	100.0	66人
緑区	78.6	1.8	14.3	5.4	—	100.0	56人
美浜区	10.8	—	61.5	27.7	—	100.0	65人
若葉区	58.6	—	17.2	22.4	1.7	100.0	58人

以上のことから、緑区は定住している人が多いことにより住民どうしの繋がりが促進され、緊密な人間関係が形成されている傾向となったのではないかと推測できる。また、緊密な人間関係が形成されていることにより、住民同士で情報を共有することで防災意識が高まっているのではないだろうか推測できる。

対して稲毛区は、人口動態を見ると、転入率、転出率どちらも中央区に次ぐ高さとなっており、社会流動性が高い地域であると読み取れる。社会流動性が高い地域ということは、近隣住民同士が緊密な人間関係を形成する前に他の地域に移動してしまう可能性が高く、近隣住民同士の繋がりを形成しにくいことが予想される。これにより住民同士が情報を共有する機会が他の区より少なく、防災意識が低下しているのではないかと推測できる。

仮説3「コミュニティ内で緊密な人間関係が形成されている地域では、特に共助的な防災意識が高い」に関しては、共助について、緑区と、稲毛区、美浜区両区との間で統計的に有意な差がみられた。

緊密な人間関係が形成されていて防災意識も高い緑区は、共助の意識が6区中最も高い、とりわけ稲毛区、美浜区と比べて有意に高いという結果であった。これは、緊密な人間関係が形成されていることにより近隣住民同士で助け合おうという意識があるからであると考えられる。

共助意識が乏しいという結果であった稲毛区と美浜区は、表5-8の人口動態に着目すると、先にも一部触れたように、ともに転入率、転出率が高く、社会流動性が高いことが読み取れる。

この2区を居住区別にみると、稲毛区は表5-7の数字だけを見ると緊密な人間関係、共助、公助が低く、自助が高いという結果であった。このことから、稲毛区は自分の身は自分で守ろうという意識が高いと推測できる。この結果は、緊密な人間関係が形成されていないことにより緊急時に助けを求めることができる人が限られることで、自分の身は自分で守るべきだという考えが強くなっているのではと推測できる。

一方、美浜区は表5-7の数字だけを見ると緊密な人間関係の形成傾向が強く、共助が低く、公助、自助が他区と大差が無いという結果であった。緊密な人間関係が高く、共助が低いという結果から、美浜区は緊密な人間関係は形成されているが、共助的な防災意識の高さに影響するまでに至っていないということが推測できる。

美浜区は、表5-9の居住区別居住形態をみると、集合住宅に住むと回答した人が他の区より圧倒的に多く、さらに表5-10の居住区別年齢構成を見ると、回答者の年齢層が他の

区より若く、また人口動態の自然増加率が6区中最も高い（表5-8参照）。

表5-10 居住区別年齢構成

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上	計	(%)
稲毛区	9.4	18.9	5.7	17.0	30.2	18.9	100.0	53人
中央区	7.6	19.0	19.0	16.5	11.4	26.6	100.0	79人
花見川区	8.7	14.5	14.5	17.4	26.1	18.8	100.0	69人
緑区	3.6	8.9	23.2	10.7	35.7	17.9	100.0	56人
美浜区	1.5	22.4	25.4	9.0	20.9	20.9	100.0	67人
若葉区	8.2	13.1	23.0	21.3	13.1	21.3	100.0	61人

このことから、美浜区は、若い夫婦が転入し子供を産むことにより子供を中心とした人間関係が形成されているのではないかと推測できる。子どもを中心とした人間関係により近隣住民同士であいさつや会話はするが、美浜区に移り住んで間もないことから、緊密な人間関係が形成されているとはいえ、共助は低いという結果となったと推測できる。

仮説2、仮説3は当初予想していた結果が現れず、仮説と多少ずれた調査結果ならびに考察となった。今回の仮説を検証するにはサンプル数が足りなかったことや、緊密な人間関係が形成されているかどうかをはかる際に子どもを中心とした人間関係の形成等、人間関係の質的差異を識別できる変数を用意すれば、より結果がクリアになったかもしれない。先行研究を十分に行い6区の特性を理解することで明確な検証を行えた可能性があったと考えれば悔やまれるが、仮説の検証に繋がる可能性のある結果を見ることができて良かった。

第6章 行動制限と防災行動

——外出頻度と地域の安全性認識の観点から——

A92058 嶋村 恭範

6. 1 問題意識

地震・火災などの被害を抑えるために、学校では緊急時のために避難訓練などの防災教育を行い身の安全の確保に努めたり、自治会などで一般の人々にも避難経路、避難場所などの指導を行う防災講座を開いている地域もある。防災用具を買い出しに行っている人も多いかもしれない。このように多くの人々はさまざまな場面で防災に取り組み自分の身を守る術を学んでいる。今年の東日本大震災をきっかけに地域の安全性について考える機会も増え人々の災害への意識も高くなってきたのではないだろうか。

しかし災害時に行動に移せなければ、防災情報に詳しくても準備した防災用具が機能しないことが多くなってしまうだろう。特に身体的な事情による体力の低下、特に加齢から億劫になったり、経済的な事情から外出を必要最低限にまで控えるようになり、防災用具の準備などの防災行動をしなくなる場合があるのではないだろうか。

また、防災行動は地域の安全性認識とも関連があるのではないかと考えた。自らの経験や他人から聞いた知識は防災の意識を高めるが、現在居住している地域で被災を受けていない人や知らない人は、この地域は災害に強い、災害が起これないと考え、防災に対して関心を持たなくなり、防災行動を行わなくなるのではないだろうか。確かに災害が起きやすい地域、被害を受けやすい地域はあるが地震大国といわれる日本では安全な場所などなく、常に私たちは自然災害と隣り合わせである。この章では、防災行動についての知識をもち必要性を理解していても、行わなくなる要因として、外出を控えることと、地域が災害に強いと感じていることをとりあげて検証を行いたい。

6. 2 仮説

I 外出行動に制限がある人ほど、防災行動に取り組んでいない。

- ① 高齢者ほど外出行動に制限がある
- ② 高齢者ほど防災行動に取り組んでいない

II 居住地域が災害に対して安全だと感じている人は、防災行動に取り組んでいない。

- ① 自分の居住地域が被災したことを知らない人は、防災行動に取り組んでいない
- ② 自分の居住地域の地盤や地勢が災害に対して強いと思っている人は、防災行動に取り組んでいない

6. 3 仮説Ⅰを検証するために用いる変数

(1) 従属変数「防災行動」

防災対策の取り組み状況に関する質問項目（問18）全21項目の中から行動制限によって影響を受けやすいと考えられる11項目——「消火器の準備」「携帯ラジオ等の準備」「懐中電灯の準備」「非常時持ち出しバッグの準備」「非常時持ち出し衣類の準備」「医薬品の準備」「電池の備蓄」「トイレットペーパーの備蓄」「食料の備蓄」「飲料水の備蓄」「カセットコンロの準備」——を抜き出し、「防災行動」と名付けた。外出頻度が低く買い物に行かないことが防災行動を抑制すると考えたからである。「行っていない」という回答が多かった項目は「非常時持ち出し衣類の準備」（73.1%）、「消化器の準備」（50.7%）、「食料の備蓄」（48.5%）などであった（巻末基礎集計表 問18参照）。

(2) 独立変数「行動制限（外出の頻度）」

調査対象者の行動制限について調べるため外出頻度に関する項目（問13）と外出しない理由に関する質問項目（問13付問）を用いた。外出頻度は「よく外出する」が33.1%、「ときどき外出する」が47.3%、「あまり外出しない」が16.9%、4「ほとんど外出しない」が2.7%であった（巻末基礎集計表 問13参照）。

次に、「あまり外出しない」「ほとんど外出しない」を選んだ対象者に対して付問で「外出しない理由」について聞いた。その結果は、「健康等に自信がない」が16.9%、「外出が面倒」が52.3%、「誘われない」が20.0%、「お金のため」が10.8%、「家でやることが多い」が41.5%であった。「外出が面倒」と「家でやることが多い」の割合が多かった（巻末基礎集計表 問13付問 参照）。

6. 4 仮説Ⅱを検証するために用いる変数

(1) 従属変数「全般的防災行動」

仮説Ⅱでは防災対策の取り組みに関する質問項目（問18）全てを用いた。それらの質問の21項目全てを「全般的防災行動」と名付けた。行なっていないという回答が最も多かった項目は「防災情報の交換」（86.3%）であった。

(2) 独立変数「居住地域の安全性認識」

地域の安全性に着目するため、居住地域の被災に関する質問項目（問1）、居住地域の地盤・地勢の強さに関する質問項目（問2）を用いた。

「浸水被害」により「自分が被害を受けた」人は2.5%、「地域が被害を受けたことを知っている」（以下では「知っている」とする）人は13.4%であった。「火災」については、「自分が被害を受けた」人は1.1%、「知っている」人は18.2%であった。「がけ崩れ」については、「自分が被害を受けた」人は0.3%、「知っている」人は3.1%であった。「液状化・地盤沈下」については、「自分が被害を受けた」人は7.7%、「知っている」人は24.6%であった。「建物の倒壊（全壊・半壊）」については、「自分が被害を受けた」人は0.6%、「知っている」人は10.0%であった（基礎集計表 問1）。

居住地域の安全性認識については、「地震」に対して地勢・地盤が「強い」と感じている人の割合は15.5%、「どちらかといえば強い」と感じている人は44.6%であった。「火災」に対しては「強い」11.1%、「どちらかといえば強い」55.4%であった。「対豪雨」については「強い」20.0%、「どちらかといえば強い」50.1%であった。「対台風」については「強い」14.5%、「どちらかといえば強い」58.2%であった。「対がけ崩れ」については「強い」45.6%、「どちらかといえば強い」36.6%であった（基礎集計表 問2）。

また、地区ごとの防災に対しての意識についても分析を行うため、居住区に関する項目（問34）を用いた。

6. 5 仮説Ⅰの検証

現在の人々の防災行動について分析を行うため、防災対策の取り組みに関する質問（問18）に対する回答——「東日本大震災前から行っていた」「東日本大震災の後から始めた」「行っていない」の3つの選択肢——から、「東日本大震災の前からしていた」と「東日本大震災の後から始めた」のいずれかを選択していた場合、現在は防災行動を「している」と考え、現時点での防災行動を「している」「していない」に分けた。

量的変数として扱うため、現在、防災行動を「している」場合には1点、「していない」場合には0点としてスコア化し、合成変数「防災行動」を作成した。この「防災行動」が合成変数として使用できるかについて調べるため、抜き出した11項目についてクロンバックスの α 係数を使用し内的整合性があるかどうかを調べた。その結果 $\alpha=0.79$ であったため、合成には妥当性があるといえる。この「防災行動」変数は、得点が高い人ほど防災行動を行っていることを示す。

基礎項目である年齢・性別にも着目し、量的変数としてスコア化した「防災行動」と関連があるかどうかを検証するために、性別ごとの防災行動の平均値、および年齢との相関係数を求めた（表6-1、表6-2）。

表6-1 男女別にみた防災行動の平均値との差の検定結果

変数名	n	平均値		t	p
		男	女		
防災行動	373	6.5	6.9	-1.2	0.2294

表6-2 年齢と防災行動の相関係数・要約統計量

	人数	平均	標準偏差	相関係数
年齢	389	53.8	15.7	0.17***
防災行動	375	6.7	2.6	

* $p<0.05$ ** $p<0.01$ *** $p<0.001$

表6-1より、 $p=0.2294$ であることから統計的な有意差はないとみられ、性別と防災行動には関連がないことがわかった。

また、表 6-2 より、有意水準 0.1% で統計的な関連性がみられ、「年齢が高い人ほど防災対策を行う」といえる。このことから、仮説 I ②「高齢者ほど防災行動を行わない」は否定され、逆に、高齢であるほど防災対策に対する意識は高いことがわかった。

次に、仮説 I ①「高齢者ほど外出行動が制限される」かどうかを検証すべく、年齢と外出の有無との関連を検証するために、「外出する・外出しない」別に年齢の平均値を求めた（表 6-3）。そのさい、独立変数である外出頻度に関する質問項目（問 13）は、「よく外出する」「ときどき外出する」を「外出する」、「あまり外出しない」「外出しない」を「外出しない」として、カテゴリー統合して使用した。

表 6-3 外出の有無別にみた年齢の平均値との差の検定結果

変数名	n	平均値		t	p
		外出する	外出しない		
年齢	389	53.8	53.7	-0.1	0.9544

表 6-3 より $p=0.9544$ であり、有意水準を満たしていないことから、統計的な有意差はないとみられ、年齢と外出の有無には関連がないことがわかった。

次に、行動制限のある人は防災行動を行わないという仮説 I を証明するため、外出の有無別に防災行動の平均値を算出した。

表 6-4 外出の有無別にみた防災行動の平均値

変数名	n	平均値		t	p
		外出する	外出しない		
防災行動	375	6.7	6.6	-0.6	0.5755

表 6-4 より $p=0.5755$ であり、統計的な有意差はないとみられ、外出の有無と防災行動には関連がないことがわかった。

そこでさらに、外出しない理由に関する質問項目（問 13 付問）（「その他」を除く 5 つの選択肢を用いた）と防災行動との関連性も検証すべく、外出理由別に防災行動得点の平均値も算出したが、統計的な有意差はひとつも見られなかった。

仮説 I の考察

仮説では、年齢が高い人ほど外出する頻度が低くなり、それゆえ防災行動をしなくなるのではないかと考えたが、仮説とは反対の結果が表れ、外出頻度と防災行動の間には全く関連がないことがわかり、仮説 I は完全に否定される結果となった。

外出しない理由として「外出が面倒」「家でやることが多い」の割合が高く、「健康等に自信がない」の割合が低かったことから、多くの人は体力的な問題でなく「外出できるがしない、あるいはできない」のであって、問題意識に提示したように、人びとが外出をしない理由は「体力の低下」ではなかった。仮説が証明されなかった原因は、こうした点に

あるのではないかと感じている。

また、表 6-3 より、「高齢者ほど外出を行わない」ことが否定されたことも大きい。若年者も高齢者も外出頻度は変わらなかったことから、人びとは私が思う以上に買い物や散歩など、通勤・通学以外の外出をしていた。

6. 6 仮説Ⅱの検証

仮説Ⅱでは、居住地域の安全性認識と防災行動の関連性を導き出すため、「全般的防災行動」という合成変数を作成した。

全般的防災は、防災対策の取り組みに関する質問（問 18）への回答に対し、（前節での手続と同様に）現在、防災行動を「している」場合には 1 点、「していない」場合には 0 点を与え、（前節では 21 項目中 11 項目のみを使用したのに対して、本節では）21 項目すべてを使用して作成した。 α 係数は $\alpha = 0.80$ だったため、合成には妥当性があるといえる。

以上の手続きを経て、まずは仮説Ⅱ①にあたる、自分が住んでいる地域がこれまでに被災したことについて知っているかどうかが防災行動にどのような影響を与えるかについて分析を行うため、居住地域の被災に関する質問項目（問 1）を用いて、居住地域の被災の認知別に防災行動の平均値を算出した。

居住地域の被災の認知は、問 1 の回答として「自分が被害を受けた」あるいは「被害を受けたことを知っている」のいずれかを選択していた場合には「認知している」とカテゴリー化し、「知らない・聞いていない」を選択した場合には「認知していない」とした。

以下の表 6-5 は、居住地域の被災の認知が防災行動にどのような影響を与えるかについて分析を行うため、居住地域の被災の認知別に全般的防災行動の平均値を求めたものである。

表 6-5 居住地域の認知と全般的防災行動

		n	全般的防災行動 (平均値)	t	p 値
浸水被害	認知している	51	11.2	-1.0	0.3347
	認知していない	285	10.6		
火災	認知している	66	11.1	-0.7	0.4622
	認知していない	269	10.6		
がけ崩れ	認知している	12	12.0	-1.1	0.2677
	認知していない	317	11.0		
液状化 地盤沈下	認知している	116	11.8	-3.3	0.0012
	認知していない	233	10.2		
建物倒壊	認知している	37	11.4	-1.1	0.2808
	認知していない	294	10.6		

「浸水被害」から「建物の倒壊」のなかで全般的防災行動と関連があったのは、「液状化・地盤沈下」のみであった。「液状化・地盤沈下」は 1 %水準での有意差がみられたことから「液状化・地盤沈下の被害を認知していない人は、認知している人に比べて、防災行動に

取り組んでいない」ということになり、仮説どおりの結果を得ることができた。千葉県は埋立地が多く、居住地域の地盤について理解しているか否かで被災に対する意識に大きく違いが出たのではないかと感じている。

次に、市内の各区ごとの特色を分析するため、居住地域の被災の認知と居住地域に関する質問項目（問３４）とのクロス集計を行った（表６－６）。なお、セルの期待値が５未満の数値となったものに対しては「not valid」として表示している。

結果として、ほとんどの項目においてセルの期待値が５未満となり、分析することができなかった。唯一分析可能であった火災についても、有意な結果は得られず、結果を出すにはより多くのサンプル数が必要であるだろう。

表６－６ 居住地域の被災の認知と居住地域のクロス集計

		認知している	認知していない	合計	人数	χ^2 値	p値
浸水被害	稲毛区	16.3	83.7	100.0	49	20.3846	not valid
	中央区	29.5	70.5	100.0	78		
	花見川区	4.5	95.5	100.0	66		
	緑区	7.3	92.7	100.0	55		
	美浜区	17.0	83.0	100.0	53		
	若葉区	16.7	83.3	100.0	60		
火災	稲毛区	16.7	83.3	100.0	48	4.1256	p=0.5315
	中央区	25.6	74.4	100.0	78		
	花見川区	19.7	80.3	100.0	66		
	緑区	16.4	83.6	100.0	55		
	美浜区	22.6	77.4	100.0	53		
	若葉区	13.6	86.4	100.0	59		
がけ崩れ	稲毛区	2.1	97.9	100.0	47	3.1159	not valid
	中央区	4.0	96.0	100.0	76		
	花見川区	4.6	95.4	100.0	65		
	緑区	0.0	100.0	100.0	55		
	美浜区	3.9	96.1	100.0	52		
	若葉区	5.2	94.8	100.0	58		
液状化・地盤沈下	稲毛区	20.8	79.2	100.0	48	151.8429	not valid
	中央区	29.4	76.6	100.0	77		
	花見川区	35.3	64.7	100.0	68		
	緑区	3.6	96.4	100.0	55		
	美浜区	90.9	9.1	100.0	66		
	若葉区	5.2	94.8	100.0	58		
建物の倒壊	稲毛区	6.3	93.7	100.0	48	45.7088	not valid
	中央区	9.5	90.5	100.0	74		
	花見川区	9.2	90.8	100.0	65		
	緑区	1.8	98.2	100.0	55		
	美浜区	35.2	64.8	100.0	54		
	若葉区	1.7	98.3	100.0	59		

次に、仮説Ⅱ②を検証するため、居住地域の地盤・地勢の強さに関する質問項目（問２）と全般的防災行動との関連性について分析を行った。

手続きとしてはまず、居住地域の地盤・地勢の強さに関する質問項目（問２）の回答選択肢について、「強いと思う」「どちらかといえば強いと思う」を「強いと思う」、「どちらかといえば弱いと思う」「弱いと思う」を「弱いと思う」としてカテゴリー統合を行い、「安全性認識」という新たな変数「安全性認識」を作成した。そしてそれぞれの災害に対する

「安全性認識」別に全般的防災行動の平均値の差の検定を行った。だが、その結果、統計的に有意な差は見られなかった。

そこで次に、全般的防災行動得点の平均値である 7 を中心とし、合計得点が 7 未満を防災行動を「していない」、7 以上を「している」とし、安全性認識とのクロス集計を行った。しかしそれでもやはり、有意な結果は得られなかった。

そのため、今度は個別の防災対策と安全性認識との関連を見ることにした。

表 6・7 は、それぞれの災害に対する安全認識（5 つの災害について「強いと思う」か「弱いと思う」か）と個別の防災対策（問 18 の全 21 項目について対策を「している」か「していない」か）との、計 105 のクロス集計結果を省略化して掲載したものである。

表 6－7 居住地域の地盤・地勢の強さと全般的防災行動の関連（クロス集計に対する χ^2 検定の統計量）

問18 問2	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v
	耐震化等	家具の固定	窓ガラスの補強	災害情報の収集	消火器の準備	携帯ラジオ等の準備	懐中電灯の準備	非常時持ち出しバッグの準備	非常時持ち出し衣類の準備	医薬品の準備	避難場所の決定	連絡方法の決定	電池の備蓄	ベトバイレットの備蓄	食料の備蓄	飲料水の備蓄	カセットコンロの準備	風呂水のため置き	持ち出し品の準備	自主防災組織の参加	防災情報の交換
a 対地震	7.61**	0.02	0.28	1.85	0.00	0.22	0.26	5.69*	0.43	8.56**	0.21	2.05	0.08	0.01	2.11	2.11	0.03	0.59	0.33	2.40	0.12
b 対火災	1.67	0.71	0.28	1.24	1.74	4.53*	1.27	1.24	0.36	0.01	0.69	0.31	0.74	0.43	2.14	0.83	0.48	0.98	0.84	0.10	0.00
c 対豪雨	5.16*	2.51	2.10	5.48*	0.10	0.09	0.07	0.94	1.18	0.01	2.45	0.30	3.69	0.15	0.68	0.05	0.01	2.08	0.48	0.01	0.01
d 対台風	5.62*	5.42*	1.78	1.68	0.39	1.17	0.00	0.79	0.93	4.47*	1.21	1.25	1.02	0.02	0.84	0.01	0.01	1.71	0.00	0.08	0.11
e 対がけ崩れ	0.04	3.59	0.08	0.69	0.52	0.89	0.05	0.69	0.54	10.7**	0.00	0.12	1.89	1.67	0.09	0.02	2.45	0.44	0.01	0.46	0.04

* $p<0.05$ ** $p<0.01$ *** $p<0.001$

※ 網掛箇所：地盤・地勢が「弱い」と思っていて、防災対策を「行なっている」という結果が得られた箇所。

※ 下線箇所：地盤・地勢が「弱い」と思っているのに、防災対策を「行なっていない」という結果が得られた箇所。

対地震（表 6・7）と関連のある項目は、「耐震化等」（ $p<0.01$ ）、「非常時持ち出しバッグの準備」（ $p<0.05$ ）と「医薬品の準備」（ $p<0.01$ ）であった。地震に関連があるであろうと想定される項目の中でも、有意な関連が見られるものと見られないものがあつた。有意な項目は耐震化等があつたが、例えば家具の固定などでは有意な結果が見られなかった。

対火災（表 6・8）と関連のある項目は、「携帯ラジオ等の準備」（ $p<0.05$ ）であつた。この結果からはお互いの関連性を見出すことができなかったが、火災に弱い地域だということが必ずしも消化器の準備に結びつくとは言えないということがわかった。

対豪雨（表 6・9）と関連のある項目は、「耐震化等」（ $p<0.05$ ）と「災害情報の収集」（ $p<0.05$ ）であつた。豪雨と耐震化の間には関連性を見いだすことはできなかったが、災害情報の収集について言えば、近年ゲリラ豪雨などの被害が相次いでいることで、大雨等による警報には気を使っているのかもしれない。

対台風（表 6・10）と関連のある項目は、「耐震化等」（ $p<0.05$ ）、「家具の固定」（ $p<0.05$ ）、

「医薬品の準備」($p<0.05$)であった。この場合も耐震化や家具の固定との有意な関連性は見いだせなかったが、台風に対して弱い地勢にあると感じながらも「窓ガラス等の補強」(実際の質問項目では「屋根瓦や窓ガラスの補強」)を行っていないことから、台風に対する防災意識の薄さを感じられた。

対がけ崩れ(表 6-11)と関連のある項目は、「医薬品の準備」($p<0.01$)であった。がけ崩れは個人では何をどう対策したらいいかわからないのでとりあえず医薬品の準備をしているのではないかと感じた。

仮説Ⅱの考察

仮説Ⅱ(居住地域が災害に対して安全だと感じている人は、防災行動に取り組んでいない)は、ごく一部でしか証明されなかった。

仮説が証明されたものの 1 つには、居住地域の「液状化・地盤沈下」といった被災の認知が防災行動をすすめるというものがあった。

液状化・地盤沈下においてのみ仮説を支持する結果がみられた要因として、今回の東日本大震災における液状化・地盤沈下による被害が千葉市、特に埋立地が大半を占める美浜区において甚大であり、それがマスコミ等で大きく取り上げられたため、このことを自身で体験、あるいは見聞したことが、防災への意識に大きな影響を及ぼし、防災行動との関連性につながったのではないだろうか。震災後数年経ったあと再度調査を行うと防災への意識の変化により、今とはまた違った結果が現れるのではないかと感じている。

次に居住地域の地盤・地勢の強さと防災行動との関連性を検証したが、想像よりも人びとが防災行動を行っていないという、意外な結果が出た。

地震に弱い地域に住んでいるのであれば地震に対する防災行動を行ってよいはずなのに、地震に対する防災行動の中でも行っているものと行っていないものがあり、人々の防災行動には一貫性がないように感じた。しかし、表 6-7 では「医薬品の準備」が 3 つの災害に対し関連のある項目としてあがった。災害による被害として「ケガ」が想定される地震・台風・がけ崩れなどに対しては医薬品が準備され、「ケガ」という被害は想定されにくい火災や豪雨に対しては医薬品の準備との間に有意な結果が見られなかったことは興味深い。また、これらの災害が起きた場合には外部からの連絡手段が途絶え、物資の調達も遅れるのでケガ等をした時は早急な措置が必要であると人びとは感じているのかもしれない。言い換えれば、医薬品とはそうした災害時における応急措置にとって、一番欠かせないものであるということを、人びとが自覚しているからではないかと感じた。

6. 7 全体の考察

以上の分析から、行動制限(外出の頻度)と防災行動には関係がなく、災害に対する地域の安全性認識と防災行動には部分的な関連しか見られなかった。

特に仮説Ⅰに関しては、私の考えていた問題意識とは反対の結果が出たため課題がたく

さん残った結果となった。今回の調査で東日本大震災に焦点を当てて研究を進めてきたが、大きな震災後であったにもかかわらず、私が思っていたより防災への意識がそれほど高くないように感じた。

また、仮説Ⅰの結果では高齢者ほど防災行動をしており、仮説Ⅱでは地域の安全認識との関連がほとんど見られなかったことから、防災行動に最も影響を与えているのは本人自身の経験なのかもしれないと考えた。つまり、地域を焦点化するのではなく、個人に焦点を当て、再度分析をし直す必要性を感じた。

そこで、本人の経験が防災行動に影響を与えるかどうかを詳しく検証するために、以下の2つの分析を行った。

1つめは、今回の震災に限らず現在住んでいる地域で被災をした経験があるかどうかと、防災行動との関連を見るために、(前節では、「自分が被害を受けた」あるいは「被害を受けたことを知っている」を統合していたが、それを再び分解して) 問1のそれぞれの選択肢ごとに全般的防災行動の平均値を算出した。

その結果を示したものが、下記の表6-8である。ただし、がけ崩れ、建物の倒壊については自身が被害を「受けた」という回答が1であり、分析に必要なサンプル数を得られなかったため、分析からは除外した。

表6-8 居住地域の被災経験・見聞別にみた全般的防災行動の平均値と分散分析結果

独立変数	n	全般的防災行動 (平均値)	標準偏差	F値	p値
浸水被害 受けた	7	10.6	2.7	0.47	0.9610
知っている	37	11.2	4.7		
知らない・聞いていない	282	10.6	4.3		
火災 受けた	4	10.0	0.8	0.40	0.9707
知っている	56	10.8	4.2		
知らない・聞いていない	266	10.6	4.4		
液状化 受けた	20	12.0	4.7	5.41	0.0326
地盤沈下 知っている	75	11.6	4.3		
知らない・聞いていない	231	10.2	4.2		

F 値=1.01 p 値=0.4329

*p<0.05

2つ目は、今回の東日本大震災において被災した経験があったかどうかと防災行動の関連を見るために、問18において防災対策を「東日本大震災の後に始めた」人とそれ以外の人との間で、全般的防災行動に違いがあらわれるかどうかを検証することにした。

具体的な分析の手続きとしては、問18において、防災行動を「東日本大震災のあとに始めた」人を「震災後した」、「東日本大震災の前からしていた」、あるいは「行っていない」のいずれかを選択した人を「変わらず」とし、「震災後した」に1点、「変わらず」に0点を与えてスコア化し、全21項目を合成することで新しい変数「震災後防災行動」を作成した。「震災後防災行動」が合成変数として使用できるかについて α 係数を算出したところ、 $\alpha=0.81$ だったため合成には妥当性があるといえる。

また、独立変数には東日本大震災での被災経験を聞いている問 24 を使用した。

表 6-9 は、東日本大震災での被災経験の有無別に震災後防災行動の平均値を算出し、t 検定を行った結果である。ただし、「大けがをした」という選択肢に該当する人は 0 人であり、分析に必要なサンプル数を得られなかったため、分析からは除いており、「避難」についても該当する人が 2 人しかいなかったため、分析からは除外している。

表 6-9 東日本大震災の被災経験別にみた震災後防災行動の平均値の差の検定

		n	震災後防災行動 (平均値)	t	p 値
家の損傷	該当	27	3.5	-1.3	0.1956
	非該当	329	2.7		
家具の損傷	該当	61	3.1	-1.1	0.2677
	非該当	295	2.6		
帰宅困難	該当	98	3.3	-2.0	0.0457
	非該当	258	2.5		
どれも当てはまらない	該当	199	2.4	2.1	0.0370
	非該当	157	3.1		

表 6-8 では、液状化・地盤沈下による被害を「知っている」人と「知らない・聞いていない」人との間に有意な差があったことから、液状化・地盤沈下の被害を受けたことを知っている人は知らない・聞いていない人よりも防災行動をしているという結果が出た。経験にもとづくのではなく、見聞にもとづき防災行動を行うことがわかったが、液状化・地盤沈下以外の被害を「受けた」人の数が少ないため、当該箇所だけに結果が見られたのは、単にサンプル数の問題かもしれず、分析結果にあまり信頼性がないように思われる。

表 6-9 では、「帰宅困難」を経験した人としていない人の間、および「どれも当てはまらない」に該当する人としていない人との間で、有意水準 5% の差が見られた。

しかし、「帰宅困難」を経験した人としていない人との平均値にはあまり差がなかったことや、帰宅困難と防災行動の関連性が薄いため、この分析結果から何かを読み取ることは難しいように思えた。

だが、「どれも当てはまらない」については、「東日本大震災で被害を受けなかった人は防災行動をしていない」という結果が表れた。

先ほどの考察においては自身の経験が防災行動に影響を与えるのではないかと推測したが、これらの分析からはそれを直接的に支持するような結果は得られなかった。しかし、表 6-9 において「どれにもあてはまらない」に該当する人は防災行動をしていないという結果が見られたことから、被災体験が防災行動を促進するとは必ずしも言えないが、被災をしていない人は防災行動を行わない、ということは言えるだろう。

第7章 テレビ視聴時間の観点から見た

防災対策の取り組みの分化

A92018 秋葉駿

7. 1 問題意識

内閣府がおこなっている「防災に関する特別世論調査」によると、阪神淡路大震災が起きた1995年には「携帯ラジオ、懐中電灯、医薬品などを準備している」「食料や飲料水を準備している」「近くの学校や公園など避難する場所を決めている」「いつも風呂の水をためおきしている」「家族との連絡方法などを決めている」などの防災対策をしている人が、1991年の調査結果に比べ、5～17ポイント増加していた。また、新潟県中越沖地震が起きた2007年には「携帯ラジオ、懐中電灯、医薬品などを準備している」「食料や飲料水を準備している」「近くの学校や公園など避難する場所を決めている」「いつも風呂の水をためおきしている」「家族との連絡方法などを決めている」などの防災対策をしている人が、2005年の調査結果に比べ、5～10ポイント増加しているという調査結果であった。（内閣府 2009）

この調査結果から、阪神淡路大震災や新潟県中越沖地震などのように、大規模災害が起けると、その後に防災対策をしている人が増加することが推測できる。しかし、全ての人が防災対策をしているわけではなかった。それでは、防災対策をしている人と防災対策をしていない人にはどのような違いがあるのだろうか。

防災対策の取り組みの分化をテレビ視聴時間の観点から見ていく。テレビは社会で問題になっていることをすばやく取り上げ、視聴者に強い印象を与える。それにより、視聴者は災害に関する知識を間接的に得ているのではないだろうか。田中淳・吉井博明は、「今起きていることをリアルタイムで伝える。それが、放送の最大のメリットである速報性、同時性だ。そうした放送のメリットを最大限に生かすことができるのが、大きな地震や水害などが起きた際の災害報道だ。今、どこでどんな被害がでているか、今後の危険性はなにかを伝え、危険が迫っている地域の人たちに避難を呼びかけたり、被害を少なくするための防災対応を進めたりすることができるからだ」と述べている（田中・吉井 2008: 171）。

田中・吉井の考えを踏まえ、テレビの力が個人の具体的な備えの行動を促進し、人々が防災対策をすることになるのではないかと考えた。

また、田中・吉井は、「家庭における防災対策は、手間や費用がかかる程度によって低コスト対策と高コスト対策に分けることができる。低コスト対策は災害への関心が高まるとすぐに反応し実施率が急上昇する。これに対して、高コスト対策は災害への関心が高まっても費用や手間がかかるため簡単にはできないので、部屋の配置換えや改修などをきっかけとして始める家庭が多い」とも述べている（田中・吉井 2008: 126-127）。

田中・吉井の考えを踏まえ、テレビ視聴時間が長い人は災害への関心が高まり防災対策をとっているのではないかと、また、防災対策の中でも特に低コストの防災対策をとっているのではないかと考え、次節の仮説Ⅰを立てた。

内閣府の「防災に関する特別世論調査」によると、災害が防災対策を促進することが推測できるが、この促進には報道番組の視聴時間の伸長が大きく影響すると考えられる。

安倍北夫は、災害パニックと経済パニックにおける「場」と「群集」を次のように述べている。

トイレットペーパーの特売に群がり、せまい入口から目の色を変えて売り場に殺到する状況がテレビを通じて、不特定多数の人々のお茶の間に入ってくるとき、その大うつしにされた主婦たちの額の汗、血走った目、つかけたサンダルは、見る主婦たちをたちまち画面とアイデンティファイさせる。場合によっては、その現場に居あわせた以上の臨場感を以て人々をかり立てる。彼等は地理的にいえば、特売場の混乱、その群集の中には身をおいてはいない。しかし電波によってうつし出された現場に——そう、カメラマンの目をもって現場に立つ。(安部 1986: 4)

安倍北夫は、続けてこう述べている。

そこでは本来、時間、空間とも虚構のものが、電波という場をより所として、人々を「共通の特定の場」に立たせる。(安部 1986: 4)

安部北夫の考えを踏まえ、災害後にテレビ番組で被災地の様子が多く報道されるのを見た人々は、被災地という「共通の特定の場」に立つことで、危機意識を啓発され、防災対策をとっているのではないかと考え、次節の仮説Ⅱを立てた。

7. 2 理論仮説

- I. テレビ視聴時間が長い人は防災対策をとっている人が多い。但し、防災対策の中でも特に低コストの防災対策をとる。
- II. 防災対策は特に大きな災害後に促進される。この促進には報道番組の視聴時間の伸長が大きく影響する。

7. 3 仮説の検証に使用した変数の基礎集計

①仮説Ⅰの独立変数「震災以前のテレビ視聴時間ー平日」「同一休日」

震災以前の平日と休日のテレビ視聴時間を調べるために、「震災以前のテレビ視聴時間ー平日」「同一休日」の質問を使う。それぞれの平均を男女別に求めた結果、平日の平均テレビ視聴時間は、男性は3時間30分、女性は4時間11分であった。休日の平均テレビ視聴時間は、男性は4時間40分、女性は4時間43分であった。(巻末基礎集計表 問9参照)

②仮説Ⅱの独立変数「震災１カ月後のテレビ視聴時間－平日」「同一休日」

震災１カ月後の平日と休日のテレビ視聴時間を調べるために、「震災１カ月後のテレビ視聴時間－平日」「同一休日」の質問を使う。それぞれの平均を男女別に求めた結果、平日の平均テレビ視聴時間は、男性は３時間５０分、女性は４時間４３分であった。休日の平均テレビ視聴時間は、男性は５時間１８分、女性は５時間３６分であった。（巻末基礎集計表 問 ９ 参照）

③仮説Ⅱの独立変数「震災前後のテレビ番組全体の視聴時間の変化」

震災以前と震災後のテレビ番組全体の視聴時間の変化を調べるために、「震災以前のテレビ視聴時間－平日」と「震災１カ月後のテレビ視聴時間－平日」をそれぞれ分単位にして、両者の差である「震災前後のテレビ視聴時間の変化－平日」という変数を作成した。

また、「震災以前のテレビ視聴時間－休日」と「震災１カ月後のテレビ視聴時間－休日」をそれぞれ分単位にして、両者の差である「震災前後のテレビ視聴時間の変化－休日」という変数を作成した。その結果を示した表 7－1 によると、平日の平均テレビ視聴時間は震災以前に比べ、男性は 17 分、女性は 34 分長くなっていた。休日の平均テレビ視聴時間は震災以前に比べ、男性は 35 分、女性は 55 分長くなっていた。

表 7－1 「震災前後のテレビ視聴時間の変化」

	性別	人数	平均
平日	男性	162人	17分増
	女性	221人	34分増
休日	男性	161人	35分増
	女性	220人	55分増

④仮説Ⅱの独立変数「震災後の番組ジャンル別視聴時間の変化」

震災後の番組ジャンル別視聴時間の変化を調べるために、「震災後の番組視聴時間の変化」の質問を使う。基礎集計の結果、回答選択肢の「増えた」と回答した人は、「報道番組」が最も高く、男性 72.0%、女性 79.3%であった。次いで「ワイドショーなどの情報番組」は男性 20.4%、女性 32.9%であった。「スポーツ番組」「音楽番組」「娯楽番組」「アニメ」「ドラマ」「映画」は男女ともに増えたと回答した人は 4%未満と低い傾向であった。（巻末基礎集計表 問 10 参照）

⑤仮説ⅠおよびⅡの従属変数「防災対策の取り組み状況」

防災対策の取り組み状況を調べるために、「防災対策の取り組み状況」の質問を使う。基礎集計の結果、「携帯ラジオや携帯テレビを準備している」「懐中電灯を準備している」「電池の備蓄をしている」は、回答選択肢の「東日本大震災の前から行っていた」と回答した人が男女ともに 50%以上と高い傾向であった。回答選択肢の「東日本大震災の後から始めた」と回答した人が相対的に多かったのは「災害情報を収集するようにしている」「飲料水を備蓄している」であり、これらの項目は、震災後に始めたという人が男女ともに 2 割から 4 割いた。「屋根瓦や窓ガラスの補強」「非常時に持ち出す衣類を準備している」「自主防

災組織に参加している」「地域住民と防災に関する情報交換を行っている」は、回答選択肢の「行っていない」と回答した人が男女ともに 70%以上と多かった。(巻末基礎集計表 問 18 参照)

7. 4 理論仮説Ⅰ「テレビ視聴時間が長い人は防災対策をとっている人が多い。但し、防災対策の中でも特に低コストの防災対策をとる」の検証

仮説検証に際しての予備的手続き

仮説Ⅰの検証に際しては、独立変数としての「震災以前のテレビ視聴時間－平日」「同一休日」をそれぞれ分単位にして使用する。従属変数である「防災対策の取り組み状況」については、問 18 の防災対策を「低コストの防災対策」と「高コストの防災対策」に分けた (表 7-2)。

表 7-2 コスト別の防災対策(問 18)

<低コストの防災対策>		<高コストの防災対策>
e 消火器の準備	q 飲料水の備蓄	a 耐震化等
f 携帯ラジオ等の準備	r カセットコンロの準備	b 家具の固定
g 懐中電灯の準備	s 風呂水のため置き	c 窓ガラス等の補強
k 避難場所の決定	t 貴重品の持ち出し準備	d 災害情報の収集
m 連絡方法の決定	u 自主防災組織への参加	h 非常時持ち出しバッグの準備
n 電池の備蓄		i 非常時持ち出し衣類の準備
o トイレ用ペーパーの備蓄		j 医薬品の準備
p 食糧の備蓄		v 防災情報の交換

「低コストの防災対策」は手間や費用がかからない防災対策、「高コストの防災対策」は手間や費用がかかる防災対策とする。この取り組み状況に関する質問項目は、「東日本大震災の前から行っている」「東日本大震災の後から始めた」「行っていない」の 3 件法で回答を求めたが、仮説Ⅰに関しては東日本大震災以前の取り組み状況を把握するために、「東日本大震災の前から行っていた」をそのまま使用し、「東日本大震災の後から始めた」と「行っていない」をカテゴリー統合し、「東日本大震災の前に防災対策を行っていない」とした。

そして、2 カテゴリーの回答分布の結果をスコア化するために、「東日本大震災の前から行っていた」には 1 点、「東日本大震災の後から始めた」「行っていない」には 0 点を与えた。そして、スコア化した 21 項目のうち、低コストの防災対策に関する項目として、表 7-2 の e~g、k~u の 13 項目を合成した場合の α 係数は 0.8122 であったため、これらの項目を用いて「低コストの防災対策着手度」という合成変数を作成した。また、高コストの防災対策に関する項目として、a~d、h~j、v の 8 項目を合成した場合の α 係数は 0.6650 であり、若干低めではあるが、これらの項目を用いて「高コストの防災対策着手度」という合成変数を作成した。

平日のテレビ視聴時間と防災対策との関連

理論仮説Ⅰの検証を行うために、「震災以前のテレビ視聴時間－平日」と「低コストの防災対策着手度」「高コストの防災対策着手度」それぞれとの相関係数を男女別に算出した。

その結果を示しているのが次頁の表 7-3 である。

表 7-3 「震災以前のテレビ視聴時間－平日」と「コスト別の防災対策着手度」の相関

	性別	人数	平均	標準偏差	震災以前のテレビ視聴時間－平日	
					相関係数	p値
低コストの防災対策着手度	男性	161人	5.60	3.14	0.20	0.0103 **
	女性	209人	5.52	3.25	-0.06	0.3526
高コストの防災対策着手度	男性	161人	2.39	1.97	0.10	0.2238
	女性	209人	1.99	1.72	-0.02	0.7219

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

この表によると、「震災以前のテレビ視聴時間－平日」と「低コストの防災対策着手度」との関連について男性に統計的に有意な結果が認められた。両変数の相関係数は 0.20 であった。男性は「震災以前のテレビ視聴時間－平日」が長い人ほど、「低コストの防災対策着手度」が高いことが分かった。

では男性の場合、「震災以前のテレビ視聴時間－平日」は低コストの防災対策の中でもどのような防災対策に影響を与えているのだろうか。「震災以前のテレビ視聴時間－平日」と「防災対策の取り組み状況」の低コストの各項目との相関係数を算出した（表 7-4）。

表 7-4 「震災以前のテレビ視聴時間－平日」と「低コストの防災対策着手度」の相関

	性別	人数	平均	標準偏差	震災以前のテレビ視聴時間－平日	
					相関係数	p値
e 消火器を準備している	男性	164人	0.46	0.50	0.00	0.9545
	女性	219人	0.46	0.50	-0.06	0.3579
f 携帯ラジオや携帯テレビを準備している	男性	163人	0.63	0.48	0.11	0.1619
	女性	220人	0.60	0.49	-0.01	0.9322
g 懐中電灯を準備している	男性	165人	0.84	0.37	0.18	0.0244 *
	女性	221人	0.79	0.41	-0.11	0.1009
k 近くの学校や公園など避難する場所を決めている	男性	165人	0.50	0.50	0.04	0.5816
	女性	221人	0.50	0.50	-0.09	0.2033
m 家族との連絡方法を決めている	男性	165人	0.38	0.49	0.06	0.4711
	女性	217人	0.35	0.48	-0.08	0.2240
n 電池の備蓄をしている	男性	164人	0.61	0.49	0.20	0.0120 *
	女性	220人	0.55	0.50	-0.05	0.4362
o トイレトペーパーの備蓄をしている	男性	165人	0.48	0.50	0.15	0.0562
	女性	220人	0.47	0.50	-0.02	0.7242
p 食料を備蓄している	男性	165人	0.38	0.49	0.07	0.3966
	女性	221人	0.36	0.48	-0.01	0.9131
q 飲料水を備蓄している	男性	165人	0.43	0.50	0.08	0.3087
	女性	221人	0.48	0.50	0.00	0.9543
r カセットコンロを準備している	男性	165人	0.41	0.49	0.12	0.1353
	女性	219人	0.51	0.50	-0.06	0.3695
s 風呂の水のため置きをしている	男性	165人	0.35	0.48	0.26	0.0010 **
	女性	220人	0.36	0.48	0.05	0.4932
t 貴重品をすぐに持ち出せるようにしている	男性	164人	0.46	0.50	0.22	0.0061 **
	女性	218人	0.33	0.47	0.09	0.1913
u 自主防災組織に参加している	男性	165人	0.13	0.33	0.03	0.6737
	女性	218人	0.10	0.30	-0.04	0.5260

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

その結果、「震災以前のテレビ視聴時間－平日」との関連性が認められたのは、男性の「懐中電灯を準備している」「電池の備蓄をしている」「風呂の水のため置きをしている」「貴重品をすぐに持ち出せるようにしている」であった。

相関係数は、この順に 0.18、0.20、0.26、0.22 であった。これらの 4 項目は、それ自体としては特段の買物行動を必要としないか、あるいは、買物行動を必要とするものでも頻繁な買い替えが必要でないという点で共通していると考えられる。男性の平日のテレビ視

聴時間は、買物行動を必要としない防災対策、および買物行動を必要とするものでも頻繁な買い替えが必要でない防災対策に影響を与えていると考えられる。

休日のテレビ視聴時間と防災対策との関連

「震災以前のテレビ視聴時間－休日」と「低コストの防災対策着手度」「高コストの防災対策着手度」の相関係数を男女別に算出した。その結果を示しているのが表 7－5 である。

表 7－5 「震災以前のテレビ視聴時間－休日」と「コスト別の防災対策着手度」の相関

	性別	人数	平均	標準偏差	震災以前のテレビ視聴時間－休日	
					相関係数	p値
低コストの防災対策着手度	男性	161人	5.60	3.14	0.23	0.0039 **
	女性	209人	5.52	3.25	-0.12	0.0867
高コストの防災対策着手度	男性	161人	2.39	1.97	0.12	0.1205
	女性	209人	1.99	1.72	-0.10	0.1643

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

この表によると、男性の「震災以前のテレビ視聴時間－休日」と「低コストの防災対策着手度」との関連性についてのみに統計的に有意な結果が認められた。両変数の相関係数は 0.23 であった。男性は「震災以前のテレビ視聴時間－休日」が長い人ほど、低コストの防災対策着手度が高いことが分かった。女性は「震災以前のテレビ視聴時間－休日」と「低コストの防災対策着手度」「高コストの防災対策着手度」に統計的に有意な関連性は認められなかった。

では男性の場合、「震災以前のテレビ視聴時間－休日」は低コストの防災対策の中でもどのような防災対策に影響を与えているのだろうか。「震災以前のテレビ視聴時間－休日」と「防災対策の取り組み状況」の低コストの各項目との相関係数を算出した（表 7－6）。

表 7－6 「震災以前のテレビ視聴時間－休日」と「低コストの防災対策着手度」の相関

	性別	人数	平均	標準偏差	震災以前のテレビ視聴時間－休日	
					相関係数	p値
e 消火器を準備している	男性	164人	0.46	0.50	0.01	0.8875
	女性	219人	0.46	0.50	-0.11	0.1093
f 携帯ラジオや携帯テレビを準備している	男性	163人	0.63	0.48	0.16	0.0451 *
	女性	220人	0.60	0.49	-0.02	0.7405
g 懐中電灯を準備している	男性	165人	0.84	0.37	0.18	0.0220 *
	女性	221人	0.79	0.41	-0.12	0.0701
k 近くの学校や公園など避難する場所を決めている	男性	165人	0.50	0.50	0.06	0.4358
	女性	221人	0.50	0.50	-0.09	0.2093
m 家族との連絡方法を決めている	男性	165人	0.38	0.49	0.05	0.5415
	女性	217人	0.35	0.48	-0.05	0.4914
n 電池の備蓄をしている	男性	164人	0.61	0.49	0.18	0.0229 *
	女性	220人	0.55	0.50	-0.12	0.0679
o トイレトペーパーの備蓄をしている	男性	165人	0.48	0.50	0.19	0.0167 *
	女性	220人	0.47	0.50	-0.12	0.0717
p 食料を備蓄している	男性	165人	0.38	0.49	0.07	0.3537
	女性	221人	0.36	0.48	-0.04	0.5732
q 飲料水を備蓄している	男性	165人	0.43	0.50	0.09	0.2426
	女性	221人	0.48	0.50	-0.08	0.2353
r カセットコンロを準備している	男性	165人	0.41	0.49	0.12	0.1274
	女性	219人	0.51	0.50	-0.13	0.0545
s 風呂の水のため置きをしている	男性	165人	0.35	0.48	0.28	0.0004 ***
	女性	220人	0.36	0.48	0.07	0.2856
t 貴重品をすぐに持ち出せるようにしている	男性	164人	0.46	0.50	0.24	0.0019 **
	女性	218人	0.33	0.47	0.07	0.3172
u 自主防災組織に参加している	男性	165人	0.13	0.33	0.02	0.8260
	女性	218人	0.10	0.30	-0.08	0.2482

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

その結果、男性は「携帯ラジオや携帯テレビを準備している」「懐中電灯を準備している」「電池の備蓄をしている」「トイレトペーパーの備蓄をしている」「風呂の水のため置きをしている」「貴重品をすぐに持ち出せるようにしている」に統計的に有意な関連性が認められた。相関係数は、この順に 0.16、0.18、0.18、0.19、0.28、0.24 であった。これらの項目は、特段の買物行動を必要としない対策、および消費期限を気にしなくてすむ雑貨類の準備という点で共通していると考えられる。男性の休日のテレビ視聴時間は、買物行動を必要としない防災対策、および消費期限を気にしなくてすむ雑貨類の準備の防災対策に影響を与えていると考えられる。

7. 5 理論仮説Ⅱ「防災対策は特に大きな災害後に促進される。この促進には報道番組の視聴時間の伸長が大きく影響する」の検証

仮説検証に際しての予備的手続き

仮説Ⅱの検証に際しては、独立変数として震災以前と以後のテレビ番組全体の視聴時間の変化と番組ジャンル別視聴時間の変化を使用する。前者については、本章3節③で作成した「震災前後のテレビ視聴時間の変化－平日」「同一休日」という変数を使用する。後者については、「震災後の番組ジャンル別視聴時間の変化」を用いる。後者の質問項目は、「増えた」「変わらない」「減った」「もともと見ない」の4件法で回答を求めたが、震災前後の番組視聴時間の伸長を把握するために、「増えた」をそのまま使用し、「変わらない」「減った」「もともと見ない」をカテゴリー統合し、「増えていない」とした。2カテゴリーの回答分布の結果をスコア化するために、「増えた」には1点、「増えていない」には0点を与えた。

従属変数である「防災対策の取り組み状況」の質問項目は、「東日本大震災の前から行っている」「東日本大震災の後から始めた」「行っていない」の3件法で回答を求めたが、東日本大震災後の取り組み状況を把握するために、回答選択肢を次のようにカテゴリー統合したうえでスコア化を行った。「東日本大震災の後から始めた」をそのまま使用し、「東日本大震災の前から行っている」と「行っていない」をカテゴリー統合し、「前から行っていた・行っていない」とした。そして、「東日本大震災の後から始めた」には1点、「前から行っていた・行っていない」は0点を与えた。スコア化した21項目を合成した場合の α 係数は0.8472であったため、21項目すべてを用いて「震災後の防災対策着手度」という合成変数を作成した。

テレビ番組全体の視聴時間の変化と防災対策との関連

「震災前後のテレビ視聴時間の変化－平日」「同一休日」のそれぞれと「震災後の防災対策着手度」の相関係数を男女別に算出した（次頁 表7-7）。その結果、男女ともに統計的に有意な関連性は認められなかった。全体的なテレビ視聴時間に関しては、震災後の防災対策着手に影響を与えていないことが分かった。

表 7-7 「震災前後のテレビ視聴時間の変化－平日」「同一休日」と「震災後の防災対策着手度」の相関

	性別	人数	平均	標準偏差	震災以前のテレビ視聴時間－平日	
					相関係数	p値
	男性	156人	2.37	2.88	0.05	0.5375
	女性	200人	3.00	3.38	0.05	0.4498

震災後の防災対策着手度	性別	人数	平均	標準偏差	震災以前のテレビ視聴時間－休日	
					相関係数	p値
	男性	156人	2.37	2.88	-0.03	0.6986
	女性	200人	3.00	3.38	-0.04	0.6149

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

番組ジャンル別視聴時間の変化と防災対策との関連

「震災後の番組ジャンル別視聴時間の変化」で取り上げた 8 ジャンルごとに、「震災後の防災対策着手度」の平均を男女別に算出した（表 7-8 a～h）。このうち「報道番組」（表 7-8 a）、「ワイドショーなどの情報番組」（表 7-8 g）、「音楽番組」（表 7-8 c）、「娯楽番組」（表 7-8 d）のいずれも女性の場合のみ、増加の有無別に見た平均値に統計的に有意な差が認められた。

表 7-8 「震災以前と比べた震災後の視聴時間の変化」（番組ジャンル別視聴時間の変化）別にみる「震災後の防災対策着手度」の平均と t 検定結果

a 「報道番組」						b 「スポーツ番組」					
性別	視聴時間	人数	平均	標準偏差	p値	性別	視聴時間	人数	平均	標準偏差	p値
男性	増えた	110人	2.55	2.88	0.1901	男性	増えた	0人	—	—	—
	増えていない	45人	1.89	2.81			増えていない	155人	2.36	2.86	
女性	増えた	158人	3.26	3.47	0.0170 *	女性	増えた	1人	7.00	—	—
	増えていない	43人	1.88	2.70			増えていない	199人	2.95	3.37	

c 「音楽番組」						d 「娯楽番組」					
性別	視聴時間	人数	平均	標準偏差	p値	性別	視聴時間	人数	平均	標準偏差	p値
男性	増えた	0人	—	—	—	男性	増えた	1人	2.00	—	—
	増えていない	154人	2.36	2.87			増えていない	153人	2.38	2.88	
女性	増えた	4人	7.00	4.97	0.0158 *	女性	増えた	6人	1.83	0.75	0.0107 *
	増えていない	195人	2.90	3.30			増えていない	195人	3.00	3.41	

e 「アニメ」						f 「ドラマ」					
性別	視聴時間	人数	平均	標準偏差	p値	性別	視聴時間	人数	平均	標準偏差	p値
男性	増えた	1人	2.00	—	—	男性	増えた	1人	3.00	—	—
	増えていない	153人	2.37	2.88			増えていない	154人	2.36	2.87	
女性	増えた	7人	4.00	3.74	0.4126	女性	増えた	1人	2.00	—	—
	増えていない	192人	2.93	3.37			増えていない	196人	2.88	3.28	

g 「ワイドショーなどの情報番組」						h 「映画」					
性別	視聴時間	人数	平均	標準偏差	p値	性別	視聴時間	人数	平均	標準偏差	p値
男性	増えた	32人	2.81	3.35	0.3225	男性	増えた	3人	0.33	0.58	0.2167
	増えていない	122人	2.25	2.74			増えていない	152人	2.40	2.88	
女性	増えた	66人	3.77	3.85	0.0303 *	女性	増えた	4人	6.00	0.89	0.0696
	増えていない	134人	2.58	3.04			増えていない	196人	2.91	3.33	

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

まず「報道番組」（表 7-8 a）を見ると、視聴時間が「増えた」と回答した人の「震災後の防災対策着手度」の平均は 3.26、「増えていない」と回答した人の平均は 1.88 であっ

た。震災後に報道番組の視聴時間が増えた人の防災対策着手度の平均は増えていない人の平均より高いことが分かった。

「ワイドショーなどの情報番組」（表 7-8 g）を見ると、視聴時間が「増えた」と回答した人の「震災後の防災対策着手度」の平均は 3.77、「増えていない」と回答した人の平均は 2.58 であった。震災後にワイドショーなどの情報番組の視聴時間が増えた人の防災対策着手度の平均は増えていない人の平均より高いことが分かった。

「音楽番組」（表 7-8 c）を見ると、視聴時間が「増えた」と回答した人の「震災後の防災対策着手度」の平均は 7.00、「増えていない」と回答した人の平均は 2.90 であった。震災後に音楽番組の視聴時間が増えた人の防災対策着手度の平均は増えていない人の平均より高いことが分かった。

「娯楽番組」（表 7-8 d）を見ると、視聴時間が「増えた」と回答した人の「震災後の防災対策着手度」の平均は 1.83、「増えていない」と回答した人の平均は 3.00 であった。上記 3 つの番組ジャンルのばあいとは逆に、震災後に娯楽番組の視聴時間が増えた人の防災対策着手度の平均は増えていない人の平均より低いことが分かった。

7. 6 考察

まず仮説 I について、震災以前のテレビ番組全体の視聴時間と防災対策着手度との関連を見ると、男性についてのみ、震災以前の平日および休日のテレビ視聴時間が長い人ほど、低コストの防災対策着手度が高くなっていた。また、低コストの防災対策の中では、平日は「風呂の水のため置きをしている」など、とくにそれ自体としては買物行動を必要としない防災対策、あるいは、買物行動を必要とするものでも「懐中電灯を準備している」など、頻繁な買い替えが必要でない防災対策に影響を与えていた。休日は「風呂の水のため置きをしている」など、とくにそれ自体としては買物行動を必要としない防災対策、および「トイレットペーパーの備蓄をしている」など、消費期限を気にしなくてすむ雑貨類の準備の防災対策に影響を与えていた。男性のみに影響を与えていた結果について、男性は買物行動の日常性のレベルが相対的に低く、日々の買物行動における内的刺激によるというよりも、テレビ視聴などの外的刺激を受けることで行動するため、テレビ視聴時間が防災対策に影響を与えたと考えられる。NHK 放送文化研究所がおこなった「2010 年 国民生活時間調査」によると、女性の買物行動の行為者率が平日、休日とも 5 割前後であるのに対して、男性の行為者率は平日が約 2 割、休日が約 3 割にとどまっている（NHK 放送文化研究所 2011）。買物行動の行為者率が高い女性は、店舗で多種多様な商品を目にする機会が多く、買物行動に随伴してそれらの商品の情報を得ていると考えられる。例えば、防災週間で店舗に防災用品の特設売場が設置されると、店舗で防災用品を目にする機会が多くなり、商品情報をいち早く得ることができる。それにより、防災用品が必要となった時に、すぐに商品を買うことができる。買物行動の行為者率が高い女性は、買物行動による内的刺激によって行動し、対して男性は、テレビによる外的刺激によって行動するのではない

だろうか。そのため、男性についてのみ、テレビ視聴時間が防災対策に影響を与えたと考えられる。

次に仮説Ⅱについて、テレビ番組全体の視聴時間との関連を見ると、震災前後の平日および休日のテレビ視聴時間の変化は、男女ともに防災対策着手度に影響を与えていないことが分かった。一方、テレビ番組ジャンル別の視聴時間の結果を見ると、女性についてのみ、震災 1 カ月後に報道番組、ワイドショーなどの情報番組、音楽番組の視聴時間が増えた場合に、防災対策着手度が高くなっており、逆に、娯楽番組の視聴時間が増えた人は、防災対策着手度は低くなっていた。報道番組、ワイドショーなどの情報番組が増えた人は、災害に対する危機意識が啓発され、防災対策の着手が高くなったと推測できる。音楽番組について見ると、復興支援の音楽番組が震災後の 3 月 20 日～4 月 30 日の間に 15 番組と、多く放送されていた。音楽番組の視聴時間が増えたという人は、その放送を視聴していたのではないだろうか。それにより、災害や防災に対する関心が高まり、防災対策着手度が高くなったということが理由のひとつとして考えられる。対して、娯楽番組についていえば、テレビ番組で被害状況が多く取り上げられ、刻々と伝えられる被害状況のあまりの悲惨さにそれを直視できない人は、意識的に災害情報を遮断し、日常への回帰をはかろうとして、娯楽番組の視聴が増えたのではないだろうか。意識的に災害情報を遮断し、災害や防災について考えることを拒否した結果が、防災対策着手度の低さとなって現れたと考えられる。番組ジャンル別の視聴時間の変化が、女性のみに影響を与えていた結果については、女性は日常的に買物行動をしているため、刺激に対する反応時間が短く、テレビ番組により、災害に対する危機意識が啓発されて、すぐに防災行動ができるのではないだろうか。そのため、防災対策に影響を与えたと考えられる。

第8章 被災経験と災害時の行動抑制

A92030 田村 渉

8. 1 問題意識

2011年3月11日に発生した「東日本大震災」では、住民に情報がしっかり行き渡らなかったこと、また、防波堤があるから津波がきても被害はそこまで大きくならないだろうといった思い込みが人々にあったことが、被害を大きくしてしまった1つの要因であると考えられる。今回の大震災だけでなく、これまでに起こった災害においても、人々の思い込みのせいで人々の行動が抑制され、被害が甚大になってしまった例は少なくないと考えられる。こういった思い込みのことを「正常化の偏見」という。

「正常化の偏見」とは、災害心理学の概念のひとつで、現在の状況の深刻さを過小評価し、自分が被害を受ける可能性はないだろうと思込む現象のことである（福田ほか2000）。言い換えれば、災害や大規模な事故などに遭遇する人が、周囲の環境が突然大きく変化したとしても「たいしたことにはならないはずだ」、「自分だけは大丈夫なはずだ」と思込むとする自己防衛的心理が発生する現象である（福田・関谷 2005）。

私は、自分だけは大丈夫という考えや思い込みといった、いわゆる「正常化の偏見」が人々の防災意識を低下させているのではないかと考える。では、人はなぜ「自分だけは大丈夫」という思い込みをしてしまうのか。

福田・関谷（2005）は、「災害時における避難行動を促進させる要因の1つとして、住民の中に適度な不安感が発生する必要がある。この不安感の発生を阻害する要因となるのが、1）正常化の偏見、2）未経験・未体験、3）経験の逆機能の3つである」と述べている。「経験の逆機能」とは、これまで経験してきた事柄が逆効果となることである。例えば、ギャンブル等におけるビギナーズラックは、初心者にもかかわらずツキに恵まれることの総称であるが、一度ツキに恵まれ、勝てたことから、次も勝てるだろうと安易に大金をつぎ込むことなどがこれにあたる。

「自分だけは大丈夫」という「正常化の偏見」とは、自分の身に及ぶ危機に対する楽観視のことだということができ、「未経験・未体験」、「経験の逆機能」は、以下のように「正常化の偏見」にかかわってくるのではないかと考える。

1) 未経験・未体験 → 正常化の偏見

災害を経験したことがない場合、人はその災害の発生する確率を低く見積もってしまう。その結果、自分はその災害の被害にはあわないという考え（正常化の偏見）を引き起こす。

2) 経験の逆機能 → 正常化の偏見

R. K. マートン（1957）によれば、「機能とは、一定の体系ないし調整を促す観察結果であり、逆機能とは、一定の体系の適応ないし調整を減ずる観察結果のことである」（Merton

1957=1969:102)。

マートンの定義から災害を例に機能・逆機能を説明すると、被災経験の機能とは、災害・危険に直面した場合、安易に対処可能だと考えないことであり、逆機能とは、災害・危険に対処可能だと安易に考えることである。つまり逆機能とは、ここでは、一度災害を経験しているから、自分の対処能力を過信し、大したことはない・回避できると考えてしまうこと（一度経験した災害が再び発生する確率が高いと考えても、自分の身に及ぶ危険性は低いと考えること）である。

福田・関谷は、未経験・未体験、経験の逆機能、正常化の偏見を並列的にとらえていたが、私は未経験・未体験および、経験の逆機能は、正常化の偏見の発現を助長させるものではないかと考える。

そこで、以下のような仮説を立てた。

8. 2 仮説

- ・ 理論仮説 1…人は災害の経験の有無にかかわらず、正常化の偏見を起こす。
- ・ 理論仮説 2…災害を経験したことのない人が正常化の偏見を起こすのは、災害の発生確率を低く見積もるからである。
- ・ 理論仮説 3…災害の経験のある人が正常化の偏見を起こすのは、経験の逆機能による。

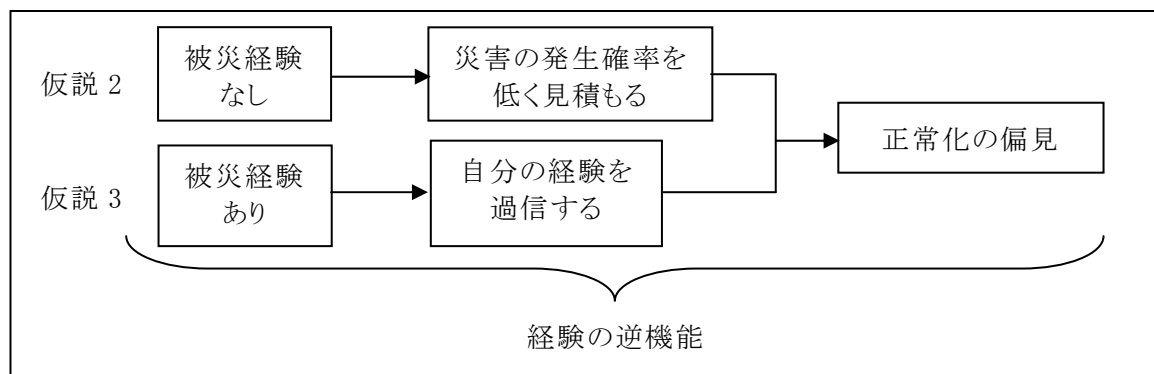


図8-1 仮説間の関連

8. 3 仮説検証に使用する質問項目の単純集計結果

(1) 問3A 「ヒヤッ」とした経験の有無（6項目）

本調査では、過去に災害の被害（人災・自然災害）にあったことがあるかどうかを次の6項目——すなわち「地震が発生したとき、家具が転倒してヒヤッとしたこと（以下、地震による家具の転倒）」「地震が発生したとき、ガラス窓や食器等が割れてヒヤッとしたこと（以下、地震によるガラス等の破損）」「車や自転車で走行中に事故を起こしそうになって、ヒヤッとしたこと（以下、自動車等の事故）」「火の不始末でヒヤッとしたこと（以下、火の不始末）」「雪道で転びそうになってヒヤッとしたこと（以下、雪道での転倒）」「台風や強風によって、自分の目の前に物が飛んできてヒヤッとしたこと（以下、強風による物

の飛来)」の 6 項目——について、「次のような経験をしたことがありますか」と 2 件法で質問した結果で把握した（巻末基礎集計表 問 3 参照）。

地震や強風等の自然災害によりヒヤッとした経験については全体的に「ない」と答えた人が 7～8 割と多く、また「火の不始末」も「ない」と答えた人が 7 割弱と多かった。逆に、「自動車等の事故」や「雪道での転倒」といった、自分の不注意で起こってしまうものは、経験が「ある」と答えた人のほうが 6 割前後と多かった。

（２） 問 3 B 「ヒヤッ」とする経験の予測（6 項目）

（１）と同様の 6 項目ごとに、今後被害にあう（ヒヤッとする経験の）確率の予測について、3 件法（「20%くらい」「50%くらい」「80%くらい」）で回答を求めた。「地震による家具の転倒」「地震によるガラス等の破損」「自動車等の事故」の項目に関しては、「50%くらい」と答えた人が 4～5 割強と多いが、「50%くらい」を頂点として「20%くらい」「80%くらい」と答えた人はほぼ均等に分布していた。一方、「火の不始末」「雪道での転倒」「強風による物の飛来」の項目に関しては、「50%くらい」と答えた人が約 4 割いるが、全体としてみれば「20%くらい」という回答の比重が大きかった。（巻末基礎集計表 問 3 参照）

（３） 問 4 危険が自身に及ぶ可能性（6 項目）

正常化の偏見については、次の 6 項目——すなわち「地震が発生したとき、家具の転倒によってケガをする可能性（以下、地震時の家具の転倒によるケガ）」「地震が発生したとき、ガラス窓や食器の破損によってケガをする可能性（以下、地震時のガラス等の破損によるケガ）」「車や自転車の事故で、ケガをする可能性（以下、自動車事故等によるケガ）」「自分の不注意で火事を起こしてしまう可能性（以下、不注意による出火）」「雪道で転んでしまう可能性（以下、雪道での転倒）」「台風や強風のとき、落下物や飛来物によってケガをする可能性（以下、落下物・飛来物によるケガ）」の 6 項目——ごとに、その可能性がどのくらいあると思うかを 4 件法で回答を求めた。「あると思う」と「どちらかといえばあると思う」を合わせてみると、ほとんどの項目に関して、半数以上が、危険が及ぶ可能性があると思うと回答した。「不注意による出火」の項目に関してのみ、半数以上が「ないと思う」もしくは「どちらかといえばないと思う」と回答した。（巻末基礎集計表 問 4 参照）

（４） 問 6 危険に対する対処（1 項目）

「あなたは、人災・自然災害を問わず、自分の身に危険が及びそうになったとき、うまく対処できると思いますか」という質問によって、危険に対する対処について回答を求めた結果、「できると思う」と「どちらかといえばできると思う」の 2 つで半数以上を占めており、危険が迫ったとしても対処できると考えている人が多いということがわかった（巻

末基礎集計表 問 6 参照)。災害経験があるにもかかわらず自分だけは大丈夫、対処できると考えているのであれば、経験の逆機能が起きていると判断できるが、図 1 に示したとおり、対処に関する変数は、その逆機能が起こる過程を説明する要因としてここでは位置づけている。

8. 4 仮説の検証

(1) 仮説 1 「人は災害の経験の有無にかかわらず、正常化の偏見を起こす」の検証

① 仮説検証のための予備的手続き

表 8-1 は、仮説 1 の検証を行うために、「ヒヤッとした経験の有無」を独立変数とし、「危険が自身に及ぶ可能性」を従属変数としてクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果である。なお、「危険が自身に及ぶ可能性」に関しては、「あると思う」「どちらかといえばあると思う」を「あると思う」、「ないと思う」「どちらかといえはないと思う」を「ないと思う」とカテゴリー統合してある。

表 8-1 「ヒヤッ」とした経験の有無とその危険が自身に及ぶ可能性

		あると思う	ないと思う	計		χ^2 値	p 値
						単位:%	
a	地震が発生したとき、家具が転倒してヒヤッとしたこと	経験がある	82.2	17.8	100.0 73人	8.554	p=0.0034
		経験がない	64.4	35.6	100.0 312人		
b	地震が発生したとき、ガラス窓や食器等が割れてヒヤッとしたこと	経験がある	86.0	14.0	100.0 107人	10.213	p=0.0014
		経験がない	70.1	29.9	100.0 278人		
c	車や自転車で走行中に事故を起こしそうになって、ヒヤッとしたこと	経験がある	83.7	16.3	100.0 227人	53.331	p<0.0001
		経験がない	48.7	51.3	100.0 156人		
d	火の不始末でヒヤッとしたこと	経験がある	54.3	45.7	100.0 116人	38.065	p<0.0001
		経験がない	22.3	77.7	100.0 265人		
e	雪道で転びそうになってヒヤッとしたこと	経験がある	79.3	20.7	100.0 237人	107.593	p<0.0001
		経験がない	25.5	74.5	100.0 145人		
f	台風や強風によって、自分の目の前に物が飛んできてヒヤッとしたこと	経験がある	83.3	16.7	100.0 72人	32.473	p<0.0001
		経験がない	46.2	53.9	100.0 312人		

② 仮説の検証

表 8-1 によると、「ヒヤッ」とした経験の有無別にみた「危険が自身に及ぶ可能性」は、「c 自動車等の事故」「d 火の不始末」「e 雪道での転倒」「f 強風による物の飛来」の項目に 0.1%水準、「a 地震による家具の転倒」「b 地震によるガラス窓等の破損」に 1%水準で有意な差がみられた。ヒヤッとした経験がある人ほどその危険が自身に及ぶ可能性は高いと考え、経験がない人ほどその危険が自身に及ぶ可能性は低いと考えていることがわかった。つまり、正常化の偏見を起こすのは被災経験の有無別に異なる傾向を示し、この限りにおいては仮説 1 は成立しなかったといえる。

個々の項目ごとにみると「地震」に関する 2 項目においては、「東日本大震災」の約半年後に行われた調査であったためか、経験の「ある」、「ない」により差があるとはいえ、両者の場合とも危険が自身に及ぶ可能性を高く見積もっていた。逆に「e 雪道での転倒」の項目においては、経験の有無別の差が大きく、経験があると危険が自身に及ぶ可能性は

高いと考え、経験がないとその可能性は低いと考える傾向が顕著であった。「c 自動車等の事故」「f 強風による物の飛来」の項目においても、全体としては同様の傾向が認められた。

「d 火の不始末」の項目においても大勢としては同様の結果ではあるが、他の項目に比べると、経験があっても、危険が自身に及ぶ可能性は「ないと思う」と考える人が半数近くいた。

前に述べたように、正常化の偏見とは、災害や大規模な事故などに遭遇する人が、周囲の環境が突然大きく変化したとしても「たいしたことにはならないはずだ」、「自分だけは大丈夫なはずだ」と思い込もうとする自己防衛的心理が発生する現象のことであるが、「d 火の不始末」については、経験の有無別に差があるとはいえ、総体として、「c 自動車等の事故」「e 雪道での転倒」「f 強風による物の飛来」については「経験がない」人の場合、正常化の偏見の傾向が明確に認められる結果である。

（２） 仮説２「災害を経験したことのない人が正常化の偏見を起こすのは、災害の発生確率を低く見積もるからである」の検証

① 「ヒヤッ」とした経験（被災経験）がない人の経験の予測分布

表８－２は仮説２の検証の手続きとして、被災経験の有無による災害の発生予測の分布をみるために、「ヒヤッとした経験の有無」を独立変数とし、「ヒヤッとする経験の予測」を従属変数としてクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果である。

表８－２ 「ヒヤッ」とした経験の有無と「ヒヤッ」とする経験の予測

							単位：%	
		20%くらい	50%くらい	80%くらい	計	χ^2 値	p値	
a	地震が発生したとき、家具が転倒してヒヤッとしたこと	経験がある	18.8	44.9	36.2	100.0	69人	13.498 p=0.001
		経験がない	30.4	52.7	16.9	100.0	296人	
b	地震が発生したとき、ガラス窓や食器等が割れてヒヤッとしたこと	経験がある	11.7	44.7	43.7	100.0	103人	23.718 p<0.0001
		経験がない	30.2	48.5	21.3	100.0	258人	
c	車や自転車で走行中に事故を起こそうになって、ヒヤッとしたこと	経験がある	25.1	43.5	31.4	100.0	223人	34.558 p<0.0001
		経験がない	49.6	41.7	8.6	100.0	139人	
d	火の不始末でヒヤッとしたこと	経験がある	33.3	50.4	16.2	100.0	117人	28.344 p<0.0001
		経験がない	60.2	35.3	4.6	100.0	241人	
e	雪道で転びそうになってヒヤッとしたこと	経験がある	26.2	44.5	29.3	100.0	229人	77.190 p<0.0001
		経験がない	72.0	25.6	2.4	100.0	125人	
f	台風や強風によって、自分の目の前に物が飛んできてヒヤッとしたこと	経験がある	20.6	51.5	27.9	100.0	68人	26.085 p<0.0001
		経験がない	48.1	42.9	9.1	100.0	287人	

「d 火の不始末」の項目を除く全ての項目において、「ヒヤッ」とした経験がある場合、今後同じような経験をする確率を「50%くらい」もしくは「80%くらい」と高く見積もっていた。経験がない場合についてみると、地震の項目においては「50%くらい」「80%くらい」と高く見積もる人が多かったが、「c 自動車等の事故」「d 火の不始末」「e 雪道での転倒」「f 強風による物の飛来」の項目においては、「20%くらい」と低く見積もる人が多かった。中でも「d 火の不始末」と「e 雪道での転倒」の項目については「20%くらい」という回答だけで半数以上を占めており、経験がない場合、大多数の人が今後、当該経験

をする確率を低く見積もっていることがわかる。

②「ヒヤッ」とした経験の有無とその予測および危険が自身に及ぶ可能性のクロス集計

表8-3のa～fは、仮説2の検証を行うために、「ヒヤッとした経験」の有無別に、「ヒヤッとする経験の予測」を独立変数とし、「危険が自身に及ぶ可能性」を従属変数としてそれぞれ項目別にクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果である。なお、「危険が自身に及ぶ可能性」については、表8-1と同様にカテゴリー統合を行っている。

a、bは、経験がない場合に0.1%水準で有意な関連がみられた。aの「地震による家具の転倒」では、経験がない者についてみると、今後経験する確率を「20%くらい」と低く見積もっている人は、危険が自身に及ぶ可能性がないと考える人が3分の2近くを占めていた。またbの「地震によるガラス等の破損」では、被災経験がない場合、今後経験する可能性を「20%くらい」と低く見積もっている人は、ケガをする可能性はないと判断する人が約6割と多かった。被災経験がある場合については、aの「地震による家具の転倒」では判断できないが、bの「地震によるガラス等の破損」では、「ヒヤッ」とする経験の有無と危険が自身に及ぶ可能性の2つには関連がなかった。結果として、「地震」に関する2項目においては仮説が成立する可能性が高いといつてよい。

表8-3 被災経験の有無別にみる「ヒヤッ」とした経験の予測と危険が自身に及ぶ可能性との関連

a 地震による家具の転倒							単位:%	b 地震によるガラス等の破損							単位:%														
「ヒヤッ」とする 危険が自身に及ぶ可能性								「ヒヤッ」とする 危険が自身に及ぶ可能性																					
経験の予測		あると思う	ないと思う	計	χ^2 値	p値		経験の予測		あると思う	ないと思う	計	χ^2 値	p値															
経験がある	20%くらい	76.9	23.1	100.0	13人	2.408	p=0.30	経験がある	20%くらい	66.7	33.3	100.0	12人	4.712	p=0.095														
	50%くらい	77.4	22.6	100.0	31人				50%くらい	87.0	13.0	100.0	46人																
	80%くらい	92.0	8.0	100.0	25人				80%くらい	90.9	9.1	100.0	44人																
経験がない	20%くらい	36.7	63.3	100.0	90人	52.740	p<0.0001	経験がない	20%くらい	40.3	59.7	100.0	77人	53.351	p<0.0001														
	50%くらい	77.4	22.6	100.0	155人				50%くらい	83.1	16.9	100.0	124人																
	80%くらい	86.0	14.0	100.0	50人				80%くらい	89.1	10.9	100.0	55人																
注)「経験がある」の場合、セルの33%において期待度数が5より小さくなっているため、 χ^2 検定は妥当ではなかった。																													
c 自動車等の事故							単位:%	d 火の不始末							単位:%														
「ヒヤッ」とする 危険が自身に及ぶ可能性								「ヒヤッ」とする 危険が自身に及ぶ可能性																					
経験の予測		あると思う	ないと思う	計	χ^2 値	p値		経験の予測		あると思う	ないと思う	計	χ^2 値	p値															
経験がある	20%くらい	67.3	32.7	100.0	55人	20.171	p<0.0001	経験がある	20%くらい	29.7	70.3	100.0	37人	18.558	p<0.0001														
	50%くらい	83.3	16.7	100.0	96人				50%くらい	60.3	39.7	100.0	58人																
	80%くらい	97.1	2.9	100.0	70人				80%くらい	88.9	11.1	100.0	18人																
経験がない	20%くらい	33.3	66.7	100.0	69人	16.247	p=0.0003	経験がない	20%くらい	11.0	89.0	100.0	145人	33.746	p<0.0001														
	50%くらい	65.5	34.5	100.0	58人				50%くらい	38.8	61.2	100.0	85人																
	80%くらい	75.0	25.0	100.0	12人				80%くらい	63.6	36.4	100.0	11人																
e 雪道での転倒															単位:%	f 強風による物の飛来							単位:%						
「ヒヤッ」とする 危険が自身に及ぶ可能性								「ヒヤッ」とする 危険が自身に及ぶ可能性																					
経験の予測		あると思う	ないと思う	計	χ^2 値	p値		経験の予測		あると思う	ないと思う	計	χ^2 値	p値															
経験がある	20%くらい	55.9	44.1	100.0	59人	40.208	p<0.0001	経験がある	20%くらい	78.6	21.4	100.0	14人	0.189	p=0.910														
	50%くらい	83.2	16.8	100.0	101人				50%くらい	82.9	17.1	100.0	35人																
	80%くらい	100.0	0.0	100.0	67人				80%くらい	84.2	15.8	100.0	19人																
経験がない	20%くらい	16.7	83.3	100.0	90人	17.274	p=0.0002	経験がない	20%くらい	26.1	73.9	100.0	138人	62.352	p<0.0001														
	50%くらい	54.8	45.2	100.0	31人				50%くらい	63.4	36.6	100.0	123人																
	80%くらい	33.3	66.7	100.0	3人				80%くらい	96.2	3.9	100.0	26人																
注)「経験がない」の場合、セルの33%において期待度数が5より小さくなっているため、 χ^2 検定は妥当ではなかった。															注)「経験がある」の場合、セルの33%において期待度数が5より小さくなっているため、 χ^2 検定は妥当ではなかった。														

c の「自動車等の事故」、d の「火の不始末」は、経験がある、経験がないともに 0.1% 水準で有意な関連がみられた。「自動車等の事故」「火の不始末」いずれにおいても、災害経験がなく、今後経験する可能性を「20%くらい」と低く見積もっている場合、ケガをする可能性がないと考える傾向が顕著であった。また、災害経験がある場合も、今後経験する可能性を「20%くらい」と低く見積もっている人は、相対的に、ケガをする可能性がないと考えているといえる。災害経験がある場合、ない場合ともに、同様の傾向が認められたのである。結果として、「自動車等の事故」「火の不始末」に関する項目においては、仮説は成立しなかった。

e では経験がある場合にのみ、f では経験がない場合にのみ 0.1%水準で有意な関連がみられた。e の「雪道での転倒」では、経験がある者についてしか判断できないが、当該の者についてみると、今後経験する確率を「20%くらい」と低く見積もっている人は、相対的に、ケガをする可能性がないと考える人が多かった。仮説とは逆に、経験がある場合にのみ経験の予測と危険が自身に及ぶ可能性との関連が認められたという結果であり、「雪道での転倒」の項目に関しては、仮説は成立しなかったといえる。

f の「強風による物の飛来」では、経験がない者についてしか判断できないが、当該の者についてみると、今後同じような経験をする確率を「20%くらい」と低く見積もっている場合、飛来物によりケガをする可能性がないと考えている人が約 7 割と多かった。よって、「強風による物の飛来」の項目においては、仮説が成立する可能性が示唆された。

③ 仮説の検証

以上のことから、「地震による家具の転倒」「地震によるガラス等の破損」の地震に関する項目や、「強風による物の飛来」といった自然災害を要因とするものにおいては仮説が成立する可能性が高いといえるが、「自動車等の事故」「火の不始末」「雪道での転倒」といった人為的な災害においては、仮説は成立しないことがわかった。自然災害は、ニュース等で発生した際の情報は得られるが、経験したことがなければどの程度の被害があるのか判断がつかない、また、頻繁に発生するものではないため、経験しない限りその災害に対する恐怖心がないといったことが、経験の予測を低く見積もることをとおして正常化の偏見の発生を促進していると考ええる。他方、人為的な災害においては、経験したことがある場合もない場合も、今後の経験確率を低く見積もる人ほど危険が自身に及ぶ可能性はないと考える人が多かった。人為的な災害は、不可抗力な傾向の強い自然災害と違い、自分自身が気をつければ起こりにくいと考えられがちな災害であり、経験がない場合のみならず、たとえ一度経験していても同じ経験はもう繰り返さないと考えることが、経験の予測を低く見積もることをとおして正常化の偏見をもたらす結果となった要因であると考ええる。よって仮説 2 が成立したりしなかったりするの経験の質によるものであると推測する。

(3) 仮説3「災害の経験のある人が正常化の偏見を起こすのは、経験の逆機能による」の検証

①「ヒヤッ」とした経験の有無と危機に対する対処およびその危険が自身に及ぶ可能性のクロス集計

表8-4のa～fは仮説3の検証を行うために、「ヒヤッとした経験」の有無別に、「危険に対する対処」を独立変数とし、「危険が自身に及ぶ可能性」を従属変数としてクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果である。

表8-4 ヒヤッとした経験の有無別にみる危険に対する対処と危険が自身に及ぶ可能性との関連

a 地震による家具の転倒							単位:%	b 地震によるガラス等の破損							単位:%
	危機に対する 危険が自身に及ぶ可能性		計	χ^2 値	p値				危機に対する 危険が自身に及ぶ可能性		計	χ^2 値	p値		
	対処	あると思う							ないと思う	対処					
経験がある	できると思う	78.4	21.6	100.0	51人	1.635	p=0.201		できると思う	82.9	17.1	100.0	70人	1.639	p=0.200
	できないと思う	90.9	9.1	100.0	22人				できないと思う	91.9	8.1	100.0	37人		
経験がない	できると思う	57.8	42.2	100.0	192人	9.602	p=0.002		できると思う	64.1	35.9	100.0	170人	7.824	P=0.005
	できないと思う	75.2	24.8	100.0	117人				できないと思う	80.0	20.0	100.0	105人		
注)「経験がある」の場合、セルの25%において期待度数が5より小さくなっているため、 χ^2 検定は妥当ではなかった。															
c 自動車等の事故							単位:%	d 火の不始末							単位:%
	危機に対する 危険が自身に及ぶ可能性		計	χ^2 値	p値				危機に対する 危険が自身に及ぶ可能性		計	χ^2 値	p値		
	対処	あると思う							ないと思う	対処					
経験がある	できると思う	80.0	20.0	100.0	135人	3.224	p=0.073		できると思う	46.3	53.7	100.0	67人	4.697	p=0.030
	できないと思う	89.0	11.0	100.0	91人				できないと思う	66.7	33.3	100.0	48人		
経験がない	できると思う	46.2	53.8	100.0	106人	0.834	p=0.361		できると思う	18.6	81.4	100.0	172人	3.439	p=0.064
	できないと思う	54.2	45.8	100.0	48人				できないと思う	28.6	71.4	100.0	91人		
e 雪道での転倒							単位:%	f 強風による物の飛来							単位:%
	危機に対する 危険が自身に及ぶ可能性		計	χ^2 値	p値				危機に対する 危険が自身に及ぶ可能性		計	χ^2 値	p値		
	対処	あると思う							ないと思う	対処					
経験がある	できると思う	74.5	25.6	100.0	137人	4.700	p=0.030		できると思う	71.8	28.2	100.0	39人	7.872	p=0.005
	できないと思う	86.0	14.0	100.0	100人				できないと思う	96.9	3.1	100.0	32人		
経験がない	できると思う	25.5	74.5	100.0	102人	0.027	p=0.869		できると思う	39.3	60.7	100.0	201人	11.743	p=0.0006
	できないと思う	26.8	73.2	100.0	41人				できないと思う	59.6	40.4	100.0	109人		

a、b では、ヒヤッとした経験がない場合に 1%水準で有意な関連がみられた。「a 地震による家具の転倒」については、経験がない者でしか判断できないが、経験がない者についてみると、自身に危機が及びそうになったとき対処できると考えている場合、相対的には、ケガをする可能性がないと考えていた。また「b 地震によるガラス等の破損」についても、a と同じような結果であり、「経験がある」場合については、危機に対する対処と危険が自身に及ぶ可能性の 2 変数には関連がなかったが、「経験がない」場合は、対処可能と考える者に、ケガをする可能性はないと考える者が相対的に多かった。しかしながら、a、b では、ヒヤッとした「経験がある」と答えた場合には統計的に有意な結果が得られなかったことから、地震に関する項目においては、仮説のとおりではないということがいえる。

c では、経験が「ある」、「ない」とともに 5%水準では有意な関連はみられなかった。d は経験がある場合に 5%水準で有意な差がみられた。

cの「自動車等の事故」では、「経験がある」の場合について、10%水準で有意差をみたところ、自身に危険が及びそうになったとき対処できると考えている場合、ケガをする可能性がないと考えている人が約2割いた。よって「自動車等の事故」に関する項目においては、10%水準でみる限り、仮説が成立する可能性が高いといえる。

dの「火の不始末」については、火の不始末でヒヤッとしたことがあり、自身に危険が及びそうになったとき対処できると考えている場合、ケガをする可能性がないと考えている人が5割強いた。よって、「火の不始末」の項目に関しては、仮説が成立したといえてよい。

eは、経験がある場合に5%水準、fは、経験がある場合に1%水準、経験がない場合に0.1%水準で有意な関連がみられた。eの「雪道での転倒」については、経験がある場合、危険への対処可能性があると考える者のうち、危険が自身に及ぶ可能性はないと考える者は2割台半ばと、「火の不始末」の項目に比べるとやや少ないが、似たような結果になった。仮説の通りであるといえる。fの「強風による物の飛来」は、経験がある場合もない場合も、自身に危機が及びそうになったとき対処できると考えている場合、ケガをする可能性がないと考えている人が多かった。よって、「強風による物の飛来」に関する項目においては、仮説の通りではないということがいえる。

② 仮説の検証

以上のことから、「自動車等の事故」「火の不始末」「雪道での転倒」といった人為的な災害においては、仮説の通りに経験の逆機能がみられたが、「地震による家具の転倒」「地震によるガラス等の破損」の地震に関する項目や、「強風による物の飛来」といった自然災害を要因とする項目においては仮説の通りではないということがわかった。

人為的な災害においては、一度経験しているからこそ、次に同じ被害に遭いそうになったときは対処できるといった考え（経験の逆機能）によって、ケガをする可能性をないと考ええる傾向にあった。特にこの傾向は、「火の不始末」の項目に顕著に認められた。「火の不始末」は、「自動車等の事故」や「雪道での転倒」に比べると他の要因の介入が比較的少ないなど、自分さえ注意していれば何とかなるという考えに陥りやすく、このような差がでたのではないかと考える。

対して自然災害である「地震」の2項目に関しては、被災経験がある場合の、危険に対する対処と危険が自身に及ぶ可能性の2変数に関連が見られず、「強風による物の飛来」の項目に関しては、経験のある、なしともに2変数に関連がみられたため、被災経験の過信が特殊に正常化の偏見に結びつくとはいえなかった。「強風による物の飛来」と、「地震」に関する2項目との関連のパターンの違いに限定していえば、前者の項目に関しては、後者の2項目に比べると、強風の中を歩くという自覚的な行動により、ある程度被害の予測がつくことや、不可抗力的な要素が弱く、自分さえ気をつけていればなんとかかなりそうだ

と考えられてしまうことが、その違いとなって現れていると考えられる。

よって仮説 3 も、経験の質によるところが大きいと推測する。

8. 5 考察

仮説すべてにおいて、ヒヤッとした経験の質、すなわち経験した災害の質によるところが大きいということがわかった。

仮説 1「人は災害の経験の有無にかかわらず、正常化の偏見を起こす」に関しては、相対的にせよ、災害経験がなければ正常化の偏見を起こしており、経験していれば、正常化の偏見が抑制されるという結果になった。この傾向はとくに「自動車等の事故」「火の不始末」「強風によるものの飛来」の項目で顕著であった。

仮説 2、仮説 3 においては、それぞれ自然災害と人為的な災害という、経験した災害の質が関係しているという結果になった。自然災害は、たとえ気をつけていたとしても、人々にとって不可抗力的な要素が強いということがその特徴として挙げられる。対して人為的な災害は、例外はあるものの、人々の意図を越えて発生する自然災害に比べると、自分さえ気をつけていれば、発生自体をある程度防ぐことができるという特徴がある。

仮説 2「災害を経験したことの無い人が正常化の偏見を起こすのは、災害の発生確率を低く見積もるからである」に関しては、自然発生的な災害の場合においては仮説の通りであったが、人為的な災害においては仮説の通りではなかったといえる。自然災害は規模の予測が難しいこと、ニュース等で地震による被害等の報道を見たとしても、身近で起きていることではないため現実味がないことが、仮説の通りになった要因なのではないかと考える。対して人為的な災害は、比較的身近なもの、日常的に使用しているものが要因となっていることが多く、経験のあり、なしにかかわらず自分さえ気をつけていれば大丈夫という考えに至ってしまうことが、仮説の通りでなかった要因なのではないかと考える。

仮説 3「災害の経験のある人が正常化の偏見を起こすのは、経験の逆機能による」に関しては、人為的な災害においては仮説の通りであるといえるが、自然災害においては仮説の通りではなかった。人為的な災害は、自然災害に比べると、自分の不注意が災害の発生に占める比重が高いということがあるため、一度経験することにより次は大丈夫という考えになりやすく、経験の逆機能として正常化の偏見を起こしやすいと考えられる。対して自然災害、特に「地震」の 2 項目においては、不可抗力的な要素が強いため、たとえ経験があったとしても、「自分だけは大丈夫」という考えに至らないのではないかと考える。また、「強風による物の飛来」の項目に関しては、突然発生する災害ではないため、地震等と比較すると、自分さえ気をつけていれば大丈夫という考えになりやすい傾向にあることが、経験が「ある」場合のみならず、「なし」の場合においても、対処の可能性を過信し、正常化の偏見を起こしやすい結果につながったと思われる。

先行研究において、福田・関谷（2005）は、不安感の発生を阻害する要因として「正常

化の偏見」「未経験・未体験」「経験の逆機能」の 3 つを並列的にとらえていたが、私は「正常化の偏見」を発生させる要因として「未経験・未体験」「経験の逆機能」の 2 つがかかわってくるものであると考えた。そして検証の結果、これらの 3 つの項目の関連は、経験した災害の内容、質に密接にかかわってくるものであることがわかった。またこのことにより、先行研究の内容も、経験した災害の内容、質にかかわってくるのではないかと推測した。

第9章 災害不安と防災対策取り組み度とのズレの考察

——性格特性の観点から——

A92027 佐藤朱里

9. 1 問題意識と仮説

9. 1. 1 問題意識

私たちは、予期せぬ災害に備えて防災対策に取り組んでいる。その取り組みを行うのは、災害に対する不安を持っているからだと考える。災害に対する不安が高ければ、それに応じた防災対策の取り組みを行うことが一般的である。また、災害に対する不安がないのであれば、防災対策の取り組みは行わないだろう。しかし、災害に対する不安が高いはずなのに、それに応じた防災対策の取り組みを行わないということもある。この「ズレ」が起こるはなぜか。私はその「ズレ」について、人々の「性格」と関係があるのではないかと考えた。「性格」との関係性を調べるために、人々の「性格」をビッグファイブと呼ばれている5つの要素で見ていくことにした。ビッグファイブとは、性格を5つの因子の組み合わせから説明しようとする考え方のことである。ビッグファイブのそれぞれの因子の命名は、研究者によって表記の仕方が様々だが、一定の意見の一致はある。そのことを踏まえた上で、今回は、基本的に村上宣寛・村上千恵子（村上・村上 2001）が命名した「外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性」を用いる。それぞれの要素の特徴は、村上・村上によれば下記のとおりである。

- ① 外向性とは、にぎやかで、元気がよく、話好き、勇敢で、冒険的、積極的な性格である。逆の場合は、おとなしく、無口で、引っ込み思案、臆病で、不活発な性格である。
- ② 協調性とは、温かく、誰にでも親切的、愉快で、人情のあつ、気前のよい、協調性の高い性格である。逆の場合は、不親切で、冷たく、利己的、疑い深い、非協力的な、協調性に欠ける性格である。
- ③ 勤勉性とは、責任感があって、仕事や勉強に良心的、精力的に取り組む、勤勉な性格である。逆の場合は、物事への取り組みが中途半端で、根気がなく、気まぐれで、浪費癖がある、無責任で、いい加減な性格である。
- ④ 情緒安定性とは、気分が安定していて、不平不満がなく、気楽で、嫉妬深くない、理性的な性格である。逆の場合は、気分が不安定で、悩みやすく、神経質で、嫉妬深く、感情的になったり、怒りっぽい性格である。
- ⑤ 知性とは、好奇心があって、知識の範囲が広く、物事を分析したり、考えたりする、思慮深い、創造的、知性的な性格である。逆の場合は、好奇心に乏しく、物

事を分析するのが苦手で、頭がすぐに混乱しやすい、知性に乏しい、素朴で、洗練されていない性格である。

(村上・村上 2001: 77-8)

以後、①の要素を〈外向－内向〉、②の要素を〈協調－排他〉、③の要素を〈勤勉－怠惰〉、④の要素を〈理性－感情〉、⑤の要素を〈知性－非知性〉と記す。

私は、上で記述した①から⑤の要素のうち、災害不安と防災対策の取り組み度との「ズレ」をもたらす性格特性として、①〈外向－内向〉、③〈勤勉－怠惰〉、④〈理性－感情〉の3つの要素の後者の特性に注目した。

その理由として以下のようなことを考えた。「内向」という特性は「おとなしく、無口で、引っ込み思案、臆病で、不活発な性格」である。この特性に当てはまる人は、ちょっとしたことにも怖がったり、しりごみをしてしまうために不安の高まりが強いのではないかと考えられる。また、行動力や積極性が低い可能性があり、災害に対する不安はあるものの防災対策の取り組みが十分に行えていないのではないかと考えられる。「怠惰」という特性は「物事への取り組みが中途半端で、根気がなく、気まぐれで、浪費癖がある、無責任で、いい加減な性格」である。この特性に当てはまる人は、考えや方針を貫き通すことが苦手なために不安を煽られるのではないかと考えられる。その一方、物事の継続が苦手で、気分一つで行動にうつすが中途半端になる可能性があり、行動が成果に結びつかない場合が考えられる。「感情」という特性は「気分が不安定で、悩みやすく、神経質で、嫉妬深く、感情的になったり、怒りっぽい性格」である。この特性に当てはまる人は、些細なことばかりに気を使い、なおかつ悩みやすい気質なので、不安の高まりが強いのではないかと考えられる。情緒が不安定になりがちで、思考回路ができあがらない可能性があり、災害に対する不安があっても、防災対策の取り組みは何をしたらよいのか悩んでしまい実行に移せないことがあると考えられる。以上「内向」、「怠惰」、「感情」という3つの特性が、災害に対する不安と防災対策の取り組み度の矛盾に関係しているのかを検証するために次のような仮説を立てた。

9. 1. 2 仮説

- I 〈外向－内向〉の観点からみると、「内向」の方が、災害に対する不安度は高いのに防災対策の取り組み度は低い。
- II 〈勤勉－怠惰〉の観点からみると、「怠惰」の方が、災害に対する不安度は高いのに防災対策の取り組み度は低い。
- III 〈理性－感情〉の観点からみると、「感情」の方が、災害に対する不安度は高いのに防災対策の取り組み度は低い。
- IV 〈協調－排他〉と〈知性－非知性〉は、災害に対する不安と防災対策の取り組み度の「ズレ」には関連しない。

9. 1. 3 仮説検証に使用する変数と単純集計結果

(1) 家庭内での被災に伴う不安

災害に対する不安について、「家庭内」に限定したのは、身近で起こる災害への不安について調べたかったからである。家庭内での被災に伴う不安を調べるために、「あなたは、次の a～j のような、家庭内で自分自身が経験するかもしれない災害について、どの程度の不安をもっていますか」という質問をし、「不安」「どちらかといえば不安」「どちらかといえば不安でない」「不安でない」の4件法で回答を求めた。単純集計の結果、選択肢「不安」の比率が、「水道が止まって、使えなくなること」51.7%、「通信がパンクして、連絡がつかなくなること」51.3%という順で高く、これらを含め、総じて、ライフラインの途絶にかかる項目の不安度が高かった。(巻末基礎集計表 問5 参照)

(2) 防災対策の取り組み度

防災対策の取り組み度を調べるために、「あなたは、現在、次の a～j のような災害の防災対策にどの程度取り組んでいますか」という質問をし、「十分だと思う」「どちらかといえば十分だと思う」「どちらかといえば不十分だと思う」「不十分だと思う」の4件法で回答を求めた。単純集計の結果、選択肢「十分だと思う」の比率が、「懐中電灯の準備」45.4%、次いで「携帯ラジオや携帯テレビの準備」28.0%という順で高かったが、それ以外の項目はすべて10%台であった。(巻末基礎集計表 問19 参照)

(3) 性格特性(独立変数)

表 9-1 性格特性の単純集計

		単位(%)					
特性		あてはまる	あどてちはらまかといえ	あどてちはらまかといえ	あてはまらない	計	
〈外向－内向〉	a おとなしい方だ	14.4	43.3	31.0	11.3	100.0	(381人)
	f 無口な方だ	9.8	25.6	39.8	24.8	100.0	(379人)
	k 引っ込み思案な方だ	8.2	30.1	38.8	23.0	100.0	(379人)
	q おくびょうな方だ	7.4	34.0	42.5	16.1	100.0	(379人)
	v 活発さに欠ける性格だ	3.7	24.8	44.6	26.9	100.0	(379人)
〈勤勉－怠惰〉	b 物事への取り組みが中途半端な方だ	10.1	32.3	38.9	18.8	100.0	(378人)
	g 根気がない方だ	5.8	19.5	46.2	28.5	100.0	(379人)
	m 気まぐれな方だ	7.9	23.8	44.1	24.3	100.0	(379人)
	r 浪費癖がある方だ	6.4	25.1	36.3	32.3	100.0	(375人)
	w 無責任な方だ	2.1	11.2	44.4	42.3	100.0	(376人)
〈知性－非知性〉	c 好奇心の乏しい方だ	4.8	17.2	51.1	27.0	100.0	(378人)
	h 物事を分析するのが苦手な方だ	5.8	22.4	43.7	28.2	100.0	(380人)
	n 頭がすぐ混乱しやすい方だ	5.0	18.7	46.6	29.7	100.0	(380人)
	s 知性に乏しい方だ	3.2	19.3	59.0	18.5	100.0	(378人)
	x 素朴で洗練されていない性格だ	3.5	26.9	50.1	19.5	100.0	(375人)
〈協調－排他〉	d 不親切な方だ	2.9	10.1	53.9	33.2	100.0	(377人)
	i 冷たい方だ	3.2	16.3	46.8	33.7	100.0	(380人)
	o 利己的な方だ	4.0	25.3	47.1	23.7	100.0	(376人)
	t 疑い深い方だ	9.5	24.9	47.4	18.3	100.0	(378人)
	y 協調性に欠ける性格だ	3.7	13.7	47.2	35.4	100.0	(379人)
〈理性－感情〉	e 気分が変わりやすい方だ	6.7	24.3	43.6	25.4	100.0	(374人)
	j くよくよする方だ	7.1	34.0	38.8	20.1	100.0	(379人)
	p 神経質な方だ	6.3	37.1	40.0	16.6	100.0	(380人)
	u 嫉妬深い方だ	5.1	16.0	52.9	26.1	100.0	(376人)
	z 怒りっぽい性格だ	7.1	27.2	41.2	24.5	100.0	(379人)

性格特性を調べるために、「あなたは、次の a～z のようなことにどの程度あてはまりますか」という質問をし、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で回答を求めた。この質問では、ビッグファイブと呼ばれる5つの要素（〈外向－内向〉、〈勤勉－怠惰〉、〈知性－非知性〉、〈協調－排他〉、〈理性－感情〉）を持った項目が配置されている。〈外向－内向〉を測る項目は「a おとなしい方だ」、「f 無口な方だ」、「k 引っ込み思案な方だ」、「q おくびょうな方だ」、「v 活発さに欠ける性格だ」の5項目である。〈勤勉－怠惰〉を測る項目は「b 物事への取り組みが中途半端な方だ」、「g 根気がない方だ」、「m 気まぐれな方だ」、「r 浪費癖がある方だ」、「w 無責任な方だ」の5項目である。〈知性－非知性〉を測る項目は「c 好奇心の乏しい方だ」、「h 物事を分析するのが苦手な方だ」、「n 頭がすぐ混乱しやすい方だ」、「s 知性に乏しい方だ」、「x 素朴で洗練されていない性格だ」の5項目である。〈協調－排他〉を測る項目は「d 不親切な方だ」、「i 冷たい方だ」、「o 利己的な方だ」、「t 疑い深い方だ」、「y 協調性に欠ける性格だ」の5項目である。〈理性－感情〉を測る項目は「e 気分が変わりやすい方だ」、「j くよくよする方だ」、「p 神経質な方だ」、「u 嫉妬深い方だ」、「z 怒りっぽい性格だ」の5項目である。

表9-1は、全25項目を要素ごとに並べ替えて作成した。単純集計の結果、総じて〈外向－内向〉は、相対的に「あてはまる」もしくは「どちらかといえばあてはまる」という比率が高い。〈勤勉－怠惰〉と〈協調－排他〉は「あてはまらない」の比率が高く、次いで〈知性－非知性〉〈理性－感情〉が「あてはまらない」傾向が強い。

9. 2 仮説の検証

9. 2. 1 仮説検証のための予備的手続き

災害不安と防災対策の取り組み度とのズレを明らかにするために、各質問項目の回答選択肢をスコア化し、合成変数の中央値を境に、それぞれ2グループに分けて作成した「災害不安」変数と「防災対策取り組み度」変数の組み合わせによって4つのグループを作成することにした。また、性格特性は各要素を測る5つの質問項目ごとに合成変数を作成することにした。

(1) 「災害不安」変数の作成

各項目の配点は「不安」を3点、「どちらかといえば不安」を2点、「どちらかといえば不安でない」を1点、「不安でない」を0点とした。計10項目を合成した最高得点は30点、最低得点は0点である。クロンバックの α 係数を算出した結果、0.89となった。10項目を用いて合成変数を作成することが妥当であると判断できたため、全項目を用いて「家庭内での被災に伴う不安」を表す合成変数「災害不安」変数を作成した。

(2) 「防災対策取り組み度」変数の作成

各項目の配点は「十分だと思う」を3点、「どちらかといえば十分だと思う」を2点、「どちらかといえば不十分だと思う」を1点、「不十分だと思う」を0点とした。計10項目を合成

した最高得点は30点、最低得点は0点である。クロンバックの α 係数を算出した結果、0.84 となった。10項目を用いて合成変数を作成することが妥当であると判断できたため、全項目を用いて防災対策の取り組み度を表す合成変数「防災対策取り組み度」変数を作成した。

(3) 「性格特性」変数の作成

各項目の配点は、「あてはまる」を0点、「どちらかといえばあてはまる」を1点、「どちらかといえばあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を3点とした。〈外向－内向〉、〈勤勉－怠惰〉〈知性－非知性〉〈協調－排他〉〈理性－感情〉それぞれ5項目ずつの最高得点は15点、最低得点は0点である。5つの要素ごとにクロンバックの α 係数を算出した結果、前記の順に0.78、0.74、0.71、0.75、0.75となった。5項目ごとに合成変数を作成することが妥当であると判断できたため、それぞれの「性格特性」を表す合成変数〈外向－内向〉変数、〈勤勉－怠惰〉変数、〈知性－非知性〉変数、〈協調－排他〉変数、〈理性－感情〉変数を作成した。得点が高い人ほど各要素の前者、得点が低い人ほど各要素の后者の傾向が強いことを表す。

(4) 「災害不安と防災対策取り組み度とのズレ」変数の暫定的作成

(1)、(2) で作成した「災害不安」変数と「防災対策取り組み度」変数の中央値を基準にそれぞれを2グループに分け、その組み合わせによって「1. 不安高い - 取組高い」「2. 不安高い - 取組低い」「3. 不安低い - 取組高い」「4. 不安低い - 取組低い」の4グループからなる「災害不安と防災対策取り組み度とのズレ」変数を作成した。グループごとに5つの性格特性変数の性格得点を求め、それぞれのグループ間に統計的に有意な差があるかどうかを分散分析によって確かめた。しかし中央値を基準とすると、各グループの回答実数が平準化されて少なくなるため、有意な差が認められなかった。

(5) 修正「災害不安と防災対策取り組み度とのズレ」変数の作成

そこで「災害不安」変数と「防災対策取り組み度」変数のレンジの真ん中の点15点を境にして、再度「1. 不安高い - 取組高い」「2. 不安高い - 取組低い」「3. 不安低い - 取組高い」「4. 不安低い - 取組低い」の4グループを編成した(表9-2)。

表9-2 災害に対する不安と防災対策の取り組み度のクロス集計
(全体パーセント)(n=393)

		単位 %	
		取り組み	
		高い	低い
不安	高い	44.3	39.4
	低い	7.9	8.4
計		52.2	47.8
		計	
		83.7	16.3
		100.0	

クロス集計の結果、「1. 不安高い - 取組高い」の割合が一番高かった。検証時に注目する項目の「2. 不安高い - 取組低い」の割合は全体の39.4%となった。レンジの真ん中の点を基準にすると、「災害不安」変数に関しては分布に偏りがあるが、不安が高い場合の防災対策取り組み度の分化に焦点を合わせ、仮説を提起しているので、課題適合的なグルー

ピングであると判断した。

9. 2. 2 災害不安と防災対策取り組み度とのズレの要因分析

(1) 仮説Ⅰ「〈外向－内向〉の観点から見ると、『内向』の方が、災害に対する不安度は高いのに防災対策の取り組み度は低い」の検証

表9-3は、仮説Ⅰの検証を行うために、「災害不安と防災対策取り組み度とのズレ」変数の4カテゴリーごとに〈外向－内向〉変数の平均値を求め、平均値の差の検定をするために分散分析を行った結果を表している。

表9-3 災害不安と防災対策取り組み度のズレ変数別にみる
〈外向－内向〉変数の平均値と分散分析結果

独立変数	N	平均	標準偏差
1. 不安高い - 取組高い	174	8.79885057	3.18772916
2. 不安高い - 取組低い	148	8.11486486	3.25873739
3. 不安低い - 取組高い	30	9.86666667	2.87358161
4. 不安低い - 取組低い	24	8.00000000	2.02162225
F値=3.33		p値=0.0198	*p<0.05

この表9-3によると、分散分析の結果は、F値が3.33、p値が0.0198で、「災害不安と防災対策取り組み度とのズレ」変数の有意な効果が示されている。TukeyのHSD法を用いて多重比較を行った結果、「2. 不安高い - 取組低い」と「3. 不安低い - 取組高い」の間に5%水準で有意差が示された。しかし「1. 不安高い - 取組高い」と「2. 不安高い - 取組低い」の間には有意差は示されなかった。不安が高くて取り組み度が低い人と不安が高くて取り組み度が高い人の間には有意差が示されなかったことから、仮説Ⅰは成立しなかった。

(2) 仮説Ⅱ「〈勤勉－怠惰〉の観点からみると、『怠惰』の方が、災害に対する不安度は高いのに防災対策の取り組み度は低い」の検証

表9-4は、仮説Ⅱの検証を行うために、「災害不安と防災対策取り組み度とのズレ」変数の4カテゴリーごとに〈勤勉－怠惰〉変数の平均値を求め、平均値の差の検定をするために分散分析を行った結果を表している。

表9-4 災害不安と防災対策取り組み度のズレ変数別にみる
〈勤勉－怠惰〉変数の平均値と分散分析結果

独立変数	N	平均	標準偏差
1. 不安高い - 取組高い	168	10.0714286	2.84019783
2. 不安高い - 取組低い	144	9.1111111	3.11349670
3. 不安低い - 取組高い	30	10.6333333	2.83431356
4. 不安低い - 取組低い	26	9.3076923	3.13393338
F値=3.90		p値=0.0092	*p<0.05

この表 9-4 によると、分散分析の結果は、F 値が 3.90、p 値が 0.0092 で、「災害不安と防災対策取り組み度とのズレ」変数の有意な効果が示されている。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、「1. 不安高い - 取組高い」と「2. 不安高い - 取組低い」の間に 5%水準で有意差が示された。不安が高くて取り組み度が低い人は、不安が高くて取り組み度が高い人に比して相対的に「怠惰」の傾向がみられた。このことから、仮説Ⅱは成立したといえる。

(3) 仮説Ⅲ「〈理性－感情〉の観点からみると、『感情』の方が、災害に対する不安度は高いのに防災対策の取り組み度は低い」の検証

表 9-5 は、仮説Ⅲの検証を行うために、「災害不安と防災対策取り組み度とのズレ」変数の 4 カテゴリーごとに〈理性－感情〉変数の平均値を求め、平均値の差の検定をするために分散分析を行った結果を表している。

表 9-5 災害不安と防災対策取り組み度のズレ変数別にみる
〈理性－感情〉変数の平均値と分散分析結果

独立変数	N	平均	標準偏差
1. 不安高い - 取組高い	173	9.50289017	2.85222124
2. 不安高い - 取組低い	142	8.44366197	3.21460463
3. 不安低い - 取組高い	30	9.80000000	2.42686118
4. 不安低い - 取組低い	24	8.91666667	2.58619524
F値=4.00		p値=0.0080	*p<0.05

この表 9-5 によると、分散分析の結果は、F 値が 4.00、p 値が 0.0080 で、「災害不安と防災対策取り組み度とのズレ」変数の有意な効果が示されている。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、「1. 不安高い - 取組高い」と「2. 不安高い - 取組低い」の間に 5%水準で有意差が示された。不安が高くて取り組み度が低い人は、不安が高くて取り組み度が高い人に比して相対的に「感情」の傾向がみられた。このことから、仮説Ⅲは成立したといえる。

(4) 仮説Ⅳ「〈知性－非知性〉と〈協調－排他〉は、災害に対する不安と防災対策の取り組み度の『ズレ』には関連しない」の検証

次頁の表 9-6 は、仮説Ⅳの検証のために、「災害不安と防災対策取り組み度とのズレ」変数の 4 カテゴリーごとに〈知性－非知性〉変数の平均値を求め、平均値の差の検定をするために分散分析を行った結果を表している。

この表 9-6 によると、分散分析の結果は、F 値が 5.62、p 値が 0.0009 で「災害不安と防災対策取り組み度とのズレ」変数の有意な効果が示されている。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、「1. 不安高い - 取組高い」と「2. 不安高い - 取組低い」の間に 5%水準で有意差が示された。不安が高くて取り組み度が低い人は、不安が高くて取り組み度が高い人に比して相対的に「非知性」の傾向がみられた。

表 9-6 災害不安と防災対策取り組み度のズレ変数別にみる
〈知性－非知性〉変数の平均値と分散分析結果

独立変数	N	平均	標準偏差
1. 不安高い - 取組高い	171	10.0701754	2.56349703
2. 不安高い - 取組低い	145	9.1241379	2.83794419
3. 不安低い - 取組高い	30	10.9333333	2.53163888
4. 不安低い - 取組低い	24	9.4583333	2.10546219
F値=5.62		p値=0.0009	*p<0.05

表 9-7 は、仮説Ⅳの検証のために、「災害不安と防災対策取り組み度とのズレ」変数の 4 カテゴリーごとに〈協調－排他〉変数の平均値を求め、平均値の差の検定をするために分散分析を行った結果を表している。

表 9-7 災害不安と防災対策取り組み度のズレ変数別にみる
〈協調－排他〉変数の平均値と分散分析結果

独立変数	N	平均	標準偏差
1. 不安高い - 取組高い	169	10.2307692	2.72335577
2. 不安高い - 取組低い	147	9.3061224	3.08023359
3. 不安低い - 取組高い	31	10.4516129	2.35001716
4. 不安低い - 取組低い	25	10.0000000	1.93649167
F値=3.38		p値=0.0183	*p<0.05

この表 9-7 によると、分散分析の結果は、F 値が 3.38、p 値が 0.0183 で「災害不安と防災対策取り組み度とのズレ」変数の有意な効果が示されている。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、「1. 不安高い - 取組高い」と「2. 不安高い - 取組低い」の間に 5%水準で有意差が示された。不安が高くて取り組み度が低い人は、不安が高くて取り組み度が高い人に比して相対的に「排他」の傾向がみられた。

以上の結果から、仮説Ⅳは成立しなかった。

9. 2. 3 考察

仮説Ⅰは成立しなかった。「内向」の傾向がある人は、行動力や積極性が低いから防災対策の取り組み度も低いのではないかと考えていた。しかし、おくびょうなところが何事も不安に思ってしまう心配性につながってくるのではないだろうか。心配性な一面を持っているから、その不安を解消するために防災対策の取り組みを行うのではないかと考えた。

仮説Ⅱは成立した。「怠惰」の傾向がある人が防災対策の取り組み度が低いのは、やはり物事の継続が苦手な中途半端な行いをする可能性があるからではないだろうかと思った。

仮説Ⅲも成立した。「感情」の傾向がある人が防災対策の取り組み度が低いのは、仮説通り情緒が不安定になりがちなことや、思考回路ができあがらず何の防災対策をしてよいか検討できないことによるのではないだろうかと思った。

仮説Ⅳは成立しなかった。〈知性－非知性〉の観点からみると、非知性の方が、災害に対

する不安度は高いのに防災対策の取り組み度は低いということがわかった。また、〈協調－排他〉の観点からみると、排他の方が、災害に対する不安度は高いのに防災対策の取り組み度は低いということがわかった。

「非知性」の傾向がある人は、物事に無関心で好奇心に乏しいため災害に対する不安を感じたり、防災対策の取り組みを行うということ自体希薄な可能性があると考え、災害に対する不安や防災対策の取り組み度の「ズレ」には関連しないと考えていた。しかし、仮説Ⅳが成立しなかったことから、「非知性」の傾向がある人は、不安を煽る災害について考えると頭が混乱して、防災対策の取り組みをやめてしまうのかもしれないと考えた。また、何事にも関心が抱けないから防災対策の取り組みに結びつかないのではないかと考えた。

〈協調性－排他〉は、対人関係に関する要素であるため、災害に対する不安と防災対策の取り組み度の「ズレ」には関連しないと考えていた。しかし、「排他」の傾向がある人は不親切で非協力的な分、一人で考え込む可能性があり、災害に対する不安も高まるのではないか。さらに、本当に防災対策をすれば災害を防げることが出来るのかどうかという疑い深さが防災対策の取り組み度を低くしたのではないかと考えた。

9. 3 補遺：職業と性格特性の関連について

9. 3. 1 問題意識

人が職業を選ぶとき、何を基準として職に就くのだろうか。もしかしたら、性格の特性によって、職業の選び方に何かしらの特徴があるのかもしれない。その人の内面的な部分が、職業を選ぶ基準となっている可能性を調べるために以下の仮説を立てた。

仮説 人は性格特性によって、職業の選択傾向が異なる。

仮説を検証していくために、各職業と本章で取り上げた性格特性の5つの要素別にスコアの平均を出した。表9-8は、職業別に性格特性の平均を求めた結果である。

表9-8 職業別の性格特性変数の平均値

	〈外向－内向〉	標準偏差	〈勤勉－怠惰〉	標準偏差	〈知性－非知性〉	標準偏差
1 専門・技術職	8.41	3.1948488	9.66	2.8969372	10.14	2.7105990
2 管理職	9.06	2.7921020	9.12	2.7812397	10.35	1.7656860
3 事務職	8.41	3.1765419	9.47	3.6814865	9.50	2.6988486
4 営業販売職	9.32	2.6794876	9.71	2.9350103	10.45	2.5397276
5 サービス職	8.29	3.3033612	9.38	3.0941425	9.15	2.8156791
6 保安職	6.67	1.1547005	6.67	2.8867513	7.00	1.0000000
7 農林漁業職	7.50	2.5166115	12.00	2.7080128	10.25	1.7078251
8 運輸・通信職	7.20	2.5733679	8.00	2.2110832	8.67	2.6457513
9 生産・労務職	8.00	1.7320508	9.00	1.7320508	7.67	2.3094011

	〈協調－排他〉	標準偏差	〈理性－感情〉	標準偏差
1 専門・技術職	8.96	3.0135747	8.65	2.6500866
2 管理職	9.82	1.9440709	9.06	2.5682355
3 事務職	9.00	2.9683010	8.08	3.4365268
4 営業販売職	10.41	2.7543747	10.14	1.9309509
5 サービス職	9.59	2.9662738	8.60	2.7437575
6 保安職	9.33	1.5275252	8.33	3.2145503
7 農林漁業職	11.00	2.9439203	10.50	4.0414519
8 運輸・通信職	8.56	2.5549516	8.11	2.2607767
9 生産・労務職	9.33	2.0816660	10.33	2.0816660

9. 3. 2 仮説検証のための予備的手続き

仮説を検証するために、職業を「1 専門・技術職」と「2 管理職」と「3 事務職」を合わせて「a 専門・管理・事務」とし、「4 営業販売職」と「5 サービス職」を合わせて「b 営業・サービス」、「6 保安職」と「8 運輸・通信職」と「9 生産・労務職」を合わせて「c 保安・運輸・生産」という 3 カテゴリーに分けて「職業別」変数を作成した。なお、この変数作成の際には表 9-8 中の「7 農林漁業職」は該当実数が少なく（巻末基礎集計表 問 30 参照）、かつ、前記のどのカテゴリーにも分類することが難しいために省いた。

9. 3. 3 仮説の検証

仮説の検証（1）

「職業別」変数の 3 カテゴリーごとに〈外向－内向〉変数の平均値を求め、平均値の差の検定をするために分散分析を行った（表 9-9）。

この表 9-9 によると、分散分析の結果は、F 値が 1.40、p 値が 0.2498 で、「職業別」変数の有意な効果が示されなかった。よって、〈外向－内向〉の観点からみると、「人は、性格の特性を基準にして、職業を選ぶ」という仮説は、成立しなかった。

表 9-9 「職業別」変数別にみる〈外向－内向〉変数の平均値と分散分析結果

独立変数	N	平均	標準偏差
a 専門・管理・事務	106	8.50943396	3.11140845
b 営業・サービス	63	8.65079365	3.11685703
c 保安・運輸・生産	16	7.25000000	2.17562252
F値=1.40 p値=0.2498		*p<0.05	

仮説の検証（2）

「職業別」変数の 3 カテゴリーごとに〈勤勉－怠惰〉変数の平均値を求め、平均値の差の検定をするために分散分析を行った（表 9-11）。

表 9-11 によると、分散分析の結果は、F 値が 1.92、p 値が 0.1498 で、「職業別」変数の有意な効果が示されなかった。よって、〈勤勉－怠惰〉の観点からみると、「人は、性格の特性を基準にして、職業を選ぶ」という仮説は、成立しなかった。

表 9-10 「職業別」変数別にみる〈勤勉－怠惰〉変数の平均値と分散分析結果

独立変数	N	平均	標準偏差
a 専門・管理・事務	105	9.50476190	3.16265410
b 営業・サービス	61	9.49180328	3.02006043
c 保安・運輸・生産	16	7.93750000	2.23513609
F値=1.92 p値=0.1498		*p<0.05	

仮説の検証（３）

「職業別」変数の３カテゴリーごとに〈知性－非知性〉変数の平均値を求め、平均値の差の検定をするために分散分析を行った（次頁 表 9-1 1）。

表 9-1 1 によると、分散分析の結果は、F 値が 3.15、p 値が 0.0454 で、「職業別」変数の有意な効果が示されている。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、「a 専門・管理・事務」と「c 保安・運輸・生産」の間に 5 %水準で有意差が示された。専門・技術職、管理職、事務職の人は、保安職、運輸・通信職、生産・労務職の人に比して「知性」の傾向がある。よって、〈知性－非知性〉の観点からみると、「人は、性格の特性を基準にして、職業を選ぶ」という仮説は、成立したといえる。

表 9-1 1 「職業別」変数別にみる〈知性－非知性〉変数の平均値と分散分析結果

独立変数	N	平均	標準偏差
a 専門・管理・事務	105	9.94285714	2.57886592
b 営業・サービス	63	9.60317460	* 2.77395538
c 保安・運輸・生産	15	8.13333333	2.32583830
F値=3.15		p値=0.0454	*p<0.05

仮説の検証（４）

「職業別」変数の３カテゴリーごとに、〈協調－排他〉変数の平均値を求め、平均の差の検定をするために分散分析を行った（表 9-1 2）。

この表 9-1 2 によると、分散分析の結果は、F 値が 1.67、p 値が 0.1920 で、「職業別」変数の有意な効果が示されなかった。よって、〈協調－排他〉の観点からみると、「人は、性格の特性を基準にして、職業を選ぶ」という仮説は、成立しなかった。

表 9-1 2 「職業別」変数別にみる〈協調－排他〉変数の平均値と分散分析の結果

独立変数	N	平均	標準偏差
a 専門・管理・事務	104	9.11538462	2.84317508
b 営業・サービス	63	9.87301587	2.89878764
c 保安・運輸・生産	15	8.86666667	2.19956706
F値=1.67		p値=0.1920	*p<0.05

仮説の検証（５）

「職業別」変数の３カテゴリーごとに〈理性－感情〉変数の平均値を求め、平均の差の検定をするために分散分析を行った（次頁表 9-1 3）。

この表 9-1 3 によると、分散分析の結果は、F 値が 1.00、p 値が 0.3709 で、「職業別」変数の有意な効果が示されなかった。よって、〈理性－感情〉の観点からみると、「人は、性格の特性を基準にして、職業を選ぶ」という仮説は、成立しなかった。

表 9-13 「職業別」変数別にみる〈理性－感情〉変数の平均値と分散分析結果

独立変数	N	平均	標準偏差
a 専門・管理・事務	104	8.50000000	2.95270158
b 営業・サービス	61	9.13114754	2.58505583
c 保安・運輸・生産	15	8.60000000	2.41424345
F値=1.00 p値=0.3709		*p<0.05	

9.3.4 考察

本章では性格特性を5つの観点から見ているが、ここでは仮説に基づいて分散分析を行った結果、〈知性－非知性〉にのみ有意な効果が示された。

〈知性－非知性〉の観点からみると、専門・技術職、管理職、事務職の人は、「知性」の傾向があると分かった。ある特定の分野に限定した知識が豊富で、物事を分析することに長けていたり、物事を注意深く十分に考えたりする能力が高いから、このような職業を選んでいるのではないだろうか。また、保安職、運輸・通信職、生産・労務職の人は、単純作業の繰り返しをこなすことに抵抗がなく、自分に与えられた仕事を堅実に行うことができるから、このような職業を選んでいるのではないだろうかと思った。

第10章 流言と信じやすさと買占め行動

——批判的感受性によるその分化の考察——

A92036 市瀬智啓

10. 1 問題意識と仮説

10. 1. 1 問題意識

2011年3月11日。大きな地震が東日本を襲った。同時に大津波も襲来した。被災した地域では、物資を送るための交通機関もマヒしてしまい、食料などの不足が起こった。しかし、同時に被災しなかった地域では、食料品や生活必需品の過剰な買占めが始まった。

買占めが起こったのは、災害の影響によって輸送手段がマヒしたり、食料品の生産を行っている工場が停止するなどして、さまざまな物資が不足するという情報がメディアを中心に広まったからである。物資が不足するという情報が広まったことによって、被災していない地域では、ガソリンや乾電池などの物資の価格が高騰し、インスタント食品やパンなどがスーパーなどで買占められ、不足するという事態に陥ったのである。後に原子力施設の事故によって放射性物質が流出し、水道水から検出されたという問題で、水の買占めもおこなわれた。

そして、災害が起こった後にさまざまな流言が流れた。特に強烈な印象を残したのは、原子力施設の事故による放射性物質についての流言である。放射性物質について、我々は十分な知識は持っていない。そのため、「放射性物質による人体への汚染を軽減するためうがい薬を飲むほうが良い」という流言や「海藻類・大豆製品を摂取すると放射性物質の影響を受けにくい」といった流言が流れると、それを信じ、関連する食料品を買占めする人も出たと思われる。

なぜ人々は流言を信じ買占め行動を起こしてしまうのか。

ロスノウとファイン(1976)は、これまでの流言研究の知見について以下のように述べている。

一般に流言は発生地点から空間的に遠ざかるにつれて増加する傾向がある。流言は、メッセージの受け取り、想起、あるいは伝達エラーによって発生する。人間の記憶は生理的に隙間があり、物事を単純化し秩序立てようとする傾向がある。従って流言に最も多い歪みは、平均化・強調・同化の結果である。

また、オルポートとポストマンによる流言の伝達の研究で、流言の信じやすさは流言(R)＝重要性(i)×あいまいさ(a)の式であらわされる。そこにコーラスによって「批判的感受性」が加わり、流言(R)＝重要性(i)×あいまいさ(a)/「批判的感受性」という式になる。「批判的感受性」が増大すれば流言は弱くなり、ついには消失する。一方、低い「批判的感受性」

しか持たない人は、どんなことでも無批判に受け入れるから流言の伝い手になりやすい。

(L. Rosnow and A. Fine 1976=1982: 87)

以上のことを踏まえて仮説を立てた。

仮説

- I 批判的感受性が低い人ほど、流言を信じやすい。
- II 流言を信じやすい人ほど、買占め行動をおこなう。

批判的感受性自体をはかる指標として、近似している先行研究から批判的思考をはかる項目を使用する。

批判的思考とは、「自分の推論過程を意識的に吟味する反省的な思考」である。これは何を信じ、主張し、行動するか決定に作用する思考である。また、自分の意見と一致しない場合であっても、その気持ちを介入させることなく推論する思考である。(平山・楠見 2004: 186)

表 10-1 批判的思考態度尺度の因子負荷量と因子間相関

TABLE 1 批判的思考態度尺度の因子負荷量と因子間相関 (N=409)					
	項 目	I	II	III	IV
T32	複雑な問題について順序立てて考えることが得意だ	.67	-.07	-.06	.18
T55	考えをまとめることが得意だ	.64	-.06	-.03	.07
T11	物事を正確に考えることに自信がある	.62	-.15	.01	.10
T84	誰もが納得できるような説明をすることができる	.60	-.02	-.01	.07
T18	何か複雑な問題を考えると、混乱してしまう(-)	-.57	.07	-.01	.09
T61	公平な見方をするので、私は仲間から判断を任せられる	.54	-.01	.14	-.08
T87	何かの問題に取り組む時は、しっかりと集中することができる	.54	.14	-.00	-.28
T26	一筋縄ではいかないような難しい問題に対しても取り組みつづけることができる	.49	.27	-.05	.04
T47	道筋を立てて物事を考える	.49	-.05	.07	.27
T90	私の欠点は気が散りやすいことだ(-)	-.48	.02	-.08	.21
T79	物事を考えるとき、他の案について考える余裕がない(-)	-.48	.09	-.15	.16
T56	注意深く物事を調べることができる	.48	.04	-.06	.27
T89	建設的な提案をすることができる	.44	.05	-.05	.22
T95	いろいろな考え方の人と接して多くのことを学びたい	-.08	.76	.09	-.04
T98	生涯にわたり新しいことを学びつづけたと思う	.04	.74	-.07	-.11
T96	新しいものにチャレンジするのが好きである	.27	.71	-.10	-.19
T22	さまざまな文化について学びたいと思う	-.18	.61	.04	.05
T37	外国人がどのように考えるかを勉強することは、意義のあることだと思う	-.18	.55	-.07	.02
T69	自分とは違う考え方の人に興味を持つ	-.14	.54	.13	.08
T64	どんな話題に対しても、もっと知りたいと思う	.11	.48	-.06	.10
T7	役に立つかわからないことでも、出来る限り多くのことを学びたい	.01	.47	.00	.03
T25	自分とは異なった考えの人と議論するのは面白い	.01	.43	.19	.07
T24	分からないことがあると質問したくなる	.01	.36	-.04	.09
T88	いつも偏りのない判断をしようとする	.00	.03	.62	.01
T94	物事を見るときに自分の立場からしか見ない(-)	-.15	.02	-.60	.18
T45	物事を決めるときには、客観的な態度を心がける	-.05	-.04	.57	.22
T91	一つ二つの立場だけではなく、できるだけ多くの立場から考えようとする	.08	.14	.55	.06
T85	自分が無意識のうちに偏った見方をしていないか振り返るようにしている	-.07	.10	.54	.20
T19	自分の意見について話し合うときには、私は中立の立場ではいられない(-)	-.06	.22	-.44	.21
T2	たとえ意見が合わない人の話にも耳をかたむける	.01	.07	.40	-.11
T21	結論をくだす場合には、確たる証拠の有無にこだわる	-.08	.01	-.06	.65
T31	判断をくだす際は、できるだけ多くの事実や証拠を調べる	.09	.13	-.01	.58
T20	何事も、少しも疑わずに信じ込んだりはしない	.01	-.05	-.01	.40

原注：(-)印は反転項目を示す

因子間
相関
II .39
III .35
IV .43
.41
.21
.28

出典：平山・楠見 2004: 189

表10-1は、平山・楠見（2004）が、批判的思考態度に係る尺度を因子分析によって析出した結果であり、かれらは、Ⅰ軸を「論理的思考の自覚」、Ⅱ軸を「探究心」、Ⅲ軸を「客観性」、Ⅳ軸を「証拠の重視」と命名した（平山・楠見 2004: 189）。

本調査では、批判的感受性をはかる指標として、上記の4因子を使用することにした。

10. 2. 仮説検証

10. 2. 1 仮説検証に使用する変数と各変数の単純集計結果

（1）批判的感受性

本調査では、前項の表10-1の「批判的思考態度尺度」の4因子それぞれを構成する項目から、「論理的思考の自覚」因子については表10-2の「a～e」の5項目、「探究心」因子については表10-2の「f～i」の4項目、「客観性」因子については表10-2の「j～n（1欠番）」の4項目、「証拠の重視」因子については表10-2の「o・p」の2項目を取り上げ、使用することにした。

表10-2 批判的感受性の単純集計結果

		単位(%)						
表10-1 命の	Q22 批判的感受性	あてはまる	あどち まかといえ ば	いどち ならいとも	あどち まかといえ ば	あては まらない	計	
論 理 的 思 考 の 自 覚 性	a 複雑な問題に対して順序立てて考えることが得意だ	9.7	35.3	37.4	13.6	3.9	100.0	382人
	b 考えをまとめることが得意だ	10.2	37.1	34.2	12.8	5.7	100.0	383人
	c 物事を正確に考えることに自信がある	9.9	33.7	40.2	11.5	4.7	100.0	383人
	d 誰もが納得できるような説明をすることができる	5.0	24.4	44.2	19.6	6.8	100.0	382人
	e 何か複雑な問題を考えると、混乱してしまう(-)	3.9	19.4	32.3	33.1	11.3	100.0	381人
探 究 心	f いろいろな考えの人と接して多くのことを学びたい	27.3	43.9	21.6	4.9	2.3	100.0	385人
	g 生涯にわたり新しいことを学び続けたい	27.4	41.5	22.7	4.7	3.7	100.0	383人
	h さまざまな文化について学びたいと思う	26.3	38.0	24.5	6.8	4.4	100.0	384人
	i 外国人がどのように考えるかを勉強することは意義のあることだと思う	33.0	35.6	23.6	5.0	2.9	100.0	382人
客 観 性	j いつも偏りのない判断をしようとする	21.0	44.6	26.3	5.8	2.4	100.0	381人
	k 物事を見るときに自分の立場からしか見ない(-)	1.8	10.5	36.8	36.8	14.2	100.0	381人
	m 物事を決めるときには、客観的な態度を心がける	13.3	52.1	29.2	4.4	1.0	100.0	384人
	n 一つ二つの立場だけでなく、できるだけ多くの立場から考えようとする	17.2	46.0	28.7	6.8	1.3	100.0	383人
証 拠 の 重 視	o 結論をくだす場合には確たる証拠の有無にこだわる	10.4	36.6	39.2	11.0	2.9	100.0	383人
	p 判断をくだす際は、できるだけ多くの事実や証拠を調べる	17.1	46.5	27.5	7.3	1.6	100.0	385人

注：(-) は逆転項目を表す

批判的感受性に係る意識を調べるため、表10-2のa～pの15項目について「あなたご自身のことやあなたのお考えについてお聞きします」という質問をし、5件法で回答を求めた。回答結果を示した同表によると、「i 外国人がどのように考えるかを勉強することは

意義のあることである」や「g 生涯にわたり新しいことを学び続けたい」、「f さまざまな文化について学びたいと思う」、「h さまざまな文化について学びたいと思う」といった「探究心」因子の質問に「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」という回答が多く集中し、この2つの回答を合わせてみると6割台半ばから7割強を占めていた。「客観性」因子、「証拠の重視」因子については、総じて「あてはまる」という回答は多くないが、「どちらかといえばあてはまる」という回答を合わせてみると、概ね全体の3分の2強となっている。これに対し、「論理性の自覚」は、相対的に「どちらかといえばあてはまらない」、「あてはまらない」という回答が多く、両者を合わせてみると、1割台半ばから2割台半ばを占めていた。

（2）情報の真偽の判断

流言の信じやすさを調べるため、「東日本大震災直後に流れた情報についてお聞きします」という質問をし、8項目の情報について「信じた」、「どちらかといえば信じた」、「どちらかといえば信じなかった」、「信じなかった」、「見たり聞いたりしたことはない」の5件法で回答を求めた。

「g 被災地で強盗事件が発生している」、「h 福島原発で放射性物質が漏れたことにより、雨が降ると被ばくする」、「b 放射性物質の影響で水道水が飲めなくなる」、「a 石油コンビナートの炎上で有害物質が雨で降ってくる」といった流言には、「信じた」、「どちらかといえば信じた」という回答が多く、両者を合わせてみると、4割弱から7割弱を占めていた（巻末基礎集計表 問11参照）。これらの項目の特徴として、総じて、視認できるものではなく、かつ広範囲に影響が及ぶような内容であるため、不安を喚起させる作用が強い流言であることが挙げられる。

対して、「c 海藻類を摂取すると放射性物質の影響を受けにくい」、「d 大豆製品を摂取すると放射性物質の影響を受けにくい」、「e 放射性物質に汚染されないためにうがい薬を飲んだほうがいい」という項目では、「どちらかといえば信じなかった」、「信じなかった」という回答が多く、両者を合わせてみると、6割から7割強を占めていた（巻末基礎集計表 問11参照）。これらの項目は、放射性物質への対策に関する流言であり、内容が限定的であることにより、相対的に真偽のほどを調べるのが容易であるという特徴を共通してもっていることが指摘できる。なにより、食品の効果などは、以前からさまざまに研究がなされており、もし放射性物質に対して効果がある食品があるとするならば、その情報がすでに流通していてもおかしくないと考えられる。

（3）震災後半月間の購入物品の量

買占め行動について調べるため、12の物品について「東日本大震災が発生してから半月くらいの間にどのくらい購入したか」という質問をし、「普段より多かった」、「普段と同じくらい」、「普段より少なかった」、「購入していない」の4件法で回答を求めた。結果は、以下の通りであった（巻末基礎集計表 問7参照）。

「a 水」や「c インスタント食品」、「d 電池・懐中電灯」、「m 非常食・保存食」といった生命の維持に関わるものや、生命の危機の除去（安全の確保）に直結するものでは「普段より多かった」という回答が相対的に多く、2割台半ばから4割近くを占めていた。

これに対して、「e ガスボンベ」では、「購入していない」が6割近くを占めていた。これは、一度購入すれば次に購入するまでの期間が長く、そもそもコンロを持っていないければ購入することがないからだと考えられる。「j マスク」についても、「購入していない」が4割と多かった。マスクが購入されなかった理由として、顔に密着する形のマスクであれば放射性物質への対策になるという情報が、震災後半月間ではほとんど知られることがなかったため、このような回答結果になったと考えられる。

「f トイレットペーパー」や「b 米」、「i 海藻類の食品」、「g パン」、「h 乳製品」、「k 菓子類」では、「普段と同じくらい」という回答が5割台半ばから6割強を占めていた。「f トイレットペーパー」や「b 米」、「i 海藻類の食品」は、他の物品に比べ、一度購入すれば、次に購入するための期間が長く、必要以上の量を買う必要がないため、このような回答結果になったと考えられる。「g パン」と「h 乳製品」では、多く購入しても、長持ちしない商品であるために、すぐに消費できるような量を購入したためではないだろうか。「k 菓子類」が普段と同じくらいという回答結果になったのは、いざというときの主食となるものではなく、あくまで、インスタント食品や非常食・保存食がないときのためのものであるために、多く購入する物品の優先順位が高いわけではなく、普段と同じくらいという回答が多かったのではないかと考える。

10. 2. 2 仮説検証のための予備手続き

(1) 批判的感受性に関する予備手続き

「批判的感受性」に係る意識をはかる質問項目（表10-2）に関しては合成変数を作成し、「情報の真偽の判断」との相関を調べるために、各質問項目の選択肢を次のようにスコア化した。逆転項目を除く13項目に関しては回答選択肢の「あてはまる」に2点、「どちらかといえばあてはまる」に1点、「どちらともいえない」に0点、「どちらかといえばあてはまらない」に-1点、「あてはまらない」に-2点を与えた。「e 思考力の欠如」「k 自己中心的認識」の2つは逆転項目の質問となっているため、「あてはまらない」を2点とし、「どちらかといえばあてはまらない」を1点、「どちらともいえない」を0点、「どちらかといえばあてはまる」を-1点、「あてはまる」を-2点とした。これら15項目を合成し、 α 係数を算出した結果、0.86であったため、全15項目を使用して合成変数を作成することにした。その結果、最高点は30点、最低点は-30点となり、合計した点数が高ければ批判的感受性が高い人、点数が低ければ批判的感受性が低い人となる。

(2) 情報の真偽の判断に関する予備手続き

「情報の真偽の判断」に関する質問項目は、次のようにスコア化して合成変数を作成することにした。まず、回答選択肢の「信じた」に4点、「どちらかといえば信じた」に3点、

「どちらかといえば信じなかった」に 2 点、「信じなかった」に 1 点を与え、「見たり聞いたりしたことはない」に 0 点を与え、合計得点をだし、 α 係数を算出した結果、0.72 であったため、全項目を用いて合成変数を作成することにした。

ただし、最終的には「見たり聞いたりしたことはない」は集計から省いた。その理由は、「見たり聞いたりしたことはない」ものについては「情報の真偽の判断」をしようがないためである。「見たり聞いたりしたことはない」を除いた項目で合計得点をだし、その項目数で合計得点を割った。その結果、最高点は 4 点、最低点は 1 点となり、合計した点数が高ければ流言を信じやすい人、点数が低ければ流言を信じにくい人となる。

(3) 震災後半月間の購入物品の量に関する予備手続き

「震災後半月間の購入物品の量」に関する質問項目では、「普段より多かった」「普段と同じくらい」「普段より少なかった」「購入していない」の 4 件法で回答を求めたが、「普段より多かった」を「買占め行動をおこなった」、「普段と同じくらい」「普段より少なかった」「購入していない」をカテゴリー統合して「買占め行動をおこなわなかった」とした。この項目をスコア化し、合成変数を作成するために、「買占め行動をおこなった」に 1 点、「買占め行動をおこなわなかった」に 0 点を与え、12 項目を合成し、 α 係数を算出した結果、0.81 であったため、全項目を使用し、合成変数を作成した。最高点は 12 点、最低点は 0 点となり、点数が高い人は買占め行動傾向が強い人、点数が低い人は買占め行動傾向が弱い人とした。

10.3 仮説の検証

(1) 仮説 I 「批判的感受性が低い人ほど、流言を信じやすい」の検証——批判的感受性と情報の真偽の判断の相関分析

表 10-3 は、仮説 I の検証をおこなうために、「批判的感受性」に関する質問 15 項目で合成変数を作成し、他方「情報の真偽の判断」については当該の質問 8 項目で合成変数を作成し、両者を相関分析にかけた結果である。

表 10-3 批判的感受性と情報の真偽の判断の相関係数

	N	平均	標準偏差	相関係数
批判的感受性	372	7.74	7.69	-0.14*
情報の真偽の判断	380	2.24	0.62	

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

この表によると、相関分析の結果、統計的に有意な結果であったが、相関係数は -0.14 とほとんど相関関係がみられなかった。

しかし、若干ではあるが、負の相関関係がみられたことから、「批判的感受性」を構成する要因によっては、「情報の真偽の判断」との関連がみられると考えた。

そこで、「批判的感受性」に関する質問項目に関しては、先行研究において取り上げられ

ていた項目の一部を使用したため、改めて因子分析をおこない、「批判的感受性」を構成する因子を析出することにした。

因子分析をおこなった結果、固有値が4つ目で、1.08あり、累積寄与率が4つ目で、0.68あり、4つ目と5つ目の固有値の差が0.27離れていたため、因子を4つに固定した。因子数を固定し、もう一度、因子分析をおこなった結果、上記の理由と解釈のしやすさから、妥当だと判断し、因子数を決定した。因子の回転方法はプロマックス回転でおこなった。その結果を示しているのが、表10-4である。

第1因子は、「さまざまな文化について学びたいと思う」など5項目に高い負荷がみられたため、「学習志向」と解釈した。第2因子は、「物事を正確に考えることに自信がある」などの4項目に高い負荷がみられたため、「論理性」と解釈した。第3因子は、「結論をくだす場合には確たる証拠の有無にこだわる」などの3項目に高い負荷がみられたため、「客観性」と解釈した。第4因子は、「物事を見るときに自分の立場からしか見ない」などの2項目を中心に高い負荷がみられたため、「視野の広さ」と解釈した。

表10-4 批判的感受性の因子分析

質問項目	学習志向	論理性	客観性	視野の広さ
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
h さまざまな文化について学びたいと思う	0.94 *	0.03	-0.09	-0.05
g 生涯にわたり新しいことを学び続けたい	0.91 *	0.07	-0.06	0.12
f いろいろな考えの人と接して多くのことを学びたい	0.84 *	0.01	0.01	-0.13
i 外国人がどのように考えるかを勉強することは意義のあることだと思う	0.71 *	-0.15	0.05	0.19
j いつも偏りのない判断をしようとする	0.51 *	0.15	0.01	0.27
c 物事を正確に考えることに自信がある	0.00	0.87 *	0.04	-0.07
b 考えをまとめることが得意だ	0.08	0.83 *	0.08	-0.06
d 誰もが納得できるような説明をすることができる	-0.01	0.82 *	-0.02	0.03
a 複雑な問題に対して順序立てて考えることが得意だ	-0.01	0.80 *	0.07	0.07
o 結論をくだす場合には確たる証拠の有無にこだわる	-0.17	0.08	0.93 *	-0.18
p 判断をくだす際は、できるだけ多くの事実や証拠を調べる	0.06	-0.01	0.83 *	0.07
n 一つ二つの立場だけでなく、できるだけ多くの立場から考えようとする	0.20	0.06	0.49 *	0.34
k 物事を見るときに自分の立場からしか見ない(-)	0.01	-0.17	0.10	0.81 *
e 何か複雑な問題を考えると、混乱してしまう(-)	-0.16	0.35	-0.30	0.64 *
m 物事を決めるときには、客観的な態度を心がける	0.07	0.13	0.38	0.39 *
注：(-)は逆転項目を表す				
因子間 II 0.26				
相 関 III 0.37				
IV 0.25				
0.38 0.27				

因子分析によって分けられた、表10-4の各因子ごとに因子得点を析出し、各個人がそれぞれもつ4つの因子得点と「情報の真偽の判断」との相関分析をおこなった。

次頁の表10-5が、相関分析の結果である。

表10-5において「学習志向」と解釈した第1因子では、「情報の真偽の判断」との相関に関して統計的に有意な結果が認められなかった。しかし、「論理性」と解釈した第2因子

では、有意水準 0.1%未満で有意な結果が認められた。分析の結果、相関係数が－0.21 と弱い負の相関関係がみられ、「論理性」という観点からみた「批判的感受性」では、その傾向が強ければ、流言を信じにくい傾向にあることがわかった。「客観性」と解釈した第3因子では、統計的に有意な結果が認められなかった。「視野の広さ」と解釈した第4因子では、有意水準 1%未満で、有意な結果が認められた。相関係数が－0.19 と極めて弱いながらも負の相関関係にあり、「視野の広さ」という観点からみた「批判的感受性」では、その傾向が強ければ、流言を信じにくい傾向にあることがわかった。

表 10-5 「学習志向」「論理性」「客観性」の因子得点と情報の真偽の判断の相関係数

	N	情報の真偽の判断 相関係数
学習志向	367	0.00
論理性	367	-0.21 ***
客観性	367	-0.09
視野の広さ	367	-0.19 **

* p < 0.05 ** p < 0.01 *** p < 0.001

この分析の結果、「批判的感受性」の中でも「論理性」、「視野の広さ」の傾向が強い人は、流言を信じにくいと言える。

(2) 仮説Ⅱ「流言を信じやすい人ほど、買占め行動をおこなう」の検証——情報の真偽の判断と買占め行動の相関分析

表 10-6 は仮説Ⅱの検証をおこなうために、「情報の真偽の判断」に関する質問項目 8 個で合成変数を作成し、他方「買占め行動」については当該の質問項目 12 個で合成変数を作成し、両者を相関分析にかけた結果である

表 10-6 情報の真偽の判断と震災後半月間の購入物品の量の相関係数

	N	平均	標準偏差	相関係数
情報の真偽の判断	380	2.24	0.62	0.23***
震災後半月間の 購入物品の量	363	2.24	2.57	

* p < 0.05 ** p < 0.01 *** p < 0.001

表 10-6 において、「情報の真偽の判断」と「震災後半月間の購入物品の量」の相関関係は有意水準 0.1%未満で有意な結果が認められた。分析の結果、相関係数が 0.23 と弱い正の相関関係があることがわかった。「情報の真偽の判断」という観点からみて、流言を信じやすい傾向にある人は、「震災後半月間の購入物品の量」の量が普段より多い傾向にあり、買占め行動をおこないやすいと言える。

10.4 考察

以上の分析の結果から、仮説Ⅰの「批判的感受性が低い人ほど、流言を信じやすい」に関しては、全体としてみてみれば、「批判的感受性」が低いからといって、流言を信じやすいと明確に判断できる結果は導き出せなかった。しかし、「批判的感受性」を構成する因子との関連をみると、「論理性」、「視野の広さ」という観点に関して得点が低い人は、流言を信じやすいという結果になった。

「論理性」の得点が低い人が流言を信じやすい理由は、見聞きした情報について分析的に考えようとしなないためだと考えられる。「論理性」の得点が低い人は、見聞きした情報を関連する情報と整合的に理解しようとせず、両者が矛盾していても気にしなかったり、あるいはどんな情報でも無批判に受け入れてしまい、流言を信じてしまうのではないだろうか。

また、「視野の広さ」の得点が低い人が流言を信じやすい理由は、入手した情報を全体状況の中に関連づけて理解しようとせず、物事の一面だけを見て、それを本当のことと単純に思い込んでしまうからではないだろうか。流言の中には、不安を喚起させる作用が強いものだけではなく、「放射性物質の影響を受けないために、特定の食品を取るとよい」といったような、相対的に真偽のほどを容易に調べることができたものも多くあった。しかし、「視野の広さ」の得点が低い人は、真偽が容易に調べられるようなそれらの流言に対しても、最初に見聞きしたままの形で鵜呑みにしてしまい、流言を信じやすいといえるのではないだろうか。

仮説Ⅱの「流言を信じやすい人ほど、買占め行動をおこなう」では、流言の信じやすさと買占め行動との関連に、有意な結果が得られた。流言には、不安を喚起させる作用が強いものが多くある。東日本大震災でも、「有害物質が雨で降ってくる」という流言や「放射性物質の影響で水道水が飲めなくなる」といった、不安を喚起させる流言が多く流れた。流言を信じやすい人は、それらの不安に対処しようとするために買占め行動をおこなったのではないだろうか。特に放射性物質に関することは、私たちにとって、未知のものであり、悪影響しか連想することができない。そのため、放射性物質の影響で水道水が飲めなくなるという流言が流れると、流言を信じやすい傾向にある人は、市販の水を買占めし、自身や家族に悪影響が及ばないように対処しようとしたのではないだろうか。

次頁の表10・7によれば、「b 放射性物質の影響で水道水が飲めなくなる」という流言を信じやすい傾向にある人は、水の買占め行動をおこなう傾向にあることがわかった。また、「c 海藻類を摂取すると放射性物質の影響を受けにくい」という流言を信じやすい傾向にある人は、海藻類の食品への買占め行動をおこなう傾向にあることもわかった。しかし、全体的にみれば、個別の関係性はそれほど強くないことがわかった。買占め行動をおこなう人は、個別の不安に対処しようとして買占め行動をおこなうというよりも、流言に対する全体的な不安に対処しようとして、買占め行動をおこなったといえよう。

表 10-7 「情報の真偽の判断」と「震災後半月間の購入物品の量」の個別の相関関係

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	m
	水	米	インスタント食品	電池・懐中電灯	ガスボンベ	トイレットペーパー	パン	乳製品	海藻類の食品	マスク	菓子類	非常食・保存食
a 石油コンビナートの炎上で有害物質が雨で降ってくる	0.14 **	0.08	0.09	0.09	0.10	0.17 **	0.10	0.17 ***	0.05	0.12 *	0.12 *	0.08
b 放射性物質の影響で水道水が飲めなくなる	0.31 ***	0.16 **	0.19 **	0.13 **	0.15 **	0.17 ***	0.18 **	0.17 **	0.17 ***	0.21 ***	0.19 ***	0.19 ***
c 海藻類を摂取すると放射性物質の影響を受けにくい	0.07	0.02	0.01	0.07	0.02	0.14 **	0.04	0.11 *	0.19 ***	0.11 *	0.10 *	0.07
d 大豆製品を摂取すると放射性物質の影響を受けにくい	0.09	0	-0.03	0.07	0.10	0.15 **	-0.01	0.15 **	0.07	0.12 *	0.02	0.04
e 放射性物質に汚染されないためにうがい薬を飲んだほうがいい	0.16 **	0.06	0.07	0.11 *	0.13 *	0.13 **	0.06	0.07	0.05	0.02	0.08	0.06
f 防衛庁・自衛隊が救援物資の提供を求めている	0	-0.03	0.01	0.05	0.09	0.05	-0.01	0.07	-0.05	0.07	-0.00	0
g 被災地で強盗事件が多発している	0.07	0.08	0.11 *	0.05	0.07	0.05	0.08	0.06	0.05	0.06	0.12 *	0.04
h 福島原発で放射性物質が漏れたことにより、雨が降ると被ばくする	0.13 **	0.09	0.10 *	0.07	0.14 **	0.09	0.10	0.07	0.13 *	0.11 *	0.11 *	0.14 **

* p < 0.05 ** p < 0.01 *** p < 0.001

10.5 補遺：学歴と批判的感受性、情報の真偽の判断、震災後半月間の購入物品の量の関連について

(1) 問題意識

人がもつ学歴に関する経歴はさまざまである。私は、学歴に時間を費やした人とそうでない人との違いを明らかにしたいと考えた。

今回は、本章で取り上げている「批判的感受性」、「情報の真偽の判断」、「震災後半月間の購入物品の量」は「学歴」によってどのような違いがあるかを明らかにするために、以下の仮説を立てた。

仮説

- I 就学年数が長い人ほど、批判的感受性が高い。
- II 就学年数が長い人ほど、流言を信じにくい。
- III 就学年数が長い人ほど、買占め行動をおこしにくい。

(2) 仮説検証のための予備手続き

仮説を検証するために、学歴を「1 旧制小学校」と「5 新制中学校」を合わせて「a 中学校卒」とし、「2 旧制中学校」と「3 旧制女学校」と「6 新制高等学校」を合わせて「b 高等学校卒」、「7 専門学校」と「8 短期大学・高等専門学校」を合わせて「c 短期大学・専門学校卒」、「4 旧制高等学校」と「9 大学・大学院」を合わせて「d 大学卒」という4カテゴリーに分けて「学歴別」変数を作成した。就学年数が最も長いのが、「d 大学卒」であり、次いで、「c 短期大学・専門学校卒」、「b 高等学校卒」、「a 中学校卒」の順となる。

(3) 仮説の検証

仮説Ⅰ「就学年数が長い人ほど、批判的感受性が高い」の検証

「学歴別」変数の4カテゴリーごとに、「批判的感受性」の平均値を求め、平均値の差の検定をするために分散分析をおこなった。その結果を表しているのが、表10-8である。

表10-8 学歴変数別の批判的感受性の平均値と分散分析結果

独立変数	N	平均	標準偏差
a 中学校卒	19	3.89473684	10.8826811
b 高等学校卒	117	5.93162393	7.4956614
c 短期大学・専門学校卒	90	7.54444444	7.7563473
d 大学卒	133	9.99248120	6.6395238

F値=8.01 p値<.0001 * p<0.05

この表10-8によると、分散分析の結果、F値が8.01、有意水準0.1%未満で、「学歴別」変数と「批判的感受性」の間に、有意な結果が認められた。TukeyのHSD法を用いて多重比較をおこなった結果、「d 大学卒」と「a 中学校卒」、「b 高等学校卒」との間にそれぞれ5%水準で有意な差がみられた。大学卒の人は、中学校卒、高等学校卒の人に比べて、「批判的感受性」が強い傾向にあることがわかった。

この分析の結果、「学歴」という観点からみて、就学年数が長い人ほど、批判的感受性の傾向が強いといえ、仮説Ⅰは成立したといえる。

仮説Ⅱ「就学年数が長い人ほど、流言を信じにくい」の検証

「学歴別」変数の4カテゴリーごとに、「情報の真偽の判断」との平均値を求め、平均値の差の検定をするために分散分析をおこなった。その結果を表しているのが、表10-9である。

表10-9 学歴変数別の情報の真偽の判断の平均値と分散分析結果

独立変数	N	平均	標準偏差
a 中学校卒	23	2.53524845	0.67407886
b 高等学校卒	117	2.21580179	0.55241193
c 短期大学・専門学校卒	93	2.35725806	0.62838166
d 大学卒	133	2.12253849	0.63640048

F値=4.63 p値=0.0034 * p<0.05

この表10-9によると、分散分析の結果、F値が4.63、有意水準が0.0034で「学歴別」変数と「情報の真偽の判断」の間に有意な結果が認められた。TukeyのHSD法を用いて多重比較をおこなった結果、「d 大学卒」と「a 中学校卒」、「c 短期大学・専門学校卒」との間にそれぞれ5%水準で有意な差がみられた。大学卒の人は、中学校卒、短期大学・専門学校卒の人に比べて、「情報の真偽の判断」という観点からみて、流言を信じにくいという傾向にあることがわかった。

この分析の結果、「学歴」という観点からみて、就学年数が長い人ほど、流言を信じにくいといえ、仮説Ⅱは成立したといえる。

仮説Ⅲ「就学年数が長い人ほど、買占め行動をおこしにくい」の検証

「学歴別」変数の4カテゴリごとに、「震災後半月間の購入物品の量」の平均値を求め、平均値の差の検定をおこなった。その結果を表しているのが、表10-10である。

表10-10 学歴変数別の震災後半月間の購入物品の量の
平均値と分散分析結果

	独立変数	N	平均	標準偏差
a	中学校卒	19	1.31578947	2.23737524
b	高等学校卒	111	2.27922798	2.81609391
c	短期大学・専門学校卒	94	2.47872340	2.50044608
d	大学卒	126	2.07142857	2.43369208
F値=1.26		p値=0.2885		* p<0.05

この表10-10によると、F値が1.26、有意水準が0.2885と、「学歴別」変数の有意な差が認められなかった。よって、学歴という観点からみて、就学年数が長い人ほど、「震災後半月間の購入物品の量」が多い傾向にあるとはいえず、仮説Ⅲは成立しなかった。

(4) 考察

以上の分析の結果から、仮説Ⅰの「就学年数が長い人ほど、批判的感受性が高い」では、就学年数と批判的感受性の間に有意な結果が得られた。学業に費やす時間が多かった人ほど、自身で考える力や知的好奇心が旺盛であったため、批判的感受性が強い傾向にあったのではないだろうか。

仮説Ⅱの「就学年数が長い人ほど、流言を信じにくい」でも、就学年数と情報の真偽の判断の間に有意な結果が得られた。学業に費やす時間が多かった人ほど、知識量や疑問の解決方法が比較的多く、流言を信じにくい傾向にあったのではないかと考える。

仮説Ⅲの「就学年数が長い人ほど、買占め行動をおこしにくい」では、就学年数が長いからといって、買占め行動をおこなわないとは明確に判断できる結果を導き出せなかった。

4節までの結果では、「批判的感受性」が低い人ほど、流言を信じやすく、買占め行動をおこないやすい傾向にあることがわかった。つまり、逆にいえば、「批判的感受性」が高い人ほど、流言を信じにくく、買占め行動をおこなわないという結果になると思われる。そして、学業に時間を費やした人ほど、「批判的感受性」が高く、流言を信じにくいという傾向にあることが、本節の解析の結果で明らかとなった。しかし、学業に時間を費やした人でも、買占め行動をおこなわないとは判断できる結果を導き出せなかった。

なぜ、就学年数が長く、学業に時間を費やした人でも、買占め行動をおこなわなかったといえない結果となったのか。

その理由として、学業に費やした時間が長い人は、平均して年齢が若いということが考えられる。次頁の表10-11によれば、大学・大学院を卒業した人の平均年齢は、49.5歳、短期大学・専門学校卒の人の平均年齢は、49.3歳である。中学校卒の人が平均68.4歳、高等学校卒の人が59.1歳であるのに比べて、若いことがわかる。

表 10-11 学歴変数別の年齢の平均値と分散分析結果

独立変数	N	平均	標準偏差
a 中学校卒	23	68.4347826	9.4764113
b 高等学校卒	121	59.0661157	14.2189636
c 短期大学・専門学校卒	96	49.2708333	13.2120194
d 大学卒	135	49.5111111	15.8702137

F値=20.56 p値<0.0001 * p<0.05

年齢が若い人のほうが、自分のためだけではなく、子どもや親世代等、家族のために買占め行動をする傾向が強いのではないだろうかと考えた。

しかしながら、年齢が比較的若い人でも、買占め行動をおこなったとはいえない結果となった。表 10-12 によれば、20 歳代から 70 歳以上の人まで、購入した物品の量の平均に差がなく、年齢と買占め行動に関係があるとはいえない結果となった。

表 10-12 年齢変数別の震災後半月間の購入物品の量の平均値と分散分析結果

独立変数	N	平均	標準偏差
a 20歳代	22	2.04545455	2.25678390
b 30歳代	63	2.53968254	2.55156749
c 40歳代	69	2.47826087	2.66021171
d 50歳代	55	2.34545455	2.59784941
e 60歳代	76	2.21052632	2.61440007
f 70歳以上	73	1.75342466	2.60757881

F値=0.85 p値=0.5173 * p<0.05

そのため、次に学歴と同居している子どもの有無との関係を見ることにした。同居の子どもの有無は問 28 の同居人の有無について「3 息子」、「4 娘」のどちらかと住んでいる人を「同居している子ども有り」とし、どちらとも住んでいない人を「同居している子ども無し」とした。「学歴別」変数の 4 カテゴリーと同居している子どもの有無とでクロス集計をおこなった。表 10-13 がその結果を表している。

表 10-13 学歴変数と同居している子どもの有無のクロス集計

学歴	同居している子ども		計	
	有	無		
a 中学校卒	26.1	73.9	100.0	23人
b 高等学校卒	43.1	56.9	100.0	116人
c 短期大学・専門学校卒	57.1	42.9	100.0	91人
d 大学卒	55.5	44.5	100.0	119人
計	49.9	50.1	100.0	349人

$$\chi^2(3) = 10.7423 \quad p = 0.0132$$

この結果から、「a 中学校卒」と「b 高等学校卒」では、子どもと同居している人は少なく、「c 短期大学・専門学校卒」、「d 大学卒」では、子どもと同居している人が多いこ

とがわかった。

次に、「震災後半月間の購入物品の量」の平均値を、同居している子供の有無別に算出した。その結果を表しているのが、表 10-14 である。

表 10-14 同居している子どもの有無別の震災後半月間の
購入物品の量の平均値と t 検定結果

		平均値	t値	
同居している 子ども	有	2.61	-2.56	*
	無	1.89		
* p < 0.05		** p < 0.01	*** p < 0.001	

この表 10-14 によると、同居している子どもの有無別にみた、「震災後半月間の購入物品の量」では、有意水準が 5%未満で平均値に統計的に有意な結果が認められた。同居している子どもがいる人は、いない人に比べて買い占め行動をおこないやすい傾向にあることが明らかになった。

以上の分析の結果から、就学年数が長い人ほど、年齢が若い傾向にあり、また子どもと同居している人が多くいるということがわかった。そして、子どもと同居している人ほど、買い占め行動をおこないやすい傾向にあることがわかった。

子どもと同居している人ほど、買い占め行動をおこないやすい傾向にある理由として、自分自身のために多くの物品を購入するというより、子どもを守るために多くの物品を購入したのではないかと考えられる。また、子どもと同居しているということは、家庭をもっていると考えられる。そのため購入する物品の量が多く、子どもと同居していない人、もしくは家庭をもっているが子どもと同居していない人よりも、物品を多く買わざるを得ない立場にあったのではないだろうか考える。

そのため、学業に時間を費やした人ほど、買い占め行動をおこなわなかったとはいえ、仮説が成立しなかったのではないだろうか。

第 11 章 ニュース視聴者と間接的被災体験者の防災対策への影響

A92042 坂田智洋

11.1 問題意識

人々はなぜ、必ずやってくる災害に対して防災対策を行わないのだろうか。今回、私はニュース視聴と防災対策の関連性に目を向けることにした。ニュースを見ている人と見ていない人では、日本社会に対する信頼度が違うのではないかと考えた。日本社会を信頼していない人は、信頼できないからこそニュースを見て、状況を把握することにより、意見や行動を決定しているのではないだろうか。普段からニュースを見ている人は、災害が発生する以前に、普段から入手している情報から、自分の判断で防災対策を行っていることが予想される。情報を得る手段としてテレビ・新聞・ラジオ・インターネットなどのメディアのうち、最も需要のあるテレビに絞った。

2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生した。その際に多くのスーパーマーケットやコンビニで商品がなくなった。被災して商品が作れなかったり、交通機関のマヒなどの影響で商品を運送できなかったりといった理由もあるが、多くの消費者が買占め行為を行ったことにも原因はある。千葉市は、宮城県や岩手県に比べるとそれほど被害を受けたとはいえない。しかし、地震発生後のテレビの内容が 1 日中地震や津波に関することであり、多くの人がほぼ毎日テレビのニュースを見ていたと考えられる。このように、直接被災はしていないが、テレビのニュース等で大量に被災地の情報を受け取った人のことを間接的被災体験者と設定する（田中 2007）。

間接的被災体験者は、災害発生後、大量に流される映像を見て事の重大さに気づき、慌てて買占め行為を行うのではないだろうか。また、買占め行為を行うことによって蓄えられたものは、その後も継続されるのではなく、一時的にとどまるのではないか。

以上のことから、ニュース視聴と日本社会への信頼度、間接的被災体験者がどのような防災対策を行うのかを検討するため、次のような仮説を立てた。

11.2 仮説

I 日頃からニュースを見ている人は、防災対策を行っている

日頃からニュースを見ている人は日本社会への信頼感が低いと、防災行動を行う

II 間接的被災体験者は、一時的な防災対策を行う

間接的被災体験者は、防災対策を行うが、半年後には十分ではない

間接的被災体験者は、買占め行為を行うが、半年後には備えが十分ではない

1 1. 3 仮説検証に使用する質問項目

(1) 仮説Ⅰ・Ⅱで共通して使用する従属変数＜防災対策の取り組み状況＞

＜防災対策の取り組み状況＞では、問18「あなたは次の防災対策を行っていますか」という質問を用いた。ただし、問18の21項目すべてを使用するわけではなく、21項目の中から17項目項目を選択し、災害にどのように備えるかという分析意図に即して「減災対策」・「防災用品等」・「生活品備蓄」の3カテゴリーに分けた。

合成変数「減災対策」は、災害時の被害を最小限に抑える備えと考えられる「a 家屋の耐震化等」「b 家具の固定」「c 窓ガラスの補強」「d 災害情報の収集」「u 自主防災組織への参加」「v 防災情報の交換」の6項目から作成した。 α 係数は0.63であったため、統計的には合成が妥当であるとは言いきれないが、参考程度に分析をしていく。

合成変数「防災用品等」は、災害直後に必要な備えと考えられる「f 携帯ラジオの準備」「g 懐中電灯の準備」「h 非常時に持ち出すバッグの準備」「i 非常時に持ち出す衣類の準備」「k 避難場所の決定」「m 連絡方法の決定」「t 貴重品の持ち出し準備」の7項目から作成した。 α 係数を算出したところ、0.70であったため合成は妥当である。

合成変数「生活品備蓄」は、災害後に長期的に必要な備えとして、「n 電池の備蓄をしている」「o トイレトペーパーの備蓄をしている」「p 食料を備蓄している」「q 飲料水を備蓄している」の4項目から作成した。 α 係数を算出したところ、0.75であったため合成は妥当である。

この変数の用い方に関しては、仮説Ⅰと仮説Ⅱでは異なるため、以下の(3)(6)で改めて説明する。

(2) 仮説Ⅰで使用する独立変数＜日頃のニュース視聴＞および＜現在の日本社会への信頼感＞

＜日頃のニュース視聴＞では、問8「あなたは、日頃、テレビで一般的なニュース（芸能・スポーツニュースは除く）をどのくらい見ていますか」という質問を用いた。項目をスコア化し、「1 よく見ている」に4点、「2 ときどき見ている」に3点を与え「見ている」、「3 あまり見ていない」に2点、「4 ほとんど見ていない」に1点、「5 テレビはない・壊れている」に0点を与え「見ていない」とカテゴリー統合した。その結果、平均値は3.5であり、「見ている」は90.8%、「見ていない」は9.2%であった。

＜現在の日本社会への信頼感＞では、問23「現在の日本の社会全体について、あなたはどのようにお考えですか」という質問を用いた（基礎集計表問23）。項目をスコア化し、「1 そう思う」に3点、「2 どちらかといえばそう思う」に2点、「3 どちらかといえばそう思わない」に1点、「4 そう思わない」に0点を与えた。また、当該の質問全5項目について α 係数を算出したところ0.79であったため、合成は妥当であるといえ5項目すべてを合成した。合成後のレンジは0～15となり、合成後の平均値は8.2であった。

（３）仮説Ⅰで使用する従属変数＜防災対策の取り組み状況＞

仮説Ⅰでは、問１８「あなたは次の防災対策を行っていますか」という質問を用い、それに対する回答選択肢「１ 東日本大震災の前から行っていた」か「２ 東日本大震災の後から始めた」を選んだ人に１点、「３ 行っていない」に０点というように項目をスコア化した。

「減災対策」の質問６項目を合成すると、合成後のレンジは０～６となり、合成後の平均値は１.９であった。また、「防災用品等」の７項目を合成すると、合成後のレンジは０～７となり、合成後の平均値は４.３であった。そして「生活品備蓄」は、当該の４項目を合成すると、合成後のレンジは０～４となり、合成後の平均値は２.６であった。

（４） 仮説Ⅱにおいて除去する変数

仮説Ⅱでは、テレビ視聴時間を用いて間接的被災者とそうではない人との差を分析していくこととなるが、そのさい、直接に被災した人は分析から除く必要がある。

そこで、本調査においては、問２４「あなたは、東日本大震災によって、どのような被害を受けましたか」という質問を用いて＜東日本大震災の被災経験＞を尋ね、そこで何らかの被災経験をしたと回答した人を分析から除くこととした。

問２４では、複数回答によって、「大きなケガをした」「家が損傷した」「家具が傷ついた」「避難所に逃げた」「帰宅困難になった」「どれにもあてはまらない」の６項目で回答を求めた。間接的被災者の設定にあたって、「大きなケガをした」（０人）、「家が損傷した」（２９人）、「避難所に逃げた」（２人）の３項目を選んだ３１人は、直接被災者として仮説Ⅱの検証から除いた。

（５）仮説Ⅱで使用する独立変数＜震災後１週間のテレビ視聴時間＞

＜震災後１週間のテレビ視聴時間－平日・休日－＞では、間接的被災体験者を設定するために、問９（２）「あなたは、震災発生から１週間くらいの間、平均して１日のうち、おおよそどのくらいテレビを見ていましたか」という質問を用いた。この質問は、平日と休日別に聞いたため、まず平日と休日の平均を出し、その平均を足し合わせて２で割ることで１日あたりの平均視聴時間を算出した。また、この変数は仮説Ⅱで使用するため、直接被災者を除いた平均値を出した。その結果、全体の平均が３７３.６分であったため、３７４分以上の人を「間接的被災体験者」、３７４分未満の人を「間接的被災体験者でない」とした。「間接的被災体験者」は３５.９%、「間接的被災体験者でない」は６４.１%であった。

（６）仮説Ⅱで使用する従属変数＜防災対策の取り組み状況＞、＜防災対策の取り組み度＞

および＜震災後半月間の購入物品の量＞

仮説Ⅱでも、仮説Ⅰと同様に、問１８「あなたは次の防災対策を行っていますか」という質問を用い、「減災対策」・「防災用品等」・「生活品備蓄」の３カテゴリーに分けた＜防

「防災対策の取り組み状況」という変数を使用した。

ただし、それぞれの選択肢に与えた得点は仮説Ⅰの場合とは異なっており、「2 東日本大震災の後から始めた」に1点、「1 東日本大震災の前から行っていた」か「3 行っていない」を選んだ人に0点というようにスコア化した。

「減災対策」の質問6項目を合成すると、合成後のレンジは0～6となり、合成後の平均値は0.61であった。また、「防災用品等」の7項目を合成すると、合成後のレンジは0～7となり、合成後の平均値は1.1であった。そして「生活品備蓄」は、当該の4項目を合成すると、合成後のレンジは0～4となり、合成後の平均値は0.7であった。

＜防災対策の取り組み度＞では、問19「家庭内で行っている防災対策について、10項目についてお聞きします。あなたは、現在、次のような災害の防災対策にどの程度取り組んでいますか」という質問を用い、回答選択肢のそれぞれをスコア化し、「1 十分だと思う」に4点、「2 どちらかといえば十分だと思う」に3点、「3 どちらかといえば不十分だと思う」に2点、「4 不十分だと思う」に1点を与えた。当該の質問全10項目について α 係数を算出したところ0.89であったため、10項目すべてを合成した。合成後のレンジは10～40となる。合成後の平均値が25.6であったため、26点以上を「十分」、26点未満を「不十分」とした。その結果、「十分」が45.5%、「不十分」が54.5%であった。

＜震災後半月間の購入物品の量＞では、問7「東日本大震災が発生してから半月くらいの間に、あなたは次の物をどのくらい購入しましたか」という質問を用いた。また、回答選択肢をそれぞれスコア化し、「1 普段より多かった」に4点、「2 普段と同じくらい」に3点、「3 普段よりも少なかった」に2点、「4 購入していない」に1点を与えた。当該の質問全12項目について α 係数を算出したところ0.84であったため、12項目すべてを合成した。合成後のレンジは12～48点となる。合成後の平均値が30.8であったため、31点以上を「買占め」、31点未満を「買占めでない」とした。その結果、「買占め」が49.9%、「買占めでない」が50.1%であった。

11.4 仮説の検証

(1) 仮説Ⅰの検証

①日頃のニュース視聴と現在の日本社会への信頼感、防災対策の取り組み状況について

表11-1～表11-3は「日頃のニュース視聴」、「日本社会への信頼感」、「防災対策の取り組み状況」について相関係数を見るため、それぞれ相関分析を行った結果である。

また、次頁の表11-4は、ニュースを見ている者と見ていない者別に、「日本社会への信頼感」と「防災対策の取り組み状況」の相関関係を見るため相関分析を行った結果である。

表 1 1-1 日頃のニュース視聴と日本社会への信頼感についての相関分析

	M	SD	相 関 係 数	
			1	2
1 ニュース視聴	3.54	0.80	—	0.11 *
2 日本社会への信頼感	8.17	2.97		—

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表 1 1-2 日頃のニュース視聴と防災対策の取り組み状況についての相関分析

	M	SD	相 関 係 数			
			1	2	3	4
1 ニュース視聴	3.54	0.80	—	0.12 *	0.13 *	0.12 *
2 減災対策	1.96	1.47		—	0.45 ***	0.31 ***
3 防災用品等	4.29	1.78			—	0.46 ***
4 生活品備蓄	2.56	1.33				—

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表 1 1-3 日本社会への信頼感と防災対策の取り組み状況についての相関分析

	M	SD	相 関 係 数			
			1	2	3	4
1 日本社会への信頼感	8.17	2.97	—	0.13 *	0.07	0.09
2 減災対策	1.96	1.47		—	0.45 ***	0.31 ***
3 防災用品等	4.29	1.78			—	0.46 ***
4 生活品備蓄	2.56	1.33				—

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表 1 1-4 日頃のニュース視聴と現在の日本社会への信頼感、防災対策の取り組み状況についての相関分析

	見 て い る						見 て い な い					
	M	SD	相 関 係 数				M	SD	相 関 係 数			
			1	2	3	4			1	2	3	4
1 日本社会への信頼感	8.23	3.02	—	0.13*	0.70	0.80	7.54	2.48	—	0.08	-0.12	0.16
2 減災対策	2.01	1.48		—	0.43***	0.29***	1.29	1.06		—	0.62***	0.43*
3 防災用品等	4.34	1.74			—	0.46***	3.68	2.00			—	0.50**
4 生活品備蓄	2.58	1.33				—	2.39	1.38				—

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表 1 1-1 からは、極めて弱い正の相関 ($r=0.11$) がみられ、ニュースを見ている者は、日本社会を信頼しているといえる。

表 1 1-2 からは、極めて弱い正の相関がみられ、ニュースを見ている者は、「2 減災対策」($r=0.12$)、「3 防災用品等」($r=0.13$)、「4 生活品備蓄」($r=0.12$)を行っている傾向があるといえる。また、「2 減災対策」と、「3 防災用品等」($r=0.45$) および「4 生活品備蓄」($r=0.31$)との間にも弱い正の相関が見られた。さらに、「3 防災用品等」を行っている人は、「4 生活品備蓄」($r=0.46$)も行っているといった弱い正の相関が見られた。

表 1 1-3 からは、極めて弱い正の相関がみられ、日本社会を信頼している者は、「2 減災対策」($r=0.13$)を行っている傾向があるといえる。また、「2 減災対策」と、「3 防災

用品等」($r=0.45$) および「4 生活品備蓄」($r=0.31$) との間にも弱い正の相関が見られた。

表 1 1-4 からは、ニュースを見ているという条件下で、日本社会を信頼している人は、「2 減災対策」($r=0.13$) を行っているといった極めて弱い正の相関が見られた。その他の「3 防災用品等」と「4 生活品備蓄」には相関が見られなかった。また、ニュースを見していないという条件下においても、「1 日本社会への信頼感」とは相関が見られなかった。

表 1 1-1～表 1 1-4 のそれぞれの結果から、仮説は支持されなかったことが分かる。つまり、仮説としてはニュースを見ている人は日本社会を信頼しておらず、自分で防災対策を行っていると考えていたが、そもそもニュースを見ている人は日本社会を信頼しているという結果になってしまった。そして、日本社会を信頼していないから防災対策を行うのではなく、日本社会を信頼しているから防災対策を行っていると結果になった。

また、表 1 1-4 のニュースを見ているという条件下で、「2 減災対策」と、「3 防災用品等」($r=0.43$) および「4 生活品備蓄」($r=0.29$) との間に弱い正の相関が見られた。さらに、「3 防災用品等」を行っている人は、「4 生活品備蓄」($r=0.46$) を行っているといった弱い正の相関が見られた。一方、ニュースを見していないという条件においても、「2 減災対策」を行っている人は、「3 防災用品等」($r=0.62$)、「4 生活品備蓄」($r=0.43$) との間に相対的に強い正の相関が見られた。また、「3 防災用品等」を行っている人は、「4 生活品備蓄」($r=0.50$) といった正の相関が見られた。このことから、「2 減災対策」「3 防災用品等」「4 生活品備蓄」のいずれかの防災対策を行っている人は、その他の防災対策も行う傾向があるといえる。

②年齢と日頃のニュース視聴および、防災対策の取り組み状況について

次に、ニュースを見ている人には若年層が少なく、高年層が多いと予想されるため、ニュース視聴以上に年齢による効果が防災行動に影響を与えている可能性がある。そのため、表 1 1-5 で「年齢」を独立変数とし、「日頃のニュースの視聴」を従属変数としてクロス集計し、 χ^2 検定を行った。表 1 1-6 は、「年齢」と「防災対策の取り組み状況」についての相関係数を見るため相関分析を行った。

表 1 1-5 年齢と日頃のニュース視聴についてのクロス集計

	見ている	見していない	合計	人数	χ^2 値	p 値
20～39歳	79.3	20.7	100.0	87	25.6494	p<.0001
40～59歳	89.4	10.6	100.0	132		
60～79歳	98.2	1.8	100.0	169		

表 1 1-6 年齢と防災対策の取り組み状況についての相関分析

	M	SD	相 関 係 数			
			1	2	3	4
1 年齢	53.76	15.67	—	0.06	0.20 ***	0.13 *
2 減災対策	1.96	1.47		—	0.45 ***	0.31 ***
3 防災用品等	4.29	1.78			—	0.46 ***
4 生活品備蓄	2.56	1.33				—

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

表 1 1-5 において、「年齢」と「日頃のニュース視聴」に 0.1%水準で有意な差が見られた。全体的にどの年代の人でもニュースを見ているが、高年層ほどその割合は高くなっている。表 1 1-6 から、「1 年齢」と「3 防災用品等」($r=0.20$)、「4 生活品備蓄」($r=0.13$)との間に、極めて弱い正の相関がみられ、年齢が高い人ほど対策を行っている傾向が見られた。ニュースをよく見ている高年層の人の方が、携帯ラジオや懐中電灯などの「3 防災用品等」や食料や飲料水などの「4 生活品備蓄」といった 3 つの防災対策のカテゴリーのうち、2 つの防災対策を行っていることが分かった。

(2) 仮説Ⅱの検証

仮説Ⅱの検証にあたって、まず直接被災者の除去を行った。該当者は 31 名おり、以下の表 1 1-7 が被災者を除いた性別と年齢の単純集計である。また、次頁の表 1 1-8 はどの年齢層に間接的被災体験者が多いかを検討するためのクロス集計である。

表 1 1-7 直接被災者を除いた性別と年齢の単純集計

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	合計	人数
男性	8.4	16.2	15.6	10.4	18.8	30.5	100.0	154
女性	4.4	16.2	20.1	18.6	24.5	16.2	100.0	204
358人 (欠損値=4)								

表 1 1-8 年齢と間接的被災体験のクロス集計

	間接的被災体験者	間接的被災体験者でない	合計	人数	χ^2 値	p 値
20代	36.4	63.6	100.0	22	9.7356	p=0.0831
30代	31.0	69.0	100.0	58		
40代	24.6	75.4	100.0	65		
50代	31.5	68.5	100.0	54		
60代	46.8	59.2	100.0	79		
70代	51.3	58.7	100.0	80		

表 1 1-8 より、有意な差は見られなかったが、若年層よりも高年層の方が間接的被災体験者は多い。これは、高年層の方が家にいる時間が長いからだと推測される。

①間接的被災体験と防災対策の取り組み状況および、防災対策の取り組み度について

表 1 1-9～表 1 1-11 は間接的被災体験者と間接的被災体験者でない者別に、「防災対策の取り組み状況」と「防災対策の取り組み度」の相関係数を見るため相関分析を行った。

表 1 1-9 テレビの視聴時間と減災対策の取り組み状況と取り組み度の相関分析

	M	SD	相 関 係 数		
			1	2	3
1 テレビの視聴時間	373.62	242.09	—	0.01	0.05
2 減災対策 (取り組み状況)	0.61	0.82		—	0.11 *
3 減災対策 (取り組み度)	2.60	1.84			—

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表 11-10 テレビの視聴時間と防災用品等の取り組み状況と取り組み度の相関分析

	M	SD	相 関 係 数		
			1	2	3
1 テレビの視聴時間	373.62	242.09	—	0.07	0.07
2 防災用品等（取り組み状況）	1.10	1.53		—	-0.03
3 防災用品等（取り組み度）	7.01	2.68			—

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表 11-11 テレビの視聴時間と生活品備蓄の取り組み状況と取り組み度の相関分析

	M	SD	相 関 係 数		
			1	2	3
1 テレビの視聴時間	373.62	242.09	—	0.03	0.10
2 生活品備蓄（取り組み状況）	0.67	1.08		—	-0.01
3 生活品備蓄（取り組み度）	4.59	2.40			—

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表 11-9～表 11-11 のいずれから、「テレビの視聴時間」と「減災対策」「防災用品等」「生活品備蓄」の取り組み状況および取り組み度に相関は見られなかった。また、表 11-9 より、震災後に「2 減災対策」を行った人は、調査時点である震災から半年後もその備えは十分であるといった極めて弱い正の相関が見られた（ $r=0.11$ ）。

②間接的被災体験と震災後半月間の購入物品の量、防災対策の取り組み度について

次頁の表 11-12～表 11-14 は、「間接的被災体験」「震災後半月間の購入物品の量」「防災対策の取り組み度」について、それぞれ「水」「食料品」「日用品」「懐中電灯」「全体」というように、項目分けをして相関分析を行った結果である。

分析のさいには、問 7＜震災後半月間の購入物品の量＞の 9 項目を、「a 水」の 1 項目のみを用いた変数「水」と、「b 米」「c インスタント食品」「k 菓子類」「m 非常食・保存食」の 4 項目を合成した変数「食料品」、「e ガスボンベ」「f トイレットペーパー」「j マスク」の 3 項目を合成した変数「日用品」、「d 電池・懐中電灯」の 1 項目のみを用いた変数「懐中電灯」の 4 カテゴリーに分類して使用した。また、同時に、全項目を合成した「全体」という変数も用意した。

また、こうした問 7 と対応するよう、問 19＜防災対策の取り組み度＞からは、「c 飲料水の確保」、「b 食料の確保」、「f 日用品の確保」、「a 懐中電灯の準備」を選んで用い、また、全項目を合成した変数「全体」も作成した。

表 11-12 テレビの視聴時間と購入物品の量「全体・水・食料品」の相関係数

	相 関 係 数			
	1	2	3	4
1 テレビの視聴時間	—	0.06	-0.08	0.09
2 購入物品の量（全体）		—		
3 購入物品の量（水）			—	
4 購入物品の量（食料品）				—

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表 1 1-1 3 テレビの視聴時間と防災対策の取り組み度「全体・飲料水・食料」の
相関係数

	相 関 係 数			
	1	2	3	4
1 テレビの視聴時間	—	0.10	-0.11 *	-0.13 *
2 防災対策の取り組み度（全体）		—		
3 防災対策の取り組み度（飲料水）			—	
4 防災対策の取り組み度（食料）				—

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表 1 1-1 4 購入物品の量「全体・水・食料品」と防災対策の取り組み状況「全体・飲料
水・食料」の相関係数

	相 関 係 数			
	1	2	3	4
1 購入物品の量（2全体・3水・4食料品）	—	0.12 *	0.22 **	-0.13 *
2 防災対策の取り組み度（全体）		—		
3 防災対策の取り組み度（飲料水）			—	
4 防災対策の取り組み度（食料品）				—

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

まず、「テレビの視聴時間」と「購入物品の量（全体）」、「防災対策の取り組み度（全体）」で相関分析を行った。次に、「テレビの視聴時間」と「購入物品の量（水）」、「防災対策の取り組み度（飲料水）」で相関分析を行った。このような要領で残りの「食料品」「日用品」「懐中電灯」についても同じように相関分析を行った。その結果を分かりやすくまとめたものが、表 1 1-1 2～表 1 1-1 4 である。「日用品」と「懐中電灯」からは相関が見られなかったため、表は掲載しなかった。

表 1 1-1 2 では、テレビの視聴時間が長い人ほど購入物品の量が多いと考えていたが、そのような相関は見られなかった。

表 1 1-1 3 では、テレビの視聴時間が長い人ほど半年後の防災対策の取り組み度は不十分であると考えていたが、「全体」では相関が見られなかった。だが、テレビの視聴時間と「飲料水」（ $r=-0.11$ ）、「食料」（ $r=-0.13$ ）との間に極めて弱い負の相関が見られた。「飲料水」と「食料」については購入の有無に関わらず、半年後には取り組みが不十分であるといえる。

また、表 1 1-1 4 より、「全体」と「水」購入量が多い人は、半年後の「全体」（ $r=0.12$ ）と「飲料水」（ $r=0.22$ ）の取り組みは十分であるといった極めて弱い正の相関が見られた。逆に、「食料品」の購入量が多い人は、「食料」（ $r=-0.13$ ）の半年後の取り組みは不十分であるといった極めて弱い負の相関が見られた。

1 1. 5 考察

以上の分析結果から、仮説 I の「日頃からニュースを見ている人は、防災対策を行っている」は立証されなかった。私の意図する日本社会を信頼していないからニュースを見ているのとは違い、信頼しているから見ている、もしくは別の意図があることが分かった。また、ニュースを見ている人は防災対策を行ってはいたが、日本社会を信頼していないか

ら防災対策を行うわけでもなかった。

このような結果となった原因として、そもそもニュースを見ている人が日本社会を信頼しているのではなく、日本社会を信頼しているからこそニュースを見ているのではないかと考えられる。仮説Ⅰの検証の中に、日本社会を信頼している人は、「減災対策」を行う傾向があるという結果があったが、これも耐震基準を決めたり、防災の方法や災害情報を流したりするのは日本の政府であり、テレビから流れるそうした情報や、それを発信する政府を信じている人たちが「減災対策」を行うようになったのではないかと考えられる。

また、「減災対策」「防災用品等」「生活品備蓄」のいずれかの防災対策を行っている人は、他の防災対策も行っている傾向があることが分かった。年齢層別の結果からは、高年層の人ほど防災対策を行っていることが分かった。

仮説Ⅱの「間接的被災体験者は、一時的な防災対策を行う」については、間接的被災体験者は防災対策を行うが、半年後には十分ではないと考えていた。しかし、テレビの視聴時間が多い人（間接的被災体験者）が、必ずしも防災対策を行うとはいえなかった。また、テレビの視聴時間が多い人（間接的被災体験者）の防災対策が、必ずしも一時的なものであるとも言い切れなかった。

さらに、間接的被災体験者は、買占め行為を行うが、半年後には備えが十分ではないとも考えていたが、テレビの視聴時間が多い人（間接的被災体験者）は、購入物品の量が多いというわけでもなかった。以上のことから、仮説は立証されなかった。

その理由のひとつには、それぞれの家庭において、東日本大震災の前からすでに防災対策を行っていた人が多いことがあげられる。

また、ニュースを見て災害の恐怖を知り、被害を最低限に抑えたいと考え、震災後から「減災対策」を行った人も少なからずいるであろう。今回の分析からは、テレビの視聴時間に関係なく「減災対策」を行った人は、その後も備えは十分であったことがわかった。これは、「減災対策」は被害を最低限に抑えるための備えであり、物ではないため必然的に継続されていたということが考えられる。

そして、間接的被災体験者と買占め行為については、関連性はあまりなかったといえる。しかし、震災後半月の間に購入した「全体」と「飲料水」の半年後の備えは十分であったが、「食料品」については半年後には不十分であるという傾向があった。これについては、「水」は「食料品」と比べて賞味期限が長く、比較的長い間保存が可能であるが、「食料品」は賞味期限が短いため、継続的に買い続けなければいつかは無くなってしまうということが原因として考えられる。

私の意図した一時的な防災対策には結びつかなかったが、このような結果になったのは、東日本大震災が与えた影響が強く、直接的にはそれほど被害のなかった千葉市民でさえも、防災意識が高まるきっかけになったことが原因のうちのひとつではないだろうか。未曾有の大震災ということで、防災に対する意識が薄れることなく対策を行っている人や、継続している人はたくさんいると考えられる。

今回このような調査をする上で、間接的被災体験者を設定したが、情報メディアをテレビに絞ってよかったのかを考えさせられた。スーパーマーケット等で、品物が無くなったというような情報は、テレビよりもインターネットや知人からの情報の方が、最寄りのスーパーマーケットの情報を正確に知ることが可能であるし、素早くその情報を得られると考えられる。

また、果たして直接被災者を除く、情報を大量に浴びた人のみを対象にしてよかったのかを考えさせられた。東日本大震災後に、たくさんの情報を浴びすぎて精神的に苦しい思いをした人もいたという話もたくさん耳にした。このような人たちをどうするかなど、間接的被災体験者の概念が自分の中で曖昧であったことが反省点である。

しかし、仮説そのものは立証されなかったが、千葉市民の防災意識の高さを知ることができたことは、私自身にとっても大きな収穫である。

【補遺】世帯収入の差が及ぼす防災対策への影響について

1 1. 6 問題意識

ある災害が発生すると、毎度のことのよう防災対策に対する意識が高まるが、実際にそれを行動に移せる人はというと、いったいどれほどのものだろうか。人それぞれ災害経験や防災意識によって違いはあるだろう。しかし、いつまでも防災対策を行えないのは、現実的には「お金がかかるから」という理由が多いからではないだろうか。

そこで、防災対策には収入の差が大きく関与しているのではないかと考えた。収入が高ければ高いほど、コストのかかる防災対策からコストのかからない防災対策まで行うようになるのではないだろうか。また、その一方で、大災害が発生すると必ずと言ってもいいほど起こりやすい、買占め行為にも走りやすくなってしまう可能性が高いと考えた。

以上のことから収入の差が及ぼす防災対策への影響について、次のような仮説を立てた。

1 1. 7 仮説

- I 世帯収入が高い人は、災害発生から半月くらいの間に買占めをする傾向があり、十分な防災対策に取り組む
- II 世帯収入が高い人は、全般的な防災対策を行っている

1 1. 8 仮説検証に使用する質問項目

(1) 独立変数

<世帯収入>では、問33「あなたの世帯の収入は、税込みでおおよそどのくらいですか」という質問を用いた（巻末基礎集計表 問33参照）。

「200万円未満」「200万円～400万円未満」を「低収入」、「400万円～600万円未満」

「600 万円～800 万円未満」を「平均的収入」、「800 万円～1000 万円未満」「1000 万円～1500 万円未満」「1500 万円以上」を「高収入」とカテゴリー統合した。その結果、「低収入」が 35.8%、「平均的収入」が 40.1%、「高収入」が 24.1%であった。

(2) 従属変数

従属変数については、本章で使用した問 7 <震災後半月間の購入物品の量>、問 1 8 <防災対策の取り組み状況>、問 1 9 <防災対策の取り組み度>を引き続き用いる。

1 1. 9 仮説の検証

(1) 仮説 I の検証

表 1 1-1 5、表 1 1-1 6 は世帯収入を「低収入」「平均的収入」「高収入」の 3 群に区分し、「震災後半月間の購入物品の量」と「防災対策の取り組み度」を従属変数として分散分析を行った結果である。

表 1 1-1 5 世帯収入と震災後半月間の購入物品の量

独立変数	N	平均	標準偏差
1 低収入	119	17.9243697	9.90048763
2 平均的収入	142	18.3239437	8.10441548
3 高収入	85	20.7882353	6.31154294
F値=3.26		P値=0.0396	

]

*

* p<.05

表 1 1-1 6 世帯収入と防災対策の取り組み度

独立変数	N	平均	標準偏差
1 低収入	122	15.0163934	6.15231409
2 平均的収入	144	14.7222222	6.50168826
3 高収入	85	17.4117647	5.50604455
F値=5.63		P値=0.0039	

]

*

* p<.01

表 1 1-1 5において、F 値=3.26、P<.05 で有意差が見られた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、「高収入」と「低収入」の間に有意差があることが分かった。

「高収入」世帯の人は、日頃からある程度の金銭的な貯蓄があると考えられる。そのため、いざという時にもまとまったお金で、大量に物を購入することができると考えられる。一方、日頃からあまり金銭的な余裕がない「低収入」世帯の人は、購入したくても大量には購入できず、最小限の購入にとどまったと考えられる。

表 1 1-1 6において、F 値=5.63、P<.01 で有意差が見られた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、「高収入」と「低収入」・「平均的収入」との間に有意差があることが分かった。このことから、「低収入」世帯の人や「平均的収入」世帯の人は、「高収入」世帯の人とは異なり、災害に備えた防災対策を行っても、金銭的な問題により、十分には続かないと考えられる。

(2) 仮説Ⅱの検証

表 1 1・1 7～表 1 1・1 9 は世帯収入を「低収入」「平均的収入」「高収入」の 3 群に区分し、「減災対策」と「防災用品等」と「生活品備蓄」を従属変数として分散分析を行った結果である。

表 1 1・1 7 世帯収入と減災対策

独立変数	N	平均	標準偏差
1 低収入	125	1.74400000	1.54973463
2 平均的収入	143	1.82517483	1.34956793
3 高収入	90	2.40000000	1.46724537
F値=6.11		P値=0.0025	

表 1 1・1 8 世帯収入と防災用品等

独立変数	N	平均	標準偏差
1 低収入	125	4.32000000	1.86478400
2 平均的収入	144	4.13888889	1.80369129
3 高収入	88	4.48863636	1.63295317
F値=1.08		P値=0.3414	

表 1 1・1 9 世帯収入と生活品備蓄

独立変数	N	平均	標準偏差
1 低収入	128	2.57812500	1.37244752
2 平均的収入	149	2.45637584	1.30737627
3 高収入	90	2.74444444	1.31166856
F値=1.32		P値=0.2691	

表 1 1・1 7において、F 値=6.11、P<.01 で有意差が見られた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、「高収入」と「低収入」・「平均的収入」との間に有意差があることが分かった。このことから、「高収入」世帯の人は金銭的な余裕から、災害に備えて比較的成本のかかる「減災対策」を行う傾向があると考えられる。

表 1 1・1 8、表 1 1・1 9においては、有意差は見られなかった。どちらの表からも、「高収入」の平均値は「低収入」・「平均的収入」よりも高くなっているが、有意差が生じるほどではないということである。だが、平均値を見ると「減災対策」だけでなく、「防災用品等」や「生活品備蓄」も行っているように見える。このことから、はっきりとは言い切れないかもしれないが、「高収入」の世帯は全般的な防災対策を行っていると考えられる。

1 1. 1 0 考察

以上の分析結果から、仮説Ⅰの「世帯収入が高い人は、災害発生から半月くらいの間に買占めをする傾向があり、十分な防災対策に取り組む」は、分散分析の結果、震災後半月間の購入物品の量と防災対策の取り組み度の両方において有意差が見られたため、仮説は立証されたといえる。収入が十分にある世帯の人は、その収入の一部を災害に備えて使用していることが分かった。収入がそれほど高くない世帯の人は、やはり必要最低限の購入、取り組みにとどまってしまうようである。

仮説Ⅱの「世帯収入が高い人は、全般的な防災対策を行っている」は、分散分析の結果、減災対策においては有意差が見られたが、防災用品等の備えや生活品備蓄の備えにおいて

は有意差が見られなかった。しかし、「高収入」の平均値は、「防災用品等」や「生活品備蓄」のどちらとも「低収入」や「平均的収入」と比べると高いため、はっきりとは言い切れないが、仮説は立証されたといえる。「減災対策」、「防災用品等」、「生活品備蓄」のすべての防災対策を行うには、それ相応のコストはかかる。できれば収入の高低差に関係なく防災対策を行えばそれが一番よいのだが、「低収入」や「平均的収入」の世帯も「高収入」の世帯のように、すべての防災対策を行うのは現実的には厳しい。そのため、すべてではなくても、必要最低限の装備や食料等の備えだけは、日頃から意識していくことが大切である。

問題意識で述べたように、防災対策を施す上で重要なことは、やはり少なからず収入も関連していることが分かった。しかし、収入が低いからといって、まったく防災対策を行っていないわけでもない。収入が少なくとも飲料水や食料品ならば、物にもよるがある程度は日持ちもするし、低収入の世帯でも少しずつ蓄えていくことは十分可能である。防災対策を行う決め手となるものが、収入には限らないことが分かった今、やはり一人ひとりの意識の向上が今後も課題となるだろう。いつ起こるか分からない災害のために、欲しい物を我慢してまで防災対策のための積立貯金をする気にはなれないかもしれない。ただ、命あつての人生だということを、本調査を通して私は改めて実感した。

参考文献・参考 URL 一覧

- 安倍北夫, 1986, 『パニックの人間科学—防災と安全の危機管理—』ブレーン出版.
- 安城市池浦町, 2010, 「いけうら防災ネット」
(<http://www.ai21.net/bousai/taiou/taiou.html>, アクセス日: 2012 年 3 月 23 日).
- 千葉県総合企画部統計課, 2011, 「分野別統計情報」 > 「人口・世帯」 > 「千葉県毎月常住人口調査」
(<http://www.pref.chiba.lg.jp/toukei/toukeidata/joujuu-geppou/index.html>)
- 千葉市経済農政局経済部経済企画課, 2008, 「企業立地ガイド (主要業務地域)」(http://www.city.chiba.jp/keizainosei/keizai/kikaku/kigyuu_chiiki.html, アクセス日: 2012 年 5 月 22 日).
- 千葉市公式ホームページ (<http://www.city.chiba.jp/>).
- 千葉市総合政策局, 2011a, 「人口統計」
(http://www.city.chiba.jp/sogoseisaku/sogoseisaku/tokei/zen_index.html)
- 千葉市総合政策局, 2011b, 「千葉市新基本計画」(<http://www.city.chiba.jp/sogoseisaku/sogoseisaku/kikaku/new-gplan.html#gian>, アクセス日: 2012 年 5 月 22 日).
- 千葉市総務局防災対策課ホームページ (<http://www.city.chiba.jp/somu/shichokoshitsu/bosai/>).
- 千葉市総務局危機管理課, 2010, 「千葉市地域防災計画概要版」
(<http://www.city.chiba.jp/somu/kikikanri/chiikibou/220401gaiyoubann.pdf>).
- 福田充・中森広道・廣井脩・森康俊・馬越直子・紙田毅, 2000, 「平成 10 年 8 月那須集中豪雨災害における災害情報と住民の避難行動」『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』14: 214-220.
- 福田充・関谷直也, 2005, 「平成 16 年 台風 23 号豪雨災害、新潟・福島集中豪雨における住民意識と避難行動」『日本社会心理学会第 46 回大会発表論文集』, 752-753.
- 平山るみ・楠見孝, 2004, 「批判的思考が結論導出プロセスに及ぼす影響: 証拠評価と結論生成課題を用いての検討」『教育心理学研究』52(2): 186-198.
- 北後明彦ら, 2009, 「都市集合住宅のコミュニティと相互支援に関する調査研究: その 2. 防災対策と非常時相互支援意識について(安全計画, 建築計画 I)」『学術講演梗概集. E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2009』973-974.
- 今本博健・岡田憲夫・河田恵昭・林春男著, 2003, 『防災講座 第 4 巻 防災計画論』山海堂.
- 片田敏孝・児玉真・桑沢敬行・越村俊一, 2005, 「住民の避難行動にみる津波防災の現状と課題—2003 年 宮城県沖の地震、気仙沼市民意識調査から—」『土木学会論文集』789: 93-104.
- 家庭問題研究所, 1997, 『阪神・淡路大震災が非被災地に与えた影響に関する調査研究報告書——横浜市民への影響を中心にして——』家庭問題研究所.
- 倉沢進, 1998, 『コミュニティ論』放送大学出版会.
- Merton, R.K., 森東吾・森好夫・金沢実訳, 1969, 『現代社会学体系 第 13 巻 社会理論と機能分析』青木書店, 102.

- もり（個人運営サイト），2012，「防災対策回覧板」＞千葉県自治体防災リンク集＞千葉市防災情報
 （http://www.ksamtys.net/bousai/jichitai_bousai/chiba/chiba_chiba.html）.
- 元吉忠寛，2004，「災害に関する心理学的研究の展望 - 防災行動の規定因を中心として -」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）』51：9-33.
- 村上宣寛・村上千恵子，2001，『主要5因子性格検査ハンドブック——性格測定の基礎から主要5因子の世界へ』学芸図書.
- 内閣府，2001，『復興支援組織設立に関する検討調査 調査報告書』
 （<http://www.bousai.go.jp/fukkou/pdf/fukkoukentou.pdf>、アクセス日：2012年3月23日）.
- 内閣府，2002，『わが国の災害対策』
 （<http://www.bousai.go.jp/panf/saigaipanf.pdf>、アクセス日：2012年3月23日）
- 内閣府，2009，「『防災に関する特別世論調査』の概要」
 （<http://www8.cao.go.jp/survey/tokubetu/h21/h21-bosai.pdf>）
- 内閣府，2010，『平成22年 防災白書』
 （<http://www.bousai.go.jp/hakusho/h22/index.htm>、アクセス日：2012年3月23日）
- 内閣府，2011，『日本の災害対策』
 （http://www.bousai.go.jp/linfo/pdf/saigaipanf_e.pdf、アクセス日：2012年3月23日）
- NHK放送文化研究所，2011，『2010年 国民生活時間調査 報告書』
- 小野澤章子，2008，「防災行動・防災意識の風化と地域社会 ——火山災害地域の住民調査結果の比較から——」『岩手県立大学社会福祉学部紀要』10：1-12.
- Rosnow, Ralph L. and Gary Alan Fine, 1976, *RUMOR AND GOSSIP The Social Psychology of Hearsay*. (= 南博訳，1982，『うわさの心理学—流言からゴシップまで—』岩波現代選書).
- 淑徳大学総合福祉学部人間社会学科，2011，『平成22年度 フィールドワーク調査報告書 第8号』.
- 総務省消防庁防災対策本部，2012，「平成23年 東北地方太平洋地震（東日本大震災）について（第145報）」（平成24年3月13日付発表）（<http://www.fdma.go.jp/bn/data/%E5%B9%B3%E6%88%9023%E5%B9%B4%E6%882011%E5%B9%B4%E6%89%E6%9D%B1%E5%8C%97%E5%9C%B0%E6%96%B9%E5%A4AA%E5%B9%B3%E6%B4%8B%E6%B2%96%E5%9C%B0%E9%9C%87%E6%88%E7%ACAC145%E5%A0%B1%E6%89.pdf>、アクセス日：2012年3月22日）.
- 総務省統計局，2011，「国勢調査」（<http://www.e-stat.go.jp/estat/html/kokusei/GL02100104.html>）
- 総務省統計局，2012，「住民基本台帳人口移動報告 平成23年結果」
 （<http://www.stat.go.jp/data/idou/2011np/kihon/youyaku/index.htm>）
- 高橋章弘・南慎一，1996，「奥尻町住人の防災意識について：青苗地区住人に対するアンケート調査から」『地域安全学会論文報告集』6：115-120.
- 高松地方气象台，2006，「防災気象情報の手引き」＞「地震と津波の知識」＞「第20回 日本周辺で地震が多い理由」（<http://www.jma-net.go.jp/takamatsu/8/8-2/8-2-3/20.pdf>、アクセス日：2012年3月22日）.

田中淳・吉井博明，2008，『災害情報論入門』株式会社弘文堂.

田中重好，2007，『共同性の地域社会学——祭り・雪処理・交通・災害』ハーベスト社.

矢守克也，2008，「再論——正常化の偏見」、『実験社会心理学研究』48 (2) : 137-149.

あとがき

今年度の調査テーマが「防災意識と防災行動」だったのは、まったくの偶然だった。

「フィールドワークⅠ・Ⅱ」は、淑徳大学総合福祉学部人間社会学科において毎年開かれる調査実習科目である。昨年度に行った調査のテーマは「防犯意識と防犯対策」であった。そして今年度は、昨年度に引き続き、「人びとの安心と安全」について総合的な考察を図るため、「防災意識と防災行動について調査しよう」と、2011年初頭に提案されたテーマだった。

そんな折、東日本大震災が起こった。千葉市が受けた被害は大きかった。

そうした状況下において、「防災」というテーマを掲げ、千葉市民を対象とした調査を行なってもいいものかどうか、スタッフ側には大きな迷いと葛藤があった。調査の対象となる人びとの中には、辛い思い、辛い生活をされた人びとも多いだろう。そのような人びとに、被災状況やどのような防災対策をしていたかなどを聞くのは無神経なのではないか。また、私たちが調査を行うことで、人びとの不安感や恐怖感をますます煽る結果となりはしないだろうか。

千葉市の被害状況や復旧状況に常に目を配りつつ、テーマを見送ることも視野に入れながら、何度も議論を交わした。そして最終的には、千葉市の状況があるていど落ち着いてきたことを確かめた上で、これから先の自然災害による被害を少なくするためにも、人びとの防災意識や防災行動を明らかにする必要があると感じ、調査の実施を決定した。

そして、行くと決定したからには、被災者の方々に不快感を抱かせることがないように、また、調査が新たな不安感や恐怖感を与えることのないよう、調査票の質問内容やその文言などには細心の注意を払い、何度も何度も校正を繰り返した。

「フィールドワーク」における調査票の作成には、毎年、学生にもかなりの時間や労力を要求しているが、今年度の学生には、上述したような、調査が人びとに及ぼす影響を十分に説明した上で、例年以上の時間と労力、そして細やかな配慮と緊張感を要求することとなった。

本年度の学生たちは、皆それぞれに、社会調査の何たるかを理解し、受け止め、真剣に調査票の作成・調査の実施へと取り組んでくれた。

調査には、調査票の作成以外にもさまざまな作業過程があり、他の授業とは比べものにならないほどの課外作業を要求するが、そうした作業にも不満のひとつも言うことなく、時にはひとりで黙々と、時には全員で賑やかに、それでも調査に対する真摯な姿勢は忘れることなく、精一杯に取り組んでくれた。

その集大成とも言えるべきものが、この報告書である。学生のひとりひとりが、どのような問題関心のもとに、何をテーマ化し、それらの問題にどのように取り組んできたのかが伺えるだろう。

人間社会学科における「フィールドワークⅠ・Ⅱ」は、学部・学科の再編成のため今年度をもって閉講となるが、その最後の年度に、こうした報告書を出せたのは幸いである。

この報告書において学生たちが明らかにしていった数々の問題が、千葉市の、そして千葉市に住む人びとの今後の防災対策へと役立てられることを願ってやまない。

平成 24 年 3 月

社会調査助手 佐藤麻衣

基 礎 集 計 表

注) 基礎集計表における年齢階級は、本来「70代」とすべきところを「70歳以上」と表記してある。これは調査票を発送した2011年9月13日からその回収期限である9月26日までの間に誕生日を迎え、「80歳」となった人が1人いたためである。本調査においては、この1人も含め分析することにした。

問1 あなたが現在お住まいの地域(自宅から徒歩15分くらいの範囲)は、過去に次のa～eのような被害がありましたか。それぞれについて、下記の1～3のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問1		単位: %				
a 浸水被害						
現在お住まいの地域で						
	1 受 け た が 被 害 を	2 を 被 知 害 つ て 受 い け る た こ と	3 聞 知 い ら な い ・ い	計		
全体	2.5	13.4	84.2	100.0	366人	
性別	男	2.6	13.6	83.9	100.0	155人
	女	2.4	12.9	84.7	100.0	209人
年齢	20-29歳	-	12.5	87.5	100.0	24人
	30-39歳	4.8	4.8	90.5	100.0	63人
	40-49歳	2.9	18.8	78.3	100.0	69人
	50-59歳	1.7	15.5	82.8	100.0	58人
	60-69歳	2.5	6.3	91.3	100.0	80人
	70歳以上	1.5	21.7	76.8	100.0	69人

問1		単位: %				
b 火災						
現在お住まいの地域で						
	1 受 け た が 被 害 を	2 を 被 知 害 つ て 受 い け る た こ と	3 聞 知 い ら な い ・ い	計		
全体	1.1	18.2	80.7	100.0	363人	
性別	男	0.7	16.2	83.1	100.0	154人
	女	1.5	19.8	78.7	100.0	207人
年齢	20-29歳	-	25.0	75.0	100.0	24人
	30-39歳	-	14.3	85.7	100.0	63人
	40-49歳	1.5	16.2	82.4	100.0	68人
	50-59歳	-	24.6	75.4	100.0	57人
	60-69歳	2.5	15.0	82.5	100.0	80人
	70歳以上	1.5	20.6	77.9	100.0	68人

問1		単位: %				
c がけ崩れ						
現在お住まいの地域で						
	1 受 け た が 被 害 を	2 を 被 知 害 つ て 受 い け る た こ と	3 聞 知 い ら な い ・ い	計		
全体	0.3	3.1	96.6	100.0	357人	
性別	男	-	5.3	94.7	100.0	151人
	女	0.5	1.5	98.0	100.0	204人
年齢	20-29歳	-	4.2	95.8	100.0	24人
	30-39歳	-	3.2	96.8	100.0	62人
	40-49歳	-	-	100.0	100.0	68人
	50-59歳	-	3.6	96.4	100.0	56人
	60-69歳	1.3	2.5	96.2	100.0	79人
	70歳以上	-	6.2	93.9	100.0	65人

問1		単位: %				
d 液状化・地盤沈下						
現在お住まいの地域で						
	1 受 け た が 被 害 を	2 を 被 知 害 つ て 受 い け る た こ と	3 聞 知 い ら な い ・ い	計		
全体	7.7	24.6	67.7	100.0	378人	
性別	男	9.2	27.0	63.8	100.0	163人
	女	6.6	22.5	70.9	100.0	213人
年齢	20-29歳	8.3	16.7	75.0	100.0	24人
	30-39歳	12.7	30.2	57.1	100.0	63人
	40-49歳	2.9	30.0	67.1	100.0	70人
	50-59歳	5.2	24.1	70.7	100.0	58人
	60-69歳	8.5	13.4	78.1	100.0	82人
	70歳以上	7.8	28.6	63.6	100.0	77人

問1		単位: %				
e 建物の倒壊(全壊・半壊)						
現在お住まいの地域で						
	1 受 け た が 被 害 を	2 を 被 知 害 つ て 受 い け る た こ と	3 聞 知 い ら な い ・ い	計		
全体	0.6	10.0	89.4	100.0	359人	
性別	男	-	9.7	90.3	100.0	155人
	女	1.0	10.4	88.6	100.0	202人
年齢	20-29歳	-	4.2	95.8	100.0	24人
	30-39歳	-	11.1	88.9	100.0	63人
	40-49歳	-	16.4	83.6	100.0	67人
	50-59歳	1.8	5.4	92.9	100.0	56人
	60-69歳	1.3	10.0	88.8	100.0	80人
	70歳以上	-	9.1	90.9	100.0	66人

問2 あなたが現在お住まいの地域(自宅から徒歩15分くらいの範囲)は、過去に次のa～eのような災害に対して地盤や地勢などが強い地域と思いますか。それぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問2		単位: %				
a 地震に対して		1	2	3	4	計
		強い と思う	強い どちら かとい え	弱い どちら かとい え	弱い と思う	
全体		15.5	44.6	25.8	14.2	100.0 388人
性別	男	16.9	41.0	22.9	19.3	100.0 166人
	女	14.6	47.3	27.7	10.5	100.0 220人
年齢	20-29歳	8.0	44.0	36.0	12.0	100.0 25人
	30-39歳	14.3	31.8	30.2	23.8	100.0 63人
	40-49歳	15.5	45.1	22.5	16.9	100.0 71人
	50-59歳	11.9	57.6	25.4	5.1	100.0 59人
	60-69歳	20.0	48.2	20.0	11.8	100.0 85人
	70歳以上	17.3	40.7	27.2	14.8	100.0 81人

問2		単位: %				
b 火災に対して		1	2	3	4	計
		強い と思う	強い どちら かとい え	弱い どちら かとい え	弱い と思う	
全体		11.1	55.4	28.4	5.0	100.0 377人
性別	男	11.2	60.3	22.4	6.2	100.0 161人
	女	11.2	51.9	32.7	4.2	100.0 214人
年齢	20-29歳	4.0	44.0	44.0	8.0	100.0 25人
	30-39歳	11.3	53.2	27.4	8.1	100.0 62人
	40-49歳	14.3	57.1	25.7	2.9	100.0 70人
	50-59歳	10.5	57.9	24.6	7.0	100.0 57人
	60-69歳	8.3	63.1	25.0	3.6	100.0 84人
	70歳以上	14.7	48.0	33.3	4.0	100.0 75人

問2		単位: %				
c 豪雨に対して		1	2	3	4	計
		強い と思う	強い どちら かとい え	弱い どちら かとい え	弱い と思う	
全体		20.0	50.1	21.3	8.7	100.0 381人
性別	男	19.8	50.0	19.8	10.5	100.0 162人
	女	20.3	49.8	22.6	7.4	100.0 217人
年齢	20-29歳	12.0	56.0	16.0	16.0	100.0 25人
	30-39歳	22.6	37.1	29.0	11.3	100.0 62人
	40-49歳	14.3	47.1	30.0	8.6	100.0 70人
	50-59歳	18.6	50.9	20.3	10.2	100.0 59人
	60-69歳	22.4	58.8	14.1	4.7	100.0 85人
	70歳以上	25.0	50.0	17.1	7.9	100.0 76人

問2		単位: %				
d 台風に対して		1	2	3	4	計
		強い と思う	強い どちら かとい え	弱い どちら かとい え	弱い と思う	
全体		14.5	58.2	22.4	5.0	100.0 380人
性別	男	11.2	59.6	23.6	5.6	100.0 161人
	女	17.1	56.7	21.7	4.6	100.0 217人
年齢	20-29歳	4.0	64.0	28.0	4.0	100.0 25人
	30-39歳	14.5	51.6	24.2	9.7	100.0 62人
	40-49歳	12.7	53.5	25.4	8.5	100.0 71人
	50-59歳	17.2	58.6	19.0	5.2	100.0 58人
	60-69歳	14.1	70.6	14.1	1.2	100.0 85人
	70歳以上	18.7	49.3	29.3	2.7	100.0 75人

問2		単位: %				
e がけ崩れに対して		1	2	3	4	計
		強い と思う	強い どちら かとい え	弱い どちら かとい え	弱い と思う	
全体		45.6	36.6	12.7	5.0	100.0 377人
性別	男	46.5	36.5	13.2	3.8	100.0 159人
	女	45.4	36.1	12.5	6.0	100.0 216人
年齢	20-29歳	44.0	40.0	12.0	4.0	100.0 25人
	30-39歳	46.0	23.8	22.2	7.9	100.0 63人
	40-49歳	41.4	37.1	18.6	2.9	100.0 70人
	50-59歳	40.7	45.8	10.2	3.4	100.0 59人
	60-69歳	48.8	45.2	4.8	1.2	100.0 84人
	70歳以上	50.0	27.8	11.1	11.1	100.0 72人

問3 あなたはa～fのような経験をしたことがありますか。また、今後a～fのような経験をする可能性はどのくらいあると思いますか。Aについては下記の1・2のうちから、Bについては下記の1～3のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問3		単位：％			
a 地震が発生したとき、家具が転倒してヒヤツしたこと					
A これまで経験したことが					
		1	2		
		ある	ない	計	
全体		19.1	80.9	100.0	387人
性別	男	18.8	81.2	100.0	165人
	女	19.6	80.5	100.0	220人
年齢	20-29歳	40.0	60.0	100.0	25人
	30-39歳	17.5	82.5	100.0	63人
	40-49歳	12.7	87.3	100.0	71人
	50-59歳	22.0	78.0	100.0	59人
	60-69歳	17.4	82.6	100.0	86人
	70歳以上	20.3	79.8	100.0	79人

問3		単位：％			
b 地震が発生したとき、ガラス窓や食器等が割れてヒヤツとしたこと					
A これまで経験したことが					
		1	2		
		ある	ない	計	
全体		27.8	72.2	100.0	388人
性別	男	25.5	74.6	100.0	165人
	女	29.9	70.1	100.0	221人
年齢	20-29歳	36.0	64.0	100.0	25人
	30-39歳	19.1	81.0	100.0	63人
	40-49歳	31.9	68.1	100.0	72人
	50-59歳	26.7	73.3	100.0	60人
	60-69歳	24.4	75.6	100.0	86人
	70歳以上	34.6	65.4	100.0	78人

問3		単位：％			
c 車や自転車で走行中に事故を起こそうになって、ヒヤツとしたこと					
A これまで経験したことが					
		1	2		
		ある	ない	計	
全体		59.5	40.5	100.0	385人
性別	男	62.2	37.8	100.0	164人
	女	57.5	42.5	100.0	219人
年齢	20-29歳	80.0	20.0	100.0	25人
	30-39歳	79.4	20.6	100.0	63人
	40-49歳	69.0	31.0	100.0	71人
	50-59歳	61.0	39.0	100.0	59人
	60-69歳	45.4	54.7	100.0	86人
	70歳以上	41.6	58.4	100.0	77人

問3		単位：％			
d 火の不始末でヒヤツとしたこと					
A これまで経験したことが					
		1	2		
		ある	ない	計	
全体		31.2	68.8	100.0	385人
性別	男	22.6	77.4	100.0	164人
	女	37.0	63.0	100.0	219人
年齢	20-29歳	20.0	80.0	100.0	25人
	30-39歳	25.4	74.6	100.0	63人
	40-49歳	39.4	60.6	100.0	71人
	50-59歳	40.7	59.3	100.0	59人
	60-69歳	32.6	67.4	100.0	86人
	70歳以上	22.1	77.9	100.0	77人

問3		単位：％			
e 雪道で転びそうになってヒヤツとしたこと					
A これまで経験したことが					
		1	2		
		ある	ない	計	
全体		62.1	37.9	100.0	385人
性別	男	58.9	41.1	100.0	163人
	女	64.6	35.5	100.0	220人
年齢	20-29歳	84.0	16.0	100.0	25人
	30-39歳	68.3	31.8	100.0	63人
	40-49歳	73.2	26.8	100.0	71人
	50-59歳	68.3	31.7	100.0	60人
	60-69歳	55.8	44.2	100.0	86人
	70歳以上	42.1	57.9	100.0	76人

問3		単位：％			
f 台風や強風によって、自分の目の前に物が飛んできてヒヤツとしたこと					
A これまで経験したことが					
		1	2		
		ある	ない	計	
全体		18.8	81.3	100.0	384人
性別	男	16.5	83.5	100.0	164人
	女	20.2	79.8	100.0	218人
年齢	20-29歳	8.0	92.0	100.0	25人
	30-39歳	30.7	69.4	100.0	62人
	40-49歳	23.9	76.1	100.0	71人
	50-59歳	23.7	76.3	100.0	59人
	60-69歳	10.5	89.5	100.0	86人
	70歳以上	13.0	87.0	100.0	77人

(問3の続き)

問3		単位: %				
a 地震が発生したとき、家具が転倒してヒヤッしたこと						
B これから経験する可能性は						
		1	2	3		
		20	50	80		
		%	%	%	計	
		く	く	く		
		ら	ら	ら		
		い	い	い		
全体		28.2	51.2	20.6	100.0	365人
性別	男	23.1	58.1	18.8	100.0	160人
	女	32.5	45.3	22.2	100.0	203人
年齢	20-29歳	20.0	36.0	44.0	100.0	25人
	30-39歳	32.2	44.1	23.7	100.0	59人
	40-49歳	23.2	59.4	17.4	100.0	69人
	50-59歳	25.0	48.2	26.8	100.0	56人
	60-69歳	35.0	48.8	16.3	100.0	80人
	70歳以上	29.2	58.3	12.5	100.0	72人

問3		単位: %				
b 地震が発生したとき、ガラス窓や食器等が割れてヒヤッとしたこと						
B これから経験する可能性は						
		1	2	3		
		20	50	80		
		%	%	%	計	
		く	く	く		
		ら	ら	ら		
		い	い	い		
全体		24.9	47.4	27.7	100.0	361人
性別	男	24.7	51.9	23.4	100.0	158人
	女	25.4	43.3	31.3	100.0	201人
年齢	20-29歳	24.0	40.0	36.0	100.0	25人
	30-39歳	28.8	42.4	28.8	100.0	59人
	40-49歳	13.0	60.9	26.1	100.0	69人
	50-59歳	26.3	33.3	40.4	100.0	57人
	60-69歳	26.9	47.4	25.6	100.0	78人
	70歳以上	31.9	50.7	17.4	100.0	69人

問3		単位: %				
c 車や自転車で走行中に事故を起こそうになって、ヒヤッとしたこと						
B これから経験する可能性は						
		1	2	3		
		20	50	80		
		%	%	%	計	
		く	く	く		
		ら	ら	ら		
		い	い	い		
全体		34.4	43.0	22.6	100.0	363人
性別	男	33.1	40.1	26.8	100.0	157人
	女	35.8	45.1	19.1	100.0	204人
年齢	20-29歳	16.0	48.0	36.0	100.0	25人
	30-39歳	27.4	41.9	30.7	100.0	62人
	40-49歳	27.5	43.5	29.0	100.0	69人
	50-59歳	31.6	47.4	21.1	100.0	57人
	60-69歳	42.3	44.9	12.8	100.0	78人
	70歳以上	48.5	35.3	16.2	100.0	68人

問3		単位: %				
d 火の不始末でヒヤッとしたこと						
B これから経験する可能性は						
		1	2	3		
		20	50	80		
		%	%	%	計	
		く	く	く		
		ら	ら	ら		
		い	い	い		
全体		51.3	40.4	8.4	100.0	359人
性別	男	58.4	34.4	7.1	100.0	154人
	女	46.3	44.8	8.9	100.0	203人
年齢	20-29歳	50.0	45.8	4.2	100.0	24人
	30-39歳	68.3	28.3	3.3	100.0	60人
	40-49歳	42.9	52.9	4.3	100.0	70人
	50-59歳	37.5	48.2	14.3	100.0	56人
	60-69歳	51.3	38.5	10.3	100.0	78人
	70歳以上	58.2	31.3	10.5	100.0	67人

問3		単位: %				
e 雪道で転びそうになってヒヤッとしたこと						
B これから経験する可能性は						
		1	2	3		
		20	50	80		
		%	%	%	計	
		く	く	く		
		ら	ら	ら		
		い	い	い		
全体		42.4	37.9	19.8	100.0	354人
性別	男	46.4	35.1	18.5	100.0	151人
	女	39.8	39.8	20.4	100.0	201人
年齢	20-29歳	24.0	48.0	28.0	100.0	25人
	30-39歳	43.3	35.0	21.7	100.0	60人
	40-49歳	31.3	40.3	28.4	100.0	67人
	50-59歳	42.9	44.6	12.5	100.0	56人
	60-69歳	51.3	34.6	14.1	100.0	78人
	70歳以上	50.0	31.3	18.8	100.0	64人

問3		単位: %				
f 台風や強風によって、自分の目の前に物が飛んできてヒヤッとしたこと						
B これから経験する可能性は						
		1	2	3		
		20	50	80		
		%	%	%	計	
		く	く	く		
		ら	ら	ら		
		い	い	い		
全体		42.6	44.5	12.9	100.0	357人
性別	男	43.0	48.7	8.3	100.0	156人
	女	42.7	41.2	16.1	100.0	199人
年齢	20-29歳	40.0	60.0	-	100.0	25人
	30-39歳	41.7	46.7	11.7	100.0	60人
	40-49歳	33.3	47.8	18.8	100.0	69人
	50-59歳	30.9	60.0	9.1	100.0	55人
	60-69歳	50.0	38.5	11.5	100.0	78人
	70歳以上	56.1	28.8	15.2	100.0	66人

問4 あなたは次のa～fのような危険が、自分の身に及ぶ可能性はどのくらいあると思いますか。それぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問4		単位：％					
a 地震が発生した時、家具の転倒によってケガをする可能性が		1	2	3	4	計	
		あ る と 思 う	あ ど ち ら か と 思 う い え ば	な ど い ち ら か と 思 う い え ば	な い と 思 う		
全体		25.3	42.8	26.3	5.7	100.0	388人
性別	男	26.7	46.7	20.0	6.7	100.0	165人
	女	24.0	40.3	30.8	5.0	100.0	221人
年齢	20-29歳	32.0	56.0	12.0	—	100.0	25人
	30-39歳	17.5	47.6	27.0	7.9	100.0	63人
	40-49歳	27.8	36.1	33.3	2.8	100.0	72人
	50-59歳	25.0	36.7	35.0	3.3	100.0	60人
	60-69歳	23.3	51.2	19.8	5.8	100.0	86人
	70歳以上	28.2	37.2	24.4	10.3	100.0	78人

問4		単位：％					
b 地震が発生した時、ガラス窓や食器等によってケガをする可能性が		1	2	3	4	計	
		あ る と 思 う	あ ど ち ら か と 思 う い え ば	な ど い ち ら か と 思 う い え ば	な い と 思 う		
全体		26.4	48.2	21.0	4.4	100.0	386人
性別	男	26.1	52.7	15.8	5.5	100.0	165人
	女	26.5	44.8	25.1	3.7	100.0	219人
年齢	20-29歳	32.0	48.0	20.0	—	100.0	25人
	30-39歳	20.6	47.6	27.0	4.8	100.0	63人
	40-49歳	28.2	52.1	16.9	2.8	100.0	71人
	50-59歳	29.3	44.8	22.4	3.5	100.0	58人
	60-69歳	26.7	53.5	15.1	4.7	100.0	86人
	70歳以上	24.1	41.8	26.6	7.6	100.0	79人

問4		単位：％					
c 車や自転車の事故で、ケガをする可能性が		1	2	3	4	計	
		あ る と 思 う	あ ど ち ら か と 思 う い え ば	な ど い ち ら か と 思 う い え ば	な い と 思 う		
全体		28.8	40.9	25.7	4.7	100.0	386人
性別	男	33.9	39.4	20.6	6.1	100.0	165人
	女	24.7	42.5	29.2	3.7	100.0	219人
年齢	20-29歳	40.0	48.0	12.0	—	100.0	25人
	30-39歳	22.2	55.6	20.6	1.6	100.0	63人
	40-49歳	42.3	29.6	23.9	4.2	100.0	71人
	50-59歳	27.1	37.3	30.5	5.1	100.0	59人
	60-69歳	23.5	48.2	25.9	2.4	100.0	85人
	70歳以上	25.3	32.9	30.4	11.4	100.0	79人

問4		単位：％					
d 自分の不注意で火事を起こしてしまう可能性が		1	2	3	4	計	
		あ る と 思 う	あ ど ち ら か と 思 う い え ば	な ど い ち ら か と 思 う い え ば	な い と 思 う		
全体		8.3	23.4	49.1	19.2	100.0	385人
性別	男	9.8	20.1	47.0	23.2	100.0	164人
	女	6.9	25.6	51.1	16.4	100.0	219人
年齢	20-29歳	12.0	20.0	52.0	16.0	100.0	25人
	30-39歳	1.6	19.1	55.6	23.8	100.0	63人
	40-49歳	9.9	25.4	47.9	16.9	100.0	71人
	50-59歳	8.5	27.1	45.8	18.6	100.0	59人
	60-69歳	11.8	31.8	45.9	10.6	100.0	85人
	70歳以上	6.4	14.1	50.0	29.5	100.0	78人

問4		単位：％					
e 雪道で転んでしまう可能性が		1	2	3	4	計	
		あ る と 思 う	あ ど ち ら か と 思 う い え ば	な ど い ち ら か と 思 う い え ば	な い と 思 う		
全体		22.3	36.4	24.9	16.4	100.0	385人
性別	男	18.9	36.6	20.7	23.8	100.0	164人
	女	24.7	36.1	28.3	11.0	100.0	219人
年齢	20-29歳	37.5	33.3	20.8	8.3	100.0	24人
	30-39歳	23.8	42.9	20.6	12.7	100.0	63人
	40-49歳	26.8	32.4	30.8	7.0	100.0	71人
	50-59歳	18.6	47.5	15.3	18.6	100.0	59人
	60-69歳	23.3	36.1	25.6	15.1	100.0	86人
	70歳以上	14.1	26.9	28.2	30.8	100.0	78人

問4		単位：％					
f 台風や強風の時、落下物や平井物によってケガをする可能性が		1	2	3	4	計	
		あ る と 思 う	あ ど ち ら か と 思 う い え ば	な ど い ち ら か と 思 う い え ば	な い と 思 う		
全体		18.3	35.3	38.7	7.7	100.0	388人
性別	男	18.7	38.6	34.3	8.4	100.0	166人
	女	17.7	32.7	42.3	7.3	100.0	220人
年齢	20-29歳	16.0	28.0	52.0	4.0	100.0	25人
	30-39歳	12.7	38.1	44.4	4.8	100.0	63人
	40-49歳	21.1	31.0	45.1	2.8	100.0	71人
	50-59歳	13.6	42.4	30.5	13.6	100.0	59人
	60-69歳	23.3	38.4	31.4	7.0	100.0	86人
	70歳以上	18.8	30.0	38.8	12.5	100.0	80人

問5 あなたは、次はa～fのような危険が、家庭内で自分自身が経験するかもしれない災害について、どの程度の不安を持っていますか。それぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問5		単位：％					
a 自分自身がケガをしたり、命を落とすこと		1 不安	2 どちらか といえ ば	3 どちら なか いとい え ば	4 不安 で ない	計	
全体		23.3	41.3	25.3	10.1	100.0	387人
性別	男	21.8	40.6	21.8	15.8	100.0	165人
	女	24.1	41.8	28.2	5.9	100.0	220人
年齢	20-29歳	50.0	33.3	8.3	8.3	100.0	24人
	30-39歳	28.6	36.5	25.4	9.5	100.0	63人
	40-49歳	21.1	33.8	29.6	15.5	100.0	71人
	50-59歳	18.3	41.7	28.3	11.7	100.0	60人
	60-69歳	23.8	41.7	26.2	8.3	100.0	84人
	70歳以上	16.1	53.1	24.7	6.2	100.0	81人

問5		単位：％					
b 家族がケガをしたり、命を落とすこと		1 不安	2 どちらか といえ ば	3 どちら なか いとい え ば	4 不安 で ない	計	
全体		37.7	39.8	17.6	4.9	100.0	387人
性別	男	34.6	43.6	13.3	8.5	100.0	165人
	女	40.0	36.8	20.9	2.3	100.0	220人
年齢	20-29歳	83.3	12.5	—	4.2	100.0	24人
	30-39歳	54.0	34.9	9.5	1.6	100.0	63人
	40-49歳	42.3	29.6	23.9	4.2	100.0	71人
	50-59歳	26.7	50.0	15.0	8.3	100.0	60人
	60-69歳	29.4	44.7	22.4	3.5	100.0	85人
	70歳以上	23.8	48.8	21.3	6.3	100.0	80人

問5		単位：％					
c 自宅の家具が壊れること		1 不安	2 どちらか といえ ば	3 どちら なか いとい え ば	4 不安 で ない	計	
全体		15.1	43.3	29.2	12.3	100.0	390人
性別	男	13.9	44.2	26.7	15.2	100.0	165人
	女	16.1	42.6	30.9	10.3	100.0	223人
年齢	20-29歳	20.8	45.8	25.0	8.3	100.0	24人
	30-39歳	11.1	36.5	30.2	22.2	100.0	63人
	40-49歳	11.1	38.9	36.1	13.9	100.0	72人
	50-59歳	11.7	53.3	28.3	6.7	100.0	60人
	60-69歳	19.8	40.7	29.1	10.5	100.0	86人
	70歳以上	18.5	46.9	24.7	9.9	100.0	81人

問5		単位：％					
d 自宅が倒壊してしまうこと		1 不安	2 どちらか といえ ば	3 どちら なか いとい え ば	4 不安 で ない	計	
全体		20.6	31.4	35.3	12.6	100.0	388人
性別	男	18.7	28.9	35.5	16.9	100.0	166人
	女	22.3	33.2	35.0	9.6	100.0	220人
年齢	20-29歳	50.0	29.2	12.5	8.3	100.0	24人
	30-39歳	25.4	19.1	39.7	15.9	100.0	63人
	40-49歳	19.7	26.8	43.7	9.9	100.0	71人
	50-59歳	18.6	37.3	32.2	11.9	100.0	59人
	60-69歳	15.1	36.1	38.4	10.5	100.0	86人
	70歳以上	17.3	35.8	30.9	16.1	100.0	81人

問5		単位：％					
e 電気が止まって、使えなくなる		1 不安	2 どちらか といえ ば	3 どちら なか いとい え ば	4 不安 で ない	計	
全体		45.2	41.1	10.8	2.8	100.0	389人
性別	男	44.9	37.0	14.6	3.6	100.0	165人
	女	46.0	44.1	7.7	2.3	100.0	222人
年齢	20-29歳	45.8	33.3	20.8	—	100.0	24人
	30-39歳	46.0	38.1	14.3	1.6	100.0	63人
	40-49歳	42.3	43.7	8.5	5.6	100.0	71人
	50-59歳	38.3	48.3	11.7	1.7	100.0	60人
	60-69歳	46.5	43.0	7.0	3.5	100.0	86人
	70歳以上	53.1	37.0	7.4	2.5	100.0	81人

問5		単位：％					
f ガスが止まって、使えなくなる		1 不安	2 どちらか といえ ば	3 どちら なか いとい え ば	4 不安 で ない	計	
全体		40.4	36.8	11.6	11.3	100.0	389人
性別	男	41.0	32.5	16.3	10.2	100.0	166人
	女	40.3	39.8	8.1	11.8	100.0	221人
年齢	20-29歳	33.3	45.8	12.5	8.3	100.0	24人
	30-39歳	38.1	25.4	19.1	17.5	100.0	63人
	40-49歳	35.7	41.4	10.0	12.9	100.0	70人
	50-59歳	33.3	43.3	10.0	13.3	100.0	60人
	60-69歳	46.5	39.5	7.0	7.0	100.0	86人
	70歳以上	48.8	31.7	12.2	7.3	100.0	82人

(問5の続き)

問5		単位: %					
g 水道が止まって、使えなくなること		1 不安	2 不 安 ど ち ら か と い え ば	3 不 安 ど ち ら か と い え ば	4 不 安 で な い	計	
全体		51.7	37.5	8.2	2.6	100.0	389人
性別	男	51.2	34.3	11.5	3.0	100.0	166人
	女	52.0	39.8	5.9	2.3	100.0	221人
年齢	20-29歳	54.2	41.7	4.2	-	100.0	24人
	30-39歳	54.0	31.8	12.7	1.6	100.0	63人
	40-49歳	50.7	42.3	2.8	4.2	100.0	71人
	50-59歳	46.7	43.3	8.3	1.7	100.0	60人
	60-69歳	51.8	38.8	5.9	3.5	100.0	85人
	70歳以上	54.9	30.5	12.2	2.4	100.0	82人

問5		単位: %					
h 通信がパンクして、連絡がつかなくなること		1 不安	2 不 安 ど ち ら か と い え ば	3 不 安 ど ち ら か と い え ば	4 不 安 で な い	計	
全体		51.3	38.5	8.0	2.3	100.0	390人
性別	男	47.0	35.5	13.3	4.2	100.0	166人
	女	54.5	40.5	4.1	0.9	100.0	222人
年齢	20-29歳	62.5	33.3	4.2	-	100.0	24人
	30-39歳	50.8	38.1	9.5	1.6	100.0	63人
	40-49歳	47.9	36.6	11.3	4.2	100.0	71人
	50-59歳	55.0	36.7	6.7	1.7	100.0	60人
	60-69歳	48.8	44.2	3.5	3.5	100.0	86人
	70歳以上	51.2	37.8	9.8	1.2	100.0	82人

問5		単位: %					
i 物流が止まって、食べ物や飲み物に困ること		1 不安	2 不 安 ど ち ら か と い え ば	3 不 安 ど ち ら か と い え ば	4 不 安 で な い	計	
全体		50.1	39.6	7.5	2.8	100.0	389人
性別	男	44.6	40.4	10.8	4.2	100.0	166人
	女	54.3	38.9	5.0	1.8	100.0	221人
年齢	20-29歳	58.3	29.2	12.5	-	100.0	24人
	30-39歳	55.6	39.7	3.2	1.6	100.0	63人
	40-49歳	53.5	36.6	7.0	2.8	100.0	71人
	50-59歳	47.5	42.4	6.8	3.4	100.0	59人
	60-69歳	48.8	40.7	5.8	4.7	100.0	86人
	70歳以上	43.9	42.7	11.0	2.4	100.0	82人

問5		単位: %					
j 避難所で生活せざるをえないこと		1 不安	2 不 安 ど ち ら か と い え ば	3 不 安 ど ち ら か と い え ば	4 不 安 で な い	計	
全体		43.2	36.3	14.7	5.9	100.0	389人
性別	男	33.5	35.3	21.0	10.2	100.0	167人
	女	50.5	36.8	10.0	2.7	100.0	220人
年齢	20-29歳	33.3	37.5	25.0	4.2	100.0	24人
	30-39歳	47.6	31.8	14.3	6.4	100.0	63人
	40-49歳	48.6	30.0	12.9	8.6	100.0	70人
	50-59歳	44.1	42.4	8.5	5.1	100.0	59人
	60-69歳	50.0	34.9	10.5	4.7	100.0	86人
	70歳以上	31.3	42.2	21.7	4.8	100.0	83人

問6 あなたは、人災・自然災害を問わず、自分の身に危険が及びそうになった時、うまく対処できると思いますか。下記の1～4のうちからあてはまるもの1つ

問6		単位: %					
		1 対 処 で き る と 思 う	2 対 ど ち ら か と い え ば	3 対 ど ち ら か と い え ば	4 対 処 で き な い と 思 う	計	
全体		6.2	56.9	29.5	7.4	100.0	390人
性別	男	8.4	58.4	28.9	4.2	100.0	166人
	女	4.5	56.3	29.3	9.9	100.0	222人
年齢	20-29歳	4.2	33.3	54.2	8.3	100.0	24人
	30-39歳	4.8	54.8	30.7	9.7	100.0	62人
	40-49歳	6.9	62.5	27.8	2.8	100.0	72人
	50-59歳	3.3	61.7	30.0	5.0	100.0	60人
	60-69歳	7.0	53.5	25.6	14.0	100.0	86人
	70歳以上	8.5	63.4	23.2	4.9	100.0	82人

問7 東日本大震災が発生してから半月くらいの間に、あなたは次のa～mの物をどのくらい購入したか。それぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問7		単位：％					
a 水		1 普段より多 かった	2 普段と同じく らい	3 普段より少 なかつた	4 購入してい ない	計	
全体		40.2	30.4	5.6	23.8	100.0	391人
性別	男	37.7	33.5	7.2	21.6	100.0	167人
	女	41.9	28.4	4.5	25.2	100.0	222人
年齢	20-29歳	33.3	37.5	-	29.2	100.0	24人
	30-39歳	46.0	23.8	7.9	22.2	100.0	63人
	40-49歳	48.6	20.8	11.1	19.4	100.0	72人
	50-59歳	41.7	25.0	5.0	28.3	100.0	60人
	60-69歳	37.7	36.5	5.9	20.0	100.0	85人
	70歳以上	31.3	39.8	1.2	27.7	100.0	83人

問7		単位：％					
b 米		1 普段より多 かった	2 普段と同じく らい	3 普段より少 なかつた	4 購入してい ない	計	
全体		14.9	54.8	4.1	26.2	100.0	389人
性別	男	16.3	51.8	6.6	25.3	100.0	166人
	女	14.0	57.0	2.3	26.7	100.0	221人
年齢	20-29歳	8.3	54.2	-	37.5	100.0	24人
	30-39歳	19.1	49.2	4.8	27.0	100.0	63人
	40-49歳	15.5	53.5	8.5	22.5	100.0	71人
	50-59歳	15.0	58.3	1.7	25.0	100.0	60人
	60-69歳	12.9	51.8	3.5	31.8	100.0	85人
	70歳以上	15.9	59.8	3.7	20.7	100.0	82人

問7		単位：％					
c インスタント食品		1 普段より多 かった	2 普段と同じく らい	3 普段より少 なかつた	4 購入してい ない	計	
全体		32.5	42.9	6.0	18.7	100.0	385人
性別	男	28.1	44.5	11.0	16.5	100.0	164人
	女	35.2	42.0	2.3	20.6	100.0	219人
年齢	20-29歳	30.4	56.5	4.4	8.7	100.0	23人
	30-39歳	42.9	39.7	3.2	14.3	100.0	63人
	40-49歳	43.7	33.8	9.9	12.7	100.0	71人
	50-59歳	33.9	49.2	8.5	8.5	100.0	59人
	60-69歳	29.4	35.3	4.7	30.6	100.0	85人
	70歳以上	16.3	52.5	5.0	26.3	100.0	80人

問7		単位：％					
d 電池・懐中電灯		1 普段より多 かった	2 普段と同じく らい	3 普段より少 なかつた	4 購入してい ない	計	
全体		39.9	29.1	6.9	24.2	100.0	389人
性別	男	36.4	27.3	10.9	25.5	100.0	165人
	女	41.9	30.6	4.1	23.4	100.0	222人
年齢	20-29歳	41.7	25.0	4.2	29.2	100.0	24人
	30-39歳	30.2	30.2	11.1	28.6	100.0	63人
	40-49歳	39.4	25.4	12.7	22.5	100.0	71人
	50-59歳	45.8	32.2	3.4	18.6	100.0	59人
	60-69歳	43.5	28.2	2.4	25.9	100.0	85人
	70歳以上	37.4	31.3	7.2	24.1	100.0	83人

問7		単位：％					
e ガスボンベ		1 普段より多 かった	2 普段と同じく らい	3 普段より少 なかつた	4 購入してい ない	計	
全体		9.2	31.1	3.2	56.5	100.0	379人
性別	男	4.9	33.7	4.9	56.4	100.0	163人
	女	12.6	29.0	1.9	56.5	100.0	214人
年齢	20-29歳	12.5	25.0	-	62.5	100.0	24人
	30-39歳	9.5	22.2	6.4	61.9	100.0	63人
	40-49歳	7.0	33.8	5.6	53.5	100.0	71人
	50-59歳	15.3	32.2	1.7	50.9	100.0	59人
	60-69歳	10.8	31.3	1.2	56.6	100.0	83人
	70歳以上	4.0	36.0	2.7	57.3	100.0	75人

問7		単位：％					
f トイレtpペーパー		1 普段より多 かった	2 普段と同じく らい	3 普段より少 なかつた	4 購入してい ない	計	
全体		16.4	56.5	5.9	21.2	100.0	391人
性別	男	12.0	59.9	7.8	20.4	100.0	167人
	女	18.9	54.5	4.5	22.1	100.0	222人
年齢	20-29歳	20.8	50.0	8.3	20.8	100.0	24人
	30-39歳	14.3	54.0	7.9	23.8	100.0	63人
	40-49歳	16.9	54.9	12.7	15.5	100.0	71人
	50-59歳	21.7	66.7	3.3	8.3	100.0	60人
	60-69歳	12.8	57.0	2.3	27.9	100.0	86人
	70歳以上	14.5	54.2	3.6	27.7	100.0	83人

(問7の続き)

問7		単位: %					
g パン		1 普段より 多かった	2 普段と 同じくらい	3 普段より 少なかった	4 購入して いない	計	
全体		12.7	62.7	11.1	13.5	100.0	386人
性別	男	10.8	64.7	12.6	12.0	100.0	167人
	女	14.3	61.3	10.1	14.3	100.0	217人
年齢	20-29歳	8.3	54.2	20.8	16.7	100.0	24人
	30-39歳	22.2	60.3	7.9	9.5	100.0	63人
	40-49歳	15.7	60.0	15.7	8.6	100.0	70人
	50-59歳	13.6	69.5	10.2	6.8	100.0	59人
	60-69歳	7.1	64.7	10.6	17.7	100.0	85人
	70歳以上	9.9	61.7	8.6	19.8	100.0	81人

問7		単位: %					
h 乳製品		1 普段より 多かった	2 普段と 同じくらい	3 普段より 少なかった	4 購入して いない	計	
全体		6.7	59.4	15.5	18.4	100.0	387人
性別	男	5.4	59.6	15.7	19.3	100.0	166人
	女	7.8	59.4	15.1	17.8	100.0	219人
年齢	20-29歳	4.2	50.0	25.0	20.8	100.0	24人
	30-39歳	4.8	60.3	15.9	19.1	100.0	63人
	40-49歳	9.9	54.9	26.8	8.5	100.0	71人
	50-59歳	6.7	58.3	21.7	13.3	100.0	60人
	60-69歳	7.1	63.5	4.7	24.7	100.0	85人
	70歳以上	6.3	61.3	8.8	23.8	100.0	80人

問7		単位: %					
i 海藻類の食品		1 普段より 多かった	2 普段と 同じくらい	3 普段より 少なかった	4 購入して いない	計	
全体		3.9	55.3	11.4	29.5	100.0	387人
性別	男	4.2	50.6	14.5	30.7	100.0	166人
	女	3.7	58.9	9.1	28.3	100.0	219人
年齢	20-29歳	-	50.0	4.2	45.8	100.0	24人
	30-39歳	3.2	58.7	11.1	27.0	100.0	63人
	40-49歳	2.8	46.5	26.8	23.9	100.0	71人
	50-59歳	3.3	53.3	10.0	33.3	100.0	60人
	60-69歳	4.7	62.4	4.7	28.2	100.0	85人
	70歳以上	6.3	55.0	8.8	30.0	100.0	80人

問7		単位: %					
j マスク		1 普段より 多かった	2 普段と 同じくらい	3 普段より 少なかった	4 購入して いない	計	
全体		15.3	39.8	4.7	40.3	100.0	387人
性別	男	12.1	42.8	6.0	39.2	100.0	166人
	女	17.8	37.4	3.7	41.1	100.0	219人
年齢	20-29歳	8.3	29.2	-	62.5	100.0	24人
	30-39歳	15.9	38.1	6.4	39.7	100.0	63人
	40-49歳	11.4	42.9	8.6	37.1	100.0	70人
	50-59歳	13.6	42.4	1.7	42.4	100.0	59人
	60-69歳	16.3	43.0	1.2	39.5	100.0	86人
	70歳以上	19.8	35.8	7.4	37.0	100.0	81人

問7		単位: %					
k 菓子類		1 普段より 多かった	2 普段と 同じくらい	3 普段より 少なかった	4 購入して いない	計	
全体		10.3	61.3	7.5	20.9	100.0	388人
性別	男	8.4	60.5	10.2	21.0	100.0	167人
	女	11.9	62.1	5.5	20.6	100.0	219人
年齢	20-29歳	8.3	58.3	8.3	25.0	100.0	24人
	30-39歳	19.1	57.1	9.5	14.3	100.0	63人
	40-49歳	12.7	60.6	12.7	14.1	100.0	71人
	50-59歳	1.7	75.0	6.7	16.7	100.0	60人
	60-69歳	9.4	57.7	4.7	28.2	100.0	85人
	70歳以上	9.9	59.3	4.9	25.9	100.0	81人

問7		単位: %					
m 非常食・保存食		1 普段より 多かった	2 普段と 同じくらい	3 普段より 少なかった	4 購入して いない	計	
全体		25.4	35.4	5.9	33.3	100.0	390人
性別	男	22.2	36.5	7.2	34.1	100.0	167人
	女	27.6	34.8	5.0	32.6	100.0	221人
年齢	20-29歳	29.2	37.5	-	33.3	100.0	24人
	30-39歳	27.0	38.1	7.9	27.0	100.0	63人
	40-49歳	29.6	28.2	11.3	31.0	100.0	71人
	50-59歳	25.0	46.7	1.7	26.7	100.0	60人
	60-69歳	23.3	32.6	4.7	39.5	100.0	86人
	70歳以上	22.0	34.2	6.1	37.8	100.0	82人

問8 あなたは、日頃、テレビでいっぱい(芸能・スポーツニュースは除く)をどのくらい見ていますか。下記の1～5のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問8		単位: %					
		1	2	3	4	5	計
		よく見ています	見といてる	見あてりない	見ほといなどい	壊れてはいない	
全体		67.9	23.0	5.4	3.1	0.8	100.0 392人
性別	男	68.9	21.0	5.4	3.6	1.2	100.0 167人
	女	67.3	24.2	5.4	2.7	0.5	100.0 223人
年齢	20-29歳	37.5	37.5	12.5	12.5	-	100.0 24人
	30-39歳	38.1	42.9	7.9	7.9	3.2	100.0 63人
	40-49歳	65.3	25.0	8.3	1.4	-	100.0 72人
	50-59歳	63.3	25.0	6.7	3.3	1.7	100.0 60人
	60-69歳	89.5	10.5	-	-	-	100.0 86人
	70歳以上	83.1	13.3	3.6	-	-	100.0 83人

問9 東日本大震災以前と以後、あなたの1日のテレビの視聴時間についてお聞きます。

＜東日本大震災以前のテレビ視聴時間＞

(1) あなたは、1日のうち平均して、おおよそどのくらいのテレビを見ていましたか。平日と休日について、それぞれ数字でお答えください。

＜東日本大震災以後のテレビ視聴時間＞

(2) あなたは、震災発生から1週間くらいの間、1日のうち平均して、おおよそどのくらいのテレビを見ていましたか。平日と休日について、それぞれ数字でお答えください。

(3) あなたは、震災発生から1ヶ月くらい経ったとき、1日のうち平均して、おおよそどのくらいのテレビを見ていましたか。平日と休日について、それぞれ数字でお答えください。

問9		単位: 時間:分									
		テレビの視聴時間の平均									
		(1) 東日本大震災以前				(2) 東日本大震災以後				(3) 地震発生から1ヶ月後	
		平日		休日		平日		休日		平日	休日
全体		3:54	387人	4:43	385人	5:51	386人	6:38	386人	4:21	386人
性別	男	3:30	163人	4:40	162人	4:43	163人	5:53	163人	3:50	163人
	女	4:11	222人	4:43	221人	6:42	221人	7:12	221人	4:43	221人
年齢	20-29歳	3:23	24人	4:16	24人	5:22	24人	6:42	24人	3:35	24人
	30-39歳	2:47	61人	3:40	61人	5:34	61人	6:32	61人	3:23	61人
	40-49歳	2:56	72人	4:03	72人	4:46	71人	6:01	71人	3:13	72人
	50-59歳	3:21	59人	4:19	59人	5:10	59人	6:11	59人	3:42	59人
	60-69歳	4:46	85人	5:23	83人	6:44	85人	7:14	85人	5:21	84人
	70歳以上	5:14	82人	5:47	82人	6:50	82人	7:00	82人	5:46	82人

問10 今度は、テレビの番組別の視聴時間についてお聞きます。東日本大震災が発生する以前と、発生から1ヶ月くらい経ったときを比べて、次のa～hの番組の視聴時間はどのように変化しましたか。それぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問10		単位：％					
a 報道番組		1 増えた	2 変わらない	3 減った	4 もともと見ない	計	
全体		76.0	22.2	1.6	0.3	100.0	388人
性別	男	72.0	26.8	0.6	0.6	100.0	164人
	女	79.3	18.5	2.3	—	100.0	222人
年齢	20-29歳	91.7	8.3	—	—	100.0	24人
	30-39歳	63.9	32.8	3.3	—	100.0	61人
	40-49歳	68.1	30.6	1.4	—	100.0	72人
	50-59歳	78.0	18.6	3.4	—	100.0	59人
	60-69歳	86.1	14.0	—	—	100.0	86人
	70歳以上	76.8	20.7	1.2	1.2	100.0	82人

問10		単位：％					
b スポーツ番組		1 増えた	2 変わらない	3 減った	4 もともと見ない	計	
全体		0.8	63.3	19.5	16.4	100.0	384人
性別	男	—	67.5	22.1	10.4	100.0	163人
	女	1.4	60.3	17.4	21.0	100.0	219人
年齢	20-29歳	—	70.8	4.2	25.0	100.0	24人
	30-39歳	—	41.0	19.7	39.3	100.0	61人
	40-49歳	—	63.4	18.3	18.3	100.0	71人
	50-59歳	—	76.3	13.6	10.2	100.0	59人
	60-69歳	—	65.1	25.6	9.3	100.0	86人
	70歳以上	3.8	65.8	22.8	7.6	100.0	79人

問10		単位：％					
c 音楽番組		1 増えた	2 変わらない	3 減った	4 もともと見ない	計	
全体		1.1	47.8	22.8	28.4	100.0	381人
性別	男	—	52.5	21.6	25.9	100.0	162人
	女	1.8	44.2	23.5	30.4	100.0	217人
年齢	20-29歳	—	62.5	8.3	29.2	100.0	24人
	30-39歳	1.6	39.3	18.0	41.0	100.0	61人
	40-49歳	2.8	49.3	16.9	31.0	100.0	71人
	50-59歳	1.7	53.5	19.0	25.9	100.0	58人
	60-69歳	—	38.8	32.9	28.2	100.0	85人
	70歳以上	—	53.9	28.2	18.0	100.0	78人

問10		単位：％					
d 娯楽番組		1 増えた	2 変わらない	3 減った	4 もともと見ない	計	
全体		1.8	50.1	31.6	16.5	100.0	383人
性別	男	0.6	55.6	27.8	16.1	100.0	162人
	女	2.7	45.7	34.7	16.9	100.0	219人
年齢	20-29歳	16.7	62.5	12.5	8.3	100.0	24人
	30-39歳	—	50.8	39.3	9.8	100.0	61人
	40-49歳	2.8	59.2	22.5	15.5	100.0	71人
	50-59歳	—	54.2	30.5	15.3	100.0	59人
	60-69歳	1.2	40.7	36.1	22.1	100.0	86人
	70歳以上	—	44.9	34.6	20.5	100.0	78人

問10		単位：％					
e アニメ		1 増えた	2 変わらない	3 減った	4 もともと見ない	計	
全体		2.1	28.0	8.7	61.2	100.0	379人
性別	男	0.6	29.6	8.0	61.7	100.0	162人
	女	3.3	26.5	9.3	60.9	100.0	215人
年齢	20-29歳	12.5	58.3	8.3	20.8	100.0	24人
	30-39歳	6.6	37.7	9.8	45.9	100.0	61人
	40-49歳	1.4	47.9	11.3	39.4	100.0	71人
	50-59歳	—	27.1	8.5	64.4	100.0	59人
	60-69歳	—	10.7	6.0	83.3	100.0	84人
	70歳以上	—	11.8	9.2	79.0	100.0	76人

問10		単位：％					
f ドラマ		1 増えた	2 変わらない	3 減った	4 もともと見ない	計	
全体		1.1	53.4	22.0	23.5	100.0	378人
性別	男	1.2	50.3	17.8	30.7	100.0	163人
	女	0.9	55.4	25.4	18.3	100.0	213人
年齢	20-29歳	8.3	50.0	12.5	29.2	100.0	24人
	30-39歳	1.6	36.1	27.9	34.4	100.0	61人
	40-49歳	1.5	65.2	13.0	20.3	100.0	69人
	50-59歳	—	67.8	23.7	8.5	100.0	59人
	60-69歳	—	48.8	27.9	23.3	100.0	86人
	70歳以上	—	52.0	21.3	26.7	100.0	75人

(問10の続き)

問10		単位: %					
g ワイドショーなどの情報番組		1 増えた	2 変わらない	3 減った	4 もともとと見ない	計	
全体		27.4	42.3	10.7	19.6	100.0	383人
性別	男	20.4	45.1	11.7	22.8	100.0	162人
	女	32.9	40.2	9.6	17.4	100.0	219人
年齢	20-29歳	25.0	45.8	4.2	25.0	100.0	24人
	30-39歳	31.2	29.5	8.2	31.2	100.0	61人
	40-49歳	29.6	40.9	8.5	21.1	100.0	71人
	50-59歳	27.1	45.8	17.0	10.2	100.0	59人
	60-69歳	26.7	46.5	10.5	16.3	100.0	86人
	70歳以上	24.4	46.2	11.5	18.0	100.0	78人

問10		単位: %					
h 映画		1 増えた	2 変わらない	3 減った	4 もともとと見ない	計	
全体		1.8	46.3	21.2	30.6	100.0	382人
性別	男	1.8	46.6	19.0	32.5	100.0	163人
	女	1.8	46.5	22.6	29.0	100.0	217人
年齢	20-29歳	4.2	58.3	20.8	16.7	100.0	24人
	30-39歳	-	47.5	18.0	34.4	100.0	61人
	40-49歳	4.2	53.5	23.9	18.3	100.0	71人
	50-59歳	1.7	57.6	22.0	18.6	100.0	59人
	60-69歳	2.3	36.1	26.7	34.9	100.0	86人
	70歳以上	-	39.0	13.0	48.1	100.0	77人

問11 東日本大震災直に流れた情報についてお聞きます。震災直後にはさまざまな情報が伝えられました
が、その中には真偽の不確かなものもかなり含まれていました。そのような情報のうち、次のa~hにつ
いて、あなたはどの程度信じましたか。それぞれ下記の1~5のうちからあてはまるもの1つを選んで、
その番号に○をつけてください。

問11		単位: %					
a 石油コンビナート炎上で有害物質が雨で降ってくる		1 信じた	2 信じたらか といえ ば	3 信じた ならかつ たいえ ば	4 信じな かつ た	5 し見た たこ り・ は聞 ない たり	計
全体		9.6	30.1	22.9	28.3	9.1	100.0 385人
性別	男	8.0	24.5	23.3	33.1	11.0	100.0 163人
	女	10.5	34.1	22.7	25.0	7.7	100.0 220人
年齢	20-29歳	-	28.0	24.0	36.0	12.0	100.0 25人
	30-39歳	14.5	21.0	16.1	41.9	6.5	100.0 62人
	40-49歳	12.5	31.9	19.4	25.0	11.1	100.0 72人
	50-59歳	6.7	38.3	23.3	23.3	8.3	100.0 60人
	60-69歳	10.8	25.3	28.9	24.1	10.8	100.0 83人
	70歳以上	6.3	34.2	25.3	26.6	7.6	100.0 79人

問11		単位: %					
b 放射性物質の影響で水道水が飲めなくなる		1 信じた	2 信じたらか といえ ば	3 信じた ならかつ たいえ ば	4 信じな かつ た	5 し見た たこ り・ は聞 ない たり	計
全体		14.6	38.7	27.3	16.4	3.1	100.0 385人
性別	男	13.5	29.5	28.8	23.3	4.9	100.0 163人
	女	15.0	45.5	26.4	11.4	1.8	100.0 220人
年齢	20-29歳	20.0	40.0	24.0	16.0	-	100.0 25人
	30-39歳	27.4	32.3	25.8	9.7	4.8	100.0 62人
	40-49歳	11.3	49.3	22.5	15.5	1.4	100.0 71人
	50-59歳	8.3	38.3	38.3	13.3	1.7	100.0 60人
	60-69歳	8.3	42.9	27.4	17.9	3.6	100.0 84人
	70歳以上	16.5	29.1	26.6	22.8	5.1	100.0 79人

問11		単位: %					
c 海藻類を摂取すると放射性物質の影響を受けにくい		1 信 じ た	2 信 ど ち ら か と い え ば	3 信 ど ち ら か と い え ば	4 信 じ な か つ た	5 し 見 た た こ り ・ は 聞 い た り	計
全体		4.7	16.9	25.2	37.9	15.3	100.0 385人
性別	男	1.2	14.1	19.0	44.8	20.9	100.0 163人
	女	7.3	18.6	29.6	33.2	11.4	100.0 220人
年齢	20-29歳	8.0	16.0	20.0	44.0	12.0	100.0 25人
	30-39歳	9.7	16.1	8.1	50.0	16.1	100.0 62人
	40-49歳	5.6	8.5	23.9	39.4	22.5	100.0 71人
	50-59歳	5.0	16.7	33.3	33.3	11.7	100.0 60人
	60-69歳	-	19.1	29.8	39.3	11.9	100.0 84人
	70歳以上	3.8	21.5	29.1	29.1	16.5	100.0 79人

問11		単位: %					
d 大豆製品を摂取すると放射性物質の影響を受けにくい		1 信 じ た	2 信 ど ち ら か と い え ば	3 信 ど ち ら か と い え ば	4 信 じ な か つ た	5 し 見 た た こ り ・ は 聞 い た り	計
全体		2.6	7.5	22.9	37.4	29.6	100.0 385人
性別	男	1.8	6.1	17.8	42.3	31.9	100.0 163人
	女	3.2	8.6	25.9	34.1	28.2	100.0 220人
年齢	20-29歳	4.0	8.0	20.0	32.0	36.0	100.0 25人
	30-39歳	3.2	6.5	12.9	41.9	35.5	100.0 62人
	40-49歳	1.4	8.5	18.3	38.0	33.8	100.0 71人
	50-59歳	3.3	5.0	26.7	31.7	33.3	100.0 60人
	60-69歳	-	6.0	23.8	46.4	23.8	100.0 84人
	70歳以上	5.1	11.4	30.4	31.7	21.5	100.0 79人

問11		単位: %					
e 放射性物質に汚染されないためにうがい薬を飲んだほうがいい		1 信 じ た	2 信 ど ち ら か と い え ば	3 信 ど ち ら か と い え ば	4 信 じ な か つ た	5 し 見 た た こ り ・ は 聞 い た り	計
全体		0.3	3.4	13.0	60.4	22.9	100.0 384人
性別	男	0.6	5.6	10.6	55.9	27.3	100.0 161人
	女	-	1.8	14.5	63.8	19.9	100.0 221人
年齢	20-29歳	-	8.0	4.0	76.0	12.0	100.0 25人
	30-39歳	-	-	8.1	77.4	14.5	100.0 62人
	40-49歳	-	2.8	7.0	60.6	29.6	100.0 71人
	50-59歳	-	3.3	13.3	61.7	21.7	100.0 60人
	60-69歳	-	1.2	16.5	56.5	25.9	100.0 85人
	70歳以上	1.3	7.8	20.8	46.8	23.4	100.0 77人

問11		単位: %					
f 防衛庁・自衛隊が救援物資の提供を求めている		1 信 じ た	2 信 ど ち ら か と い え ば	3 信 ど ち な か か つ た い え ば	4 信 じ な か つ た	5 し 見 た た こ り ・ は 聞 い た り	計
全体		6.0	12.2	13.0	22.4	46.4	384人
性別	男	3.7	8.6	12.9	23.9	50.9	163人
	女	7.8	15.1	13.2	20.6	43.4	219人
年齢	20-29歳	-	24.0	16.0	16.0	44.0	25人
	30-39歳	11.3	17.7	3.2	19.4	48.4	62人
	40-49歳	7.0	9.9	7.0	9.9	66.2	71人
	50-59歳	5.0	11.7	13.3	26.7	43.3	60人
	60-69歳	1.2	9.5	17.9	32.1	39.3	84人
	70歳以上	9.0	10.3	20.5	23.1	37.2	78人

問11		単位: %					
g 被災地で強盗事件が多発している		1 信 じ た	2 信 ど ち ら か と い え ば	3 信 ど ち な か か つ た い え ば	4 信 じ な か つ た	5 し 見 た た こ り ・ は 聞 い た り	計
全体		28.8	39.9	13.0	10.9	7.5	386人
性別	男	22.7	37.4	13.5	14.1	12.3	163人
	女	33.5	41.2	12.7	8.6	4.1	221人
年齢	20-29歳	28.0	44.0	12.0	8.0	8.0	25人
	30-39歳	45.2	37.1	8.1	8.1	1.6	62人
	40-49歳	39.4	35.2	12.7	5.6	7.0	71人
	50-59歳	23.3	45.0	8.3	11.7	11.7	60人
	60-69歳	22.4	44.7	16.5	11.8	4.7	85人
	70歳以上	19.0	34.2	17.7	16.5	12.7	79人

問11		単位: %					
h 福島原発で放射性物質が漏れたことにより、雨が降ると被ばくする		1 信 じ た	2 信 ど ち ら か と い え ば	3 信 ど ち な か か つ た い え ば	4 信 じ な か つ た	5 し 見 た た こ り ・ は 聞 い た り	計
全体		22.1	41.3	20.3	12.7	3.6	385人
性別	男	21.0	35.2	16.7	21.0	6.2	162人
	女	22.6	45.7	23.1	6.8	1.8	221人
年齢	20-29歳	24.0	44.0	24.0	8.0	-	25人
	30-39歳	32.3	35.5	17.7	14.5	-	62人
	40-49歳	28.2	39.4	15.5	14.1	2.8	71人
	50-59歳	10.0	41.7	31.7	10.0	6.7	60人
	60-69歳	22.6	46.4	15.5	10.7	4.8	84人
	70歳以上	16.5	40.5	22.8	15.2	5.1	79人

問12 防災への取り組みについて、あなたのお考えをお聞きます。次のa～iのそれぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問12		単位：％					
a 食糧や飲料水は自分で備蓄するべきだ		1 あてはまる	2 あどち はらか るとい え ば	3 あどち はらか とない え ば	4 あては まら ない	計	
全体		40.3	51.7	7.2	0.8	100.0	387人
性別	男	43.4	50.6	6.0	—	100.0	166人
	女	37.9	52.5	8.2	1.4	100.0	219人
年齢	20-29歳	33.3	54.2	12.5	—	100.0	24人
	30-39歳	47.6	47.6	4.8	—	100.0	63人
	40-49歳	45.8	50.0	4.2	—	100.0	72人
	50-59歳	44.1	40.7	11.9	3.4	100.0	59人
	60-69歳	33.3	57.1	8.3	1.2	100.0	84人
	70歳以上	37.0	58.0	4.9	—	100.0	81人

問12		単位：％					
c 地区の避難所や経路は把握しておくべきだ		1 あてはまる	2 あどち はらか るとい え ば	3 あどち はらか とない え ば	4 あては まら ない	計	
全体		70.8	26.6	2.1	0.5	100.0	387人
性別	男	64.9	32.1	2.4	0.6	100.0	165人
	女	75.5	22.3	1.8	0.5	100.0	220人
年齢	20-29歳	68.0	20.0	12.0	—	100.0	25人
	30-39歳	77.8	20.6	1.6	—	100.0	63人
	40-49歳	74.7	23.9	1.4	—	100.0	71人
	50-59歳	61.7	33.3	3.3	1.7	100.0	60人
	60-69歳	70.2	28.6	—	1.2	100.0	84人
	70歳以上	72.5	26.3	1.3	—	100.0	80人

問12		単位：％					
e 地区の防災訓練には可能な限り参加するべきだ		1 あてはまる	2 あどち はらか るとい え ば	3 あどち はらか とない え ば	4 あては まら ない	計	
全体		31.1	47.9	16.8	4.2	100.0	386人
性別	男	27.9	44.2	24.2	3.6	100.0	165人
	女	32.9	51.1	11.4	4.6	100.0	219人
年齢	20-29歳	20.0	40.0	36.0	4.0	100.0	25人
	30-39歳	25.4	42.9	20.6	11.1	100.0	63人
	40-49歳	31.0	45.1	21.1	2.8	100.0	71人
	50-59歳	27.1	54.2	13.6	5.1	100.0	59人
	60-69歳	36.9	51.2	10.7	1.2	100.0	84人
	70歳以上	35.0	50.0	12.5	2.5	100.0	80人

問12		単位：％					
b 災害の知識や情報は自分で集めるべきだ		1 あてはまる	2 あどち はらか るとい え ば	3 あどち はらか とない え ば	4 あては まら ない	計	
全体		29.3	53.1	13.0	4.7	100.0	386人
性別	男	32.5	48.8	11.5	7.2	100.0	166人
	女	27.1	56.9	13.3	2.8	100.0	218人
年齢	20-29歳	40.0	44.0	12.0	4.0	100.0	25人
	30-39歳	42.9	46.0	7.9	3.2	100.0	63人
	40-49歳	32.4	60.6	5.6	1.4	100.0	71人
	50-59歳	27.1	45.8	23.7	3.4	100.0	59人
	60-69歳	21.4	60.7	11.9	6.0	100.0	84人
	70歳以上	23.8	53.8	13.8	8.8	100.0	80人

問12		単位：％					
d 近所の非難困難者(体が不自由等)の有無を普段から把握しておくべきだ		1 あてはまる	2 あどち はらか るとい え ば	3 あどち はらか とない え ば	4 あては まら ない	計	
全体		34.9	44.0	15.6	5.5	100.0	384人
性別	男	30.1	42.3	21.5	6.1	100.0	163人
	女	38.4	45.7	11.0	5.0	100.0	219人
年齢	20-29歳	20.0	36.0	28.0	16.0	100.0	25人
	30-39歳	27.9	39.3	19.7	13.1	100.0	61人
	40-49歳	35.2	46.5	18.3	—	100.0	71人
	50-59歳	25.0	51.7	16.7	6.7	100.0	60人
	60-69歳	44.6	45.8	8.4	1.2	100.0	83人
	70歳以上	42.5	40.0	12.5	5.0	100.0	80人

問12		単位：％					
f 災害時、近隣の人が困っていたら迷わず助けるべきだ		1 あてはまる	2 あどち はらか るとい え ば	3 あどち はらか とない え ば	4 あては まら ない	計	
全体		53.8	43.2	2.6	0.5	100.0	387人
性別	男	49.7	47.3	3.0	—	100.0	167人
	女	56.4	40.4	2.3	0.9	100.0	218人
年齢	20-29歳	48.0	52.0	—	—	100.0	25人
	30-39歳	41.3	52.4	4.8	1.6	100.0	63人
	40-49歳	59.2	36.6	2.8	1.4	100.0	71人
	50-59歳	55.2	43.1	1.7	—	100.0	58人
	60-69歳	54.8	42.9	2.4	—	100.0	84人
	70歳以上	58.5	39.0	2.4	—	100.0	82人

(問12の続き)

問12		単位: %					
g 行政は市民の防災意識を高めるために努力するべきだ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない ええ ば	あて はまら ない		
全体		59.2	34.6	5.2	1.0	100.0	387人
性別	男	54.8	38.0	6.0	1.2	100.0	166人
	女	62.6	32.0	4.6	0.9	100.0	219人
年齢	20-29歳	44.0	48.0	8.0	-	100.0	25人
	30-39歳	54.9	34.9	6.4	4.8	100.0	63人
	40-49歳	57.8	35.2	5.6	1.4	100.0	71人
	50-59歳	55.9	39.0	5.1	-	100.0	59人
	60-69歳	60.7	35.7	3.6	-	100.0	84人
	70歳以上	70.4	24.7	4.9	-	100.0	81人

問12		単位: %					
h 市民のための備蓄は、行政が中心となり行うべきだ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない ええ ば	あて はまら ない		
全体		35.1	45.7	17.1	2.1	100.0	387人
性別	男	33.7	44.6	17.5	4.2	100.0	166人
	女	36.1	46.6	16.9	0.5	100.0	219人
年齢	20-29歳	44.0	36.0	20.0	-	100.0	25人
	30-39歳	34.9	46.0	14.3	4.8	100.0	63人
	40-49歳	28.2	42.3	26.8	2.8	100.0	71人
	50-59歳	28.3	50.0	20.0	1.7	100.0	60人
	60-69歳	32.5	54.2	12.1	1.2	100.0	83人
	70歳以上	46.9	38.3	13.6	1.2	100.0	81人

問12		単位: %					
i 行政は、防災に関する情報がもっと簡単に市民の手に入るようにするべきだ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない ええ ば	あて はまら ない		
全体		54.3	41.1	3.6	1.0	100.0	387人
性別	男	47.0	48.2	4.2	0.6	100.0	166人
	女	59.4	36.1	3.2	1.4	100.0	219人
年齢	20-29歳	40.0	60.0	-	-	100.0	25人
	30-39歳	61.9	31.8	1.6	4.8	100.0	63人
	40-49歳	43.7	46.5	8.5	1.4	100.0	71人
	50-59歳	44.1	54.2	1.7	-	100.0	59人
	60-69歳	53.6	42.9	3.6	-	100.0	84人
	70歳以上	69.1	27.2	3.7	-	100.0	81人

問13 あなたは現在通勤・通学以外で、どのくらい外出しますか。下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけて下さい。

問13		単位：％				
		1 よく 外出 する	2 とき どき 外出 する	3 あま り外 出し ない	4 ほと んど 外出 しな い	計
全体		33.1	47.3	16.9	2.7	100.0 366人
性別	男	33.3	47.8	16.4	2.5	100.0 159人
	女	33.0	46.6	17.5	2.9	100.0 206人
年齢	20-29歳	29.2	45.8	25.0	—	100.0 24人
	30-39歳	41.0	47.5	9.8	1.6	100.0 61人
	40-49歳	38.6	41.4	18.6	1.4	100.0 70人
	50-59歳	31.6	45.6	17.5	5.3	100.0 57人
	60-69歳	28.0	46.7	22.7	2.7	100.0 75人
	70歳以上	30.3	54.0	11.8	4.0	100.0 76人

付問 外出しない理由は何ですか。下記の1～6のうちからあてはまるものすべてを選んで、その番号に○をつけてください。【複数回答】

		単位：%					
		1 健康・ 体力に 自信が ない	2 外出が 面倒で ある	3 誘って くれる 人が いない	4 お金の ため	5 家の 中で やら ない こと が多 い け れ ば な い	計
全体		16.9	52.3	20.0	10.8	41.5	100.0 65人
性別	男	25.9	59.3	18.5	11.1	22.2	100.0 27人
	女	10.5	47.4	21.1	10.5	55.3	100.0 38人
年齢	20-29歳	33.3	66.7	33.3	50.0	50.0	100.0 6人
	30-39歳	14.3	71.4	14.3	28.6	28.6	100.0 7人
	40-49歳	—	76.9	23.1	—	38.5	100.0 13人
	50-59歳	16.7	16.7	25.0	16.7	66.7	100.0 12人
	60-69歳	12.5	50.0	12.5	—	31.3	100.0 16人
	70歳以上	36.4	45.5	18.2	—	36.4	100.0 11人

注)ここでは、「6. その他」で具体的な理由を回答した人を1～5の項目に割り振った。それぞれ、「1. 健康・体力に自信がない」に3人、「2. 外出が面倒である」に2人、「3. 誘ってくれる人がいない」に5人という形で分けた。

問14 あなたは、地域のどのような活動に参加していますか。次のa～eのそれぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問14		単位：％				
a 地域の自治会などの会合によく参加している		1	2	3	4	計
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない えい ば	あて はま らない	
全体		6.8	15.1	20.5	57.7	100.0 385人
性別	男	4.8	16.9	20.5	57.8	100.0 166人
	女	8.3	13.8	20.7	57.1	100.0 217人
年齢	20-29歳	—	4.0	4.0	92.0	100.0 25人
	30-39歳	4.8	4.8	9.5	81.0	100.0 63人
	40-49歳	1.4	14.1	21.1	63.4	100.0 71人
	50-59歳	6.8	13.6	30.5	49.2	100.0 59人
	60-69歳	13.1	16.7	22.6	47.6	100.0 84人
	70歳以上	8.9	27.9	24.1	39.2	100.0 79人

問14		単位：％				
b 祭り、盆踊りなどの行事によく参加している		1	2	3	4	計
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない えい ば	あて はま らない	
全体		9.6	18.5	24.0	47.9	100.0 384人
性別	男	6.1	15.2	29.1	49.7	100.0 165人
	女	12.4	21.2	20.3	46.1	100.0 217人
年齢	20-29歳	4.0	20.0	12.0	64.0	100.0 25人
	30-39歳	14.3	22.2	14.3	49.2	100.0 63人
	40-49歳	12.7	15.5	26.8	45.1	100.0 71人
	50-59歳	3.4	22.0	25.4	49.2	100.0 59人
	60-69歳	11.9	19.1	20.2	48.8	100.0 84人
	70歳以上	7.7	15.4	35.9	41.0	100.0 78人

問14		単位：％				
c 公園の掃除や、花を植えるなどの地域をきれいにする活動によく参加している		1	2	3	4	計
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない えい ば	あて はま らない	
全体		6.5	10.4	20.1	63.0	100.0 384人
性別	男	4.9	10.4	20.1	64.6	100.0 164人
	女	7.8	10.6	20.2	61.5	100.0 218人
年齢	20-29歳	—	4.0	12.0	84.0	100.0 25人
	30-39歳	6.4	1.6	4.8	87.3	100.0 63人
	40-49歳	1.4	8.5	25.4	64.8	100.0 71人
	50-59歳	1.7	13.6	30.5	54.2	100.0 59人
	60-69歳	11.9	16.7	15.5	56.0	100.0 84人
	70歳以上	11.5	12.8	28.2	47.4	100.0 78人

問14		単位：％				
d お年寄りの家庭や施設でのボランティア活動によく参加している		1	2	3	4	計
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない えい ば	あて はま らない	
全体		3.4	4.7	19.8	72.1	100.0 384人
性別	男	3.7	3.7	18.3	74.4	100.0 164人
	女	3.2	5.5	21.1	70.2	100.0 218人
年齢	20-29歳	—	—	12.0	88.0	100.0 25人
	30-39歳	—	1.6	3.2	95.2	100.0 63人
	40-49歳	1.4	4.2	16.9	77.5	100.0 71人
	50-59歳	3.4	3.4	32.2	61.0	100.0 59人
	60-69歳	4.8	7.1	23.8	64.3	100.0 84人
	70歳以上	7.7	7.7	25.6	59.0	100.0 78人

問14		単位：％				
e 少年野球や子供会などの青少年育成活動によく参加している		1	2	3	4	計
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない えい ば	あて はま らない	
全体		3.1	3.9	16.2	76.8	100.0 383人
性別	男	3.0	4.2	17.0	75.8	100.0 165人
	女	3.2	3.7	15.7	77.3	100.0 216人
年齢	20-29歳	—	—	8.0	92.0	100.0 25人
	30-39歳	6.4	3.2	6.4	84.1	100.0 63人
	40-49歳	5.6	4.2	19.7	70.4	100.0 71人
	50-59歳	3.4	5.1	20.3	71.2	100.0 59人
	60-69歳	2.4	1.2	15.7	80.7	100.0 83人
	70歳以上	—	7.7	21.8	70.5	100.0 78人

問15 あなたは、近隣に次のような方がいらっしゃいますか、次のa～eのそれぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問15		単位：％					
a 庭先や道端で会うとよく立ち話をする人							
		1 た く さ ん い る	2 数 人 い る	3 一 人 二 人 い る	4 い な い	計	
全体		12.1	37.2	25.1	25.6	100.0	387人
性別	男	7.8	28.7	27.5	35.9	100.0	167人
	女	15.6	43.6	22.9	17.9	100.0	218人
年齢	20-29歳	-	20.0	20.0	60.0	100.0	25人
	30-39歳	6.4	23.8	20.6	49.2	100.0	63人
	40-49歳	17.1	31.4	22.9	28.6	100.0	70人
	50-59歳	10.0	50.0	26.7	13.3	100.0	60人
	60-69歳	16.7	42.9	22.6	17.9	100.0	84人
	70歳以上	13.6	42.0	32.1	12.4	100.0	81人

問15		単位：％					
b 互いの家によく訪問し合う人							
		1 た く さ ん い る	2 数 人 い る	3 一 人 二 人 い る	4 い な い	計	
全体		1.8	20.0	24.4	53.9	100.0	386人
性別	男	1.2	12.7	17.5	68.7	100.0	166人
	女	2.3	25.7	29.4	42.7	100.0	218人
年齢	20-29歳	-	12.0	20.0	68.0	100.0	25人
	30-39歳	-	14.3	22.2	63.5	100.0	63人
	40-49歳	2.9	21.4	24.3	51.4	100.0	70人
	50-59歳	3.3	21.7	28.3	46.7	100.0	60人
	60-69歳	1.2	26.2	26.2	46.4	100.0	84人
	70歳以上	2.5	18.8	22.5	56.3	100.0	80人

問15		単位：％					
c よくおすそ分けし合う人							
		1 た く さ ん い る	2 数 人 い る	3 一 人 二 人 い る	4 い な い	計	
全体		3.9	24.1	32.9	39.1	100.0	386人
性別	男	1.8	18.7	26.5	53.0	100.0	166人
	女	5.5	28.0	37.6	28.9	100.0	218人
年齢	20-29歳	-	12.0	20.0	68.0	100.0	25人
	30-39歳	-	14.3	30.2	55.6	100.0	63人
	40-49歳	7.1	18.6	34.3	40.0	100.0	70人
	50-59歳	5.0	21.7	48.3	25.0	100.0	60人
	60-69歳	4.8	36.9	23.8	34.5	100.0	84人
	70歳以上	3.8	27.5	36.3	32.5	100.0	80人

問15		単位：％					
d 家族ぐるみのつきあいをしている人							
		1 た く さ ん い る	2 数 人 い る	3 一 人 二 人 い る	4 い な い	計	
全体		1.8	19.0	23.6	55.6	100.0	385人
性別	男	1.8	16.3	15.7	66.3	100.0	166人
	女	1.8	21.2	29.5	47.5	100.0	217人
年齢	20-29歳	4.0	8.0	4.0	84.0	100.0	25人
	30-39歳	-	12.7	23.8	63.5	100.0	63人
	40-49歳	1.4	21.4	25.7	51.4	100.0	70人
	50-59歳	5.1	18.6	30.5	45.8	100.0	59人
	60-69歳	-	22.6	22.6	54.8	100.0	84人
	70歳以上	2.5	22.5	23.8	51.3	100.0	80人

問15		単位：％					
e よく一緒に外出するような関係の人							
		1 た く さ ん い る	2 数 人 い る	3 一 人 二 人 い る	4 い な い	計	
全体		3.4	18.6	24.6	53.5	100.0	387人
性別	男	1.2	13.9	13.3	71.7	100.0	166人
	女	5.0	22.4	32.9	39.7	100.0	219人
年齢	20-29歳	4.0	12.0	24.0	60.0	100.0	25人
	30-39歳	1.6	9.5	22.2	66.7	100.0	63人
	40-49歳	4.2	16.9	31.0	47.9	100.0	71人
	50-59歳	5.0	23.3	26.7	45.0	100.0	60人
	60-69歳	3.6	20.2	22.6	53.6	100.0	84人
	70歳以上	2.5	25.0	21.3	51.3	100.0	80人

問16 あなたは、千葉市の防災計画・防災対策の内容をどの程度知っていますか。次のa～mのそれぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問16		単位：％					
a 地震ハザードマップ		1	2	3	4	計	
		だいたいい知ってる	いくらか知ってる	が名前はある聞いたこと	知らない		
全体		9.1	26.0	28.6	36.4	100.0	385人
性別	男	12.7	20.0	24.9	42.4	100.0	165人
	女	6.4	29.8	31.7	32.1	100.0	218人
年齢	20-29歳	12.0	16.0	36.0	36.0	100.0	25人
	30-39歳	4.8	21.0	24.2	50.0	100.0	62人
	40-49歳	7.0	26.8	33.8	32.4	100.0	71人
	50-59歳	8.5	30.5	30.5	30.5	100.0	59人
	60-69歳	11.8	28.2	27.1	32.9	100.0	85人
	70歳以上	11.4	25.3	25.3	38.0	100.0	79人

問16		単位：％					
b あなたの街にも自主防衛組織		1	2	3	4	計	
		だいたいい知ってる	いくらか知ってる	が名前はある聞いたこと	知らない		
全体		7.1	14.9	17.2	60.8	100.0	383人
性別	男	8.6	13.5	20.3	57.7	100.0	163人
	女	6.0	15.6	15.1	63.3	100.0	218人
年齢	20-29歳	4.0	4.0	20.0	72.0	100.0	25人
	30-39歳	-	1.6	8.1	90.3	100.0	62人
	40-49歳	2.8	14.1	18.3	64.8	100.0	71人
	50-59歳	10.2	20.3	15.3	54.2	100.0	59人
	60-69歳	12.1	20.5	20.5	47.0	100.0	83人
	70歳以上	10.1	19.0	21.5	49.4	100.0	79人

問16		単位：％					
c 千葉市の災害時要援護者対策		1	2	3	4	計	
		だいたいい知ってる	いくらか知ってる	が名前はある聞いたこと	知らない		
全体		1.6	5.2	16.6	76.6	100.0	385人
性別	男	1.2	5.5	16.4	77.0	100.0	165人
	女	1.8	5.1	17.0	76.2	100.0	218人
年齢	20-29歳	4.0	4.0	20.0	72.0	100.0	25人
	30-39歳	1.6	3.2	11.3	83.9	100.0	62人
	40-49歳	4.2	4.2	19.7	71.8	100.0	71人
	50-59歳	-	5.1	17.0	78.0	100.0	59人
	60-69歳	-	7.1	19.1	73.8	100.0	84人
	70歳以上	1.3	6.3	15.0	77.5	100.0	80人

問16		単位：％					
d 千葉市防災エリアメール		1	2	3	4	計	
		だいたいい知ってる	いくらか知ってる	が名前はある聞いたこと	知らない		
全体		9.1	10.7	14.6	65.6	100.0	384人
性別	男	6.7	12.1	13.9	67.3	100.0	165人
	女	11.1	9.7	15.2	64.1	100.0	217人
年齢	20-29歳	20.0	20.0	20.0	40.0	100.0	25人
	30-39歳	9.7	9.7	9.7	71.0	100.0	62人
	40-49歳	22.5	9.9	15.5	52.1	100.0	71人
	50-59歳	8.5	10.2	15.3	66.1	100.0	59人
	60-69歳	2.4	8.3	16.7	72.6	100.0	84人
	70歳以上	1.3	11.4	13.9	73.4	100.0	79人

問16		単位：％					
e わが家の危機管理マニュアル		1	2	3	4	計	
		だいたいい知ってる	いくらか知ってる	が名前はある聞いたこと	知らない		
全体		5.5	13.4	21.1	60.0	100.0	380人
性別	男	6.1	12.8	18.9	62.2	100.0	164人
	女	5.1	14.0	22.9	57.9	100.0	214人
年齢	20-29歳	4.0	8.0	36.0	52.0	100.0	25人
	30-39歳	-	3.3	13.1	83.6	100.0	61人
	40-49歳	4.2	15.5	26.8	53.5	100.0	71人
	50-59歳	1.7	10.3	19.0	69.0	100.0	58人
	60-69歳	7.4	16.1	18.5	58.0	100.0	81人
	70歳以上	12.5	20.0	22.5	45.0	100.0	80人

問16		単位：％					
f 初期消火訓練		1	2	3	4	計	
		だいたいい知ってる	いくらか知ってる	が名前はある聞いたこと	知らない		
全体		12.5	21.9	20.8	44.8	100.0	384人
性別	男	13.9	21.2	20.6	44.2	100.0	165人
	女	11.5	22.6	20.7	45.2	100.0	217人
年齢	20-29歳	12.0	12.0	36.0	40.0	100.0	25人
	30-39歳	8.1	6.5	17.7	67.7	100.0	62人
	40-49歳	8.5	23.9	22.5	45.1	100.0	71人
	50-59歳	11.9	23.7	18.6	45.8	100.0	59人
	60-69歳	16.5	25.9	22.4	35.3	100.0	85人
	70歳以上	16.7	29.5	16.7	37.2	100.0	78人

(問16の続き)

問16		単位: %					
g 避難訓練		1	2	3	4		
		だいたいい知ってる	いくらか知ってる	がある前は聞いたこと	知らない	計	
全体		12.8	25.3	24.0	38.0	100.0	384人
性別	男	13.3	26.1	22.4	38.2	100.0	165人
	女	12.4	24.4	25.4	37.8	100.0	217人
年齢	20-29歳	16.0	36.0	28.0	20.0	100.0	25人
	30-39歳	11.3	17.7	24.2	46.8	100.0	62人
	40-49歳	15.5	23.9	31.0	29.6	100.0	71人
	50-59歳	8.5	30.5	25.4	35.6	100.0	59人
	60-69歳	15.5	21.4	23.8	39.3	100.0	84人
	70歳以上	11.4	29.1	16.5	43.0	100.0	79人

問16		単位: %					
h 応急救護訓練		1	2	3	4		
		だいたいい知ってる	いくらか知ってる	がある前は聞いたこと	知らない	計	
全体		10.1	21.0	23.8	45.1	100.0	386人
性別	男	10.9	20.0	20.0	49.1	100.0	165人
	女	9.6	21.5	26.9	42.0	100.0	219人
年齢	20-29歳	12.0	24.0	24.0	40.0	100.0	25人
	30-39歳	6.5	14.5	21.0	58.1	100.0	62人
	40-49歳	11.3	19.7	25.4	43.7	100.0	71人
	50-59歳	10.2	22.0	27.1	40.7	100.0	59人
	60-69歳	12.9	18.8	30.6	37.7	100.0	85人
	70歳以上	8.8	27.5	16.3	47.5	100.0	80人

問16		単位: %					
i 震度体感訓練		1	2	3	4		
		だいたいい知ってる	いくらか知ってる	がある前は聞いたこと	知らない	計	
全体		9.1	18.4	21.0	51.4	100.0	385人
性別	男	9.7	17.0	17.0	56.4	100.0	165人
	女	8.7	18.8	24.3	48.2	100.0	218人
年齢	20-29歳	4.0	4.0	28.0	64.0	100.0	25人
	30-39歳	9.7	11.3	6.5	72.6	100.0	62人
	40-49歳	7.0	21.1	23.9	47.9	100.0	71人
	50-59歳	10.2	18.6	23.7	47.5	100.0	59人
	60-69歳	10.6	21.2	28.2	40.0	100.0	85人
	70歳以上	10.1	21.5	17.7	50.6	100.0	79人

問16		単位: %					
j 地域の避難所の備蓄品		1	2	3	4		
		だいたいい知ってる	いくらか知ってる	がある前は聞いたこと	知らない	計	
全体		3.2	15.2	12.1	69.6	100.0	381人
性別	男	3.1	14.0	9.8	73.2	100.0	164人
	女	3.3	16.3	14.0	66.5	100.0	215人
年齢	20-29歳	-	24.0	8.0	68.0	100.0	25人
	30-39歳	1.6	11.3	9.7	77.4	100.0	62人
	40-49歳	4.2	15.5	16.9	63.4	100.0	71人
	50-59歳	3.4	13.6	13.6	69.5	100.0	59人
	60-69歳	4.8	15.7	12.1	67.5	100.0	83人
	70歳以上	2.6	16.9	10.4	70.1	100.0	77人

問16		単位: %					
k 身近な消火栓の設置場所		1	2	3	4		
		だいたいい知ってる	いくらか知ってる	がある前は聞いたこと	知らない	計	
全体		16.5	22.2	12.0	49.4	100.0	383人
性別	男	15.3	24.5	12.3	47.9	100.0	163人
	女	17.4	20.6	11.9	50.0	100.0	218人
年齢	20-29歳	12.0	24.0	12.0	52.0	100.0	25人
	30-39歳	12.9	21.0	8.1	58.1	100.0	62人
	40-49歳	15.7	18.6	17.1	48.6	100.0	70人
	50-59歳	13.6	18.6	10.2	57.6	100.0	59人
	60-69歳	19.1	28.6	8.3	44.1	100.0	84人
	70歳以上	21.5	22.8	15.2	40.5	100.0	79人

問16		単位: %					
m 近くの井戸の場所		1	2	3	4		
		だいたいい知ってる	いくらか知ってる	がある前は聞いたこと	知らない	計	
全体		11.2	8.6	4.7	75.6	100.0	385人
性別	男	9.2	7.3	4.9	78.7	100.0	164人
	女	12.8	9.6	4.6	73.1	100.0	219人
年齢	20-29歳	4.0	4.0	8.0	84.0	100.0	25人
	30-39歳	4.8	6.5	1.6	87.1	100.0	62人
	40-49歳	7.0	7.0	5.6	80.3	100.0	71人
	50-59歳	8.5	6.8	5.1	79.7	100.0	59人
	60-69歳	17.7	15.3	-	67.1	100.0	85人
	70歳以上	17.7	7.6	10.1	64.6	100.0	79人

問17 あなたは、千葉市が行なっている防災に対する取り組みは十分だと思いますか。次のa～cのそれぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問17		単位：％					
a 災害時の情報伝達							
		1 そう 思う	2 まあ そう 思う	3 あまり 思わ ない	4 ま っ た く 思 わ ない	計	
全体		6.0	25.0	47.1	21.9	100.0	384人
性別	男	3.7	24.5	46.6	25.2	100.0	163人
	女	7.8	25.6	47.5	19.2	100.0	219人
年齢	20-29歳	4.0	44.0	48.0	4.0	100.0	25人
	30-39歳	3.2	17.7	53.2	25.8	100.0	62人
	40-49歳	9.7	20.8	50.0	19.4	100.0	72人
	50-59歳	6.8	22.0	47.5	23.7	100.0	59人
	60-69歳	6.0	21.7	55.4	16.9	100.0	83人
	70歳以上	5.1	34.2	31.7	29.1	100.0	79人

問17		単位：％					
b 防災訓練の実施							
		1 そう 思う	2 まあ そう 思う	3 あまり 思わ ない	4 ま っ た く 思 わ ない	計	
全体		4.7	27.0	49.5	18.9	100.0	382人
性別	男	4.9	24.7	49.4	21.0	100.0	162人
	女	4.6	28.9	49.5	17.0	100.0	218人
年齢	20-29歳	4.0	40.0	44.0	12.0	100.0	25人
	30-39歳	3.2	14.5	56.5	25.8	100.0	62人
	40-49歳	2.8	29.6	50.7	16.9	100.0	71人
	50-59歳	6.8	22.0	52.5	18.6	100.0	59人
	60-69歳	3.6	27.7	55.4	13.3	100.0	83人
	70歳以上	7.7	34.6	37.2	20.5	100.0	78人

問17		単位：％					
c 防災意識を高めるための広報活動							
		1 そう 思う	2 まあ そう 思う	3 あまり 思わ ない	4 ま っ た く 思 わ ない	計	
全体		3.1	27.0	49.5	20.4	100.0	382人
性別	男	2.5	25.9	49.4	22.2	100.0	162人
	女	3.7	27.5	49.5	19.3	100.0	218人
年齢	20-29歳	-	32.0	56.0	12.0	100.0	25人
	30-39歳	1.6	17.7	51.6	29.0	100.0	62人
	40-49歳	2.8	25.4	52.1	19.7	100.0	71人
	50-59歳	3.4	23.7	55.9	17.0	100.0	59人
	60-69歳	3.6	27.7	53.0	15.7	100.0	83人
	70歳以上	5.1	35.9	35.9	23.1	100.0	78人

問18 あなたは、次のa～vの防災対策を行なっていますか。それぞれについて、下記の1～3のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問18		単位：％				
a 家屋の耐震化や耐震度、耐震診断など、自分の家やマンションの耐震性に気を使っている		1	2	3	計	
		前東 か日 から本 行大 つ震 て災 いの た	か東 ら日 始本 め大 た震 災の 後	行 っ て い ない		
全体		40.5	9.7	49.7	100.0	380人
性別	男	47.0	12.2	40.9	100.0	164人
	女	35.5	7.9	56.5	100.0	214人
年齢	20-29歳	28.0	16.0	56.0	100.0	25人
	30-39歳	46.8	11.3	41.9	100.0	62人
	40-49歳	45.1	9.9	45.1	100.0	71人
	50-59歳	40.7	5.1	54.2	100.0	59人
	60-69歳	34.5	8.3	57.1	100.0	84人
	70歳以上	42.7	12.0	45.3	100.0	75人

問18		単位：％				
b 家具を固定している		1	2	3	計	
		前東 か日 から本 行大 つ震 て災 いの た	か東 ら日 始本 め大 た震 災の 後	行 っ て い ない		
全体		38.2	10.1	51.7	100.0	387人
性別	男	39.4	11.5	49.1	100.0	165人
	女	37.3	9.1	53.6	100.0	220人
年齢	20-29歳	28.0	16.0	56.0	100.0	25人
	30-39歳	30.7	11.3	58.1	100.0	62人
	40-49歳	36.6	9.9	53.5	100.0	71人
	50-59歳	35.0	13.3	51.7	100.0	60人
	60-69歳	41.2	7.1	51.8	100.0	85人
	70歳以上	47.5	7.5	45.0	100.0	80人

問18		単位：％				
c 屋根瓦や窓ガラスの補強をしている		1	2	3	計	
		前東 か日 から本 行大 つ震 て災 いの た	か東 ら日 始本 め大 た震 災の 後	行 っ て い ない		
全体		11.5	2.6	85.9	100.0	382人
性別	男	12.8	3.7	83.5	100.0	164人
	女	10.2	1.9	88.0	100.0	216人
年齢	20-29歳	8.0	8.0	84.0	100.0	25人
	30-39歳	11.3	1.6	87.1	100.0	62人
	40-49歳	7.1	1.4	91.4	100.0	70人
	50-59歳	8.3	3.3	88.3	100.0	60人
	60-69歳	7.1	1.2	91.7	100.0	84人
	70歳以上	23.4	2.6	74.0	100.0	77人

問18		単位：％				
d 災害情報を積極的に収集するようにしている		1	2	3	計	
		前東 か日 から本 行大 つ震 て災 いの た	か東 ら日 始本 め大 た震 災の 後	行 っ て い ない		
全体		24.4	33.7	42.0	100.0	386人
性別	男	23.8	29.3	47.0	100.0	164人
	女	25.0	36.8	38.2	100.0	220人
年齢	20-29歳	20.0	32.0	48.0	100.0	25人
	30-39歳	27.4	37.1	35.5	100.0	62人
	40-49歳	25.4	40.9	33.8	100.0	71人
	50-59歳	26.7	28.3	45.0	100.0	60人
	60-69歳	24.7	30.6	44.7	100.0	85人
	70歳以上	21.5	30.4	48.1	100.0	79人

問18		単位：％				
e 消火器を準備している		1	2	3	計	
		前東 か日 から本 行大 つ震 て災 いの た	か東 ら日 始本 め大 た震 災の 後	行 っ て い ない		
全体		46.0	3.4	50.7	100.0	385人
性別	男	46.3	2.4	51.2	100.0	164人
	女	45.7	4.1	50.2	100.0	219人
年齢	20-29歳	25.0	4.2	70.8	100.0	24人
	30-39歳	35.5	3.2	61.3	100.0	62人
	40-49歳	50.7	-	49.3	100.0	71人
	50-59歳	46.7	3.3	50.0	100.0	60人
	60-69歳	54.1	1.2	44.7	100.0	85人
	70歳以上	45.6	8.9	45.6	100.0	79人

問18		単位：％				
f 携帯ラジオや携帯テレビを準備している		1	2	3	計	
		前東 か日 から本 行大 つ震 て災 いの た	か東 ら日 始本 め大 た震 災の 後	行 っ て い ない		
全体		61.6	16.1	22.3	100.0	385人
性別	男	63.2	12.9	23.9	100.0	163人
	女	60.5	18.2	21.4	100.0	220人
年齢	20-29歳	52.0	12.0	36.0	100.0	25人
	30-39歳	46.8	12.9	40.3	100.0	62人
	40-49歳	54.3	20.0	25.7	100.0	70人
	50-59歳	57.6	18.6	23.7	100.0	59人
	60-69歳	71.8	16.5	11.8	100.0	85人
	70歳以上	75.0	12.5	12.5	100.0	80人

問18		単位: %				
g 懐中電灯を準備している		1	2	3	計	
		前東 から日 本大 行つ て災 いの た	か東 から日 本大 始め た震 災の 後	行 つ て い ない		
全体		81.4	14.7	3.9	100.0	388人
性別	男	84.2	9.1	6.7	100.0	165人
	女	79.2	19.0	1.8	100.0	221人
年齢	20-29歳	56.0	28.0	16.0	100.0	25人
	30-39歳	69.4	25.8	4.8	100.0	62人
	40-49歳	81.7	12.7	5.6	100.0	71人
	50-59歳	83.3	11.7	5.0	100.0	60人
	60-69歳	86.9	11.9	1.2	100.0	84人
	70歳以上	90.2	9.8	-	100.0	82人

問18		単位: %				
h 非常時に持ち出すバック等を準備している		1	2	3	計	
		前東 から日 本大 行つ て災 いの た	か東 から日 本大 始め た震 災の 後	行 つ て い ない		
全体		38.2	20.2	41.6	100.0	387人
性別	男	43.0	13.9	43.0	100.0	165人
	女	35.0	24.6	40.5	100.0	220人
年齢	20-29歳	28.0	16.0	56.0	100.0	25人
	30-39歳	25.8	29.0	45.2	100.0	62人
	40-49歳	33.8	23.9	42.3	100.0	71人
	50-59歳	33.3	23.3	43.3	100.0	60人
	60-69歳	38.1	14.3	47.6	100.0	84人
	70歳以上	58.0	14.8	27.2	100.0	81人

問18		単位: %				
i 非常時に持ち出す衣類を準備をしている		1	2	3	計	
		前東 から日 本大 行つ て災 いの た	か東 から日 本大 始め た震 災の 後	行 つ て い ない		
全体		14.3	12.7	73.1	100.0	386人
性別	男	15.8	13.9	70.3	100.0	165人
	女	13.2	11.9	74.9	100.0	219人
年齢	20-29歳	12.0	16.0	72.0	100.0	25人
	30-39歳	12.9	16.1	71.0	100.0	62人
	40-49歳	11.3	14.1	74.7	100.0	71人
	50-59歳	10.0	5.0	85.0	100.0	60人
	60-69歳	10.8	13.3	75.9	100.0	83人
	70歳以上	24.7	13.6	61.7	100.0	81人

問18		単位: %				
j 医薬品を準備している		1	2	3	計	
		前東 から日 本大 行つ て災 いの た	か東 から日 本大 始め た震 災の 後	行 つ て い ない		
全体		42.3	13.9	43.8	100.0	388人
性別	男	48.5	8.5	43.0	100.0	165人
	女	38.0	18.1	43.9	100.0	221人
年齢	20-29歳	44.0	8.0	48.0	100.0	25人
	30-39歳	50.0	16.1	33.9	100.0	62人
	40-49歳	46.5	11.3	42.3	100.0	71人
	50-59歳	45.0	11.7	43.3	100.0	60人
	60-69歳	36.5	12.9	50.6	100.0	85人
	70歳以上	37.0	18.5	44.4	100.0	81人

問18		単位: %				
k 近くの学校や 公園など避難する場所を決めている		1	2	3	計	
		前東 から日 本大 行つ て災 いの た	か東 から日 本大 始め た震 災の 後	行 つ て い ない		
全体		49.7	17.0	33.3	100.0	388人
性別	男	49.7	10.9	39.4	100.0	165人
	女	50.2	21.7	28.1	100.0	221人
年齢	20-29歳	32.0	24.0	44.0	100.0	25人
	30-39歳	38.7	27.4	33.9	100.0	62人
	40-49歳	52.1	16.9	31.0	100.0	71人
	50-59歳	46.7	13.3	40.0	100.0	60人
	60-69歳	63.5	10.6	25.9	100.0	85人
	70歳以上	50.6	16.1	33.3	100.0	81人

問18		単位: %				
m 家族との連絡方法を決めている		1	2	3	計	
		前東 から日 本大 行つ て災 いの た	か東 から日 本大 始め た震 災の 後	行 つ て い ない		
全体		35.7	19.0	45.3	100.0	384人
性別	男	37.6	12.7	49.7	100.0	165人
	女	34.6	24.0	41.5	100.0	217人
年齢	20-29歳	20.0	24.0	56.0	100.0	25人
	30-39歳	30.7	24.2	45.2	100.0	62人
	40-49歳	38.6	17.1	44.3	100.0	70人
	50-59歳	39.0	17.0	44.1	100.0	59人
	60-69歳	34.5	20.2	45.2	100.0	84人
	70歳以上	41.3	15.0	43.8	100.0	80人

(問18の続き)

問18		単位: %				
n 電池の備蓄をしている		1	2	3	計	
		前東 から日 本大 行震 つ災 ていの た	か東 から日 本大 始め震 た災 の 後	行 つ てい ない		
全体		57.5	21.2	21.2	100.0	386人
性別	男	61.0	17.1	22.0	100.0	164人
	女	55.5	24.6	20.0	100.0	220人
年齢	20-29歳	48.0	20.0	32.0	100.0	25人
	30-39歳	40.3	25.8	33.9	100.0	62人
	40-49歳	62.0	19.7	18.3	100.0	71人
	50-59歳	55.0	28.3	16.7	100.0	60人
	60-69歳	67.1	17.7	15.3	100.0	85人
	70歳以上	64.6	19.0	16.5	100.0	79人

問18		単位: %				
o トイレ用紙の備蓄をしている		1	2	3	計	
		前東 から日 本大 行震 つ災 ていの た	か東 から日 本大 始め震 た災 の 後	行 つ てい ない		
全体		47.6	10.3	42.1	100.0	387人
性別	男	47.9	7.9	44.2	100.0	165人
	女	47.3	12.3	40.5	100.0	220人
年齢	20-29歳	44.0	16.0	40.0	100.0	25人
	30-39歳	32.3	12.9	54.8	100.0	62人
	40-49歳	47.9	7.0	45.1	100.0	71人
	50-59歳	41.7	10.0	48.3	100.0	60人
	60-69歳	57.1	7.1	35.7	100.0	84人
	70歳以上	55.6	13.6	30.9	100.0	81人

問18		単位: %				
p 食料を備蓄している		1	2	3	計	
		前東 から日 本大 行震 つ災 ていの た	か東 から日 本大 始め震 た災 の 後	行 つ てい ない		
全体		36.6	15.0	48.5	100.0	388人
性別	男	37.6	11.5	50.9	100.0	165人
	女	36.2	17.2	46.6	100.0	221人
年齢	20-29歳	32.0	20.0	48.0	100.0	25人
	30-39歳	25.8	17.7	56.5	100.0	62人
	40-49歳	43.7	14.1	42.3	100.0	71人
	50-59歳	33.3	15.0	51.7	100.0	60人
	60-69歳	42.4	12.9	44.7	100.0	85人
	70歳以上	38.3	13.6	48.2	100.0	81人

問18		単位: %				
q 飲料水を備蓄している		1	2	3	計	
		前東 から日 本大 行震 つ災 ていの た	か東 から日 本大 始め震 た災 の 後	行 つ てい ない		
全体		45.6	21.9	32.5	100.0	388人
性別	男	43.0	20.6	36.4	100.0	165人
	女	47.5	23.1	29.4	100.0	221人
年齢	20-29歳	44.0	24.0	32.0	100.0	25人
	30-39歳	33.9	27.4	38.7	100.0	62人
	40-49歳	52.1	22.5	25.4	100.0	71人
	50-59歳	36.7	23.3	40.0	100.0	60人
	60-69歳	51.8	21.2	27.1	100.0	85人
	70歳以上	49.4	17.3	33.3	100.0	81人

問18		単位: %				
r カセットコンロを準備している		1	2	3	計	
		前東 から日 本大 行震 つ災 ていの た	か東 から日 本大 始め震 た災 の 後	行 つ てい ない		
全体		46.6	7.8	45.6	100.0	386人
性別	男	40.6	6.1	53.3	100.0	165人
	女	51.1	9.1	39.7	100.0	219人
年齢	20-29歳	28.0	8.0	64.0	100.0	25人
	30-39歳	43.6	8.1	48.4	100.0	62人
	40-49歳	49.3	9.9	40.9	100.0	71人
	50-59歳	51.7	6.7	41.7	100.0	60人
	60-69歳	52.9	7.1	40.0	100.0	85人
	70歳以上	41.8	7.6	50.6	100.0	79人

問18		単位: %				
s 風呂の水のため置きをしている		1	2	3	計	
		前東 から日 本大 行震 つ災 ていの た	か東 から日 本大 始め震 た災 の 後	行 つ てい ない		
全体		35.1	10.1	54.8	100.0	387人
性別	男	34.6	9.7	55.8	100.0	165人
	女	35.9	10.5	53.6	100.0	220人
年齢	20-29歳	12.0	24.0	64.0	100.0	25人
	30-39歳	27.4	3.2	69.4	100.0	62人
	40-49歳	28.2	5.6	66.2	100.0	71人
	50-59歳	38.3	13.3	48.3	100.0	60人
	60-69歳	37.7	11.8	50.6	100.0	85人
	70歳以上	50.0	10.0	40.0	100.0	80人

(問18の続き)

問18		単位: %				
t 貴重品をすぐに持ち出せるようにしている		1	2	3	計	
		1 前東 から日 本大 行っ つ震 て災 いの た	2 か東 ら日 本始 め大 た震 災の 後	3 行っ てい ない		
全体		38.8	13.8	47.4	100.0	384人
性別	男	46.3	9.8	43.9	100.0	164人
	女	33.5	17.0	49.5	100.0	218人
年齢	20-29歳	48.0	12.0	40.0	100.0	25人
	30-39歳	24.2	16.1	59.7	100.0	62人
	40-49歳	30.0	7.1	62.9	100.0	70人
	50-59歳	38.3	16.7	45.0	100.0	60人
	60-69歳	37.8	14.6	47.6	100.0	82人
	70歳以上	56.8	16.1	27.2	100.0	81人

問18		単位: %				
u 自主防衛組織に参加している		1	2	3	計	
		1 前東 から日 本大 行っ つ震 て災 いの た	2 か東 ら日 本始 め大 た震 災の 後	3 行っ てい ない		
全体		10.9	3.4	85.7	100.0	385人
性別	男	12.7	4.9	82.4	100.0	165人
	女	9.6	2.3	88.1	100.0	218人
年齢	20-29歳	8.0	8.0	84.0	100.0	25人
	30-39歳	4.8	1.6	93.6	100.0	62人
	40-49歳	8.5	4.2	87.3	100.0	71人
	50-59歳	13.3	-	86.7	100.0	60人
	60-69歳	14.3	3.6	82.1	100.0	84人
	70歳以上	13.9	5.1	81.0	100.0	79人

問18		単位: %				
v 地域住民と防災に関する情報交換を行っている		1	2	3	計	
		1 前東 から日 本大 行っ つ震 て災 いの た	2 か東 ら日 本始 め大 た震 災の 後	3 行っ てい ない		
全体		9.6	4.2	86.3	100.0	386人
性別	男	11.6	3.7	84.8	100.0	164人
	女	8.2	4.6	87.3	100.0	220人
年齢	20-29歳	8.0	-	92.0	100.0	25人
	30-39歳	1.6	3.2	95.2	100.0	62人
	40-49歳	8.5	7.0	84.5	100.0	71人
	50-59歳	15.0	1.7	83.3	100.0	60人
	60-69歳	9.4	4.7	85.9	100.0	85人
	70歳以上	13.9	3.8	82.3	100.0	79人

問19 家庭内で行なっている防災対策について、10項目にしばった上でお聞きます。あなたは、現在、次のa～jのような防災対策にどの程度取り組んでいますか。それぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問19		単位：％					
a 懐中電灯の準備		1	2	3	4		
		十分 だ と 思 う	ど ち ら か と 思 う い え ば	ど ち ら か と 思 う い え ば	不 十 分 だ と 思 う	計	
全体		45.4	39.4	10.2	5.0	100.0	383人
性別	男	43.2	38.3	11.1	7.4	100.0	162人
	女	47.0	40.2	9.6	3.2	100.0	219人
年齢	20-29歳	40.0	44.0	4.0	12.0	100.0	25人
	30-39歳	50.8	28.6	12.7	7.9	100.0	63人
	40-49歳	49.3	37.7	5.8	7.3	100.0	69人
	50-59歳	33.9	44.1	15.3	6.8	100.0	59人
	60-69歳	42.9	46.4	8.3	2.4	100.0	84人
	70歳以上	51.9	35.4	12.7	-	100.0	79人

問19		単位：％					
b 食料の確保(米・インスタント食品等)		1	2	3	4		
		十分 だ と 思 う	ど ち ら か と 思 う い え ば	ど ち ら か と 思 う い え ば	不 十 分 だ と 思 う	計	
全体		14.6	33.0	39.2	13.3	100.0	385人
性別	男	13.5	35.0	37.4	14.1	100.0	163人
	女	15.5	30.9	40.9	12.7	100.0	220人
年齢	20-29歳	8.0	28.0	44.0	20.0	100.0	25人
	30-39歳	11.1	19.1	50.8	19.1	100.0	63人
	40-49歳	11.6	39.1	40.6	8.7	100.0	69人
	50-59歳	11.9	30.5	39.0	18.6	100.0	59人
	60-69歳	16.7	40.5	32.1	10.7	100.0	84人
	70歳以上	22.2	32.1	35.8	9.9	100.0	81人

問19		単位：％					
c 飲料水の確保		1	2	3	4		
		十分 だ と 思 う	ど ち ら か と 思 う い え ば	ど ち ら か と 思 う い え ば	不 十 分 だ と 思 う	計	
全体		17.7	32.0	32.8	17.5	100.0	384人
性別	男	15.4	37.0	29.6	17.9	100.0	162人
	女	19.6	28.6	34.6	17.3	100.0	220人
年齢	20-29歳	16.0	28.0	28.0	28.0	100.0	25人
	30-39歳	14.3	25.4	39.7	20.6	100.0	63人
	40-49歳	11.6	43.5	33.3	11.6	100.0	69人
	50-59歳	18.6	27.1	37.3	17.0	100.0	59人
	60-69歳	15.5	34.5	28.6	21.4	100.0	84人
	70歳以上	28.8	30.0	27.5	13.8	100.0	80人

問19		単位：％					
d 医薬品の準備		1	2	3	4		
		十分 だ と 思 う	ど ち ら か と 思 う い え ば	ど ち ら か と 思 う い え ば	不 十 分 だ と 思 う	計	
全体		13.7	35.6	34.3	16.4	100.0	379人
性別	男	13.7	37.9	31.7	16.8	100.0	161人
	女	13.9	34.3	35.7	16.2	100.0	216人
年齢	20-29歳	12.0	44.0	28.0	16.0	100.0	25人
	30-39歳	17.5	33.3	28.6	20.6	100.0	63人
	40-49歳	11.6	39.1	31.9	17.4	100.0	69人
	50-59歳	12.1	32.8	39.7	15.5	100.0	58人
	60-69歳	9.9	39.5	35.8	14.8	100.0	81人
	70歳以上	19.0	30.4	35.4	15.2	100.0	79人

問19		単位：％					
e 携帯ラジオや携帯テレビの準備		1	2	3	4		
		十分 だ と 思 う	ど ち ら か と 思 う い え ば	ど ち ら か と 思 う い え ば	不 十 分 だ と 思 う	計	
全体		28.0	39.8	17.5	14.7	100.0	382人
性別	男	27.2	42.0	15.4	15.4	100.0	162人
	女	28.9	38.1	19.3	13.8	100.0	218人
年齢	20-29歳	8.0	56.0	12.0	24.0	100.0	25人
	30-39歳	27.0	31.8	19.1	22.2	100.0	63人
	40-49歳	31.9	33.3	18.8	15.9	100.0	69人
	50-59歳	20.7	41.4	22.4	15.5	100.0	58人
	60-69歳	28.6	46.4	16.7	8.3	100.0	84人
	70歳以上	38.0	36.7	15.2	10.1	100.0	79人

問19		単位：％					
f 日用品の確保(トイレトペーパー・紙おむつ等)		1	2	3	4		
		十分 だ と 思 う	ど ち ら か と 思 う い え ば	ど ち ら か と 思 う い え ば	不 十 分 だ と 思 う	計	
全体		18.1	39.5	29.3	13.1	100.0	382人
性別	男	15.5	39.8	31.1	13.7	100.0	161人
	女	20.1	39.7	27.4	12.8	100.0	219人
年齢	20-29歳	4.0	44.0	32.0	20.0	100.0	25人
	30-39歳	17.5	28.6	38.1	15.9	100.0	63人
	40-49歳	17.4	37.7	37.7	7.3	100.0	69人
	50-59歳	17.0	37.3	27.1	18.6	100.0	59人
	60-69歳	18.1	48.2	22.9	10.8	100.0	83人
	70歳以上	25.3	41.8	20.3	12.7	100.0	79人

(問19の続き)

問19		単位: %					
g 家具の固定							
		1 十分 だ と 思 う	2 ど ち ら か と 思 う え ば	3 ど ち ら か と 思 う え ば	4 不 十 分 だ と 思 う	計	
全体		13.8	24.7	29.7	31.8	100.0	384人
性別	男	14.2	25.3	32.1	28.4	100.0	162人
	女	13.6	24.6	27.7	34.1	100.0	220人
年齢	20-29歳	8.0	20.0	28.0	44.0	100.0	25人
	30-39歳	14.3	22.2	30.2	33.3	100.0	63人
	40-49歳	11.4	24.3	27.1	37.1	100.0	70人
	50-59歳	13.6	15.3	42.4	28.8	100.0	59人
	60-69歳	11.9	29.8	31.0	27.4	100.0	84人
	70歳以上	20.3	29.1	21.5	29.1	100.0	79人

問19		単位: %					
h 住宅の補強							
		1 十分 だ と 思 う	2 ど ち ら か と 思 う え ば	3 ど ち ら か と 思 う え ば	4 不 十 分 だ と 思 う	計	
全体		16.4	32.5	21.6	29.6	100.0	379人
性別	男	18.2	32.7	19.5	29.6	100.0	159人
	女	14.7	32.6	23.4	29.4	100.0	218人
年齢	20-29歳	8.0	24.0	28.0	40.0	100.0	25人
	30-39歳	27.4	21.0	17.7	33.9	100.0	62人
	40-49歳	13.0	34.8	17.4	34.8	100.0	69人
	50-59歳	15.5	44.8	22.4	17.2	100.0	58人
	60-69歳	10.7	39.3	23.8	26.2	100.0	84人
	70歳以上	19.5	27.3	22.1	31.2	100.0	77人

問19		単位: %					
i 避難経路や避難場所の把握							
		1 十分 だ と 思 う	2 ど ち ら か と 思 う え ば	3 ど ち ら か と 思 う え ば	4 不 十 分 だ と 思 う	計	
全体		16.3	32.8	32.0	18.9	100.0	381人
性別	男	16.8	31.7	31.1	20.5	100.0	161人
	女	16.1	33.9	32.6	17.4	100.0	218人
年齢	20-29歳	12.0	16.0	44.0	28.0	100.0	25人
	30-39歳	23.8	28.6	25.4	22.2	100.0	63人
	40-49歳	13.0	30.4	39.1	17.4	100.0	69人
	50-59歳	10.2	37.3	32.2	20.3	100.0	59人
	60-69歳	19.3	38.6	30.1	12.1	100.0	83人
	70歳以上	16.7	35.9	26.9	20.5	100.0	78人

問19		単位: %					
j 家族との連絡方法の確認							
		1 十分 だ と 思 う	2 ど ち ら か と 思 う え ば	3 ど ち ら か と 思 う え ば	4 不 十 分 だ と 思 う	計	
全体		15.7	33.0	31.2	20.2	100.0	382人
性別	男	16.7	29.6	32.1	21.6	100.0	162人
	女	15.1	35.8	30.7	18.4	100.0	218人
年齢	20-29歳	16.0	24.0	44.0	16.0	100.0	25人
	30-39歳	14.3	33.3	30.2	22.2	100.0	63人
	40-49歳	17.4	30.4	34.8	17.4	100.0	69人
	50-59歳	11.9	27.1	32.2	28.8	100.0	59人
	60-69歳	11.9	40.5	34.5	13.1	100.0	84人
	70歳以上	23.1	34.6	20.5	21.8	100.0	78人

問20 あなたは、次のa～dのような事柄について誰が行うべきだと思いますか。それぞれについて、下記の1～3のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問20		単位：％				
a 地域の中で子どもたちが安心して登下校したり、遊んだりできる環境を維持する		1 行政のサービスで	2 地域住民の協力で	3 それぞれの家庭で	計	
全体		23.0	70.4	6.6	100.0	378人
性別	男	23.8	67.5	8.8	100.0	160人
	女	22.2	72.7	5.1	100.0	216人
年齢	20-29歳	12.5	79.2	8.3	100.0	24人
	30-39歳	27.4	64.5	8.1	100.0	62人
	40-49歳	25.7	70.0	4.3	100.0	70人
	50-59歳	24.6	73.7	1.8	100.0	57人
	60-69歳	20.2	76.2	3.6	100.0	84人
	70歳以上	20.8	64.9	14.3	100.0	77人

問20		単位：％				
b 一人暮らしのお年寄りが日常生活でちょっとした助けを必要としているとき、お手伝いをする		1 行政のサービスで	2 地域住民の協力で	3 それぞれの家庭で	計	
全体		29.0	67.8	3.2	100.0	376人
性別	男	29.4	65.6	5.0	100.0	160人
	女	29.0	69.2	1.9	100.0	214人
年齢	20-29歳	37.5	62.5	-	100.0	24人
	30-39歳	47.5	52.5	-	100.0	61人
	40-49歳	39.1	58.0	2.9	100.0	69人
	50-59歳	32.1	66.1	1.8	100.0	56人
	60-69歳	17.1	80.5	2.4	100.0	82人
	70歳以上	15.0	76.3	8.8	100.0	80人

問20		単位：％				
c 乳幼児を持った親が急な用事で1～2時間子どもを預けなければならなくなったとき、子どもの面倒をみる		1 行政のサービスで	2 地域住民の協力で	3 それぞれの家庭で	計	
全体		40.3	40.9	18.8	100.0	377人
性別	男	34.2	43.0	22.8	100.0	158人
	女	44.7	39.2	16.1	100.0	217人
年齢	20-29歳	48.0	32.0	20.0	100.0	25人
	30-39歳	53.2	33.9	12.9	100.0	62人
	40-49歳	48.5	38.2	13.2	100.0	68人
	50-59歳	33.3	36.8	29.8	100.0	57人
	60-69歳	38.6	47.0	14.5	100.0	83人
	70歳以上	26.9	48.7	24.4	100.0	78人

問20		単位：％				
d 誰からも親しまれている地域のシンボリックな並木があり、あなたの家の前を含む歩道が落ち葉だらけになっているとき、掃除をする		1 行政のサービスで	2 地域住民の協力で	3 それぞれの家庭で	計	
全体		12.7	63.6	23.8	100.0	379人
性別	男	14.4	63.1	22.5	100.0	160人
	女	11.5	64.1	24.4	100.0	217人
年齢	20-29歳	12.0	80.0	8.0	100.0	25人
	30-39歳	27.9	59.0	13.1	100.0	61人
	40-49歳	15.9	62.3	21.7	100.0	69人
	50-59歳	7.0	71.9	21.1	100.0	57人
	60-69歳	7.2	67.5	25.3	100.0	83人
	70歳以上	8.8	52.5	38.8	100.0	80人

問21 あなたの性格は、次のa～zのようなことにどの程度あてはまりますか。それぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、番号に○をつけてください。

問21		単位：％					
a おとなしい方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか まかとい えば	あどち はらか まかとい えば	あては まらな い		
全体		14.4	43.3	31.0	11.3	100.0	381人
性別	男	19.4	51.3	20.0	9.4	100.0	160人
	女	10.5	37.4	39.3	12.8	100.0	219人
年齢	20-29歳	32.0	40.0	12.0	16.0	100.0	25人
	30-39歳	14.5	37.1	25.8	22.6	100.0	62人
	40-49歳	11.6	44.9	31.9	11.6	100.0	69人
	50-59歳	11.9	33.9	50.9	3.4	100.0	59人
	60-69歳	11.9	42.9	36.9	8.3	100.0	84人
	70歳以上	15.2	55.7	20.3	8.9	100.0	79人

問21		単位：％					
b 物事への取り組みが中途半端な方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか まかとい えば	あどち はらか まかとい えば	あては まらな い		
全体		10.1	32.3	38.9	18.8	100.0	378人
性別	男	10.8	31.7	36.7	20.9	100.0	158人
	女	9.2	32.6	40.8	17.4	100.0	218人
年齢	20-29歳	20.8	33.3	33.3	12.5	100.0	24人
	30-39歳	16.1	38.7	29.0	16.1	100.0	62人
	40-49歳	4.4	33.3	49.3	13.0	100.0	69人
	50-59歳	6.8	28.8	40.7	23.7	100.0	59人
	60-69歳	9.5	31.0	44.1	15.5	100.0	84人
	70歳以上	9.1	28.6	33.8	28.6	100.0	77人

問21		単位：％					
c 好奇心の乏しい方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか まかとい えば	あどち はらか まかとい えば	あては まらな い		
全体		4.8	17.2	51.1	27.0	100.0	378人
性別	男	4.5	17.8	49.7	28.0	100.0	157人
	女	5.0	16.0	52.5	26.5	100.0	219人
年齢	20-29歳	-	28.0	44.0	28.0	100.0	25人
	30-39歳	3.2	17.7	45.2	33.9	100.0	62人
	40-49歳	5.8	13.0	59.4	21.7	100.0	69人
	50-59歳	5.2	20.7	50.0	24.1	100.0	58人
	60-69歳	4.8	15.5	54.8	25.0	100.0	84人
	70歳以上	6.5	13.0	49.4	31.2	100.0	77人

問21		単位：％					
d 不親切な方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか まかとい えば	あどち はらか まかとい えば	あては まらな い		
全体		2.9	10.1	53.9	33.2	100.0	377人
性別	男	3.8	9.6	57.3	29.3	100.0	157人
	女	2.3	10.1	51.8	35.8	100.0	218人
年齢	20-29歳	4.0	8.0	68.0	20.0	100.0	25人
	30-39歳	3.2	17.7	58.1	21.0	100.0	62人
	40-49歳	1.5	14.5	58.0	26.1	100.0	69人
	50-59歳	5.2	6.9	56.9	31.0	100.0	58人
	60-69歳	1.2	7.1	53.6	38.1	100.0	84人
	70歳以上	4.0	4.0	42.1	50.0	100.0	76人

問21		単位：％					
e 気分が変わりやすい方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか まかとい えば	あどち はらか まかとい えば	あては まらな い		
全体		6.7	24.3	43.6	25.4	100.0	374人
性別	男	5.8	26.3	48.1	19.9	100.0	156人
	女	6.9	22.7	40.7	29.6	100.0	216人
年齢	20-29歳	4.0	52.0	32.0	12.0	100.0	25人
	30-39歳	9.7	40.3	37.1	12.9	100.0	62人
	40-49歳	2.9	29.0	49.3	18.8	100.0	69人
	50-59歳	8.6	17.2	51.7	22.4	100.0	58人
	60-69歳	4.8	16.9	48.2	30.1	100.0	83人
	70歳以上	8.1	9.5	37.8	44.6	100.0	74人

問21		単位：％					
f 無口な方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか まかとい えば	あどち はらか まかとい えば	あては まらな い		
全体		9.8	25.6	39.8	24.8	100.0	379人
性別	男	13.8	32.7	37.7	15.7	100.0	159人
	女	6.4	20.2	41.7	31.7	100.0	218人
年齢	20-29歳	8.0	40.0	36.0	16.0	100.0	25人
	30-39歳	9.7	29.0	37.1	24.2	100.0	62人
	40-49歳	11.6	17.4	43.5	27.5	100.0	69人
	50-59歳	6.8	23.7	44.1	25.4	100.0	59人
	60-69歳	8.4	28.9	38.6	24.1	100.0	83人
	70歳以上	11.5	23.1	38.5	26.9	100.0	78人

問21		単位: %					
g 根気がない方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか まかとい ええば	あどち はらか まかとい ええば	あては まらな い		
全体		5.8	19.5	46.2	28.5	100.0	379人
性別	男	4.4	20.8	50.9	23.9	100.0	159人
	女	6.4	18.4	43.1	32.1	100.0	218人
年齢	20-29歳	4.0	28.0	52.0	16.0	100.0	25人
	30-39歳	8.1	16.1	48.4	27.4	100.0	62人
	40-49歳	4.4	27.5	43.5	24.6	100.0	69人
	50-59歳	1.7	23.7	54.2	20.3	100.0	59人
	60-69歳	9.6	13.3	47.0	30.1	100.0	83人
	70歳以上	3.9	15.4	38.5	42.3	100.0	78人

問21		単位: %					
h 物事を分析するのが苦手な方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか まかとい ええば	あどち はらか まかとい ええば	あては まらな い		
全体		5.8	22.4	43.7	28.2	100.0	380人
性別	男	4.4	17.0	48.4	30.2	100.0	159人
	女	6.9	25.6	40.6	26.9	100.0	219人
年齢	20-29歳	-	24.0	40.0	36.0	100.0	25人
	30-39歳	4.8	16.1	50.0	29.0	100.0	62人
	40-49歳	5.8	24.6	42.0	27.5	100.0	69人
	50-59歳	5.1	22.0	54.2	18.6	100.0	59人
	60-69歳	6.0	26.2	42.9	25.0	100.0	84人
	70歳以上	9.0	18.0	35.9	37.2	100.0	78人

問21		単位: %					
i 冷たい方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか まかとい ええば	あどち はらか まかとい ええば	あては まらな い		
全体		3.2	16.3	46.8	33.7	100.0	380人
性別	男	2.5	17.6	51.6	28.3	100.0	159人
	女	3.7	15.1	43.8	37.4	100.0	219人
年齢	20-29歳	-	32.0	56.0	12.0	100.0	25人
	30-39歳	8.1	24.2	43.6	24.2	100.0	62人
	40-49歳	4.4	17.4	47.8	30.4	100.0	69人
	50-59歳	3.4	17.0	47.5	32.2	100.0	59人
	60-69歳	1.2	10.7	47.6	40.5	100.0	84人
	70歳以上	1.3	9.0	44.9	44.9	100.0	78人

問21		単位: %					
j くよくよする方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか まかとい ええば	あどち はらか まかとい ええば	あては まらな い		
全体		7.1	34.0	38.8	20.1	100.0	379人
性別	男	5.7	33.3	39.0	22.0	100.0	159人
	女	7.3	34.9	39.0	18.8	100.0	218人
年齢	20-29歳	16.0	40.0	32.0	12.0	100.0	25人
	30-39歳	4.8	37.1	41.9	16.1	100.0	62人
	40-49歳	11.6	42.0	33.3	13.0	100.0	69人
	50-59歳	6.8	44.1	37.3	11.9	100.0	59人
	60-69歳	1.2	32.1	41.7	25.0	100.0	84人
	70歳以上	6.5	18.2	41.6	33.8	100.0	77人

問21		単位: %					
k 引っ込み思案な方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか まかとい ええば	あどち はらか まかとい ええば	あては まらな い		
全体		8.2	30.1	38.8	23.0	100.0	379人
性別	男	4.4	35.4	41.1	19.0	100.0	158人
	女	10.5	26.0	37.4	26.0	100.0	219人
年齢	20-29歳	12.0	32.0	40.0	16.0	100.0	25人
	30-39歳	9.7	38.7	32.3	19.4	100.0	62人
	40-49歳	10.1	33.3	34.8	21.7	100.0	69人
	50-59歳	6.8	28.8	47.5	17.0	100.0	59人
	60-69歳	7.1	26.2	46.4	20.2	100.0	84人
	70歳以上	5.2	24.7	33.8	36.4	100.0	77人

問21		単位: %					
m 気まぐれな方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか まかとい ええば	あどち はらか まかとい ええば	あては まらな い		
全体		7.9	23.8	44.1	24.3	100.0	379人
性別	男	10.1	25.2	46.5	18.2	100.0	159人
	女	5.5	22.9	42.7	28.9	100.0	218人
年齢	20-29歳	16.0	44.0	32.0	8.0	100.0	25人
	30-39歳	11.3	30.7	35.5	22.6	100.0	62人
	40-49歳	10.1	30.4	40.6	18.8	100.0	69人
	50-59歳	1.7	27.6	44.8	25.9	100.0	58人
	60-69歳	6.0	15.5	59.5	19.1	100.0	84人
	70歳以上	5.1	11.5	42.3	41.0	100.0	78人

問21		単位: %					
n 頭がすぐ混乱しやすい方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない ええ ば	あては まらな い		
全体		5.0	18.7	46.6	29.7	100.0	380人
性別	男	4.4	13.2	49.1	33.3	100.0	159人
	女	4.6	22.8	45.2	27.4	100.0	219人
年齢	20-29歳	4.0	20.0	64.0	12.0	100.0	25人
	30-39歳	4.8	22.6	41.9	30.7	100.0	62人
	40-49歳	2.9	20.0	48.6	28.6	100.0	70人
	50-59歳	5.1	17.0	55.9	22.0	100.0	59人
	60-69歳	4.8	17.9	53.6	23.8	100.0	84人
	70歳以上	5.2	15.6	29.9	49.4	100.0	77人

問21		単位: %					
o 利己的な方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない ええ ば	あては まらな い		
全体		4.0	25.3	47.1	23.7	100.0	376人
性別	男	4.5	25.5	49.0	21.0	100.0	157人
	女	3.7	24.9	45.6	25.8	100.0	217人
年齢	20-29歳	12.0	36.0	36.0	16.0	100.0	25人
	30-39歳	6.6	31.2	50.8	11.5	100.0	61人
	40-49歳	4.4	26.1	50.7	18.8	100.0	69人
	50-59歳	1.7	23.7	52.5	22.0	100.0	59人
	60-69歳	2.4	27.4	44.1	26.2	100.0	84人
	70歳以上	2.7	13.3	44.0	40.0	100.0	75人

問21		単位: %					
p 神経質な方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない ええ ば	あては まらな い		
全体		6.3	37.1	40.0	16.6	100.0	380人
性別	男	6.3	41.5	39.6	12.6	100.0	159人
	女	5.9	34.3	40.6	19.2	100.0	219人
年齢	20-29歳	8.0	48.0	40.0	4.0	100.0	25人
	30-39歳	9.7	45.2	32.3	12.9	100.0	62人
	40-49歳	4.4	37.7	47.8	10.1	100.0	69人
	50-59歳	3.4	32.2	49.2	15.3	100.0	59人
	60-69歳	6.0	35.7	41.7	16.7	100.0	84人
	70歳以上	6.4	32.1	32.1	29.5	100.0	78人

問21		単位: %					
q おくびょうな方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない ええ ば	あては まらな い		
全体		7.4	34.0	42.5	16.1	100.0	379人
性別	男	6.9	37.7	41.5	13.8	100.0	159人
	女	6.9	31.7	43.6	17.9	100.0	218人
年齢	20-29歳	12.0	32.0	44.0	12.0	100.0	25人
	30-39歳	11.3	33.9	43.6	11.3	100.0	62人
	40-49歳	4.4	39.1	44.9	11.6	100.0	69人
	50-59歳	3.5	41.4	39.7	15.5	100.0	58人
	60-69歳	4.8	36.9	45.2	13.1	100.0	84人
	70歳以上	9.0	21.8	39.7	29.5	100.0	78人

問21		単位: %					
r 浪費癖がある方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない ええ ば	あては まらな い		
全体		6.4	25.1	36.3	32.3	100.0	375人
性別	男	7.0	24.8	37.6	30.6	100.0	157人
	女	6.0	25.0	35.7	33.3	100.0	216人
年齢	20-29歳	-	28.0	44.0	28.0	100.0	25人
	30-39歳	12.9	35.5	33.9	17.7	100.0	62人
	40-49歳	9.0	23.9	38.8	28.4	100.0	67人
	50-59歳	6.8	25.4	49.2	18.6	100.0	59人
	60-69歳	2.4	19.1	35.7	42.9	100.0	84人
	70歳以上	5.3	21.3	25.3	48.0	100.0	75人

問21		単位: %					
s 知性に乏しい方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない ええ ば	あては まらな い		
全体		3.2	19.3	59.0	18.5	100.0	378人
性別	男	1.9	18.4	56.3	23.4	100.0	158人
	女	4.1	19.7	61.0	15.1	100.0	218人
年齢	20-29歳	-	24.0	60.0	16.0	100.0	25人
	30-39歳	6.5	12.9	67.7	12.9	100.0	62人
	40-49歳	-	23.2	60.9	15.9	100.0	69人
	50-59歳	6.9	13.8	67.2	12.1	100.0	58人
	60-69歳	2.4	21.7	55.4	20.5	100.0	83人
	70歳以上	2.6	19.2	48.7	29.5	100.0	78人

(問21の続き)

問21		単位: %					
t 疑い深い方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない ええ ば	あては まらない		
全体		9.5	24.9	47.4	18.3	100.0	378人
性別	男	14.5	22.6	49.1	13.8	100.0	159人
	女	6.0	26.3	46.1	21.7	100.0	217人
年齢	20-29歳	20.0	32.0	40.0	8.0	100.0	25人
	30-39歳	19.4	41.9	35.5	3.2	100.0	62人
	40-49歳	13.0	24.6	50.7	11.6	100.0	69人
	50-59歳	5.1	27.1	54.2	13.6	100.0	59人
	60-69歳	4.8	19.3	53.0	22.9	100.0	83人
	70歳以上	3.9	13.0	44.2	39.0	100.0	77人

問21		単位: %					
u 嫉妬深い方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない ええ ば	あては まらない		
全体		5.1	16.0	52.9	26.1	100.0	376人
性別	男	7.1	12.2	59.0	21.8	100.0	156人
	女	3.7	18.4	48.6	29.4	100.0	218人
年齢	20-29歳	16.0	16.0	56.0	12.0	100.0	25人
	30-39歳	8.2	29.5	49.2	13.1	100.0	61人
	40-49歳	5.9	17.7	54.4	22.1	100.0	68人
	50-59歳	3.4	18.6	55.9	22.0	100.0	59人
	60-69歳	1.2	10.8	59.0	28.9	100.0	83人
	70歳以上	3.9	6.5	44.2	45.5	100.0	77人

問21		単位: %					
v 活発さに欠ける性格だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない ええ ば	あては まらない		
全体		3.7	24.8	44.6	26.9	100.0	379人
性別	男	2.5	27.7	49.1	20.8	100.0	159人
	女	4.6	22.5	41.3	31.7	100.0	218人
年齢	20-29歳	-	44.0	40.0	16.0	100.0	25人
	30-39歳	8.1	24.2	45.2	22.6	100.0	62人
	40-49歳	2.9	26.1	43.5	27.5	100.0	69人
	50-59歳	1.7	18.6	66.1	13.6	100.0	59人
	60-69歳	3.6	27.4	44.1	25.0	100.0	84人
	70歳以上	3.9	19.5	31.2	45.5	100.0	77人

問21		単位: %					
w 無責任な方だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない ええ ば	あては まらない		
全体		2.1	11.2	44.4	42.3	100.0	376人
性別	男	2.6	12.8	46.2	38.5	100.0	156人
	女	1.8	9.2	43.6	45.4	100.0	218人
年齢	20-29歳	-	12.0	52.0	36.0	100.0	25人
	30-39歳	4.8	17.7	41.9	35.5	100.0	62人
	40-49歳	1.5	14.5	55.1	29.0	100.0	69人
	50-59歳	-	11.9	55.9	32.2	100.0	59人
	60-69歳	3.6	6.0	39.8	50.6	100.0	83人
	70歳以上	1.3	5.3	30.7	62.7	100.0	75人

問21		単位: %					
x 素朴で洗練されていない性格だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない ええ ば	あては まらない		
全体		3.5	26.9	50.1	19.5	100.0	375人
性別	男	3.2	29.8	49.4	17.7	100.0	158人
	女	3.3	24.7	51.2	20.9	100.0	215人
年齢	20-29歳	-	28.0	60.0	12.0	100.0	25人
	30-39歳	6.5	27.4	48.4	17.7	100.0	62人
	40-49歳	2.9	22.1	60.3	14.7	100.0	68人
	50-59歳	-	37.9	44.8	17.2	100.0	58人
	60-69歳	6.0	21.7	54.2	18.1	100.0	83人
	70歳以上	1.3	26.3	40.8	31.6	100.0	76人

問21		単位: %					
y 協調性に欠ける性格だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち はらか といえ ば	あどち はらか とない ええ ば	あては まらない		
全体		3.7	13.7	47.2	35.4	100.0	379人
性別	男	5.0	17.0	47.8	30.2	100.0	159人
	女	2.8	11.0	47.3	39.0	100.0	218人
年齢	20-29歳	-	4.0	56.0	40.0	100.0	25人
	30-39歳	4.8	17.7	50.0	27.4	100.0	62人
	40-49歳	1.5	11.6	52.2	34.8	100.0	69人
	50-59歳	3.4	15.3	55.9	25.4	100.0	59人
	60-69歳	6.0	14.3	44.1	35.7	100.0	84人
	70歳以上	3.9	13.0	35.1	48.1	100.0	77人

(問21の続き)

問21		単位: %					
z 怒りっぽい性格だ		1	2	3	4	計	
		あてはまる	あどち てはらか まるとい えば	あどち てはらか まらない えば	あては まらな い		
全体		7.1	27.2	41.2	24.5	100.0	379人
性別	男	6.3	32.7	37.7	23.3	100.0	159人
	女	7.8	22.9	43.6	25.7	100.0	218人
年齢	20-29歳	8.3	33.3	25.0	33.3	100.0	24人
	30-39歳	16.1	25.8	40.3	17.7	100.0	62人
	40-49歳	7.3	31.9	40.6	20.3	100.0	69人
	50-59歳	5.1	33.9	39.0	22.0	100.0	59人
	60-69歳	3.6	22.6	52.4	21.4	100.0	84人
	70歳以上	5.1	21.8	35.9	37.2	100.0	78人

問22 あなたご自身のことやあなたのお考えについてお聞きます。次のa～pのそれぞれについて、下記の1～5のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問22		単位：％						
a 複雑な問題について順序立てて考えること得意だ		1	2	3	4	5		
		あてはまる	あてはまかといえ	どちらともいえない	あてはまかといえない	あてはまらない	計	
全体		9.7	35.3	37.4	13.6	3.9	100.0	382人
性別	男	14.7	40.5	34.4	8.6	1.8	100.0	163人
	女	6.0	31.7	39.5	17.4	5.5	100.0	218人
年齢	20-29歳	12.0	40.0	28.0	16.0	4.0	100.0	25人
	30-39歳	6.5	51.6	24.2	9.7	8.1	100.0	62人
	40-49歳	14.1	36.6	31.0	18.3	-	100.0	71人
	50-59歳	8.5	40.7	27.1	17.0	6.8	100.0	59人
	60-69歳	9.4	24.7	50.6	12.9	2.4	100.0	85人
	70歳以上	9.0	28.2	50.0	9.0	3.9	100.0	78人

問22		単位：％						
b 考えをまとめることが得意だ		1	2	3	4	5		
		あてはまる	あてはまかといえ	どちらともいえない	あてはまかといえない	あてはまらない	計	
全体		10.2	37.1	34.2	12.8	5.7	100.0	383人
性別	男	13.5	42.3	32.5	8.0	3.7	100.0	163人
	女	7.8	33.3	35.2	16.4	7.3	100.0	219人
年齢	20-29歳	24.0	32.0	20.0	16.0	8.0	100.0	25人
	30-39歳	11.3	51.6	19.4	11.3	6.5	100.0	62人
	40-49歳	11.3	39.4	32.4	15.5	1.4	100.0	71人
	50-59歳	10.2	37.3	30.5	11.9	10.2	100.0	59人
	60-69歳	9.3	29.1	43.0	15.1	3.5	100.0	86人
	70歳以上	5.1	34.6	44.9	7.7	7.7	100.0	78人

問22		単位：％						
c 物事を正確に考えることに自信がある		1	2	3	4	5		
		あてはまる	あてはまかといえ	どちらともいえない	あてはまかといえない	あてはまらない	計	
全体		9.9	33.7	40.2	11.5	4.7	100.0	383人
性別	男	13.5	36.8	39.9	7.4	2.5	100.0	163人
	女	7.3	31.5	40.2	14.6	6.4	100.0	219人
年齢	20-29歳	4.0	44.0	28.0	16.0	8.0	100.0	25人
	30-39歳	6.5	38.7	40.3	8.1	6.5	100.0	62人
	40-49歳	12.7	36.6	35.2	14.1	1.4	100.0	71人
	50-59歳	10.2	32.2	40.7	10.2	6.8	100.0	59人
	60-69歳	11.6	26.7	43.0	12.8	5.8	100.0	86人
	70歳以上	10.3	33.3	44.9	9.0	2.6	100.0	78人

問22		単位：％						
d 誰もが納得できるような説明をすることができる		1	2	3	4	5		
		あてはまる	あてはまかといえ	どちらともいえない	あてはまかといえない	あてはまらない	計	
全体		5.0	24.4	44.2	19.6	6.8	100.0	382人
性別	男	8.0	24.7	49.4	14.2	3.7	100.0	162人
	女	2.7	24.2	40.6	23.3	9.1	100.0	219人
年齢	20-29歳	8.0	20.0	28.0	36.0	8.0	100.0	25人
	30-39歳	3.2	12.9	53.2	24.2	6.5	100.0	62人
	40-49歳	4.2	36.1	33.3	20.8	5.6	100.0	72人
	50-59歳	3.5	34.5	36.2	17.2	8.6	100.0	58人
	60-69歳	4.7	16.3	58.1	11.6	9.3	100.0	86人
	70歳以上	7.8	26.0	44.2	18.2	3.9	100.0	77人

問22		単位：％						
e 何か複雑な問題を考えると、混乱してしまう		1	2	3	4	5		
		あてはまる	あてはまかといえ	どちらともいえない	あてはまかといえない	あてはまらない	計	
全体		3.9	19.4	32.3	33.1	11.3	100.0	381人
性別	男	2.5	14.7	27.6	41.1	14.1	100.0	163人
	女	5.1	22.6	35.9	27.2	9.2	100.0	217人
年齢	20-29歳	4.0	32.0	28.0	32.0	4.0	100.0	25人
	30-39歳	6.5	19.4	27.4	41.9	4.8	100.0	62人
	40-49歳	1.4	22.5	32.4	36.6	7.0	100.0	71人
	50-59歳	3.4	15.3	33.9	33.9	13.6	100.0	59人
	60-69歳	6.0	20.2	36.9	22.6	14.3	100.0	84人
	70歳以上	2.6	12.8	32.1	34.6	18.0	100.0	78人

問22		単位：％						
f いろいろな考えの人と接して多くのことを学びたい		1	2	3	4	5		
		あてはまる	あてはまかといえ	どちらともいえない	あてはまかといえない	あてはまらない	計	
全体		27.3	43.9	21.6	4.9	2.3	100.0	385人
性別	男	20.3	46.0	24.5	6.1	3.1	100.0	163人
	女	32.1	42.5	19.5	4.1	1.8	100.0	221人
年齢	20-29歳	32.0	44.0	24.0	-	-	100.0	25人
	30-39歳	33.9	43.6	17.7	4.8	-	100.0	62人
	40-49歳	29.6	36.6	22.5	7.0	4.2	100.0	71人
	50-59歳	20.3	49.2	28.8	1.7	-	100.0	59人
	60-69歳	25.6	51.2	14.0	7.0	2.3	100.0	86人
	70歳以上	25.0	38.8	26.3	5.0	5.0	100.0	80人

(問22の続き)

問22		単位: %						
g 生涯にわたり新しいことを学び続けたい		1	2	3	4	5	計	
		あてはまる	あてはまるといえる	どちらともいえない	あてはまるといえない	あてはまらない		
全体		27.4	41.5	22.7	4.7	3.7	100.0	383人
性別	男	21.6	45.1	23.5	5.6	4.3	100.0	162人
	女	31.4	39.1	22.3	4.1	3.2	100.0	220人
年齢	20-29歳	20.0	56.0	20.0	4.0	-	100.0	25人
	30-39歳	33.9	45.2	17.7	3.2	-	100.0	62人
	40-49歳	33.8	35.2	19.7	7.0	4.2	100.0	71人
	50-59歳	25.4	40.7	27.1	1.7	5.1	100.0	59人
	60-69歳	23.3	41.9	26.7	5.8	2.3	100.0	86人
	70歳以上	24.4	39.7	23.1	5.1	7.7	100.0	78人

問22		単位: %						
h さまざまな文化について学びたいと思う		1	2	3	4	5	計	
		あてはまる	あてはまるといえる	どちらともいえない	あてはまるといえない	あてはまらない		
全体		26.3	38.0	24.5	6.8	4.4	100.0	384人
性別	男	23.3	39.3	28.2	3.7	5.5	100.0	163人
	女	28.2	37.3	21.8	9.1	3.6	100.0	220人
年齢	20-29歳	24.0	44.0	32.0	-	-	100.0	25人
	30-39歳	37.1	30.7	24.2	6.5	1.6	100.0	62人
	40-49歳	32.4	28.2	23.9	11.3	4.2	100.0	71人
	50-59歳	23.7	37.3	27.1	6.8	5.1	100.0	59人
	60-69歳	18.6	47.7	25.6	4.7	3.5	100.0	86人
	70歳以上	22.8	40.5	20.3	7.6	8.9	100.0	79人

問22		単位: %						
i 外国人がどのように考えるかを勉強することは意義のあることだと思う		1	2	3	4	5	計	
		あてはまる	あてはまるといえる	どちらともいえない	あてはまるといえない	あてはまらない		
全体		33.0	35.6	23.6	5.0	2.9	100.0	382人
性別	男	29.0	36.4	24.7	5.6	4.3	100.0	162人
	女	35.6	35.2	22.8	4.6	1.8	100.0	219人
年齢	20-29歳	36.0	32.0	32.0	-	-	100.0	25人
	30-39歳	40.3	32.3	21.0	6.5	-	100.0	62人
	40-49歳	28.2	38.0	29.6	1.4	2.8	100.0	71人
	50-59歳	37.3	39.0	20.3	3.4	-	100.0	59人
	60-69歳	25.6	36.1	27.9	5.8	4.7	100.0	86人
	70歳以上	33.8	35.1	15.6	9.1	6.5	100.0	77人

問22		単位: %						
j いつも偏りのない判断をしようとする		1	2	3	4	5	計	
		あてはまる	あてはまるといえる	どちらともいえない	あてはまるといえない	あてはまらない		
全体		21.0	44.6	26.3	5.8	2.4	100.0	381人
性別	男	18.4	44.2	28.2	5.5	3.7	100.0	163人
	女	22.6	45.2	24.9	6.0	1.4	100.0	217人
年齢	20-29歳	20.0	40.0	32.0	8.0	-	100.0	25人
	30-39歳	27.9	37.7	26.2	6.6	1.6	100.0	61人
	40-49歳	23.9	33.8	38.0	4.2	-	100.0	71人
	50-59歳	18.6	47.5	20.3	10.2	3.4	100.0	59人
	60-69歳	19.3	53.0	22.9	2.4	2.4	100.0	83人
	70歳以上	16.3	50.0	22.5	6.3	5.0	100.0	80人

問22		単位: %						
k 物事を見るとときに自分の立場からしか見ない		1	2	3	4	5	計	
		あてはまる	あてはまるといえる	どちらともいえない	あてはまるといえない	あてはまらない		
全体		1.8	10.5	36.8	36.8	14.2	100.0	381人
性別	男	1.9	6.8	40.4	34.8	16.2	100.0	161人
	女	1.8	13.2	33.8	38.4	12.8	100.0	219人
年齢	20-29歳	-	12.0	28.0	48.0	12.0	100.0	25人
	30-39歳	1.6	11.3	32.3	40.3	14.5	100.0	62人
	40-49歳	1.4	5.6	38.0	35.2	19.7	100.0	71人
	50-59歳	-	6.9	41.4	39.7	12.1	100.0	58人
	60-69歳	2.3	11.6	38.4	33.7	14.0	100.0	86人
	70歳以上	3.9	15.6	35.1	33.8	11.7	100.0	77人

問22		単位: %						
m 物事を決めるときには、客観的な態度を心がける		1	2	3	4	5	計	
		あてはまる	あてはまるといえる	どちらともいえない	あてはまるといえない	あてはまらない		
全体		13.3	52.1	29.2	4.4	1.0	100.0	384人
性別	男	16.0	52.8	28.2	2.5	0.6	100.0	163人
	女	11.4	51.4	30.0	5.9	1.4	100.0	220人
年齢	20-29歳	8.0	52.0	40.0	-	-	100.0	25人
	30-39歳	14.5	53.2	25.8	6.5	-	100.0	62人
	40-49歳	11.3	63.4	23.9	-	1.4	100.0	71人
	50-59歳	11.9	40.7	37.3	8.5	1.7	100.0	59人
	60-69歳	14.0	58.1	24.4	2.3	1.2	100.0	86人
	70歳以上	16.5	41.8	32.9	7.6	1.3	100.0	79人

(問22の続き)

問22		単位: %						
n		一つ二つの立場だけではなく、できるだけ多くの立場から考えようとする						
		1 あてはまる	2 あどち はらか といえ ば	3 どち らとも いえ ない	4 あどち はらか といえ ば	5 あて はま らない	計	
全体		17.2	46.0	28.7	6.8	1.3	100.0	383人
性別	男	17.8	47.2	28.2	4.3	2.5	100.0	163人
	女	16.9	44.8	29.2	8.7	0.5	100.0	219人
年齢	20-29歳	24.0	52.0	20.0	4.0	-	100.0	25人
	30-39歳	16.1	43.6	29.0	9.7	1.6	100.0	62人
	40-49歳	16.9	56.3	22.5	4.2	-	100.0	71人
	50-59歳	17.0	42.4	35.6	5.1	-	100.0	59人
	60-69歳	17.4	41.9	33.7	5.8	1.2	100.0	86人
	70歳以上	16.7	43.6	25.6	10.3	3.9	100.0	78人

問22		単位: %						
p		判断をくだす際は、できるだけ多くの事実や証拠を調べる						
		1 あてはまる	2 あどち はらか といえ ば	3 どち らとも いえ ない	4 あどち はらか といえ ば	5 あて はま らない	計	
全体		17.1	46.5	27.5	7.3	1.6	100.0	385人
性別	男	17.2	44.8	30.1	6.1	1.8	100.0	163人
	女	16.7	48.0	25.8	8.1	1.4	100.0	221人
年齢	20-29歳	20.0	48.0	28.0	4.0	-	100.0	25人
	30-39歳	21.0	50.0	21.0	8.1	-	100.0	62人
	40-49歳	16.9	49.3	26.8	7.0	-	100.0	71人
	50-59歳	15.3	44.1	28.8	10.2	1.7	100.0	59人
	60-69歳	14.0	45.4	31.4	8.1	1.2	100.0	86人
	70歳以上	17.5	43.8	28.8	5.0	5.0	100.0	80人

問23 現在の日本の社会全体について、あなたは、どのようにお考えですか。次のa～eのそれぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問23		単位: %					
a		日本は公平な社会だ					
		1 そう 思う	2 そど うち 思ら うか とい え ば	3 そど うち 思ら わか ない え ば	4 そ う 思 わ ない	計	
全体		6.8	46.5	27.8	19.0	100.0	385人
性別	男	10.9	43.0	27.3	18.8	100.0	165人
	女	3.6	49.1	28.2	19.1	100.0	220人
年齢	20-29歳	-	44.0	28.0	28.0	100.0	25人
	30-39歳	3.2	36.5	25.4	34.9	100.0	63人
	40-49歳	4.2	38.0	36.6	21.1	100.0	71人
	50-59歳	8.6	39.7	36.2	15.5	100.0	58人
	60-69歳	7.0	59.3	19.8	14.0	100.0	86人
	70歳以上	12.5	53.8	23.8	10.0	100.0	80人

問23		単位: %					
b		日本は住みやすい社会だ					
		1 そう 思う	2 そど うち 思ら うか とい え ば	3 そど うち 思ら わか ない え ば	4 そ う 思 わ ない	計	
全体		20.2	62.5	11.1	6.2	100.0	387人
性別	男	21.8	57.6	14.6	6.1	100.0	165人
	女	18.9	66.2	8.6	6.3	100.0	222人
年齢	20-29歳	28.0	56.0	12.0	4.0	100.0	25人
	30-39歳	19.1	63.5	9.5	7.9	100.0	63人
	40-49歳	16.7	55.6	16.7	11.1	100.0	72人
	50-59歳	15.3	67.8	11.9	5.1	100.0	59人
	60-69歳	22.1	66.3	8.1	3.5	100.0	86人
	70歳以上	23.8	61.3	10.0	5.0	100.0	80人

(問23の続き)

問23		単位: %					
c 日本は困ったときに助けてくれる		1	2	3	4	計	
		1 そう 思う	2 そど うち らか とい え ば	3 そど うち らか な い え ば	4 そ う 思 わ な い		
全体		9.9	47.8	31.1	11.2	100.0	383人
性別	男	10.8	43.4	31.9	13.9	100.0	166人
	女	9.2	51.2	30.4	9.2	100.0	217人
年齢	20-29歳	28.0	40.0	32.0	-	100.0	25人
	30-39歳	9.5	36.5	33.3	20.6	100.0	63人
	40-49歳	4.2	40.9	43.7	11.3	100.0	71人
	50-59歳	8.8	54.4	29.8	7.0	100.0	57人
	60-69歳	9.4	57.7	22.4	10.6	100.0	85人
	70歳以上	11.3	48.8	28.8	11.3	100.0	80人

問23		単位: %					
d たいていの人は話し合えば理解できる		1	2	3	4	計	
		1 そう 思う	2 そど うち らか とい え ば	3 そど うち らか な い え ば	4 そ う 思 わ な い		
全体		10.7	56.1	24.4	8.8	100.0	385人
性別	男	13.3	55.8	21.2	9.7	100.0	165人
	女	8.6	56.4	26.8	8.2	100.0	220人
年齢	20-29歳	12.0	60.0	24.0	4.0	100.0	25人
	30-39歳	11.1	44.4	28.6	15.9	100.0	63人
	40-49歳	4.2	60.6	25.4	9.9	100.0	71人
	50-59歳	10.2	50.9	35.6	3.4	100.0	59人
	60-69歳	8.2	62.4	20.0	9.4	100.0	85人
	70歳以上	18.8	56.3	17.5	7.5	100.0	80人

問23		単位: %					
e たいていの人は信用できる		1	2	3	4	計	
		1 そ う 思 う	2 そど うち ら か と い え ば	3 そど うち ら か な い い え ば	4 そ う 思 わ な い		
全体		7.1	51.3	30.6	11.0	100.0	382人
性別	男	8.5	49.7	27.9	13.9	100.0	165人
	女	6.0	52.5	32.7	8.8	100.0	217人
年齢	20-29歳	8.3	29.2	54.2	8.3	100.0	24人
	30-39歳	4.8	42.9	34.9	17.5	100.0	63人
	40-49歳	1.4	63.4	22.5	12.7	100.0	71人
	50-59歳	3.5	54.4	36.8	5.3	100.0	57人
	60-69歳	9.4	48.2	31.8	10.6	100.0	85人
	70歳以上	13.8	53.8	22.5	10.0	100.0	80人

問24 あなたは、東日本大震災によって、どのような被害を受けましたか。下記の1～6のうちからあてはまるものすべてを選んで、その番号に○をつけてください。【複数回答】

問24		単位: %							
		1	2	3	4	5	6	計	
		1 大 き な ケ ガ を し た	2 家 が 損 傷 し た	3 家 具 が 傷 つ い た	4 避 難 所 に 逃 げ た	5 帰 宅 困 難 に な っ た	6 ど れ に も あ て は ま ら な い		
全体		-	7.5	17.2	0.5	26.5	57.1	100.0	389人
性別	男	-	7.2	18.1	-	34.9	50.0	100.0	166人
	女	-	7.6	16.6	0.9	20.2	62.3	100.0	223人
年齢	20-29歳	-	12.0	32.0	-	32.0	48.0	100.0	25人
	30-39歳	-	6.4	19.1	1.6	41.3	39.7	100.0	63人
	40-49歳	-	9.7	15.3	-	29.2	55.6	100.0	72人
	50-59歳	-	8.3	21.7	1.7	36.7	48.3	100.0	60人
	60-69歳	-	8.1	9.3	-	19.8	66.3	100.0	86人
	70歳以上	-	3.7	18.5	-	9.9	71.6	100.0	81人

問25 あなたの性別と年齢をお聞きます。

(1)あなたの性別は

(2)あなたの年齢は

問25		単位: %						
		1	2	3	4	5	6	
		20	30	40	50	60	70	計
		歳	歳	歳	歳	歳	以上	
全体		6.4	16.2	18.5	15.4	22.1	21.3	100.0 389人
性別	男	9.0	16.3	16.3	10.2	19.3	28.9	100.0 166人
	女	4.5	16.1	20.2	19.3	24.2	15.7	100.0 223人

問26 あなたの配偶関係についてお聞きます。下記の1～3のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問26		単位: %				
		1 (有配偶 パートナー がいる)	2 未婚	3 離別・死別		計
全体		79.4	14.1	6.4	100.0	389人
性別	男	73.5	22.9	3.6	100.0	166人
	女	83.9	7.6	8.5	100.0	223人
年齢	20-29歳	32.0	64.0	4.0	100.0	25人
	30-39歳	74.2	24.2	1.6	100.0	62人
	40-49歳	76.4	16.7	6.9	100.0	72人
	50-59歳	84.8	10.2	5.1	100.0	59人
	60-69歳	90.7	3.5	5.8	100.0	86人
	70歳以上	84.3	3.6	12.1	100.0	83人

問27 あなたの居住形態についてお聞きます。下記の1～5のうちからあてはまるもの1つを選んでその番号に○をつけてください。

問27		単位: %					
		1 (持ち建て)	2 (賃貸建て)	3 (集合住宅)	4 (集合住宅)	5 その他	計
全体		51.9	1.1	26.5	19.8	0.8	100.0 378人
性別	男	50.3	1.2	23.9	23.3	1.2	100.0 163人
	女	52.8	0.9	28.5	17.3	0.5	100.0 214人
年齢	20-29歳	20.8	4.2	20.8	54.2	-	100.0 24人
	30-39歳	24.2	-	35.5	40.3	-	100.0 62人
	40-49歳	44.4	2.8	30.6	20.8	1.4	100.0 72人
	50-59歳	52.5	-	33.9	10.2	3.4	100.0 59人
	60-69歳	72.0	-	22.0	6.1	-	100.0 82人
	70歳以上	69.7	1.3	14.5	14.5	-	100.0 76人

問27付問 あなたは何階建ての何階にお住みですか。()内に数字を記入してください。

問27付問		単位:階	
		(1)	(2)
		建物階数の平均 n	居住階数の平均 n
全体		7.6 152人	4.1 153人
性別	男	7.3 66人	3.7 66人
	女	7.8 86人	4.3 87人
年齢	20-29歳	5.9 17人	3.6 17人
	30-39歳	7.5 40人	4.4 40人
	40-49歳	8.4 32人	3.9 32人
	50-59歳	8.3 24人	4.4 24人
	60-69歳	8.1 21人	4.1 21人
	70歳以上	6.1 18人	4.0 18人

問28 あなたは、現在、どなたと一緒に住まいですか。下記の1～14のうちからあてはまるものすべてを選んで、その番号に○をつけてください。【複数回答】

問28		単位:%														計
		1 一人暮らし	2 配偶者(パートナー)	3 息子	4 娘	5 子どもの配偶者	6 孫	7 自分の父親	8 自分の母親	9 配偶者の父親	10 配偶者の母親	11 祖父母	12 自分のきょうだい	13 配偶者のきょうだい	14 その他	
全体		9.5	77.2	31.5	28.4	1.3	3.2	6.0	10.2	1.1	1.6	0.8	4.5	0.3	1.8	100.0 381人
性別	男	13.0	72.1	19.9	19.9	1.2	2.5	8.1	12.4	-	0.6	1.9	6.2	-	3.1	100.0 161人
	女	6.9	80.8	39.7	34.3	1.4	3.7	4.6	8.2	1.8	2.3	-	2.7	0.5	0.9	100.0 219人
年齢	20-29歳	20.0	32.0	16.0	24.0	-	-	36.0	44.0	-	-	8.0	28.0	-	4.0	100.0 25人
	30-39歳	8.1	74.2	37.1	35.5	-	-	14.5	19.4	-	-	-	9.7	-	3.2	100.0 62人
	40-49歳	7.0	74.7	49.3	46.5	1.4	-	4.2	9.9	4.2	2.8	-	2.8	-	2.8	100.0 71人
	50-59歳	8.6	81.0	41.4	36.2	1.7	1.7	3.5	5.2	1.7	3.5	-	1.7	-	1.7	100.0 58人
	60-69歳	7.2	88.0	24.1	16.9	1.2	4.8	-	4.8	-	2.4	-	-	-	-	100.0 83人
	70歳以上	12.5	81.3	15.0	13.8	2.5	8.8	-	1.3	-	-	1.3	-	1.3	1.3	100.0 80人

問29 現在、あなたと同居している人数は合計で何人ですか。()内にあなたも含めた人数を記入してください。

問29		単位:人	
		(1)	
		同居人数の平均 n	
全体		2.9	379人
性別	男	2.7	159人
	女	3.1	219人
年齢	20-29歳	3.1	25人
	30-39歳	3.2	62人
	40-49歳	3.4	71人
	50-59歳	3.1	57人
	60-69歳	2.5	82人
	70歳以上	2.4	80人

問30 あなたの現在のご職業は次のうちどれにあたりますか。下記の1～13のうちからもっとも近いと考えられるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問30		単位：％										
		1 専門・技術職	2 管理職	3 事務職	4 営業販売職	5 サービス職	6 保安職	7 農林漁業職	8 運輸・通信職	9 生産・労務職	10 その他	【働いている方】小計
全体		13.6	5.0	10.2	5.7	11.2	0.8	1.0	2.6	0.8	4.7	55.6 213人
性別	男	17.8	8.6	6.8	9.2	6.8	1.8	2.5	4.9	—	7.4	65.6 107人
	女	10.5	2.3	12.3	3.2	14.6	—	—	0.9	1.4	2.7	47.9 105人
年齢	20-29歳	28.0	—	—	4.0	20.0	—	—	—	—	4.0	56.0 14人
	30-39歳	17.7	3.2	12.9	6.5	19.4	—	3.2	4.8	—	3.2	71.0 44人
	40-49歳	15.3	9.7	18.1	11.1	12.5	2.8	—	4.2	1.4	2.8	77.8 56人
	50-59歳	18.3	5.0	15.0	6.7	16.7	—	—	3.3	1.7	6.7	73.3 44人
	60-69歳	9.5	4.8	8.3	3.6	7.1	1.2	1.2	2.4	1.2	4.8	44.0 37人
	70歳以上	3.9	3.9	1.3	2.6	1.3	—	1.3	—	—	6.4	20.5 16人

問30(続き)		単位：％					
		11 主婦 (主夫)	12 学生	13 無職	【働いていない方】小計	計	
全体		25.6	1.8	17.0	44.4 170人	100.0	383人
性別	男	—	3.1	31.3	34.4 56人	100.0	163人
	女	44.8	0.9	6.4	52.1 114人	100.0	219人
年齢	20-29歳	16.0	28.0	—	44.0 11人	100.0	25人
	30-39歳	29.0	—	—	29.0 18人	100.0	62人
	40-49歳	18.1	—	4.2	22.2 16人	100.0	72人
	50-59歳	23.3	—	3.3	26.7 16人	100.0	60人
	60-69歳	34.5	—	21.4	56.0 47人	100.0	84人
	70歳以上	25.6	—	53.9	79.5 62人	100.0	78人

問31 現在、働いている方にお聞きます。あなたの勤務形態は次のどれにあたりますか。下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

問31		単位：％				
		1 正社員	2 自営業	3 派遣・契約社員	4 アルバイト・パート	計
全体		47.1	11.2	8.7	33.0	100.0 206人
性別	男	66.0	12.6	12.6	8.7	100.0 103人
	女	27.5	9.8	4.9	57.8	100.0 102人
年齢	20-29歳	69.2	—	7.7	23.1	100.0 13人
	30-39歳	62.8	2.3	9.3	25.6	100.0 43人
	40-49歳	52.7	9.1	5.5	32.7	100.0 55人
	50-59歳	43.2	9.1	6.8	40.9	100.0 44人
	60-69歳	27.8	19.4	16.7	36.1	100.0 36人
	70歳以上	7.7	46.2	7.7	38.5	100.0 13人

問32 あなたが最後に出られた学校についてお聞きます。下記の1～11のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

		問32											単位：%	
		1 旧 制 小 学 校	2 旧 制 中 学 校	3 旧 制 女 学 校	4 旧 制 高 等 学 校	5 新 制 中 学 校	6 新 制 高 等 学 校	7 専 門 学 校	8 高 等 専 門 学 校 ・ 短 期 大 学	9 大 学 ・ 大 学 院	10 そ の 他	11 現 在 在 学 中	計	
全体		－	1.3	－	1.9	6.1	30.9	11.4	14.0	34.0	－	0.5	100.0	379人
性別	男	－	1.2	－	1.2	8.0	27.6	5.5	3.7	51.5	－	1.2	100.0	163人
	女	－	1.4	－	2.3	4.7	33.0	15.8	21.9	20.9	－	－	100.0	215人
年齢	20-29歳	－	－	－	8.7	－	8.7	17.4	－	56.5	－	8.7	100.0	23人
	30-39歳	－	－	－	1.6	－	19.1	17.5	22.2	39.7	－	－	100.0	63人
	40-49歳	－	－	－	1.4	2.8	26.4	13.9	15.3	40.3	－	－	100.0	72人
	50-59歳	－	－	－	1.7	1.7	23.7	17.0	17.0	39.0	－	－	100.0	59人
	60-69歳	－	1.2	－	－	8.6	45.7	7.4	16.1	21.0	－	－	100.0	81人
	70歳以上	－	5.1	－	2.5	16.5	40.5	2.5	6.3	26.6	－	－	100.0	79人

問33 あなたの世帯の収入は、税込みでおおよそどのくらいですか。下記の1～7のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。お二人以上の収入がある場合が、それらを合計してください。

		問33							単位：%	
		1 200 万円 未満	2 200 万円 ～ 400 万円 未満	3 400 万円 ～ 600 万円 未満	4 600 万円 ～ 800 万円 未満	5 800 万円 ～ 1000 万円 未満	6 1000 万円 ～ 1500 万円 未満	7 1500 万円 以上	計	
全体		9.4	26.5	24.3	15.8	11.5	8.6	4.0	100.0	374人
性別	男	8.8	28.1	30.6	13.1	10.6	6.3	2.5	100.0	160人
	女	9.9	25.4	19.7	17.8	12.2	9.9	5.2	100.0	213人
年齢	20～29歳	13.0	26.1	34.8	13.0	8.7	4.4	－	100.0	23人
	30～39歳	－	19.7	27.9	27.9	11.5	9.8	3.3	100.0	61人
	40～49歳	8.5	9.9	19.7	15.5	21.1	14.1	11.3	100.0	71人
	50～59歳	7.0	10.5	19.3	21.1	19.3	17.5	5.3	100.0	57人
	60～69歳	8.4	38.6	30.1	12.1	4.8	3.6	2.4	100.0	83人
	70歳以上	19.5	46.8	20.8	7.8	5.2	－	－	100.0	77人

問34 あなたが現在お住まいの区はどこですか。下記の1～7のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

		問34						単位：％	
		1 稲 毛 区	2 中 央 区	3 花 見 川 区	4 緑 区	5 美 浜 区	6 若 葉 区	計	
全体		13.7	20.9	17.8	14.5	17.3	15.8	100.0	387人
性別	男	13.9	18.2	17.0	10.9	20.6	19.4	100.0	165人
	女	13.6	22.6	18.5	17.2	14.9	13.1	100.0	221人
年齢	20-29歳	20.0	24.0	24.0	8.0	4.0	20.0	100.0	25人
	30-39歳	15.9	23.8	15.9	7.9	23.8	12.7	100.0	63人
	40-49歳	4.2	20.8	13.9	18.1	23.6	19.4	100.0	72人
	50-59歳	15.3	22.0	20.3	10.2	10.2	22.0	100.0	59人
	60-69歳	18.8	10.6	21.2	23.5	16.5	9.4	100.0	85人
	70歳以上	12.4	25.9	16.1	12.4	17.3	16.1	100.0	81人

問35 あなたがお住まいの町はどこですか。さしつかえなければ()内に町名
をご記入ください。

問35 〈稲毛区〉

単位:人

	1 稲丘町	2 稲毛東	3 小中台町	4 小仲台	5 小深町	6 山王町	7 園生町	8 天台	9 長沼町	10 緑町	【稲毛区】小計
人数	4	3	3	4	3	7	5	2	6	7	44人

問35 〈中央区〉

単位:人

【中央区】小計	26 若草	25 村田町	24 都町	23 港町	22 星久喜町	21 浜野町	20 仁戸名町	19 道場北町	18 出洲港	17 千葉寺町	16 蘇我	15 蘇我町	14 新宿	13 川戸町	12 生実町	11 今井	人数
	5	2	2	2	5	1	5	5	3	1	4	1	3	6	7	7	

問35 〈花見川区〉

単位:人

	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	【花見川区】小計
	内山町	検見川町	作新台	さつきが丘	長作町	畑町	花見川	幕張町	幕張本郷	横戸町	
人数	2	5	3	2	6	6	4	9	13	6	56人

問35 〈緑区〉

単位:人

									【緑区】小計
	37	38	39	40	41	42	43	44	
	あすみが丘	大木戸町	おゆみ野	おゆみ野中央	おゆみ野南	高津戸町	古市場町	誉田町	
人数	7	6	4	6	5	4	5	4	41人

問35 〈美浜区〉

単位:人

	45 磯 辺	46 打 瀬	47 幸 町	48 高 洲	49 高 浜	50 豊 砂	51 中 瀬	52 浜 田	53 真 砂	54 若 葉	【美浜区】小計
人数	11	8	6	10	4	0	0	5	11	0	55人

(問35のつづき)

問35 〈若葉区・その他〉													単位:人	
	55 愛 生 町	56 小 倉 町	57 貝 塚 町	58 桜 木	59 桜 木 北	60 千 城 台 西	61 都 賀	62 西 都 賀	63 み つ わ 台	64 源 町	65 若 松 町	【若葉区】 小計	66 そ の 他	計
人数	4	2	3	5	5	5	11	6	2	5	3	51人	6	312人

問36 あなたは現在お住まいの地域に何年住んでいますか。()内に数字をご記入ください。1ヵ月未満の方は1ヵ月とお答えください。

問36				
		居住年数の平均		n
全体		19年	3ヶ月	383人
性別	男	19年	11ヶ月	162人
	女	18年	9ヶ月	220人
年齢	20-29歳	7年	3ヶ月	23人
	30-39歳	9年	1ヶ月	63人
	40-49歳	12年	9ヶ月	71人
	50-59歳	20年	1ヶ月	59人
	60-69歳	23年	7ヶ月	85人
	70歳以上	31年	6ヶ月	80人

調 査 票

千葉市民の防災意識と防災行動に関する調査

アンケートのお願い

淑徳大学総合福祉学部人間社会学科では、日頃より授業の一環として地域の社会問題に対し、調査活動を行っております。本調査は、千葉市民の防災意識と防災行動に対するお考えをおうかがいするものです。みなさまの常日頃の防災意識や、今年 3 月 11 日に発生しました「東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）」を経て、防災意識がどのように変化したのかといったことをお教えいただきたく、調査を企画いたしました。

東日本大震災は、甚大な被害をもたらしました。被災した皆様に心からお見舞い申し上げますと共に 1 日も早い復興をお祈り申し上げます。皆様方のなかにも、直接被害に遭われたという方や、親類やご友人が被害に遭われたという方もおられるかもしれません。調査票を作成するにあたって、何度も確認作業を行い、不適切な表現がないよう細心の注意を心がけましたが、本調査へご回答いただくにあたって、辛い記憶や経験を思い出し嫌な気持ちになる方もおられるかと思えます。そのさいには、お差し支えない範囲で構いませんので、ご記入いただけましたら幸いです。

皆様方のお名前は、学術目的であることを明らかにしたうえで、所定の手続きに従い、住民基本台帳からくじ引きのような方法で選ばせていただきました。この調査は無記名でお答えいただくことになっており、得られたデータはすべて数値化し、コンピュータにかけて統計的に処理されますので、皆様方のお名前やご住所などの個人情報が出ることはありません。どうぞありのままをご記入くださいますようお願い申し上げます。また、この質問紙は、統計的な処理が終わったあとは、当大学が責任をもってすべて焼却いたします。

以上の趣旨をご理解いただき、何卒この調査にご協力くださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

ご記入にあたってのご注意

この質問紙では、それぞれの質問によって、回答は、「○」をつけていただくものと、直接（ ）の中にご記入いただくものがあります。どの回答が正しいとか、すぐれているとかいったことはありませんので、けっして他の人と相談したりなさらずに、あなたご自身のありのままのお気持ちや状態をお答えください。

※ ご回答していただいたアンケートは、平成 23 年 9 月 26 日（月）までに、同封の返信用封筒でご返送ください。

なお、このアンケート調査についてご不明な点や、ご質問がございましたら下記までお問い合わせください。

調査責任者　：　淑徳大学教授　野田陽子
淑徳大学教授　松菌祐子
社会調査助手　佐藤麻衣

連絡先　：　淑徳大学総合福祉学部人間社会学科
〒260-8701　千葉市中央区大巖寺町 200
043-265-7331（内線 559）
fieldwrk@soc.shukutoku.ac.jp

問1 あなたが現在お住まいの地域（自宅から徒歩 15 分くらいの範囲）は、過去に次の a～e のような被害がありましたか。それぞれについて、下記の 1～3 のうちからあてはまるもの 1 つを選んで、その番号に○をつけてください。

現在お住まいの地域で		
1 受 自 け 分 た が 被 被 害 害 を を	2 知 被 つ 害 て を い 受 る け た こ と を	3 聞 知 い ら ら て な い い な い

- a 浸水被害…………… 1 ————— 2 ————— 3
- b 火災…………… 1 ————— 2 ————— 3
- c がけ崩れ…………… 1 ————— 2 ————— 3
- d 液状化・地盤沈下…………… 1 ————— 2 ————— 3
- e 建物の倒壊（全壊・半壊）…………… 1 ————— 2 ————— 3

問2 あなたは、現在お住まいの地域（自宅から徒歩 15 分くらいの範囲）が次の a～e のような災害に対して地盤や地勢などが強い地域だと思いますか。それぞれについて、下記の 1～4 のうちからあてはまるもの 1 つを選んで、その番号に○をつけてください。

1 強 い と 思 う	2 強 ど い ち と ら ら か 思 う と い え ば	3 弱 ど い ち と ら ら か 思 う と い え ば	4 弱 い と 思 う
----------------------------	--	--	----------------------------

- a 地震に対して…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- b 火災に対して…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- c 豪雨に対して…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- d 台風に対して…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- e がけ崩れに対して…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4

問3 あなたは次の a～f のような経験をしたことがありますか。また、今後 a～f のような経験を
 する可能性はどのくらいあると思いますか。Aについては下記の1・2のうちから、Bについては下
 記の1～3のうちから、それぞれあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

A		B		
これまで経験したことが		これから経験する可能性は		
1 ある	2 ない	1 20 % く ら い	2 50 % く ら い	3 80 % く ら い

- a 地震が発生したとき、家具が転倒して
 ヒヤッとしたこと…………… 1 …………… 2 ➡ 1 …………… 2 …………… 3
- b 地震が発生したとき、ガラス窓や食器
 等が割れてヒヤッとしたこと…………… 1 …………… 2 ➡ 1 …………… 2 …………… 3
- c 車や自転車で走行中に事故を起こしそ
 うになって、ヒヤッとしたこと…………… 1 …………… 2 ➡ 1 …………… 2 …………… 3
- d 火の不始末でヒヤッとしたこと…………… 1 …………… 2 ➡ 1 …………… 2 …………… 3
- e 雪道で転びそうになってヒヤッとした
 こと…………… 1 …………… 2 ➡ 1 …………… 2 …………… 3
- f 台風や強風によって、自分の目の前に
 物が飛んできてヒヤッとしたこと…………… 1 …………… 2 ➡ 1 …………… 2 …………… 3

問4 あなたは次の a～f のような危険が、自分の身に及ぶ可能性はどのくらいあると思いますか。そ
 れぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてく
 ださい。

1 ある と 思 う	2 ど ち ら か と い え ば	3 な い と 思 う と い え ば	4 な い と 思 う
------------------------	---	--	----------------------------

- a 地震が発生した時、家具の転倒によってケ
 ガをする可能性が…………… 1 …………… 2 …………… 3 …………… 4
- b 地震が発生した時、ガラス窓や食器の破損
 によってケガをする可能性が…………… 1 …………… 2 …………… 3 …………… 4
- c 車や自転車の事故で、ケガをする可能性が…………… 1 …………… 2 …………… 3 …………… 4
- d 自分の不注意で火事を起こしてしまう可
 性が…………… 1 …………… 2 …………… 3 …………… 4
- e 雪道で転んでしまう可能性が…………… 1 …………… 2 …………… 3 …………… 4
- f 台風や強風の時、落下物や飛来物によって
 ケガをする可能性が…………… 1 …………… 2 …………… 3 …………… 4

問5 あなたは、次のa～jのような、家庭内で自分自身が経験するかもしれない災害について、どの程度の不安を持っていますか。それぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

1 不安	2 どちら らかと いえば	3 ど ち ら か と い え ば	4 不 安 で な い
---------	------------------------	---	----------------------------

- | | | | | |
|-----------------------------|---|---|---|---|
| a 自分自身がケガをしたり、命を落とすこと…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| b 家族がケガをしたり、命を落とすこと…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| c 自宅の家具が壊れること…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| d 自宅が倒壊してしまうこと…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| e 電気が止まって、使えなくなること…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| f ガスが止まって、使えなくなること…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| g 水道が止まって、使えなくなること…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| h 通信がパンクして、連絡がつかなくなること…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| i 物流が止まって、食べ物や飲み物に困ること…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| j 避難所で生活せざるをえないこと…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |

問6 あなたは、人災・自然災害を問わず、自分の身に危険が及びそうになった時、うまく対処できると思いますか。下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

- 1 対処できると思う
- 2 どちらかといえば対処できると思う
- 3 どちらかといえば対処できないと思う
- 4 対処できないと思う

問7 東日本大震災が発生してから半月くらいの間に、あなたは次のa～mの物をどのくらい購入しましたか。それぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

1 普段より多かった	2 普段と同じくらい	3 普段より少なかった	4 購入していない
---------------	---------------	----------------	--------------

- | | | | | | |
|---|-----------|---|---|---|---|
| a | 水 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| b | 米 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| c | インスタント食品 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| d | 電池・懐中電灯 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| e | ガスボンベ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| f | トイレットペーパー | 1 | 2 | 3 | 4 |
| g | パン | 1 | 2 | 3 | 4 |
| h | 乳製品 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| i | 海藻類の食品 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| j | マスク | 1 | 2 | 3 | 4 |
| k | 菓子類 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| m | 非常食・保存食 | 1 | 2 | 3 | 4 |

問8 あなたは、日頃、テレビで一般的なニュース（芸能・スポーツニュースは除く）をどのくらい見ていますか。下記の1～5のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

- 1 よく見ている 2 とくどき見ている
3 あまり見ていない 4 ほとんど見ていない
- 5 テレビはない・壊れている → 6 ページの間 11 にすすみください。

問9 東日本大震災以前と以後の、あなたの1日のテレビの視聴時間についてお聞きします。

＜東日本大震災以前のテレビ視聴時間＞

(1) あなたは、1日のうち平均して、おおよそどのくらいテレビを見ていましたか。平日と休日について、それぞれ数字でお答えください。

平日 $\left[\begin{array}{c} \\ \end{array} \right]$ 時間 $\left[\begin{array}{c} \\ \end{array} \right]$ 分程度

休日 $\left[\begin{array}{c} \\ \end{array} \right]$ 時間 $\left[\begin{array}{c} \\ \end{array} \right]$ 分程度

<東日本大震災以後>

(2) あなたは、震災発生から1週間くらいの間、平均して1日のうち、おおよそどのくらいテレビを見ていましたか。平日と休日について、それぞれ数字でお答えください。

平日 () 時間 () 分程度

休日 () 時間 () 分程度

(3) あなたは、震災発生から1ヶ月くらい経ったとき、1日のうち平均して、おおよそどのくらいテレビを見ていましたか。平日と休日について、それぞれ数字でお答えください。

平日 () 時間 () 分程度

休日 () 時間 () 分程度

問 10 今度は、テレビの番組別の視聴時間についてお聞きします。東日本大震災が発生する以前と、発生から1ヶ月くらい経ったときを比べて、次のa～hの番組の視聴時間はどのように変化しましたか。それぞれについて、下記の1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

1 増えた	2 変わらない	3 減った	4 もともと見ない
----------	------------	----------	--------------

a 報道番組	1	2	3	4
b スポーツ番組	1	2	3	4
c 音楽番組	1	2	3	4
d 娯楽番組	1	2	3	4
e アニメ	1	2	3	4
f ドラマ	1	2	3	4
g ワイドショーなどの情報番組	1	2	3	4
h 映画	1	2	3	4

問 11 東日本大震災直後に流れた情報についてお聞きします。震災直後にはさまざまな情報が伝えられましたが、その中には真偽の不確かなものもかなり含まれていました。そのような情報のうち、次の a～h について、あなたはどの程度信じましたか。それぞれ下記の 1～5 のうちから あてはまるもの 1 つ を選んで、その番号に○をつけてください。

1	2	3	4	5
信 じ た	信 ど じち たら か とい え ば	信 ど じち なら か か とい え ば	信 じ な か つ た	聞 見 いた たり した こと は な い

- a 石油コンビナート炎上で有害物質が雨で降ってくる…… 1 ——— 2 ——— 3 ——— 4 ——— 5
- b 放射性物質の影響で水道水が飲めなくなる…………… 1 ——— 2 ——— 3 ——— 4 ——— 5
- c 海藻類を摂取すると放射性物質の影響を受けにくい…… 1 ——— 2 ——— 3 ——— 4 ——— 5
- d 大豆製品を摂取すると放射性物質の影響を受けにくい… 1 ——— 2 ——— 3 ——— 4 ——— 5
- e 放射性物質に汚染されないためにうがい薬を飲んだほ
うがいい…………… 1 ——— 2 ——— 3 ——— 4 ——— 5
- f 防衛庁・自衛隊が救援物資の提供を求めている…………… 1 ——— 2 ——— 3 ——— 4 ——— 5
- g 被災地で強盗事件が多発している…………… 1 ——— 2 ——— 3 ——— 4 ——— 5
- h 福島原発で放射性物質が漏れたことにより、雨が降る
と被ばくする…………… 1 ——— 2 ——— 3 ——— 4 ——— 5

問 12 防災への取り組みについて、あなたのお考えをお聞きます。次の a ～ i のそれぞれについて、下記の 1 ～ 4 のうちから あてはまるもの 1 つ を選んで、その番号に○をつけてください。

1 あてはまる	2 どちらかといえばあてはまる	3 どちらかといえはあてはまらない	4 あてはまらない
------------	--------------------	----------------------	--------------

- a 食料や飲料水は自分で備蓄すべきだ…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- b 災害の知識や情報は自分で集めるべきだ…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- c 地区の避難場所や経路は把握しておくべきだ…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- d 近所の避難困難者(体が不自由等)の有無を普段から把握しておくべきだ…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- e 地区の防災訓練には可能な限り参加すべきだ…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- f 災害時、近隣の人が困っていたら迷わず助けるべきだ…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- g 行政は市民の防災意識を高めるために努力すべきだ…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- h 市民のための備蓄は、行政が中心となり行うべきだ…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4
- i 行政は、防災に関する情報がもっと簡単に市民の手に入るようにすべきだ…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4

あなたの普段の行動についてお聞きます。

問 13 あなたは、現在通勤・通学以外で、どのくらい外出しますか。下記の 1 ～ 4 のうちから あてはまるもの 1 つ を選んで、その番号に○をつけて下さい。

- 1 よく外出する ☐ → 問 14 にすすみください。
- 2 ときどき外出する ☐ → 問 14 にすすみください。
- 3 あまり外出しない ☐ → 下記の付問にお答えのうえ、問 14 にすすみください。
- 4 ほとんど外出しない ☐ → 下記の付問にお答えのうえ、問 14 にすすみください。

付問 外出しない理由は何ですか。下記の 1 ～ 6 のうちから あてはまるものすべて を選んで、その番号に○をつけてください。

- 1 健康・体力に自信がない 2 外出が面倒である 3 誘ってくれる人がいない
- 4 お金のため 5 家の中でやらなければならないことが多い
- 6 その他(具体的に)

問 14 あなたは、地域のどのような活動に参加していますか。次の a ～ e のそれぞれについて、下記の 1 ～ 4 のうちからあてはまるもの 1 つを選んで、その番号に○をつけてください。

1 あてはまる	2 どちらかといえば	3 どちらかといえ ば	4 あてはまらない
------------	---------------	-------------------	--------------

- a 地域の自治会などの会合によく参加している…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- b 祭り、盆踊りなどの行事によく参加している…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- c 公園の掃除や、花を植えるなどの地域をきれいにする
活動によく参加している…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- d お年寄りの家庭や施設でのボランティア活動によく
参加している…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- e 少年野球や子ども会などの青少年育成活動によく参加
している…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4

問 15 あなたは、近隣に次のような方がいらっしゃいますか。次の a ～ e のそれぞれについて、下記の 1 ～ 4 のうちからあてはまるもの 1 つを選んで、その番号に○をつけてください。

1 たくさん いる	2 数人 いる	3 一人 二人 いる	4 い ない
-----------------	---------------	---------------------	--------------

- a 庭先や道端で会うとよく立ち話をする人…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- b 互いの家によく訪問し合う人…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- c よくおすそ分けし合う人…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- d 家族ぐるみのつきあいをしている人…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- e よく一緒に外出するような関係の人…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4

問 16 あなたは、千葉市の防災計画・防災対策の内容をどの程度知っていますか。次の a～m のそれぞれについて、下記の 1～4 のうちからあてはまるもの 1 つを選んで、その番号に○をつけてください。

1 知 だ つ っ い い て た い い る	2 知 い つ く て ら い か る	3 が 名 あ 前 る は 聞 い た こ と	4 知 ら な い
---	------------------------------------	---	-----------------------

- | | | | | |
|----------------------|---|---|---|---|
| a 地震ハザードマップ…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| b あなたの街にも自主防災組織…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| c 千葉市の災害時要援護者対策…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| d 千葉市防災エリアメール…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| e わが家の危機管理マニュアル…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| f 初期消火訓練…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| g 避難訓練…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| h 応急救護訓練…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| i 震度体感訓練…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| j 地域の避難所の備蓄品…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| k 身近な消火栓の設置場所…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| m 近くの井戸の場所…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |

問 17 あなたは、千葉市が行っている防災に対する取り組みは十分だと思いますか。次の a～c のそれぞれについて、下記の 1～4 のうちからあてはまるもの 1 つを選んで、その番号に○をつけてください。

1 そ う 思 う	2 ま あ そ う 思 う	3 あ ま り 思 わ な い	4 全 く 思 わ な い
-----------------------	---------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------

- | | | | | |
|------------------------|---|---|---|---|
| a 災害時の情報伝達…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| b 防災訓練の実施…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| c 防災意識を高めるための広報活動…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |

問 18 あなたは、次の a～v の防災対策を行っていますか。それぞれについて、下記の 1～3 のうちから あてはまるもの 1 つ を選んで、その番号に○をつけてください。

1	2	3
か東 ら日 行本 つ大 つ震 て災 いた たの 前	か東 ら日 始本 めた た震 災 の後	行 つ て い ない

- a 家屋の耐震化や耐震度、耐震診断など、自分の家や
マンションの耐震性に気がつかっている…………… 1 …… 2 …… 3
- b 家具を固定している…………… 1 …… 2 …… 3
- c 屋根瓦や窓ガラスの補強をしている…………… 1 …… 2 …… 3
- d 災害情報を積極的に収集するようにしている…………… 1 …… 2 …… 3
- e 消火器を準備している…………… 1 …… 2 …… 3
- f 携帯ラジオや携帯テレビを準備している…………… 1 …… 2 …… 3
- g 懐中電灯を準備している…………… 1 …… 2 …… 3
- h 非常時に持ち出すバッグ等を準備している…………… 1 …… 2 …… 3
- i 非常時に持ち出す衣類を準備している…………… 1 …… 2 …… 3
- j 医薬品を準備している…………… 1 …… 2 …… 3
- k 近くの学校や公園など避難する場所を決めている…………… 1 …… 2 …… 3
- m 家族との連絡方法を決めている…………… 1 …… 2 …… 3
- n 電池の備蓄をしている…………… 1 …… 2 …… 3
- o トイレットペーパーの備蓄をしている…………… 1 …… 2 …… 3
- p 食料を備蓄している…………… 1 …… 2 …… 3
- q 飲料水を備蓄している…………… 1 …… 2 …… 3
- r カセットコンロを準備している…………… 1 …… 2 …… 3
- s 風呂の水のため置きをしている…………… 1 …… 2 …… 3
- t 貴重品をすぐに持ち出せるようにしている…………… 1 …… 2 …… 3
- u 自主防災組織に参加している…………… 1 …… 2 …… 3
- v 地域住民と防災に関する情報交換を行っている…………… 1 …… 2 …… 3

問 19 家庭内で行っている防災対策について、10 項目にしばった上でお聞きします。あなたは、現在、次の a ～ j のような災害の防災対策にどの程度取り組んでいますか。それぞれについて、下記の 1 ～ 4 のうちからあてはまるもの 1 つを選んで、その番号に○をつけてください。

1 十分 だ と 思 う	2 ど ち ら か と 思 う え ば	3 不 十 分 だ と 思 う え ば	4 不 十 分 だ と 思 う
-----------------------------	--	--	--------------------------------------

- | | | | | |
|---------------------------|---|---|---|---|
| a 懐中電灯の準備 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| b 食料の確保（米・インスタント食品等） | 1 | 2 | 3 | 4 |
| c 飲料水の確保 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| d 医薬品の準備 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| e 携帯ラジオや携帯テレビの準備 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| f 日用品の確保（トイレットペーパー・紙おむつ等） | 1 | 2 | 3 | 4 |
| g 家具の固定 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| h 住宅の補強 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| i 避難経路や避難場所の把握 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| j 家族との連絡方法の確認 | 1 | 2 | 3 | 4 |

問 20 あなたは、次の a ～ d のような事柄について誰が行うべきだと考えますか。それぞれについて、下記の 1 ～ 3 のうちからあてはまるもの 1 つを選んで、その番号に○をつけてください。

1 行 政 の サ ー ビ ス で	2 行 地 域 住 民 の 協 力 で	3 行 そ れ ぞ れ の 家 庭 で
---	--	--

- | | | | |
|--|---|---|---|
| a 地域の中で子どもたちが安心して登下校したり、遊んだりできる環境を維持する | 1 | 2 | 3 |
| b 一人暮らしのお年寄りが日常生活でちょっとした助けを必要としているとき、お手伝いをする | 1 | 2 | 3 |
| c 乳幼児を持った親が急な用事で 1 ～ 2 時間子どもを預けなければならなくなったとき、子どもの面倒をみる | 1 | 2 | 3 |
| d 誰からも親しまれている地域のシンボリックな並木があり、あなたの家の前を含む歩道が落ち葉だらけになっているとき、掃除をする | 1 | 2 | 3 |

問 21 あなたの性格は、次の a～z のようにことにどの程度あてはまりますか。それぞれについて、下記の 1～4 のうちから あてはまるもの 1 つ を選んで、番号に○をつけてください。

	1 あてはまる	2 どちらかといえ ば	3 どちらかといえ ば	4 あてはまらない
a おとなしい方だ.....	1	2	3	4
b 物事への取り組みが中途半端な方だ.....	1	2	3	4
c 好奇心の乏しい方だ.....	1	2	3	4
d 不親切な方だ.....	1	2	3	4
e 気分が変わりやすい方だ.....	1	2	3	4
f 無口な方だ.....	1	2	3	4
g 根気がない方だ.....	1	2	3	4
h 物事を分析するのが苦手な方だ.....	1	2	3	4
i 冷たい方だ.....	1	2	3	4
j くよくよする方だ.....	1	2	3	4
k 引っ込み思案な方だ.....	1	2	3	4
m 気まぐれな方だ.....	1	2	3	4
n 頭がすぐ混乱しやすい方だ.....	1	2	3	4
o 利己的な方だ.....	1	2	3	4
p 神経質な方だ.....	1	2	3	4
q おくびょうな方だ.....	1	2	3	4
r 浪費癖がある方だ.....	1	2	3	4
s 知性に乏しい方だ.....	1	2	3	4
t 疑い深い方だ.....	1	2	3	4
u 嫉妬深い方だ.....	1	2	3	4
v 活発さに欠ける性格だ.....	1	2	3	4
w 無責任な方だ.....	1	2	3	4
x 素朴で洗練されていない性格だ.....	1	2	3	4
y 協調性に欠ける性格だ.....	1	2	3	4
z 怒りっぽい性格だ.....	1	2	3	4

問 22 あなたご自身のことやあなたのお考えについてお聞きします。次の a ～ p のそれぞれについて、下記の 1 ～ 5 のうちから あてはまるもの 1 つ を選んで、その番号に○をつけてください。

1	2	3	4	5
あてはまる	どちらかといえ ばあてはまる	どちらともい えない	どちらかとい えないあては まる	あてはまら ない

- a 複雑な問題について順序立てて考えることが得意だ… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5
- b 考えをまとめることが得意だ…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5
- c 物事を正確に考えることに自信がある…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5
- d 誰もが納得できるような説明をすることができる…… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5
- e 何か複雑な問題を考えると、混乱してしまう…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5
- f いろいろな考えの人と接して多くのことを学びたい… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5
- g 生涯にわたり新しいことを学び続けたい…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5
- h さまざまな文化について学びたいと思う…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5
- i 外国人がどのように考えるかを勉強することは意義
のあることだと思う…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5
- j いつも偏りのない判断をしようとする…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5
- k 物事を見るときに自分の立場からしか見ない…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5
- m 物事を決めるときには、客観的な態度を心がける…… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5
- n 一つ二つの立場だけではなく、できるだけ多くの立
場から考えようとする…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5
- o 結論をくだす場合には確たる証拠の有無にこだわる… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5
- p 判断をくだす際は、できるだけ多くの事実や証拠を
調べる…………… 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5

問 23 現在の日本の社会全体について、あなたはどのようにお考えですか。次の a～e のそれぞれについて、下記の 1～4 のうちからあてはまるもの 1 つを選んで、その番号に○をつけてください。

1 そう 思う	2 そう どちら 思わ かとい えば	3 そう どちら 思わ かとい えば	4 そう 思わ ない
---------------	-----------------------------------	-----------------------------------	---------------------

- a 日本は公正な社会だ…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- b 日本は住みやすい社会だ…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- c 日本は困ったときに助けてくれる…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- d たいていの人は話し合えば理解できる…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4
- e たいていの人は信用できる…………… 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4

問 24 あなたは、東日本大震災によって、どのような被害を受けましたか。下記の 1～6 のうちからあてはまるものすべてを選んで、その番号に○をつけてください。

- 1 大きなケガをした 2 家が損傷した 3 家具が傷ついた
- 4 避難所に逃げた 5 帰宅困難になった 6 どれにもあてはまらない

最後に、あなた自身のことについてお聞きします。

問 25 あなたの性別と年齢をお聞きします。

(1) あなたの性別は 1 男 2 女

(2) あなたの年齢は () 歳

問 26 あなたの配偶関係についてお聞きします。下記の 1～3 のうちからあてはまるもの 1 つを選んで、その番号に○をつけてください。

- 1 有配偶 (パートナーがいる) 2 未婚 3 離別・死別

問 27 あなたの居住形態についてお聞きします。下記の 1～5 のうちからあてはまるもの 1 つを選んでその番号に○をつけてください。

- | | | |
|-------------------------------|---|-------------------------------|
| 1 一戸建て（持ち家） | } | → 問 28 にお進みください。 |
| 2 一戸建て（賃貸） | | |
| 3 集合住宅（持ち家） | } | → 下記の付問にお答えのうえ、問 28 にお進みください。 |
| 4 集合住宅（賃貸） | | |
| 5 その他（ ） | | |

付問 あなたは何階建ての何階にお住みですか。（ ）内に数字を記入してください。

（ ） 階建ての （ ） 階

問 28 あなたは、現在、どなたと一緒に住まいですか。下記の 1～14 のうちからあてはまるものすべてを選んで、その番号に○をつけてください。

- | | | |
|--------------|------------------------------------|-------------|
| 1 一人暮らし | 2 配偶者（パートナー） | 3 息子 |
| 4 娘 | 5 子どもの配偶者 | 6 孫 |
| 7 自分の父親 | 8 自分の母親 | 9 配偶者の父親 |
| 10 配偶者の母親 | 11 祖父母 | 12 自分のきょうだい |
| 13 配偶者のきょうだい | 14 その他（具体的に ） | |

問 29 現在、あなたと同居している人は合計で何人ですか。（ ）内にあなたも含めた人数を記入してください。

（ ） 人

問 30 あなたの現在のご職業は次のどれにあたりますか。下記の 1～13 のうちからもっとも近いと考えられるもの 1 つを選んで、その番号に○をつけてください。

【働いている方】

- | | | | |
|--------------------------------|----------|---|---|
| 1 専門・技術職 | 2 管理職 | } | → 1～10 に○をつけた方は、
次ページの問 31 に
すすみください。 |
| 3 事務職 | 4 営業販売職 | | |
| 5 サービス職 | 6 保安職 | | |
| 7 農林漁業職 | 8 運輸・通信職 | | |
| 9 生産・労務職 | | | |
| 10 その他（ ） | | | |

【働いていない方】

- | | | | |
|-----------|-------|---|--|
| 11 主婦（主夫） | 12 学生 | } | → 11～13 に○をつけた方は、
次ページの問 32 に
すすみください。 |
| 13 無職 | | | |

問 31 現在、働いている方にお聞きします。あなたの勤務形態は次のどれにあたりますか。下記の
1～4のうちからあてはまるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。

- 1 正社員 2 自営業 3 派遣・契約社員 4 パート・アルバイト

問 32 あなたが最後に出られた学校についてお聞きします。下記の1～11のうちからあてはまるもの
1つを選んで、その番号に○をつけてください。

- 1 旧制小学校 2 旧制中学校 3 旧制女学校 4 旧制高等学校
5 新制中学校 6 新制高等学校 7 専門学校 8 短期大学・高等専門学校
9 大学・大学院 10 その他（具体的に ） 11 現在在学中

問 33 あなたの世帯の収入は、税込みでおおよそどのくらいですか。下記の1～7のうちからあては
まるもの1つを選んで、その番号に○をつけてください。お二人以上の収入がある場合は、それ
らを合計してください。

- 1 200万円未満 2 200万円～400万円未満 3 400万円～600万円未満
4 600万円～800万円未満 5 800万円～1000万円未満 6 1000万円～1500万円未満
7 1500万円以上

問 34 あなたが現在お住まいの区はどこですか。下記の1～7のうちからあてはまるもの1つを選んで、
その番号に○をつけてください。

- 1 稲毛区 2 中央区 3 花見川区 4 緑区
5 美浜区 6 若葉区 7 その他（ ）

問 35 あなたがお住まいの町はどこですか。さしつかえなければ（ ）内に町名をご記入ください。

（ ）

問 36 あなたは現在お住いの地域に何年住んでいますか。（ ）内に数字をご記入ください。1ヵ月未
満の方は1ヵ月とお答えください。

（ ） 年 （ ） ヲ月

以上で質問は終わりです。長時間にわたり、ご協力ありがとうございました。

平成 23 年度 フィールドワーク調査報告書 第 9 号

発 行：2012 年 3 月 31 日

発行者：淑徳大学総合福祉学部人間社会学科

〒260-8701

千葉市中央区大巖寺町 200

TEL 043-265-7331

印 刷：株式会社 正文社